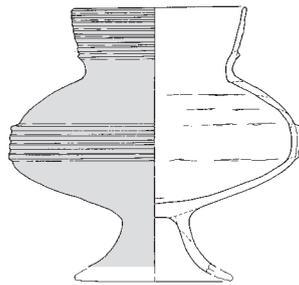


浅川扇状地遺跡群

# 長野女子高校校庭遺跡

——（仮称）長野女子高等学校校舎改築工事に伴う発掘調査報告書——



2014・3

長野市教育委員会

巻頭図版 1



調査区遠景（A区、北西から）



調査区全景（A区、南東から）



壁面被熱状況（48号住居跡）



床面被熱状況（40号住居跡）



ガラス小玉出土状況（16号住居跡）



ガラス小玉



出土した北陸系土器



5号住居跡出土土器



11号住居跡出土土器

## 序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、古くから人々の足跡が刻まれています。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産です。中でも土地に埋蔵されている遺跡は、当時の人々の暮らしぶりを現在の私たちに伝えてくれます。

本書で報告しております長野女子高校校庭遺跡は、長野市北部の広大な浅川扇状地遺跡群に含まれており、弥生時代後期から古墳時代後期に至るまで、ほぼ連続した人々の生活の痕跡が確認されています。

ここに長野市の埋蔵文化財 134 集として刊行いたします本書には、平成 24 年 3 月から 5 月にかけて行われた発掘調査の成果を詳しく掲載しております。その成果は、連綿綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

長野市教育委員会  
教育長 堀内 征治

## 例 言

- 1 本書は、長野県長野市三輪地区における開発事業「(仮称)長野女子高等学校校舎建設工事」に伴い、平成23年度から平成25年度にかけて緊急発掘調査を実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、委託者 学校法人長野家政学園 理事長 小林士朗(～平成24年12月19日)及び小林健治(平成24年12月20日～)と、受託者 長野市長 鷲沢正一(～平成25年11月10日)及び加藤久雄(平成25年11月11日～)との間で締結された埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会(文化財課埋蔵文化財センター担当)が直営で実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市三輪9丁目62番1外であり、開発事業面積のうち埋蔵文化財の保護対象面積は5,194㎡、発掘調査面積は2,570㎡である。なお、土地の所有者は委託者である。
- 4 本遺跡の名称は、浅川扇状地遺跡群(長野市A-①)の構成遺跡の一つである、長野女子高校校庭遺跡(長野市A-056)である。また、今回の発掘調査対象から外れている旧校舎部分については、相ノ木氏居館跡(相木城跡、長野市A-207)にも該当している。
- 5 現場における発掘調査は、青木・飯島の指導の下、柳生・平林が担当し、各専門員がこれを補助した。
- 6 本書の編集は、飯島の指導の下柳生が担当し、平林および各専門員が補佐した。本書における執筆分担は下記のとおりである。なお、表現や用字等は執筆者の意向を尊重し、必ずしも統一を図らなかった。

飯島哲也	I 調査に至る経緯、II 遺跡の環境
柳生俊樹	III 遺 構
平林大樹	IV 遺 物
- 7 発掘調査の実施に際し、事業委託者である学校法人長野家政学園におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき絶大なご協力を賜った。また保護協議、現場および整理作業において下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し明記するものである。(順不同、敬称略)

三輪地区住民自治協議会、下宇木区、上宇木区、相ノ木東区、アサバハイツ宇木、長野県立歴史館、財団法人長野県埋蔵文化財センター、長野市立三輪公民館、長野市立博物館
小林健治、小林健雄、小林まゆ佳、笹沢 浩、滝沢規朗、白沢勝彦、鶴田典昭、柳沢 亮、寺島孝典、畠山幸司、若林行正、石井康雄、坂本千尋、佐賀正紀、竹内元一、野村健一、清水正剛、加藤浩二、石川千裕
- 8 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで管理し、長野市立博物館の考古収蔵庫にて保管している。なお、出土遺物の注記記号は、「A N J K」と表記してある。

## 凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

- 1 本調査において確認したすべての遺構・遺物については、その資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。しかしできうるかぎり追認できるよう、基礎データはそのまま保管してある。
- 2 地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。調査地における座標北からの真北方向角は約 $0^{\circ}10'36''$ であり、また磁北は真北より西へ約 $6^{\circ}40'$ の偏差がある。
- 3 基準点測量及び遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経 $138^{\circ}30'00''$ 、北緯 $36^{\circ}00'00''$ ）の座標値（日本測地系2000）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。
- 4 遺構図は、全体図を1/500、個別遺構図を1/80、微細図を1/20とした。炭化物や被熱痕の範囲、土器出土地点などについて、網掛けによって下記のとおり表記した。



…炭化物集中



…被熱痕

21

● …土器出土地点（番号は実測図に対応）

- 5 遺物に関しては、調査員により原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図1/4、土製品1/3、石製品・鉄製品1/2、ガラス小玉1/1で図示した。
- 6 土器実測図において、断面は、弥生土器・土師器を白抜き、須恵器を黒塗りで表し、赤色塗彩・黒色処理の範囲等は、網掛けによって下記のとおり表記した。



…赤色塗彩



…黒色処理

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査に至る経緯	1
1 調査契機と保護協議	1
2 発掘調査の経過（調査日誌抄）	3
3 調査体制	5
4 調査方法	6
II 遺跡の環境	10
1 地理的環境	10
2 歴史的環境	12
III 遺構	15
1 竪穴住居跡	15
2 溝跡	19
3 土坑・井戸跡	19
4 ピット	19
5 火を受けた痕跡のある住居跡について	19
[遺構写真]	
IV 遺物	89
1 土器	89
2 その他の遺物	92
3 長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器	93
4 16号住居跡出土のガラス小玉	97
[出土遺物観察表]	
[遺物写真]	

報告書抄録

## 挿図目次

図1 試掘トレンチ位置図	6
図2 土層柱状図	7
図3 調査区の設定	8
図4 調査地位置図	11
図5 調査地周辺遺跡分布図	13
図6 調査区全体図	15
図7 弥生時代後期の竪穴住居跡	16
図8 古墳時代中期・後期の竪穴住居跡	17
図9 溝跡・土坑（井戸跡）・ピット	18
図10～49 遺構実測図①～④⑩	26-65
図50 長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器	94
図51 北陸系土器の想定移動ルート	96
図52 ガラス小玉の寸法	98
図53 関東甲信地域におけるガラス玉の出土数	100
図54 住居内埋葬の諸例	101
図55～77 遺物実測図①～②③	104-126

## 表目次

表1 長野女子高校校庭遺跡近隣における火を受けた痕跡のある住居跡	20
表2 土器出土量比較	21
表3 検出遺構一覧表	23-25
表4 長野県内におけるガラス玉出土遺跡	99

# I 調査に至る経過

## 1 調査契機と保護協議

長野女子高等学校（以下、学校）は、大正14年（1925）に設立され、当時は現在の長野県庁前に校舎が建てられた。昭和32年（1957）には長野女子高等学校と改称し、現在の場所である長野市三輪に移転した。さらに昭和42年（1967）には姉妹校である長野女子短期大学も開学し、平成16年5月21日には創立80周年を迎え、長野県下で最も歴史の長い女子高として発展を続けている。



長野女子高校の旧校舎正門

学校の新校舎を平成25年度から供用するための校舎改築計画が、学校法人長野家政学園において浮上した。その起因事業に関する保護協議は、平成23年4月28日のファックス照会に始まる。コンサルティングを担当する北野建設株式会社担当者から、建設地について埋蔵文化財包蔵の有無に関する照会があった。この時点では現校舎を同じ場所に建て替えるか、あるいは現校舎の北方約100mにある校庭（西グラウンド）に新築するか未定であったが、長野市教育委員会（以下、市教委）としては、どちらにしても開発予定地に埋蔵文化財包蔵の可能性が高いことから、保護措置の必要性、特に試掘調査が必要である旨を回答した。同年5月16日の現地確認では、現校舎の中庭と西グラウンドに試掘坑を設定し、小型重機による掘削を伴う試掘調査の実施に関する詳細について北野建設と協議した。5月24日に試掘調査依頼書と土地所有者承諾書を受領し、6月20～22日に埋蔵文化財試掘調査を実施した。試掘調査では、相ノ木氏居館跡（相木城跡）に比定されている現校舎部分では、明確な遺構は検出できなかったものの、現校舎建設時の攪乱に伴う土器片等の遺物が出土し、遺物包含層も確認された。西グラウンドでは遺物包含層と共に竪穴住居跡を含む遺構の検出が見られ、良好な埋蔵文化財の残存が確認された。

7月8日付23埋第152号にて試掘調査結果を回答し、必要となる保護措置について協議を申し入れた。早速7月12日に保護協議を実施し、学校側からは平成25年4月新校舎供用開始予定という点と、来年2月には工事に着手したい意向を聞いた。市教委からは、詳細な設計決定後に発掘調査の依頼書と文化財保護法（以下、法）第93条の規定に基づく届出の書類整備を依頼した。10月28日に開発行為計画協議書を建築指導課経由で受理し、こ



西グラウンドでの試掘調査

れまでの経緯と保護措置が必要となる旨を回答している。学校より11月7日付けで発掘調査依頼書と土地所有者承諾書、及び法第93条の規定に基づく届出があり、即座に長野県教育委員会（以下、県教委）にあてて進達している。11月8日には開発行為計画協議書に関する現地における事前協議会が開催され、発掘調査の実施を主とする保護措置が必要である旨を回答した。11月30日付23教文第7-535号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」により、学校に発掘調査の実施が県教委から通知された。

平成24年1月12日に学校と北野建設、市教委の三者協議を行い、埋蔵文化財発掘調査協定書及び委託契約の準備に入ると共に、先行して作業員の募集を行うことが了承された。1月20日にも三者協議を行い、発掘調査実施に向けて具体的な打合せを行った。1月31日付けで「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し、2月6日付けで「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結した。



降雪により現場休業（平成24年3月29日）

起因となる本体工事の請負業者となった北野建設株式会社の現場代理人と綿密な調整を図り、平成23年度の発掘調査は2月27日から現場作業を開始した。翌28日から重機による掘削作業を開始し、3月6日から作業員による掘削作業を開始した。この年の3月は比較的天候不順で、降雨・降雪・降霜により現場作業の遅延が余儀なくされ、竪穴住居跡の検出数が予想以上であったことも手伝い、当初3月末日でA区（教室棟部分）を終了させる予定が、翌年度にずれ込むこととなった。発掘調査の終了間際の3月29日付けで、委託費を減額とする「埋蔵文化財発掘調査委託変更契約書」を締結し、3月30日付けで「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を学校あてに提出し、平成23年度分の業務を終了した。



高校生の現場見学会（平成24年4月19日）

平成24年度分は、現場作業の連続性が求められるため4月1日から開始し、作業員は4月4日から雇用した。学校からの依頼により、高校生の日本史校外学習として、4月16日には3年生21人、19日には2年生52人が見学に訪れ、説明等の対応をした。発掘作業は、ゴールデンウィーク前にA区（教室棟部分）の調査を終了させ、B区（アリーナ部分）他に移行し、5月17日の地鎮祭の後、A区は校舎建築工事が本格稼動となった。それ以降、大型杭打機の影響範囲を避けながらの発掘現場作業となったが、5月29日に全体写真を撮影し、作業員による掘削作業を終了するとともに撤収作業に入り、5

月31日の測量図結線をもって現場におけるすべての作業を終了した。

発掘調査期間の延長、予想を上回る遺構検出数等により、平成24年度に予定していた整理調査の一部である発掘調査報告書の刊行が厳しい状況となったため、全体の調査期間の延長が余儀なくなり、10月5日付けで埋蔵文化財発掘調査協定書の変更について学校と協議し、26日付けで変更協定書を締結した。これにより協定期間が3カ年度にわたることとなり、発掘調査報告書の刊行が平成26年3月となった。併せて同日付けで平成24年度分の委託契約も変更している。平成25年3月6日付けで「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を学校あてに提出し、平成24年度分の業務を終了した。なお、長野市埋蔵文化財センター速報展の第14回は、「掘った！見つけた！原始・古代の三輪 ～長野女子高校校庭遺跡の発掘調査から～」と題し、三輪公民館にて平成25年2月25日から3月15日まで、長野市役所にて3



三輪公民館での速報展展示風景

月18日から4月5日まで開催し、合わせて3月3日には調査報告会と展示解説を行い、好評を得た。

学校が新校舎に移転し、新たなスタートをきったのは創立88周年にあたる平成25年4月であった。協定書に基づいて平成25年4月8日に平成25年度分の委託契約を締結した。4月11日には旧校舎の敷地を新たなグラウンドにする造成工事について北野建設担当者より問合せがあり、旧建物の撤去解体工事の際に試掘調査を実施して埋蔵文化財の残存状況を調べる必要がある旨を回答した。4月19日受付で学校理事長よりグラウンド造成工事に関する法第93条の規定に基づく



旧校舎の試掘調査（平成25年6月3日）

届出がなされ、同24日付25埋第2-13号で届出者あてに発掘調査（試掘調査）の実施を通知している。ちなみに長野市では、平成25年度から法第93条の規定に基づく届及び法94条の規定に基づく通知に対する保護措置について県教委から権限移譲を受けており、本件も市教委教育長が通知者となっている。これを受けて旧校舎解体工事の合間を縫って6月3日に試掘調査を実施した結果、昭和32年に現在地に旧校舎が建てられる際の造成工事によって遺構面が大きく破壊されている状況が看取された。土器片等の遺物は散見されるものの遺構を確認することができなかったことから、グラウンドの造成工事としては工事立会の措置に変更することとなった。平成



講師派遣（平成25年7月4・5日）

25年7月4・5日には学校からの依頼により、地歴公民科の授業として講師を派遣した。対象者は2学年49名、3学年43名、及び3学年選択授業10名であり、また実習として土器の接合も生徒に体験させることができた。また、弥生時代後期の竪穴住居跡床面から出土したガラス小玉については、長野県立歴史館にてX線撮影を行うなど、発掘調査報告書の作成を継続的かつ効率的に行って刊行した。平成26年3月14日付で委託費の減額を目的とした変更委託契約を締結し、同20日付で「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を学校あてに提出し、すべての業務を終了した。

## 2 発掘調査の経過（調査日誌抄）

【平成23年度】

- 2月28日（火） A区東側から重機による表土剥ぎ開始。
- 2月29日（水） 降雪により作業中止。機材等搬入。
- 3月1日（木） 重機による表土剥ぎ継続。
- 3月2日（金） 定例会議のため作業は午前のみ。
- 3月5日（月） 作業員雇用開始。作業内容ガイダンス。
- 3月6日（火） 作業員による掘削開始。排水溝掘削。
- 3月7日（水） 遺構検出作業開始。
- 3月9日（金） 降雨により午後の掘削作業は中止。
- 3月12日（月） 降雪により全作業中止。



重機によるA区表土剥ぎ（平成24年3月1日）

- 3月13日（火） 重機によるA区の表土剥ぎ終了。
- 3月14日（水） SB1・2掘り下げ開始。
- 3月19日（月） SB5付近の面的掘り下げ継続。
- 3月21日（水） 降雪により作業中止。午後一部で作業。
- 3月22日（木） SB3・4掘り下げ継続。
- 3月23日（金） 降雨により作業中止。午後下層確認。
- 3月26日（月） 市立長野高校生徒の体験発掘（～28日）
- 3月27日（火） A区南側にて遺構検出開始。
- 3月28日（水） 降雪により作業中止。
- 3月29日（木） 作業員掘削年度内終了。遺構測量。
- 3月30日（金） 遺構図結線と遺構写真撮影。
- 【平成24年度】**
- 4月4日（水） 作業員掘削再開。SB8・9掘り下げ。
- 4月5日（木） 降雨により作業中止。
- 4月10日（火） SB10～15掘り下げ継続。
- 4月11日（水） 降雨により午後作業中止。遺構測量。
- 4月16日（月） 長野女子高生徒の遺跡見学会。
- 4月18日（水） A区全体写真撮影。
- 4月19日（木） 遺跡見学会及び遺構測量。
- 4月20日（金） 遺構図結線。SB14～17掘り下げ。
- 4月25日（水） SB16床面からガラス小玉多数出土。
- 4月26日（木） 降雨により午前中止。遺構測量。
- 4月27日（金） SB18～24掘り下げ。遺構図結線。
- 5月1日（火） C・E区調査開始。B区重機表土剥ぎ開始。
- 5月2日（水） C・E区終了。A区測量結線、調査終了。
- 5月7日（月） B区作業員による遺構検出作業。
- 5月8日（火） D区掘削開始。
- 5月10日（木） B～E区遺構測量。B区遺構掘り下げ継続。
- 5月15日（火） 降雨により午後作業中止。
- 5月16日（水） 個別遺構写真撮影。出土状況作図。
- 5月17日（木） 遺構測量。翌18日遺構図結線。
- 5月23日（水） 隣接区域で大型建設機械稼働。
- 5月24日（木） 遺構測量。安全対策のため午後休業。
- 5月25日（金） 遺構図結線。降雨により午後作業中止。
- 5月29日（火） B区全体写真撮影。作業員雇用終了。
- 5月31日（木） 遺構図結線。現場における全作業終了。



作業員による遺構検出作業（平成24年3月29日）



A区焼失住居の掘り下げ（平成24年4月11日）



D区の調査（平成24年5月2日）



B区の住居跡掘り下げ（平成24年5月22日）

### 3 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内征治		
調査機関	文化財課	課長	山口明（～H24）	青木和明（H25）	
	埋蔵文化財センター	所長	青木和明（～H24）	小山敏夫（H25）	
	庶務担当	係長	北村嘉孝（H23）	河口英明（H24～）	
		事務職員	大竹千春		
	調査担当	係長	飯島哲也		
		主査	小林和子		
		主事	塚原秀之		
		専門員	山本賢治（～H24）	柳生俊樹	
			田中暁穂	高田亜紀子（～H25.9）	
			山野井智子（H23）	平林大樹	
			遠藤恵実子（H24～）	日下恵一（H25.10～）	
		臨時職員	篠井ちひろ（H25.10～）		
調査員	青木善子、池田寛子、鳥羽徳子、武藤信子、矢口忠良				
調査補助員	中嶋昭二郎				
発掘作業員	磯崎純子、岩崎千恵、上原律江、江守久仁子、岡沢貴子、岡宮純子、菊川真央、北村まどか、久住信幸、小出栄子、小林紀代美、小松泉、五明栄美子、杉本千代、鈴木友江、諏訪里子、高波政二、高橋明美、田代弥生、古澤栄、増山聡、丸山千夏、三沢節子、宮下稔、宮島勲、宮本信雄、森はる美、山口真吾、山口由美子				
整理作業員	清水さゆり、関崎文子、西尾千枝、待井かおる、三好明子				
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本咲子				
重機等賃貸借	北野建設株式会社 代表取締役社長 北野貴裕				



調査員、発掘作業員等集合写真（平成24年4月12日）

## 4 調査方法

### (1) 試掘調査の概要

当該開発事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「浅川扇状地遺跡群（長野市A-①）」に属し、その中でも旧校舎部分は、土塁の一部が残存していることや、今も残る周辺地割りからも、中世城館跡の本郭であることは確定的であり、「相木城跡（相ノ木氏館跡、長野市A-207）」として遺跡台帳に登録されている。また、グラウンド部分も、その名のとおりに「長野女子高校校庭遺跡（長野市A-056）」の名で登録されている。したがって試掘調査は、複数面の埋蔵文化財の包蔵状況を把握する目的で、平成23年6月20日（月）～22日（水）の3日間実施した。試掘坑は、旧校舎中庭部分に約1.5m四方の坪掘りトレンチを2箇所（A・Bトレンチ）、グラウンド部分に1.5m幅の帯状トレンチを3箇所（C～Eトレンチ）設定している。

旧校舎中庭部分のAトレンチでは、地表下85cmで遺物包含層と見られる暗茶褐色粘質土層が確認された。Bトレンチでは、地表下50cmで遺物包含層と見られる暗茶灰色土層が確認された。それぞれのトレンチ内においては遺構と考えられる落込み等確認されていないが、出土した土器細片からおそらく弥生～古墳時代の遺物包含層と考えられる。しかし、それより上層でも中近世と見られる陶器片が混入しており、もともと該期の遺物包含層が存在した可能性は高い。したがって該期の遺構の存在は確定的と見られたが、堆積状況からも著しい改変を受けていることが看取され、おそらく旧校舎建設時の造成工事によって該期の遺構面は破壊を受けたものと推定される。



図1 試掘トレンチ位置図

グラウンド部分のCトレンチでは地表下15cmで遺物包含層上面が検出され、遺構検出面において住居跡と考えられる掘り込みと小穴を確認した。Dトレンチでは包含層の深さを調べることを主眼に深堀トレンチを入れ、調査地南端において地表下126cmで遺物包含層が確認された。旧地形に沿った形で、遺物包含層が北から南へ傾斜している状況を確認することができた。さらに東西方向に遺構検出を行ったEトレンチにおいては、住居跡や土坑など複数の遺構が確認された。出土遺物は弥生時代後期の土器片を主体に、古墳時代や平安時代のものも検出されている。したがって、グラウンド全体に良好な埋蔵文化財が包蔵されている状況が確認された。北西から東南にかけて傾斜する旧地形を、過去に水田造成によって切り盛りされ、その後現グラウンドを造成している状況が看取された。

ちなみに、旧校舎部分は新しく全天候型のグラウンドとして造成されるため、平成25年6月3日（月）に旧校舎建物の解体工事に伴い試掘調査を実施した。その結果コンクリート基礎によって大規模に改変されている状況が看取され、さらに新しいグラウンドも基本的には盛り土工法によって造成されるため、記録保存を目的とした発掘調査は実施せず、工事立会いの保護措置としている。しかし、部分的には中世城館の遺構が残存している可能性は完全には否定できないため、将来的に今回のグラウンドが開発を受ける際には改めて埋蔵文化財の保護協議が必要となる。

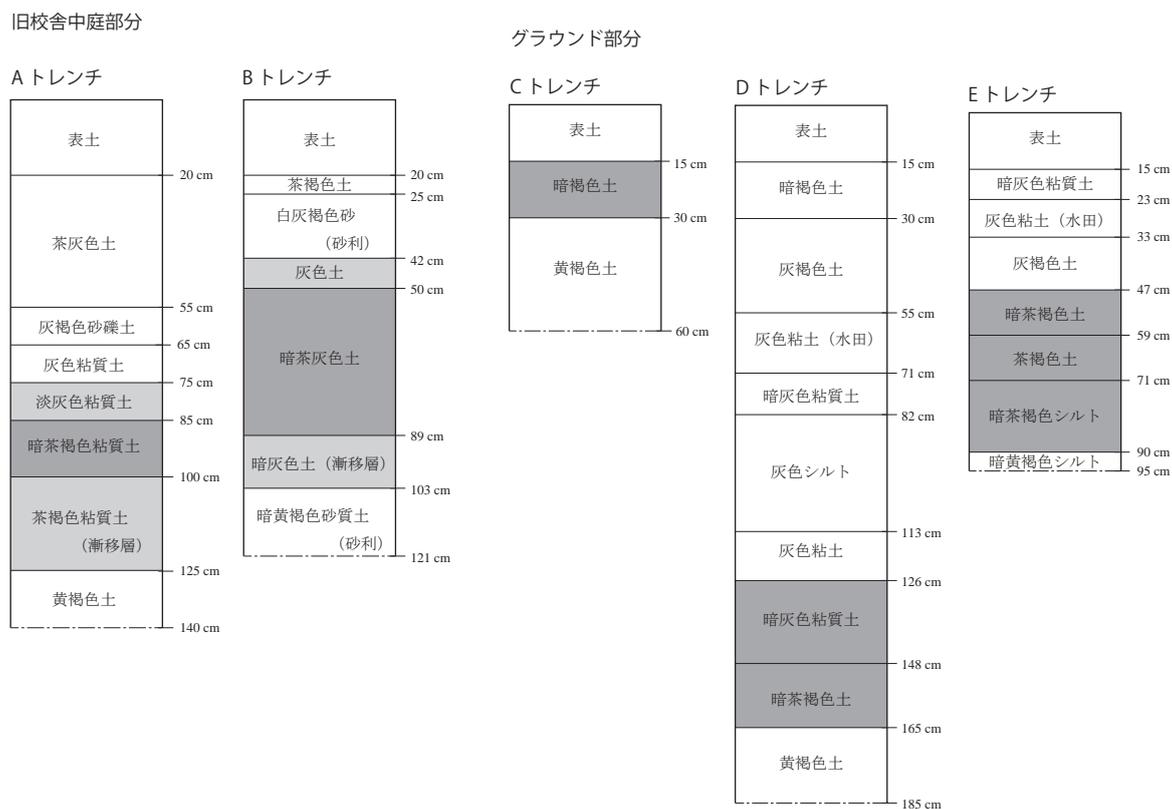


図2 土層柱状図

## (2) 発掘調査の方法

長野女子高校校庭遺跡は、文字通り現況がグラウンドとなっており、旧地形が東南向きの緩斜面であることを考慮すれば、標高の高い方は切り土され、低い方が盛り土されていることを容易に想像することができた。グラウンド造成面からの遺構検出面の高さは、北側で約30cm、南側では約165cmの差を持つ傾斜となっている。

埋蔵文化財保護対象地はグラウンド全域であったが、保護協議により埋蔵文化財への影響が懸念される範囲を抽

出し、それぞれを調査区として設定した。それはほぼ構築物の範囲と同一であり、メインの建物である教室棟をA区とし、アリーナ（体育館）をB区、自転車置場をC区、部室棟をD区、ポンプ室をE区とした。全体の実質調査面積は2,487㎡で、内訳はA区1,328㎡、B区918㎡、C区106㎡、D区79㎡、E区56㎡である。順番としては、面積的にも大きなA区から調査を開始し、B区へと移行する中で、規模の小さいC～E区の調査を平行させながら実施した。なお、前述の傾斜の関係から、大型重機の作業路確保及び深くなる遺構面に対する調査区壁面の保護を目的として、建物範囲内ではあるが発掘調査の対象外とした安全区域をA区南側に設定した。この区域を選定した理由としては、遺物包含層が下層に落ち込む状況を呈しており、地形的にも遺構の存在を確認できなかったことによる。

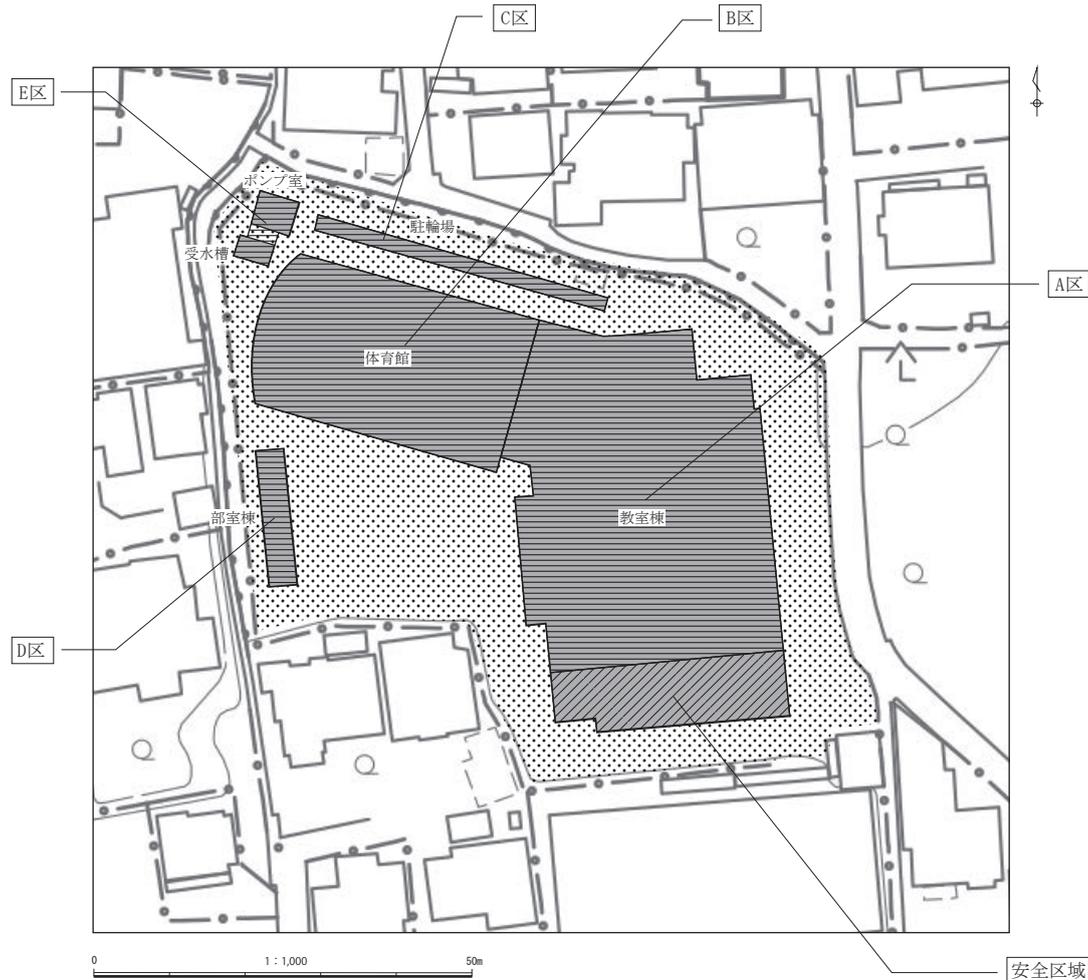


図3 調査区の設定

重機の賃借は、本体工事の請負業者である北野建設株式会社と契約した。バックホウ（0.4㎡級）1台を採用し、A区の北側から掘削を始め徐々に南側に移行させ、最終的には西側へ逃げていく順序とした。発生土についてはクローラードンプ（4t級）1台にて場内運搬し、調査対象外とした中庭部分に仮置きした。なお、仮置き場でも発生土の整理のためバックホウを使用している。大型重機により検出した遺構検出面については、ただちに作業員による遺構検出作業を行ったが、扇状地の扇端部であることと、季節的な理由も手伝って湧水が著しく、遺構面の精査は難航した。また、降雪・降霜等の天候条件により作業効率も低下せざるを得なかった。最終的には調査区壁際に排水を兼ねた側溝を設定し、2箇所ポンプ置場（カマ場）を設置して常時排水しながらの調査となった。なお、下層確認のためのトライアルを適宜設定し、基本層序の確認を行っている。作業員による遺構の検出は、じょれん（板草かき）の後両刃鎌を使用し、確認できた遺構にはスプレー塗料によるマーキングを目印

として調査区内における遺構配置の把握を試みた。遺構の切り合いについては、検出時に完全に判明できたものは比較的少なく、個別に遺構を掘り下げながら判別した例が多い。これは覆土の差異が明確に判別できなかったことに起因するが、古墳時代住居跡のカマドの関係する焼土の存在により重機による検出レベルをやや高めに設定したことや、前述の天候等の理由により検出面の精査が不十分であったことも一因と考えられる。

遺構の測量は基準点測量とあわせ、凡例で記したとおり株式会社写真測図研究所へ委託した。基準点測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値と、日本水準原点の標高を基準としている。また各遺構の個別測量は、上記業者独自開発の遺跡調査支援システム「ATS（Archaeologist Technical Systems）Ver.1.13」のうち、トータルステーションを使用した「Coordic Systems（コーディック・システム、Coordinates Computer Systems）Ver.1.13」を援用し、調査員が現地で指定した測点を同社の観測員が測量し、当日または翌日にプロットアウトした1/20縮尺の原図に、現場にて各調査員が結線・実測した。カマドや住居床面の土器集中箇所については、任意の基準点を基に開放トラバースを組み、調査員のうち主に山本が手作業で1/10縮尺の実測を行った。出土遺物のうち土器片については個別遺構単位でまとめて採取し、取上げ台帳に記載した。なお、完形に近いような大型品については出土位置を平面図に記録している。

現場における写真撮影は、銀塩フィルム撮影用にNikon New FM2を2台、デジタル撮影用にNikon D5100を1台使用し、主に柳生と平林が担当した。銀塩フィルムは35mmの白黒（FUJIFILM NEOPAN 400 PRESTO）とカラーリバーサル（FUJIFILM FUJICHROME PROVIA 100F）のデイトタイプを使用した。現場撮影に使用した機材は、固定用の三脚と足場としてアルミ製の三脚（八尺）である。なお、調査地が住宅密集地の中心部であることから安全管理上ラジコンヘリコプターによる空中撮影ができなかったため、調査地から約100m西側に建つアサバハイツツ木の屋上から俯瞰撮影を行い、さらに約1.5km北西の防災メモリアル地附山公園からも遠景を撮影した。

発掘調査終了後は直ちに本体工事に移行したため、埋め戻し等の措置は講じられず、検出した遺構はすべて本体工事によって破壊された。

### (3) 整理調査の方法

整理調査は長野市埋蔵文化財センターにて行った。遺物洗浄は整理事業員による水洗を基本とし、水洗できない金属製品はメタノール容剤にて洗浄した。なお、ガラス小玉が265点以上出土した16号住居址（SB16）については出土地点周辺の覆土を持ち帰ってきており、水洗洗浄によって多くのガラス小玉を採集した。土器片への注記作業は主に清水と三好が担当し、第一合成株式会社製「ジェットマーカー」を使用し、内側が黒っぽい土器片や内黒処理された土師器は、茶色の水性サインペン（ポスカ）で下地を塗った上に印字している。なお注記記号は「ANJK・（地区名）・（遺構名）・（取り上げ番号）」で記してある。遺物の接合・復元については主に関崎・西尾・待井が担当した。遺物実測については武藤・鳥羽・矢口（栄）・中殿が実施した。同一個体と認識できたものについては可能な限り図上復元を試みた。遺物の個別写真は平林が撮影した。使用した機材はデジタルカメラ（Nikon D90、マイクロニッコールレンズ105mm f/2.8）1台により、長野市立博物館内に設置した特設の撮影場において実施した。

現場にて作成した各種図面の整理、および浄書原図の作成については主に山本が担当した。遺構図版のトレースは、グラフィックソフト（Adobe Illustrator CS6）を用いてパソコン上で柳生と篠井が行い、遺物図版のトレースは主に調査員の青木がロットリングペンで手書きした。報告書の編集作業は、飯島の指導の下柳生が担当し、平林が補佐した。編集作業に伴う個別データのデジタル図化やレイアウト、そしてPDF化については三和印刷株式会社に委託した。執筆は各調査員が分担し、凡例に明記してある。出土遺物は長野市埋蔵文化財センターにて、出土地点および種類別に保管してある。

## Ⅱ 遺跡の環境

### 1 地理的環境

長野県の県庁所在地である長野市は県の北部にあり、総面積834.85km<sup>2</sup>、人口386,030人、156,402世帯の地方中核都市である（平成26年1月1日現在）。地形および地質的には、中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と、西側の西部山地（通称西山）、東側の東部山地（河東山地）に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約1000万～200万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約40km、最大幅約10km、標高330～360mである。第四紀中頃に形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や、千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

飯綱山を水源とする一級河川浅川は、中曽根集落のある山間部を侵食しながら流下し、通称「浅川原口」を起点として長野盆地内に流入し、東南方向へなだらかに傾斜（25/1,000）する典型的な大規模扇状地を形成している。扇頂部から約2km弱東南に流下した浅川は以後天井川となり、千曲川に合流する下流域においては大雨ごとに水害が頻発する厄介な存在でもあった。調査地の所在する長野市三輪地区は、この浅川扇状地扇端部の標高約370m付近に位置し、南向きのより緩やかな勾配（15/1,000）で閑静な住宅街である。各種学校施設も集中している地区であり、長野電鉄本郷駅周辺だけでも、三輪小学校をはじめ、長野県短期大学、長野女子高校と同短期大学、旭幼稚園などが所在している。JR長野駅を中心とする市街地から交通至便な場所にあり、昭和20年代後半から公営団地や宅地造成、事業所も進出し始め、高度経済成長に足並みを合わせて開発が進み、「三輪たんぼ」と呼ばれた条里制の遺構はほぼ姿を消し、道路や町並みにその名残が見られる程度である。



調査地周辺航空写真（平成2年撮影）

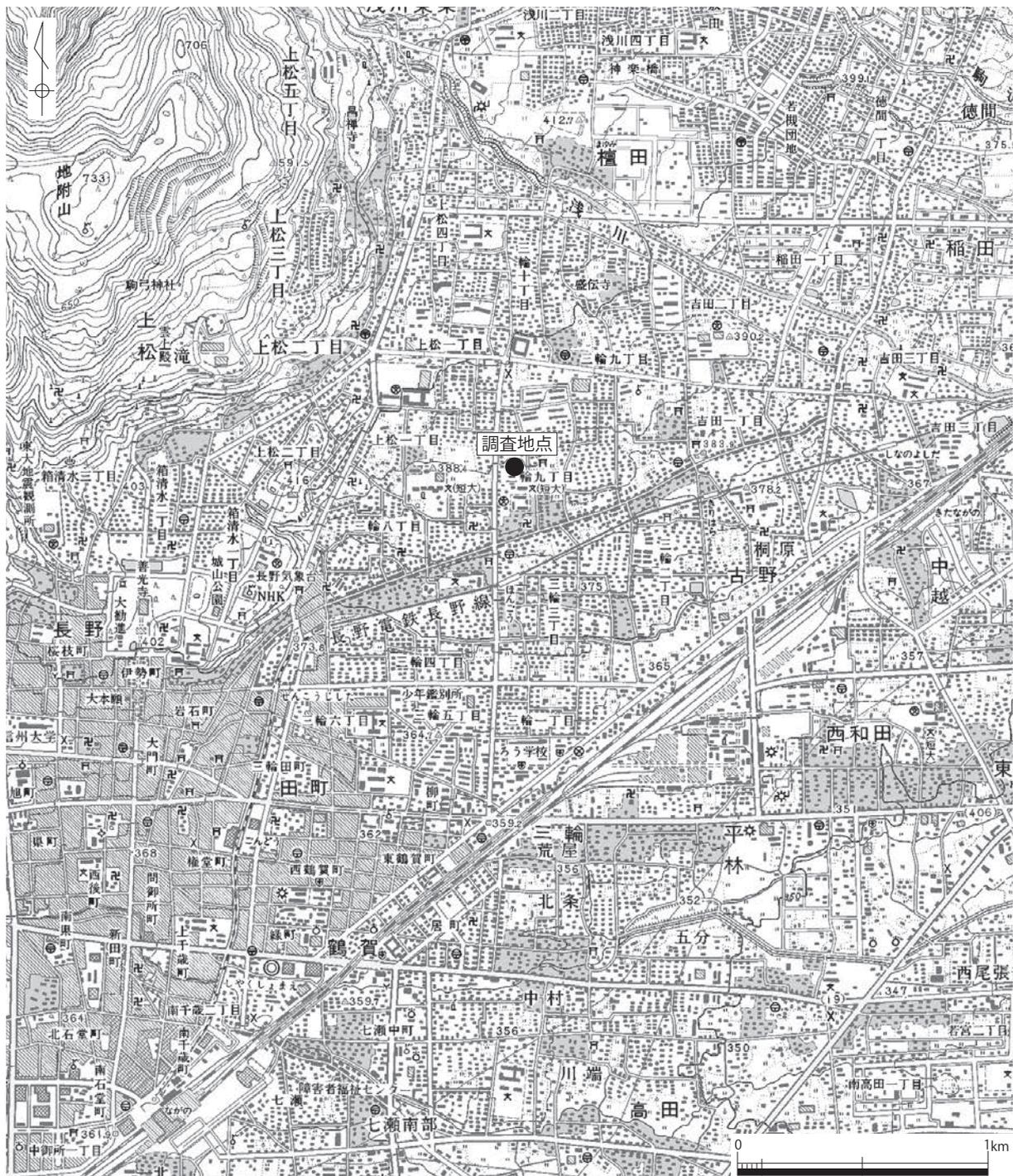
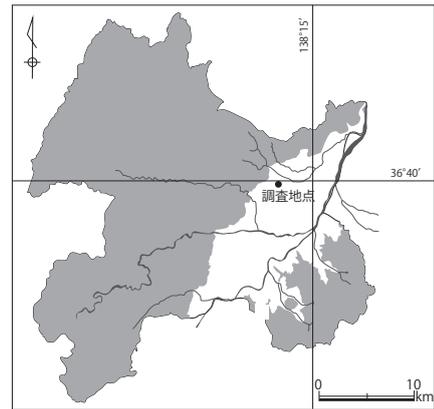
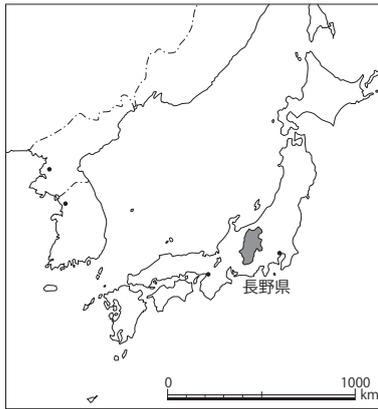


図4 調査地位位置図 (S=1/25,000)

## 2 歴史的環境

三輪の地名は、10世紀に成立した『延喜式』神名帳に記載された水内9社でも筆頭に列せられている美和神社に由来するという。奈良県の大神神社を祖神として祭っており、国内各地に関連地名が残っている。

この三輪地区の所在する浅川扇状地のほぼ全域が、「周知の埋蔵文化財包蔵地」である「浅川扇状地遺跡群（遺跡番号：長野市A-①）」の範囲内となっている。長野市内でも最大の規模を誇る遺跡群であり、調査地が含まれる長野女子高校校庭遺跡（遺跡番号A-056）もその構成遺跡の一つである。近隣には下宇木遺跡、美和公園遺跡、三輪遺跡、相ノ木氏居館跡（相木城跡）、旭幼稚園遺跡、本村東沖遺跡などが所在しており、弥生時代後期から現代へと連綿と続く集落が一带に展開していたことがわかる。昭和41～43年に分布調査を行った長野吉田高校地歴班の報告によると、調査地付近として本郷、SBC南、上宇木、東宇木、SBC西、返目、長野女子高等学校西、下宇木の各所から遺物を採集し、下水道工事中であった下宇木B遺跡の緊急調査も行っている。そもそも「長野女子高校校庭遺跡」の名称もこのときに付けられたものと推測される。

浅川扇状地遺跡群にはこれまでのところ旧石器時代の遺跡は知られていないが、浅川を遡った飯綱高原には上ヶ屋遺跡が存在する。縄文時代では、概ねの傾向として扇頂部付近で前期、扇中部付近で中期、扇端部付近で後期の住居跡が検出される例が多いようであり、それぞれ松ノ木田遺跡、檀田遺跡、吉田古屋敷遺跡などで確認されている。弥生時代は、ほぼ扇状地全域に集落が展開しており本遺跡群の中核をなす時代と言える。それ以降、南向きの緩斜面と伏流湧水という生活しやすい立地条件によって連綿と集落が営まれ、それは現在まで継続している。以下、三輪地区を主として調査地周辺の既往調査について概述する。

### 1 長野女子高校校庭遺跡（本調査）

### 2 相ノ木氏居館跡（相木城跡）

約70m四方の「回」字形の居館跡であり、昭和32年の長野女子高校旧校舎建設時かあるいはそれ以前に、大きく造成改変を受けたものと思われる。道路や土地割りだけでなく、一部に土塁の痕跡を残している。

### 3 下宇木遺跡（下宇木B遺跡）

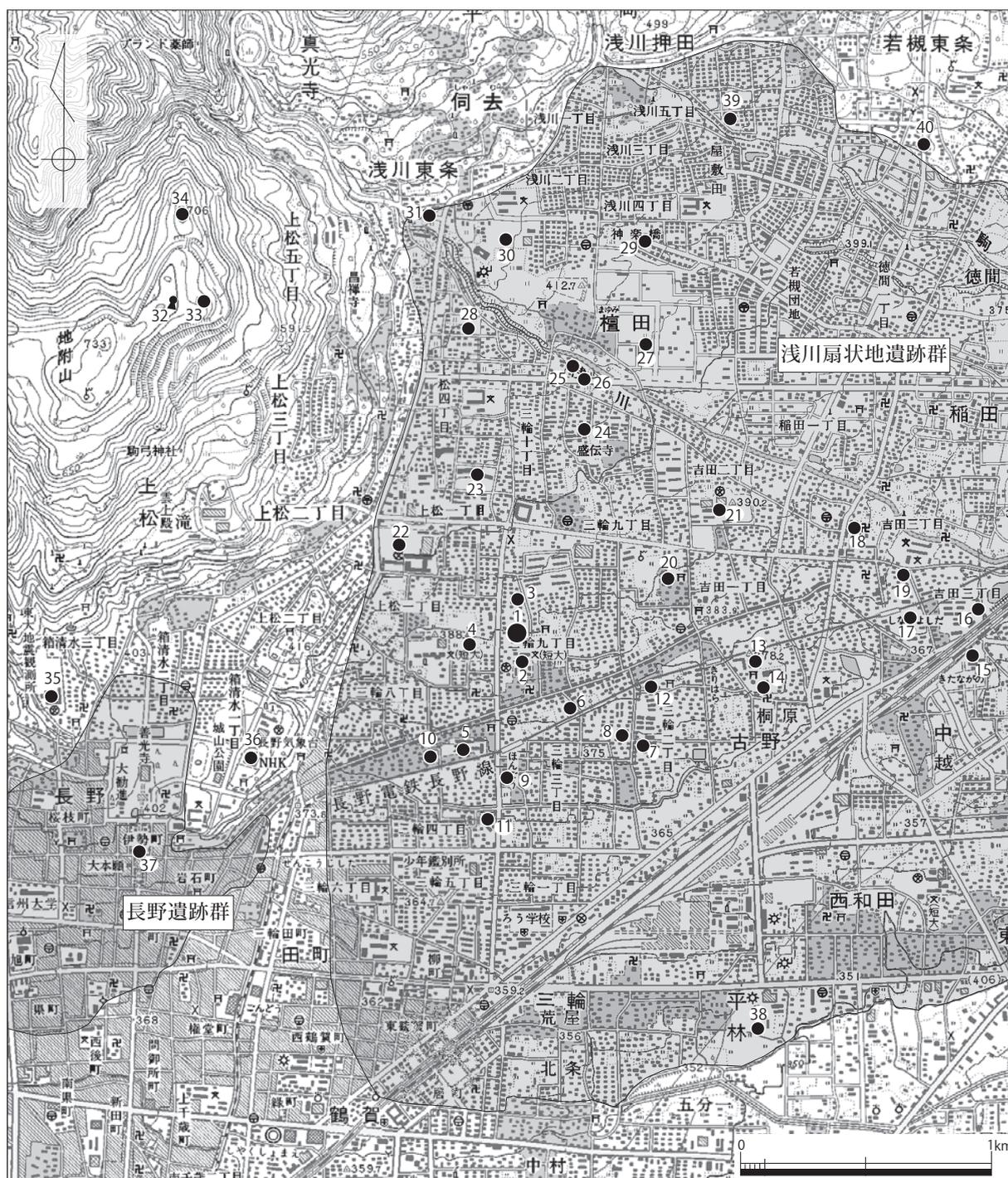
うずら幼稚園プール造成事業及び、公営住宅建設事業・市道拡幅改良事業に伴い、平成2年度に調査された遺跡である。工事工程の都合から各調査区を5か所に分け発掘調査を実施した。調査では弥生時代後期の住居跡6軒、古墳時代中期から後期の住居跡10軒が確認された。下宇木B遺跡は、詳細な位置が不詳ではあるが、昭和43年に下水道工事中に発見され、長野西高の笹沢浩教諭（当時）の指導の下長野吉田高校地歴班によって緊急調査された。幅2m程の狭い調査ではあったが、溝跡1本、土坑1基、土器集中区1か所などの遺構が検出されている。特に土器集中区からはきわめて大形の二重口縁壺や小型丸底土器などが一括出土している。

### 4 美和公園遺跡

昭和58年度に長野市遺跡調査会が発掘調査したが、報告書は刊行されていない。古墳時代中期の住居跡1軒と、直径約25cmを測る柱痕が残る柱穴が2基検出され、大形の掘立柱建物跡の存在が想定される。

### 5 三輪遺跡（1）三輪小学校地点

昭和50・51・53年度の3次にわたって合計約2200㎡の発掘調査が実施された。1次調査では古墳時代後期の住居跡2軒と、時期不明な溝1条を確認した。古墳時代後期の住居跡2軒の内1軒は、一辺10m前後を測る大形の方形住居で、床面からは建築部材と思われるおびただしい量の炭化材が検出された。2次調査では古墳時代中期と平安時代の住居跡7軒と溝跡2条が検出され、3次調査でも弥生時代後期及び古墳時代後期の住居跡7軒と土坑2基が確認されている。



- |                  |                |                       |                       |
|------------------|----------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 調査地点           | 11 旭幼稚園遺跡      | 21 吉田高校グランド遺跡         | 31 松ノ木田遺跡(2)飯綱高原線道路地点 |
| 2 相ノ木城跡          | 12 返目遺跡        | 22 本村東沖遺跡(1)長野高校地点    | 32 地附山前方後円墳           |
| 3 下字木遺跡          | 13 桐原宮北遺跡      | 23 本村東沖遺跡(2)上松団地地点    | 33 地附山古墳群上池ノ平6号墳      |
| 4 美和公園遺跡         | 14 桐原要害(高野氏館跡) | 24 盛伝寺居館跡             | 34 枅形城跡               |
| 5 三輪遺跡(1)三輪小学校地点 | 15 吉田四ツ屋遺跡     | 25 浅川端遺跡(1)団地造成地点     | 35 箱清水遺跡              |
| 6 三輪遺跡(2)長電住宅地点  | 16 吉田古屋敷遺跡(1)  | 26 浅川端遺跡(2)北部幹線地点     | 36 横山城跡               |
| 7 三輪遺跡(3)国鉄団地地点  | 17 吉田古屋敷遺跡(2)  | 27 檀田遺跡(2)            | 37 元善町遺跡              |
| 8 三輪遺跡(4)県宿舍地点   | 18 吉田町東遺跡(1)   | 28 湯谷東古墳群             | 38 平林東沖遺跡             |
| 9 三輪遺跡(5)滝沢M地点   | 19 吉田町東遺跡(2)   | 29 神楽橋遺跡              | 39 浅川西条遺跡             |
| 10 三輪遺跡(6)保育園地点  | 20 押鐘城跡        | 30 松ノ木田遺跡(1)第2グラウンド地点 | 40 牟礼バイパスA遺跡          |

図5 調査地周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

## 6 三輪遺跡 (2) 長電本郷住宅地地点

昭和60年度に本郷住宅地造成事業に伴い調査された。発掘調査は道路部分の約450㎡について実施し、古墳時代後期から平安時代に至る住居跡6軒、溝跡4本、土坑1基を検出している。

## 7 三輪遺跡 (3) 国鉄本郷団地地点

平成2年度に約300㎡を発掘調査し、弥生時代後期の住居跡2軒、古墳時代中期の住居跡1軒、土坑1基、奈良・平安時代の住居跡3軒、中世の土坑5基が確認されている。

## 8 三輪遺跡 (4) 県職員宿舎地点

平成4年度に約900㎡を発掘調査し、平安時代の住居跡2軒、溝跡7本、土坑4基、竪穴状遺構2基、柱穴列（掘立柱建物跡）1棟などが検出されている。

## 9 三輪遺跡 (5) 滝沢マンション地点

仮称滝沢マンション（サンディ・ココ）建設事業に先立って約280㎡の調査を行い、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡1軒、溝跡1本、土坑2基、井戸跡1基が検出されている。

## 10 三輪遺跡 (6) 保育園地点

三輪保育園園舎改築工事に伴い、約460㎡の発掘調査を行った。弥生時代後期住居跡1軒、古墳時代前期住居跡1軒、後期1軒、奈良時代住居跡2軒、などが検出されている。

## 11 旭幼稚園遺跡

旭幼稚園建設現場で発見され昭和42年7月に調査が行われた。調査を開始した時点では既に遺跡のほとんどが破壊を受けた状態で、西南の隅の一部を調査できたにすぎない。住居跡と思われる落ち込み（掘り込み）が確認されたが、今となってはこの遺構が住居跡であるか否かについて確かめる術はない。この落ち込みからは弥生時代中期末の土器の破片が多量に出土し、善光寺平における該期の基準資料となった。

## 22 本村東沖遺跡

平成3年に長野高校校舎改築工事に先立って約6800㎡が調査され、弥生時代中期の住居跡3軒、後期41軒、古墳時代前期2軒、中～後期56軒、平安時代1軒や掘立柱建物跡などを確認した。北陸系土器や子持勾玉、石製模造品などの出土が目ざされ、善光寺平におけるカマド初現期の集落として地附山古墳群とも関連付けられるなど、きわめて特徴的な調査例である。

## 引用・参考文献

- 笹沢 浩 1970 「長野市下宇木遺跡B地点出土の土師器」『長野県考古学会誌』8号 長野県考古学会  
笹沢 浩 1971 「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第23巻第12号 信濃史学会  
霜田 巖 1967 「新産都市建設の為の埋蔵文化財緊急調査報告（長野市）」『長野』12号 長野郷土史研究会  
千野 浩 1993 「古墳時代中期以降の土師器編年について」『本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集 長野市教育委員会  
長野県長野吉田高等学校文芸部地歴班 1969 『無定形』第3号 長野県長野吉田高等学校文芸部地歴班  
長野市教育委員会 1980 『三輪遺跡』長野市の埋蔵文化財第6集  
長野市教育委員会 1987 『三輪遺跡 (2)』長野市の埋蔵文化財第20集  
長野市教育委員会 1991 『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡 (3)』長野市の埋蔵文化財第38集  
長野市教育委員会 1993 『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡 (4)』長野市の埋蔵文化財第49集  
長野市教育委員会 1994 『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡 (5)・小島柳原遺跡群上中島遺跡』長野市の埋蔵文化財第62集  
長野市教育委員会 1996 『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡 (6)・棗河原遺跡』長野市の埋蔵文化財第75集  
長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌』第8巻 旧市町村史編 旧上水内郡・旧上高井郡 長野市  
長野市誌編さん委員会 2000 『長野市誌』第2巻 歴史編 原始・古代・中世 長野市  
米山一政 1976 『長野県上水内郡誌』歴史篇 上水内郡誌編集会 信教印刷（株）

### Ⅲ 遺構

今回の調査では、竪穴住居跡、溝跡、土坑（井戸跡）、ピットを検出した。時期の判明したものは、弥生時代後期と古墳時代中期・後期である。以下、その概略を記す。各遺構の基礎的なデータは一覧表（表3）にまとめ、図化に堪える遺存良好な遺物の出土した遺構、特に住居跡を優先して、実測図・写真を提示する。

なお、土師器杯、黒色土器椀、灰釉陶器など、平安時代の土器がわずかながら確認されており、同時期の遺構があった可能性もある。しかし、今回は明瞭に検出するには至らなかった。



図6 調査区全体図

#### 1 竪穴住居跡

##### 1. 概要

総数48軒を数える。内訳は、弥生時代後期箱清水式期26軒、古墳時代中期・後期19軒、時期不明3軒であった。以下、不明の3軒を除いて、時期ごとに概略を述べる。

##### 2. 弥生時代後期

まず、土器様相から当該期に属することが確認される住居跡が21軒ある。すなわち、1号、3号、5号、14号、



図7 弥生時代後期の竪穴住居跡

16号、17号、19号、22号、24号、25号、28号、31号、34号、36号、38号、40号、45号、48号、49号、50号、52号の各住居跡である。このうち、3号住居跡については、当該期に属することは問題ないとしても、東壁を除いてプランが不明瞭であり、そもそも住居とみなすべきではない遺構かもしれないが、一応ここに含めている。さらに、38号住居跡が重複する39号住居跡も加えることができよう。

これらの住居跡は、図7に示すように、プランは長方形を呈し、若干の振れはあるものの、いずれも主軸を北西にとっている。堅緻な床は見られなかった。床面では、34号住居址を除いて、複数のピットが検出されているが、それぞれの性格を直接的に示す資料はない。柱穴についても、位置関係から想定せざるを得なかった。また、16号、17号、19号、22号、48号、52号の各住居跡においては、楕円形の小穴が南東側の短軸に面して2基見出されている。これらは入口施設（梯子）に関わるものであろう。周溝が検出されたのは1号、28号住居跡のみであった。調理施設は地床炉であり、中央より北西に偏った地点、おおむね柱穴の間で検出されている。17号、36号、40号住居址の炉は、縁部に置石を有している。石は長円形を呈し、住居の主軸に直行するように配置されている。

以上のような特徴を踏まえると、箱清水式期の土器片が出土した47号住居址も当該期に属すると判断される。さらに、大部分が調査区外となる12号、29号、32号の各住居跡についても、疑問符付きながら箱清水式期のものとみなしたい。

ところで、当遺跡では、7軒の住居跡において、火を受けた痕跡が顕著に見られたが、詳細については後述する。



図8 古墳時代中期・後期の竪穴住居跡

### 3. 古墳時代中期・後期

当該期の住居跡としては、本村東沖編年（千野 1993, pp. 180-184）の3～6段階に併行する時期の土器が出土した、2号、4号、6号、8号、9号、10号、11号、13号、15号、23号、27号、30号、33号、35号、43号、44号、51号住居跡の17軒がある。また、弥生時代後期の40号住居跡に重複する26号住居跡と、弥生時代後期の45号住居跡に重複し、古墳時代後期の44号住居跡が重複する46号住居跡も加え、総数19軒となる。

図8に示すように、プランは35号住居跡を除いて正方形を呈し、北西から北北西に主軸をとっている。床面は、6号、10号住居跡で比較的堅緻な部分が見られたが、他は全て軟弱なものであった。床面では、弥生時代後期の住居と同様に、複数のピットが検出されている。位置関係から柱穴とみなし得るもの以外、いずれも性格は不明瞭である。その中で、33号住居跡では、北西壁際で貯蔵穴であった可能性のある土坑が検出されている。そこでは、土器も良好な状態で出土している（図37、遺構写真13～14）。8号、15号、23号、27号、33号、44号、51号の各住居跡で周溝が検出されている。また、4号住居跡では、当初5号、6号住居跡との新旧関係が判断できず、掘り下げの中でプランが不明瞭になってしまったが、壁に沿う大型の溝が検出された。これも周溝の一種であろうか。

調理施設に注目すれば、1) 炉が検出された住居跡が4軒（11号、33号、46号、51号住居跡）、2) カマドが検出された住居跡が6軒（2号、8号、15号、23号、30号、44号住居跡）、3) 調理施設が検出されなかった住居跡が8軒（4号、6号、10号、13号、26号、27号、35号、43号住居跡）となる。最後の事例については、4号、9号、26号、27号、35号住居跡のように部分的にしか調査できなかったために、調理施設の有無を判断できな

いものを含んでいる。

炉は、浅い掘り込みの地床炉である。51号住居跡では北西よりの柱穴の間、46号住居跡では東北よりの柱穴の間に位置する。33号住居跡では、北西よりの地点とともに、住居跡中央でも焼土が検出されており、こちらも地床炉であったろう。いずれも、痕跡としてはあまり明瞭ではない。互いに時期を違えるものか、あるいは二箇所にも炉があったのか、どちらも判断がつかない。11号住居跡では、甕の底部が床面に埋設されており、内部に灰と焼土が詰まっていた（遺構写真7）。炉として使用されたものであろう。

カマドは、全て北西壁に造り付けられている。いずれも石組みはなく粘土構築を基本とする。2号・30号住居跡では袖石が残存していた。2号住居跡では、さらに、焚口の天井に掛けられたと思われる長円形で扁平な石が、カマド前面に残存していた。支脚が残存していたのは2号住居跡のみであった。

2号、15号住居跡では、カマドの周囲にほぼ完形に復元可能な土器が多く残されていた。2号住居跡では倒置あるいは伏せられた状態の高杯5点や甕が（図11、遺構写真4）、15号住居跡では杯5点や高杯3点のほか、甕、甔、壺などが残されていた（図26、遺構写真8～9）。カマド廃絶時の状況を反映しているであろう。

なお、カマド跡として確実なものは、上記住居跡でしか見られないが、11号、33号の各住居跡でも、カマドの存在を疑わせる資料がある。両住居跡では、北西壁付近で、床面から浮いた状態ではあったが、焼土ブロックが検出されている。また、11号住居跡出土土器には、甔が含まれている（図61）。これらによって、カマドが存在していたにも関わらず、明瞭に検出できなかった可能性のあることを付記しておく。



図9 溝跡・土坑（井戸跡）・ピット

## 2 溝跡

今調査で検出した溝跡に対して1号から9号まで遺構番号を与えているが、3号、7号、9号の各溝跡は位置関係から見て同一の可能性があり、実質的には7条となろう。1号、2号溝跡については、時間的制約から内容を明らかにするには至らなかった。それら以外の溝も浅いもので、出土遺物もわずかであった。時期、機能ともに明らかではない。

## 3 土坑・井戸跡

径1 mを超え、比較的大型とみなし得る穴を土坑とし、8基を一覧表に提示する。加えて、当初は土坑と認識して掘り下げを始めたものの、他が検出面からの深さが40cmを超えない中で、50 cmを超えても完掘に至らないものが2基あった。これらについては「井戸跡」と推測し、一覧表では別個に扱っている。なお、井戸跡は、湧水によって掘り下げの継続が困難と判断され、完掘はしていない。

円形あるいは楕円形を呈するものが主となり、2号・3号土坑のように方形のものもある。これらは、住居と認定するには、規模が小さいために躊躇される。加えて、柱穴と認定し得るピットもなく、調理施設も欠いている。他とは性格が異なるものであろうが、一応土坑に含めたものである。

出土遺物は、8基の土坑のいずれにおいても土器の小破片しか見られない。したがって、時期の特定は困難である。例外的に、2号土坑においては、箱清水式期の壺1点、甕2点、さらに北陸系の有段口縁甕1点が出土している（図49、遺構写真21）。箱清水式期の早い段階に位置づけられ、かつ広範な地域間交流を示す資料を含む興味深い遺構であるが、残念ながら、その機能あるいは性格を明瞭にし得る手がかりはない。

## 4 ピット

径1 mに満たない小型の穴をピットと把握しているが、住居跡などに付属しないことが確実なものだけで99基検出された。そのうち、遺物が出土した16基について、遺構番号を付し、遺構一覧表に提示した。配置に規則性は見出されず、掘立柱建物の柱穴とみなし得るものはない。遺物はいずれも土器の小破片であるが、13号ピットのみ、高杯の脚を抽出している。

## 5 火を受けた痕跡のある住居跡について

今回の調査で検出された住居跡の中に、火を受けた痕跡のあるものが見られた（註）。弥生時代後期の住居跡で7軒（29号、31号、39号、40号、45号、48号、49号住居跡）、古墳時代後期の住居跡で2軒（10号、43号住居跡）の、合計9軒である。

ここで注目されるのは、多くを占める弥生時代後期の事例である。炭化物あるいは炭化材が多く残存し、火を受けたと認められる住居跡は、当遺跡の近隣でも検出例がある。三輪遺跡（三輪小学校地点）、本村東沖遺跡（長野高校地点）、檀田遺跡、柳田遺跡、吉田古屋敷遺跡、平林東沖遺跡、駒沢城跡などで検出されたものである（表1）。時期的には弥生時代中期から平安時代に渡るが、数的には特に弥生時代後期の事例が目立っている。数の多少は、各時期の住居跡の検出状況にも影響されようが、上記遺跡における弥生時代後期の住居跡の検出数は、必ずしも他の時期のそれを上回るものではない。例えば、檀田遺跡における時期ごとの住居跡の検出数を見ると、縄文時代中期18軒、弥生時代中期41軒、弥生時代後期70軒、古墳時代前中期20軒、古墳時代中後期90軒となる。本村東沖遺跡では、弥生時代中期3軒、弥生時代後期41軒、古墳時代中後期58軒である。いずれにおいても、むしろ古墳時代の住居跡が他時期に比べて多い。その中で、火を受けた痕跡のある住居跡については、弥生時代

表1 長野女子高校校庭遺跡近隣における火を受けた痕跡のある住居跡

遺跡	住居番号	時期	出典
三輪遺跡 (三輪小学校)	2号住居址	古墳後期	長野市教育委員会 1980, pp. 7-9
本村東沖遺跡 (長野高校)	45号住居址	弥生後期	長野市埋蔵文化財センター 1993, p. 37
	60号住居址	弥生後期	前掲書, p. 42
	83号住居址	弥生後期	前掲書, p. 54
	87号住居址	弥生後期	前掲書, p. 57
	105号住居址	弥生後期	前掲書, p. 66
	110号住居址	弥生後期	前掲書, p. 67
檀田遺跡	53①SA11	弥生中期	長野市埋蔵文化財センター 2004, p. 40
	75①SA1	弥生中期	前掲書, p. 41
	C②SA20	弥生中期	前掲書, p. 42
	50②SA3	弥生後期	前掲書, p. 44
	50②SA7	弥生後期	前掲書, p. 44
	56②SA1	弥生後期	前掲書, p. 45
	60②SA4	弥生後期	前掲書, p. 45
	B②SA3	弥生後期	前掲書, p. 46
	B②SA9	弥生後期	前掲書, p. 46
	C②SA2	弥生後期	前掲書, p. 47
	B②SA13	古墳前中期	前掲書, p. 50
	23①SA1	古墳後期	前掲書, p. 52
	34①SA1	古墳後期	前掲書, p. 52
柳田遺跡	YD3区5号住居址	古墳前期	長野市埋蔵文化財センター 1992, p. 82
平林東沖遺跡	SB16	古墳後期	長野市埋蔵文化財センター 2007a, pp. 29-31
浅川扇状地遺跡群W3C区	6号竪穴住居跡	弥生中期	長野県埋蔵文化財センター 1998, p. 44
吉田古屋敷遺跡	35号住居	古墳後期	長野市埋蔵文化財センター 2008, p. 82
駒沢城跡	1号住居址	平安	長野市埋蔵文化財センター 1996, pp. 16-18

の住居跡においても床面直上であった。古墳時代後期の10号住居跡では放射状に分布していたが(図20)、ここで問題としている弥生時代後期の例では、そうした規則性は明瞭ではなかった。炭化材は、垂木の一部であったと思われるものが主体である。48号住居跡では、板材と思われるものもある。明確に柱とみなし得る大型部材は確認されていない。45号、および48号住居跡では、炭化材が壁に密着した例が見られた(巻頭図版2上)。40号あるいは45号住居跡では、炭化物はほぼ全面に広がり(遺構写真15)、49号住居跡でも、住居の大部分が調査区外ではあったが、調査し得た部分では、全面的な堆積が認められた。床面に掘り込まれた炉跡やピットなどを覆うようにして堆積していた。ただ、ピットに関しては、柱穴に相当すると考えられるものも含め、内部に炭化物は流入していなかった。

こうした炭化材・炭化物の上に住居覆土となる暗褐色土が堆積するが、このことは、住居の埋没が始まった時点ですでに炭化材が存在していた証左となる。また、柱穴に炭化物が流入していなかった点も注目されよう。火が回った時点では、柱の抜き取りなどが行われておらず、上屋が存在していた可能性も示している。

ただし、柱部材とみなされる炭化材が検出されていないことは気がかりである。上屋が残存していたとすれば、床面上に露出した部分が焼き切れて倒壊し、燃え尽きたと解釈せざるを得ない。あるいは、佐久市市道遺跡で観察されたように(前原、川島 1976, p. 196-197)、柱を床面近くで切断するなどして、住居を解体していたのであろうか。放射状に炭化材が分布しない点も、あらかじめ上屋が解体されていたことを示すものかもしれない。

## 2. 床面・壁面の被熱硬化

覆土中から焼土等は検出されなかったが、床面・壁面の一部に被熱硬化が認められた。39号、40号、48号の各住居跡の床面が、部分的ではあるが、熱を受けて硬化していた(巻頭図版2下)。また、29号、40号、45号、48号、49号の各住居跡においては、壁面が熱を受けて硬化していた(巻頭図版2上)。層序としては、こうした

後期の例が古墳時代の例を数的に凌駕しているのである。弥生時代後期の火を受けた痕跡のある住居跡の高出現率は、善光寺平を見渡してみても変わらないようである。とすれば、住居が火を受けるとい現象は、弥生時代後期の歴史的・文化的特性を示すものと見なければならぬ。そこで、以下、調査所見を詳しく記し、検討の手がかりを供したい。

### 1. 炭化材・炭化物の検出状況

まず、炭化材・炭化物の検出レベルは、いずれ

被熱硬化面上に炭化材・炭化物が重なり、さらに住居覆土となる暗褐色土が位置づけられる。住居の燃焼とその後の埋没という時間経過を明瞭に示している。

### 3. 土器の出土量

次に、遺物の面から、火を受けた痕跡のある住居跡の有する特性を見てみよう。遺物の実測図提示にあたっては、口縁・底部の外周が1/2以上残存していることを基準としたが、火を受けた住居跡からの出土例は、わずかな数しか抽出できず、しかも完形に復元できるものはほとんどなかった。この点は、火を受けていない住居跡の事例と比べると、一層明瞭である。

表2 土器出土量比較

	火を受けた痕跡のある住居跡				火を受けていない住居跡			
	31号住居跡	45号住居跡	48号住居跡	40号住居跡	1号住居跡	16号住居跡	52号住居跡	5号住居跡
出土重量	4,128 g	5,182 g	7,459 g	7,626 g	11,761 g	15,865 g	33,223 g	38,044 g
実測点数	1	1	9	3	9	16	14	27

表に示したのが、火を受けた痕跡のある住居跡と火を受けていない住居跡それぞれにおける土器の出土量を比較したものである。火を受けた痕跡のある住居跡については、6軒のうち、住居跡の全部、あるいは比較的多くの部分を検出し得た31号、40号、45号、48号住居跡を挙げた。一方で、火を受けていない住居跡については、住居跡の全部を検出し得たもので、かつ火を受けた痕跡のある住居跡と規模の面で大きな相違のない1号、5号、16号、52号住居跡を挙げた。

さて、ここで一見してわかることは、火を受けた痕跡のある住居跡における土器の出土量が、火を受けていない住居跡のそれと比べて著しく少ないことである。例えば、火を受けた痕跡のある48号住居跡と、火を受けていない5号および52号住居跡の土器出土量を比較してみると、4～5倍の開きがある。5号、52号住居跡は、今調査で検出された住居跡の中でも、土器の出土量が際立って多い住居跡であり、比較対象として適当でないかもしれない。ただし、規模のより小さな1号住居跡と比べてみても、48号住居跡とは1.5倍を超える開きがある。火を受けた痕跡のある住居跡における土器の出土量の少なさは認めてよいと考える。

こうした土器の出土量の相違は、数的なものというよりも、土器の残存率の相違と言い換えることができよう。火を受けていない住居跡からは、火を受けた痕跡のある住居跡から出土しないような完形に復元可能な土器群が出土しているからである。火を受けた住居と受けていない住居とでは、土器の廃棄・遺棄のあり方に相違があったのであろう。さらに言えば、火を受けた住居では、廃絶にあたって土器が運び出された可能性もあろう。

### 4. 火を受けた痕跡のある住居跡の成因をめぐって

住居が火を受けた要因については、様々な解釈が出されている。すなわち、失火や自然災害と並んで、戦乱による焼き討ち（石野 1990, pp. 324-326; 麻柄2003, p. 7）、廃絶に伴う焼却（前原、川島 1976, pp. 196-197; 長野市埋蔵文化財センター 2007b, p. 119）、儀礼的あるいは忌避的放火（大島1994, pp. 42-43）、といった解釈がある。

これまでの見解では、大別して、住人の意志に反するものと意図的な放火があるが、長野女子高校校庭遺跡の事例に関しては、後者であろう。火を受けていない住居跡に比べて土器の出土量が少なく、完形に復元可能な土器がほとんど存在しないなど、あらかじめ土器を運び出していたことさえ想定される。その後火が回ったとすれば、住人の意志に反した火災とは考えにくい。当遺跡の事例における炭化物・炭化材の検出状況、さらに床面・壁面の被熱硬化状況は、それらの形成が住居の埋没開始以前に為されたことを示しており、住居の機能停止直後に火が放たれたと考えてよい。さらに事前に住居を解体していたとすれば、火入れは極めて計画的であったことになる。

火入れがどのような目的によるのかは、興味を引く問題である。ただ、留意すべきは、一口に火を受けた痕跡のある住居跡と言っても、内実がおそらく多様である点である。本村東沖遺跡の諸例など、長野女子高校校庭遺跡で検出された事例と類似したものがある一方で、篠ノ井遺跡群（長野市埋蔵文化財センター 2007b, p. 135-140）や、小島・柳原遺跡群の水内坐一元神社遺跡（長野市埋蔵文化財センター 2006, p. 39-40）などのように、土器を豊富に伴った例もある。長野女子高校校庭遺跡の事例も、火を受けた痕跡のある住居跡の一類型にすぎないのであろう。検討すべき課題はまだ多い。

## 註

ここで取り上げるような住居跡は、しばしば「火災住居」あるいは「焼失住居（竪穴建物）」などと呼ばれる。しかし、ここではあえてそうした語の使用を避けた。火を受ける要因に多様な解釈があり得る中で、「火災」や「焼失」の語は、多分に解釈を含んでいるように思えるからである。「火災」は、天災か人災かは問わず、人の意識に反して発生する現象であろう。となると、廃絶行為や儀礼として意図的に火が放たれた場合（大島1994, pp. 42-43）、「火災」とは言えまい。その意味で、「焼失住居」は、「火災住居」よりも汎用性が高いと言えるが、「焼失」には、燃焼によってかたちあるものが消滅するという語感がある。つまり、生活時であれ、廃絶後であれ、火が回ることで住居の上屋が焼け落ちるイメージである。解体した住居に火を放った可能性も考えられているが（前原、川島 1976, pp. 196-197; 長野市埋蔵文化財センター 2007b, p. 119）、その場合には、「火災」はもちろんのこと、「焼失」の語もそぐわないように思える。小林謙一のように「燃焼住居」と呼ぶのも一案であろう（小林 1999, p. 8）。用語の問題にはこれ以上踏み込む余裕はないので、ひとまず、「要因は未確定ながらも、火を受けたという事実が確認できる住居跡」という意味合いを含む記述を試みた。

## 引用参考文献

- 石野博信 1990 「火災住居跡の課題」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館, pp. 303-350.
- 大島直行 1994 「縄文時代の火災住居」『考古学雑誌』80 (1), pp. 1-56.
- 小林謙一 1999 「いわゆる「火災住居」跡の調査と解釈」『考古学ジャーナル』447, pp. 8-11.
- 千野浩 1993 「本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について」長野市埋蔵文化財センター（編）1993『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』（長野市の埋蔵文化財第50集）長野市教育委員会, p. 180-184.
- 長野県埋蔵文化財センター（編）1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その2 浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局ほか
- 長野市教育委員会（編）1980 『三輪遺跡：三輪小学校地点遺跡第1～3次調査報告』（長野市の埋蔵文化財第6集）長野市遺跡調査会
- 長野市埋蔵文化財センター（編）1992 『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』（長野市の埋蔵文化財第47集）長野市教育委員会
- 長野市埋蔵文化財センター（編）1993 『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』（長野市の埋蔵文化財第50集）長野市教育委員会
- 長野市埋蔵文化財センター（編）2004 『浅川扇状地遺跡群 檀田遺跡（2）』（長野市の埋蔵文化財第105集）長野市教育委員会
- 長野市埋蔵文化財センター（編）2006 『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡（4）』（長野市の埋蔵文化財第113集）長野市教育委員会
- 長野市埋蔵文化財センター（編）2007a 『浅川扇状地遺跡群 平林東沖遺跡』（長野市の埋蔵文化財第116集）長野市教育委員会
- 長野市埋蔵文化財センター（編）2007b 『篠ノ井遺跡群（6）』（長野市の埋蔵文化財第117集）長野市教育委員会
- 長野市埋蔵文化財センター（編）2008 『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡（5）』（長野市の埋蔵文化財第120集）長野市教育委員会
- 前原豊、川島雅人 1976 「第9号住居址と出土遺物」市道遺跡発掘調査団『市道：長野県佐久市市道遺跡の発掘調査』佐久市教育委員会, pp. 149-203.
- 麻柄一志 2003 「北陸地方の焼失住居」『考古学ジャーナル』509, pp. 6-9.

表3 検出遺構一覧表

遺構名	記号	時代(期)	遺構		出土土器		その他遺物	特記事項	図	写真
			形態(規模)・施設	備考	重量(g)	実測点数				
1号住居跡	SB01	弥生後期	長方形(5.5×4.2m) 柱穴(4) 周溝	SB10が重複	11,761	9			10	4
2号住居跡	SB02	古墳中後期	方形(5.0×4.7m) 柱穴(3) カマド	SB31に重複	10,721	16			11	4
3号住居跡	SB03	弥生後期	方形(4.5×4.2m)	SB2が重複	7,483	10	管玉(未製品)	住居ではない可能性あり	12	5
4号住居跡	SB04	古墳中後期	? 大型溝(周溝?)	SB5、6が重複	11,248	14			12	5
5号住居跡	SB05	弥生後期	長方形(9.0×4.3m) 柱穴(4) 炉(2)	SB6が重複	38,044	27	鉄鏃		13-16	5-6
6号住居跡	SB06	古墳中後期	方形(7.0×7.5m) 貼床 柱穴(1)	SB05に重複 SK01に重複	7,406	21	砥石		17	6
8号住居跡	SB08	古墳中後期	方形(5.0×5.2m) 柱穴(3) 周溝 カマド	SB9、17に重複	4,630	5			18	6
9号住居跡	SB09	古墳中後期	方形(5.5×6.0m) 柱穴(4)	SB17に重複 SB08が重複	11,978	6			19	7
10号住居跡	SB10	古墳中後期	方形(5.5×5.5m) 貼床	SB01に重複	5,844	11		火を受けた痕跡あり(炭化材)	20	7
11号住居跡	SB11	古墳中後期	方形(6.5×6.6m) 柱穴 炉	SB12、19に重複	46,907	42	打製石斧	土器底部を利用した炉あり	21-23	7-8
12号住居跡	SB12	弥生後期?	?	SB11が重複	1,134	0			24	8
13号住居跡	SB13	古墳中後期	方形(5.1×5.0m) 柱穴(4)	SB14に重複	7,072	9	石鏃		24	8
14号住居跡	SB14	弥生後期	?(7.2×?m) 柱穴(1)	SB13が重複	10,608	10		炭化材あり(床から浮く)	25	8
15号住居跡	SB15	古墳中後期	方形(4.8×4.8m) 柱穴(2) 周溝 カマド	SB16、24に重複	21,551	25			26	8-9
16号住居跡	SB16	弥生後期	長方形(9.8×5.5m) 柱穴(3) 炉(2?)	SB24に重複 SB15が重複	15,865	16	ガラス小玉		27	9
17号住居跡	SB17	弥生後期	長方形(6.8×5.5m) 柱穴(4) 梯子穴 炉	SB08、09が重複	12,994	9			28	10
18号住居跡	SB18	不明	?	SB11、19、22が 重複	2,766	0	石鏃			10
19号住居跡	SB19	弥生後期	長方形(10.2×5.2m) 柱穴(4) 梯子穴 炉	SB11が重複 SB22に重複	8,494	4	匙形土製品		29	10
21号住居跡	SB21	不明	?	竪穴住居址?	2,187	0				
22号住居跡	SB22	弥生後期	長方形(4.6×3.5m) 柱穴(3) 梯子穴 炉	SB19が重複	3,773	4	磨石		30	10
23号住居跡	SB23	古墳中後期	方形(5.0×4.8m) 柱穴(4) 周溝 カマド	SB24に重複	2,212	3			31	11
24号住居跡	SB24	弥生後期	?	SB15、16、23が 重複	967	2			31	11
25号住居跡	SB25	弥生後期	?		2,532	1			32	11
26号住居跡	SB26	古墳中後期?	方形(6.2×6.3m) 柱穴(3)	SB39、40に重複	1,955	1			33	11
27号住居跡	SB27	古墳中後期	? 柱穴(2)		4,236	3			34	12
28号住居跡	SB28	弥生後期	? 周溝		18,932	6			34	12
29号住居跡	SB29	弥生後期?	?		596	1		火を受けた痕跡あり(壁面被 熱硬化)		12
30号住居跡	SB30	古墳中後期	方形(6.5×6.7m) 柱穴(4) カマド	SB36、37、38に 重複	22,371	12			35	12
31号住居跡	SB31	弥生後期	長方形(?×5.4m) 柱穴(3) 炉(2?)	SB33が重複	4,128	1		火を受けた痕跡あり(床面一 部被熱硬化、炭化材)	36	12-13
32号住居跡	SB32	弥生後期?	?		304	0				13
33号住居跡	SB33	古墳中後期	方形(7.0~6.8m) 柱穴(3) 貯蔵穴 炉	SB31、34、36に 重複	18,490	18	不明鉄製品		37	13-14
34号住居跡	SB34	弥生後期	長方形(4.3×3.6m) 炉	SB33が重複	4,748	10	凹石		38	14
35号住居跡	SB35	古墳中後期	長方形(?×4.2m)	SK04が重複	1,459	5			32	14
36号住居跡	SB36	弥生後期	長方形(?×4.7m) 柱穴(2) 炉	SB30、33が重複	3,541	2			38	14
37号住居跡	SB37	不明	(?×4.8m)	SB30が重複	662	0				14
38号住居跡	SB38	弥生後期	長方形(7.5×5.1m) 柱穴(4) 炉(2?)	SB39に重複 SB30が重複	8,136	5			29	14-15
39号住居跡	SB39	弥生後期	? 柱穴(2) 炉	SB38が重複	670	0		火を受けた痕跡あり(床面一 部被熱硬化、炭化材)	40	15

遺構名	記号	時代(期)	遺構		出土土器		その他遺物	特記事項	図	写真
			形態(規模)・施設	備考	重量(g)	実測点数				
40号住居跡	SB40	弥生後期	長方形(7.2×5.2m) 柱穴(4) 炉	SB26、SE02が重複 SK09に重複	7,626	3		火を受けた痕跡あり(床面一部被熱硬化、炭化材)	41	15-16
43号住居跡	SB43	古墳中後期	方形(3.3×3.6m)		1,616	3		火を受けた痕跡あり(炭化材)	40	16
44号住居跡	SB44	古墳中後期	方形(5.5×5.5m) 柱穴(4) 周溝 カマド	SB45、46、47に 重複	10,531	11	勾玉		42	16-17
45号住居跡	SB45	弥生後期	(?)×4.2m) 柱穴(2) 炉	SB44、46が重複	5,182	1		火を受けた痕跡あり(壁面被熱硬化、炭化材)	43	17-18
46号住居跡	SB46	古墳中後期?	方形(4.6×4.6m) 柱穴(3) 炉	SB45に重複 SB44が重複	2,418	1			44	18
47号住居跡	SB47	弥生後期	長方形(5.9×4.4m)	SB48に重複 SB44が重複	506	0			44	18
48号住居跡	SB48	弥生後期	長方形(8.8×6.2m) 柱穴(4) 梯子穴 炉	SB47が重複	7,459	9		火を受けた痕跡あり(床面一部・壁面被熱硬化、炭化材)	45-46	18-19
49号住居跡	SB49	弥生後期	?		3,193	3		火を受けた痕跡あり(床面一部・壁面被熱硬化、炭化材)	47	19
50号住居跡	SB50	弥生後期	長方形(5.4×4.2m) 柱穴(4) 炉	SD08に重複 SB51が重複	7,196	5			47	19
51号住居跡	SB51	古墳中後期	方形(6.0×5.7m) 炉 周溝	SB50、SD08に重複	11,802	13			48	20
52号住居跡	SB52	弥生後期	長方形(7.2×4.8m) 柱穴(3) 周溝 炉		33,223	14	凹石		49	20-21
1号溝跡	SD01	不明	幅～1.6m	SD02と交差	0	0		未発掘		
2号溝跡	SD02	不明	幅～0.6m	SD01と交差	0	0		未発掘(かく乱?)		
3号溝跡	SD03	不明	幅～1.2m		425	0				
4号溝跡	SD04	不明	幅～0.8m		2,116	1				
5号溝跡	SD05	不明	幅～1.0m		1,074	0				
6号溝跡	SD06	不明	幅～0.9m	SD07に重複	1,166	0				
7号溝跡	SD07	不明	幅～0.8m	SD06が重複	23	0				
8号溝跡	SD08	不明	幅～1.0m	SB50が重複	40	0				
9号溝跡	SD09	不明	幅～1.1m	SB40に重複	82	0				
1号井戸跡	SE01	不明	直径1.4m		0	0				
2号井戸跡	SE02	不明	方形(1.9×2.0m)	SB40に重複	645	1				
1号土坑	SK01	不明	不整形(短径2.7m)		1,412	0				
2号土坑	SK02	弥生後期	長方形(2.5×2.1m)	SB08が重複	4,100	4			49	21
3号土坑	SK03	不明	(?)×1.8m)		167	0				
4号土坑	SK04	不明	楕円形?(長径1.6m)	SB35に重複	82	0				
5号土坑	SK05	不明	不整形(長1.3m)	SB33に重複	0	0				
6号土坑	SK06	不明	円形(径1.6m)	SB26に重複	147	0				
8号土坑	SK08	不明	楕円形(長径2.0m)		70	0				
9号土坑	SK09	不明	不整形(1.2×4.3m)	SB40が重複	2,015	6		SB40に帰属する遺物を含む		
1号ビット	SP01	不明	円形(径0.5m)		0	0				
2号ビット	SP02	不明	円形(径0.6m)		0	0				
3号ビット	SP03	不明	円形(径0.4m)		0	0				
4号ビット	SP04	不明	円形(径0.5m)		13	0				
5号ビット	SP05	不明	円形(径0.4m)		12	0				
6号ビット	SP06	不明	円形(径0.6m)		0	0				
11号ビット	SP11	不明	円形(径0.5m)		36	0				

遺構名	記号	時代(期)	遺構		出土土器		その他遺物	特記事項	図	写真
			形態(規模)・施設	備考	重量(g)	実測点数				
12号ビット	SP12	不明	不整形(長径0.5m)		64	0				
13号ビット	SP13	不明	円形(径0.5m)		261	1				
14号ビット	SP14	不明	円形(径0.6m)		0	0				
15号ビット	SP15	不明	円形(径0.5m)		98	0				
16号ビット	SP16	不明	円形(径0.3m)		25	0				
17号ビット	SP17	不明	円形(径0.6m)		48	0				
18号ビット	SP18	不明	円形(径0.5m)		17	0				
19号ビット	SP19	不明	円形(径0.4m)		40	0				
20号ビット	SP20	不明	円形(径0.5m)		8	0				
21号ビット	SP21	不明	円形(径0.5m)		115	0				
22号ビット	SP22	不明	円形(径0.3m)		8	0				
23号ビット	SP23	不明	不整形(長0.7m)		89	0				

SB1

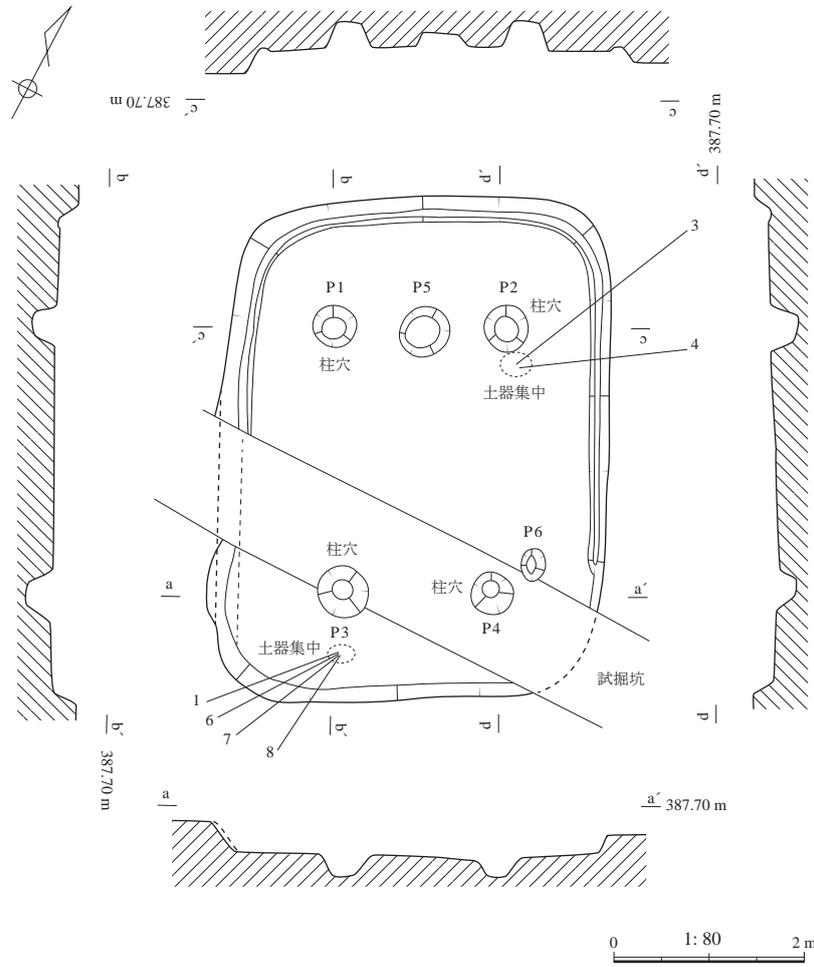
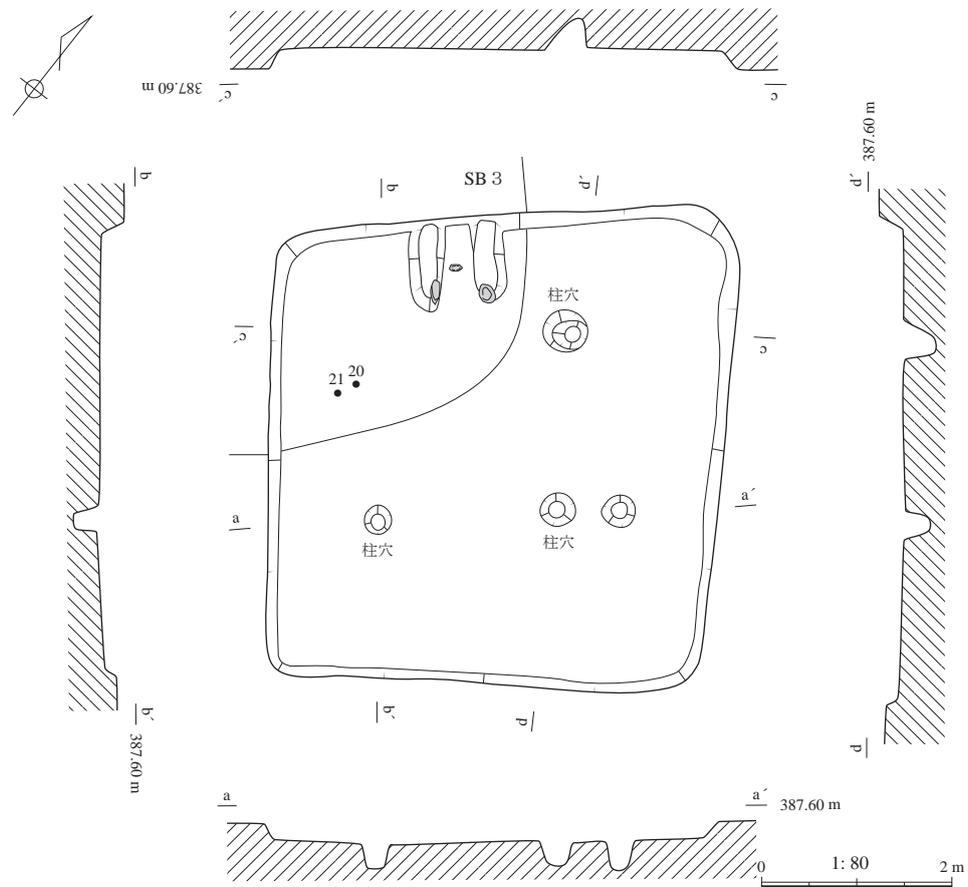


図 10 遺構実測図①

SB2

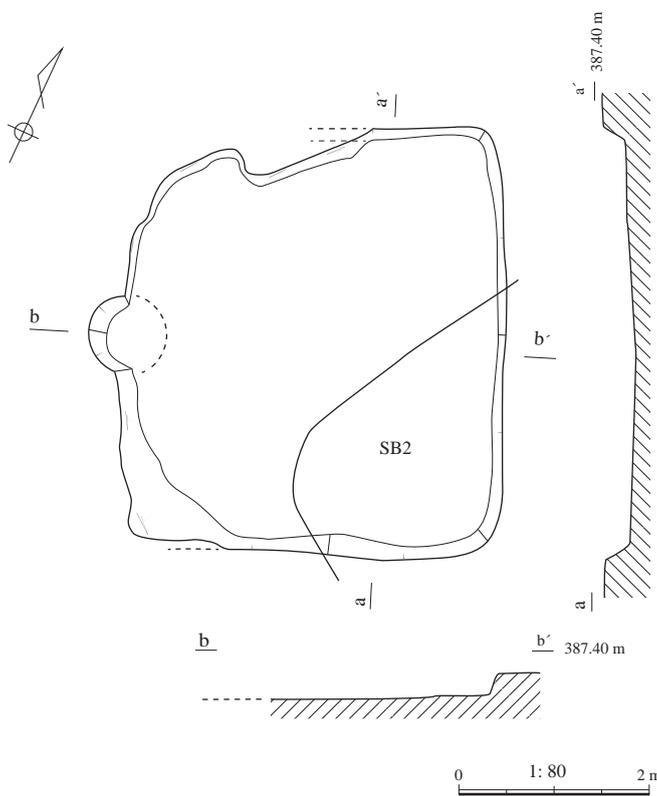


SB2 カマド土器出土状況



図 11 遺構実測図②

SB3



SB4

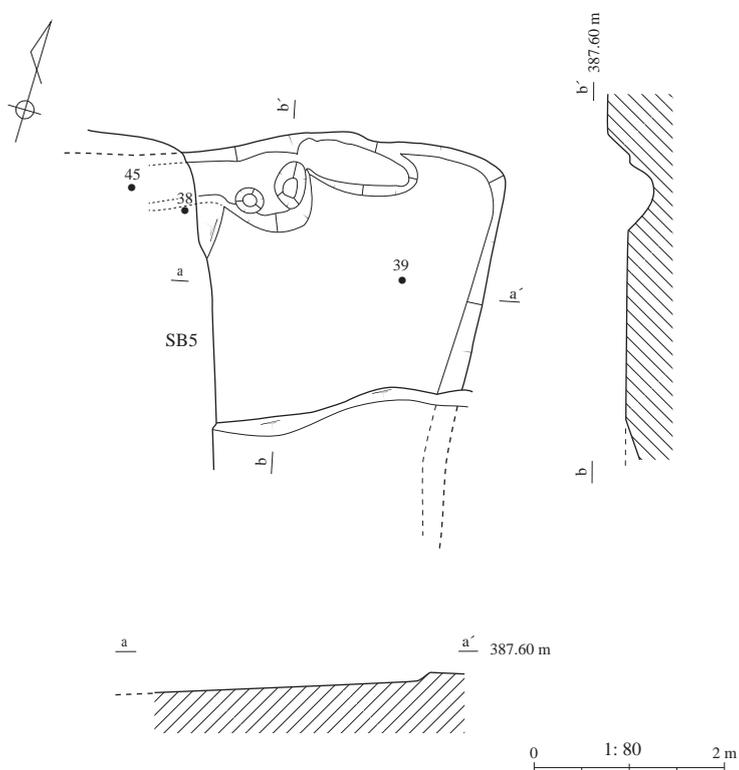


图 12 遺構実測図③

SB5

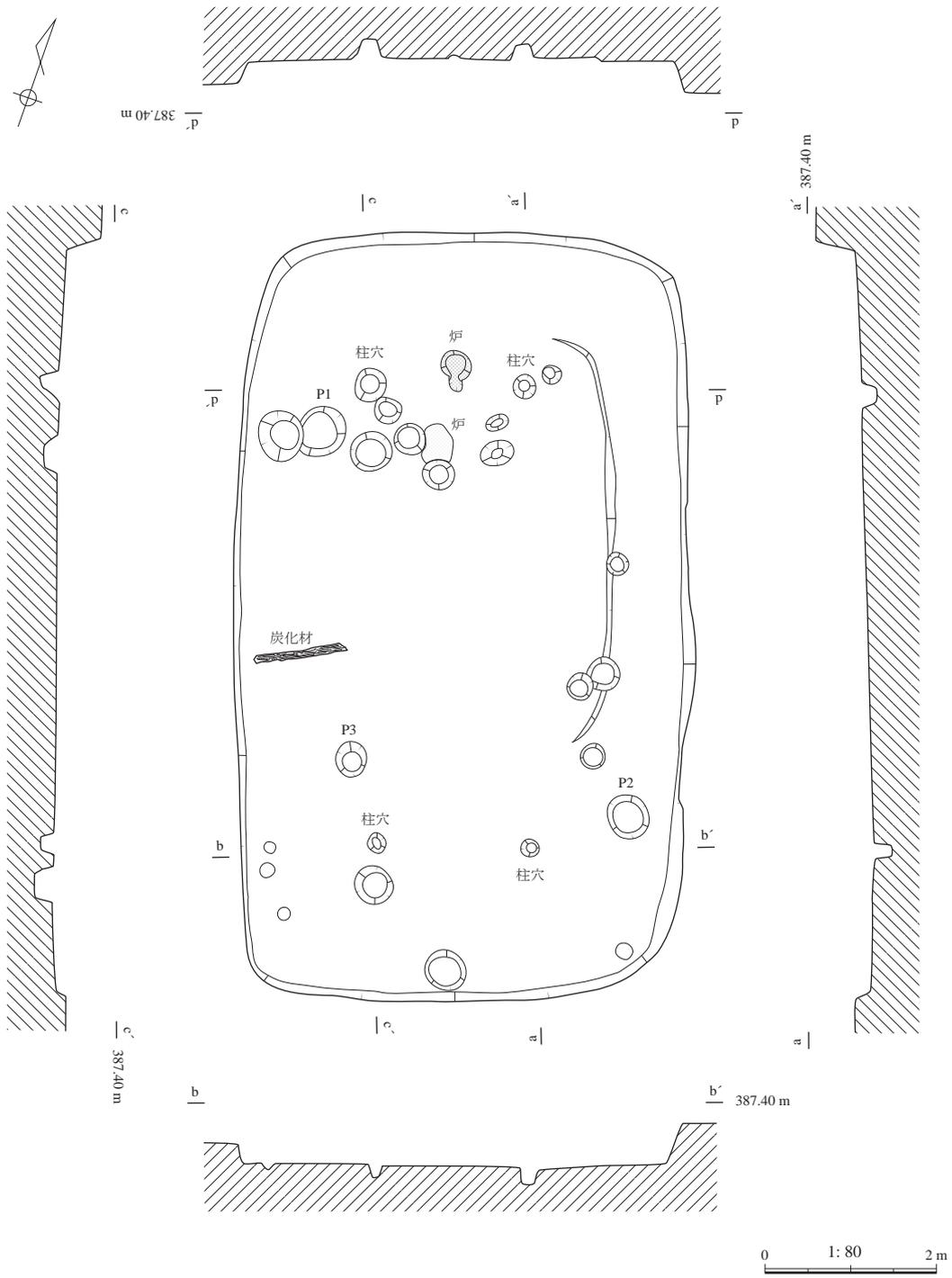
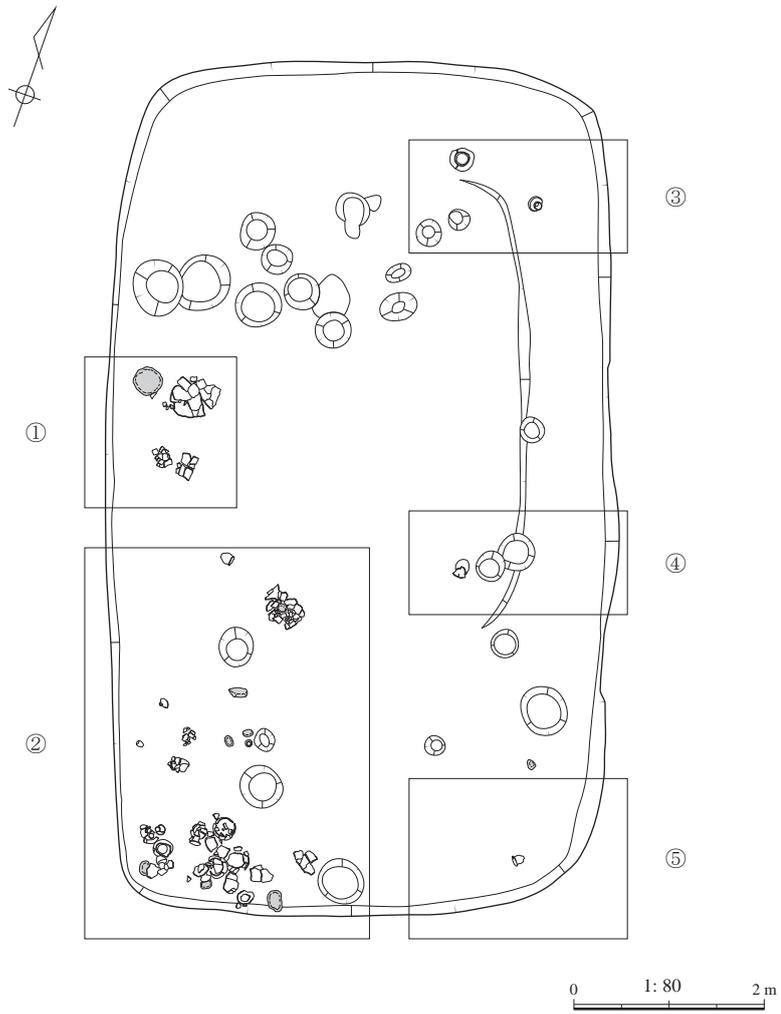


图 13 遺構実測図④

SB5 床面土器出土状況



SB5 床面土器出土状況①

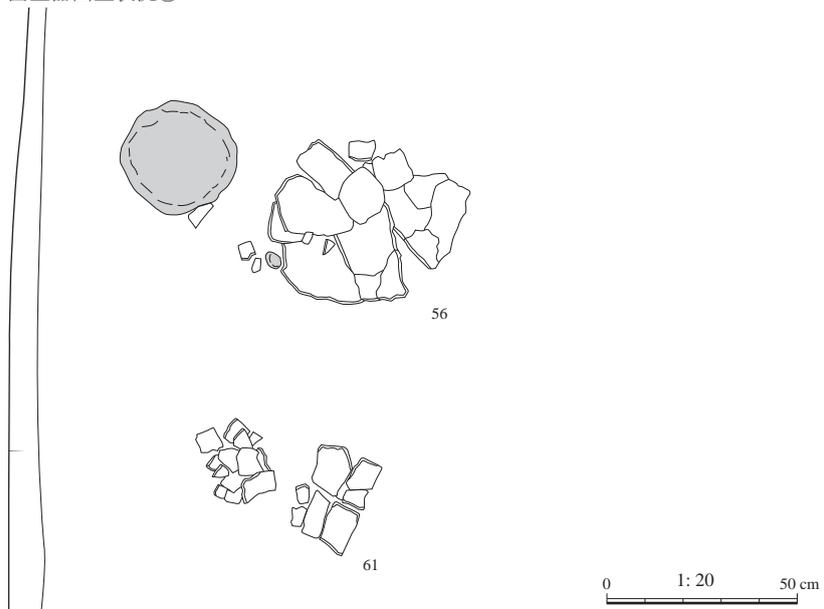


図 14 遺構実測図⑤

SB5 床面土器出土状況②

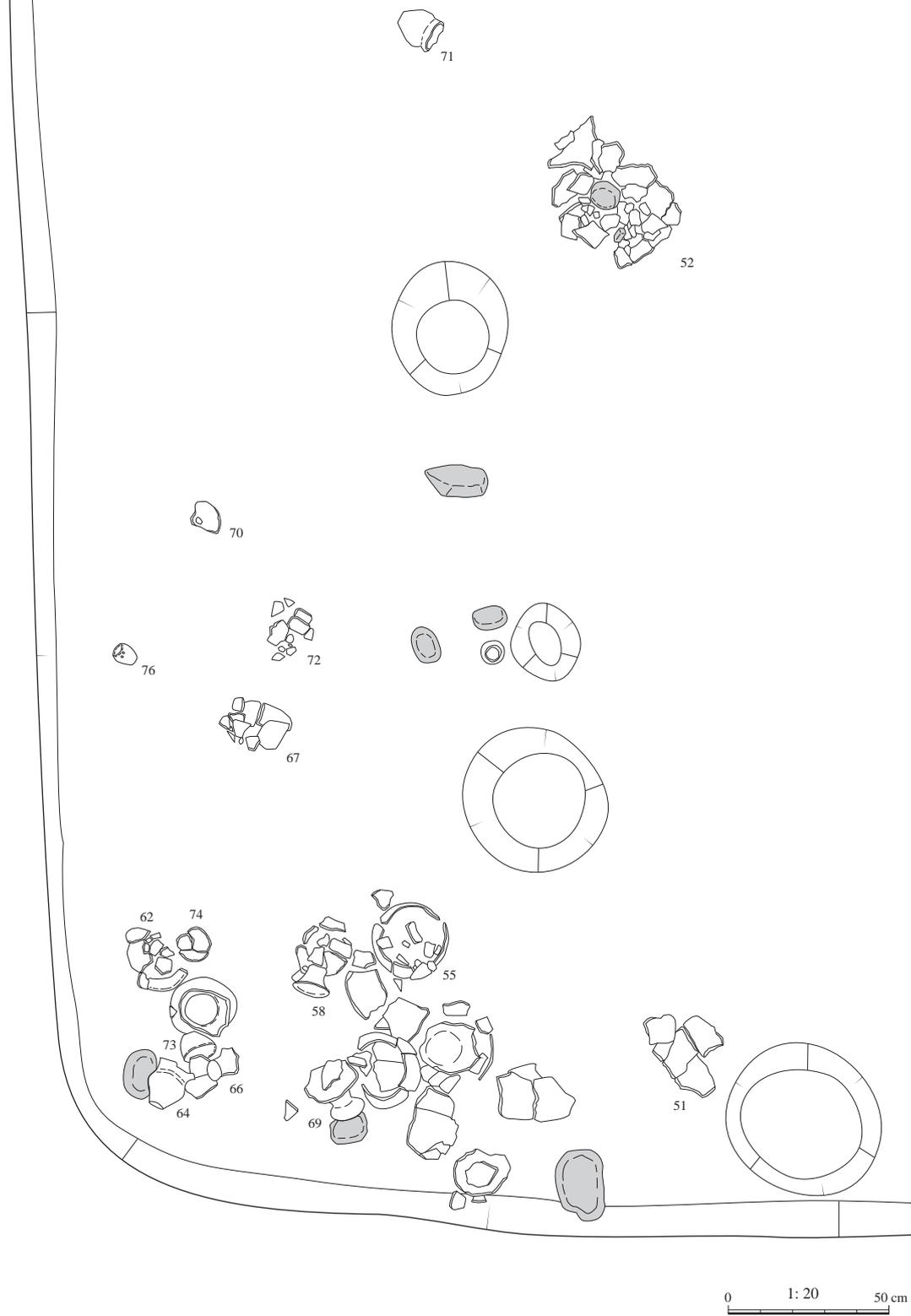
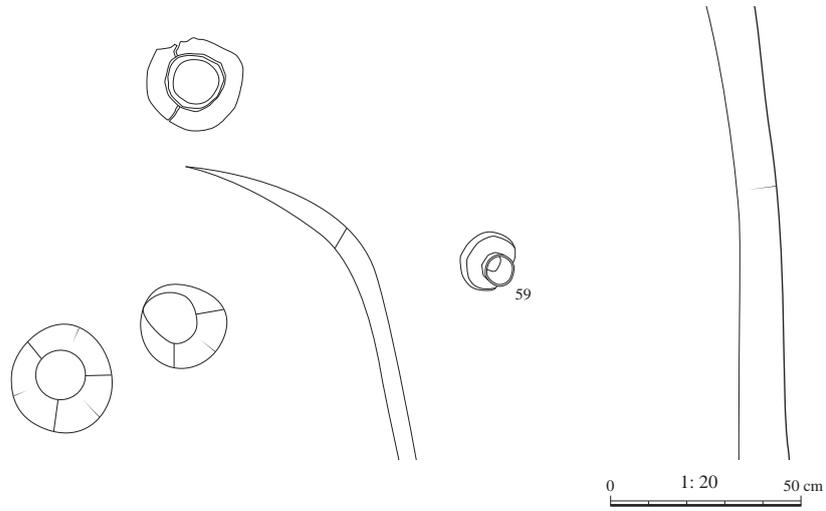
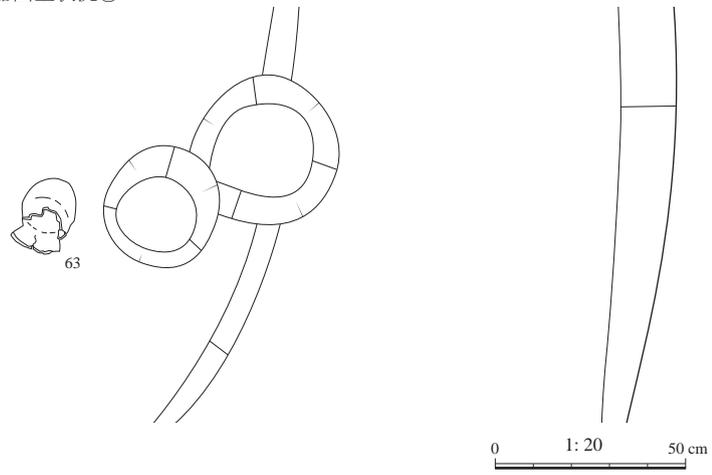


図 15 遺構実測図⑥

SB5 床面土器出土状況③



SB5 床面土器出土状況④



SB5 床面土器出土状況⑤

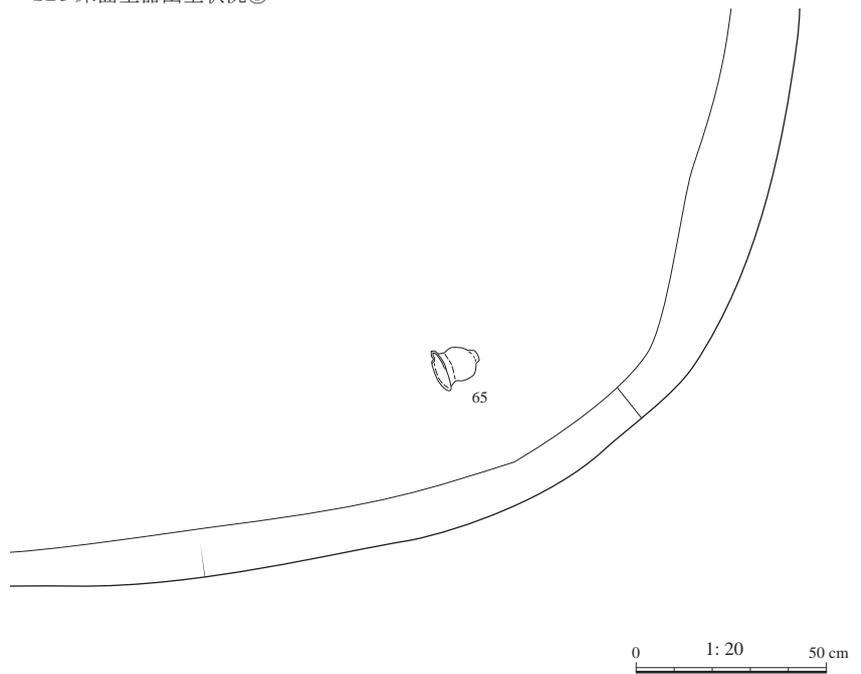


図 16 遺構実測図⑦

SB6

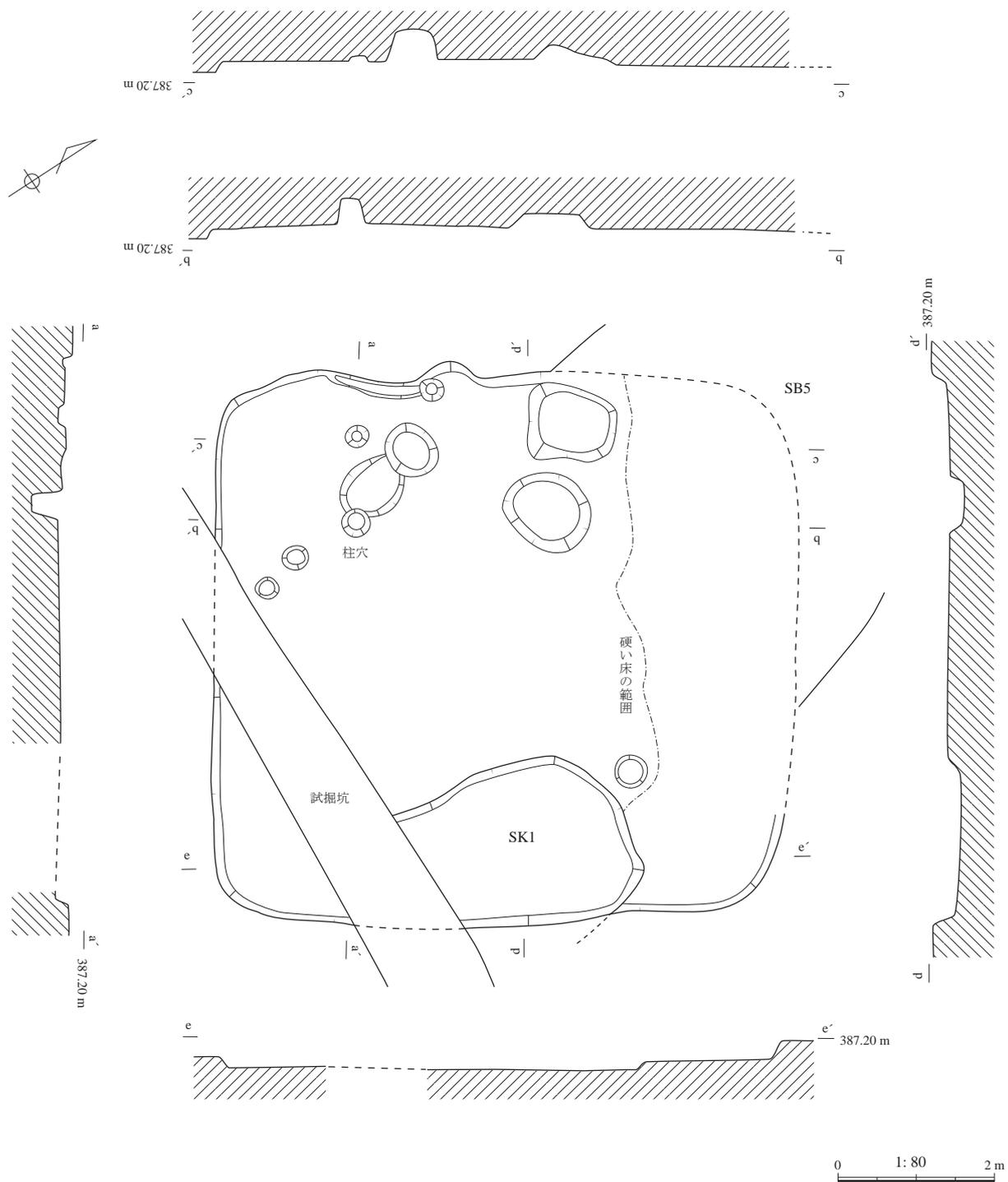
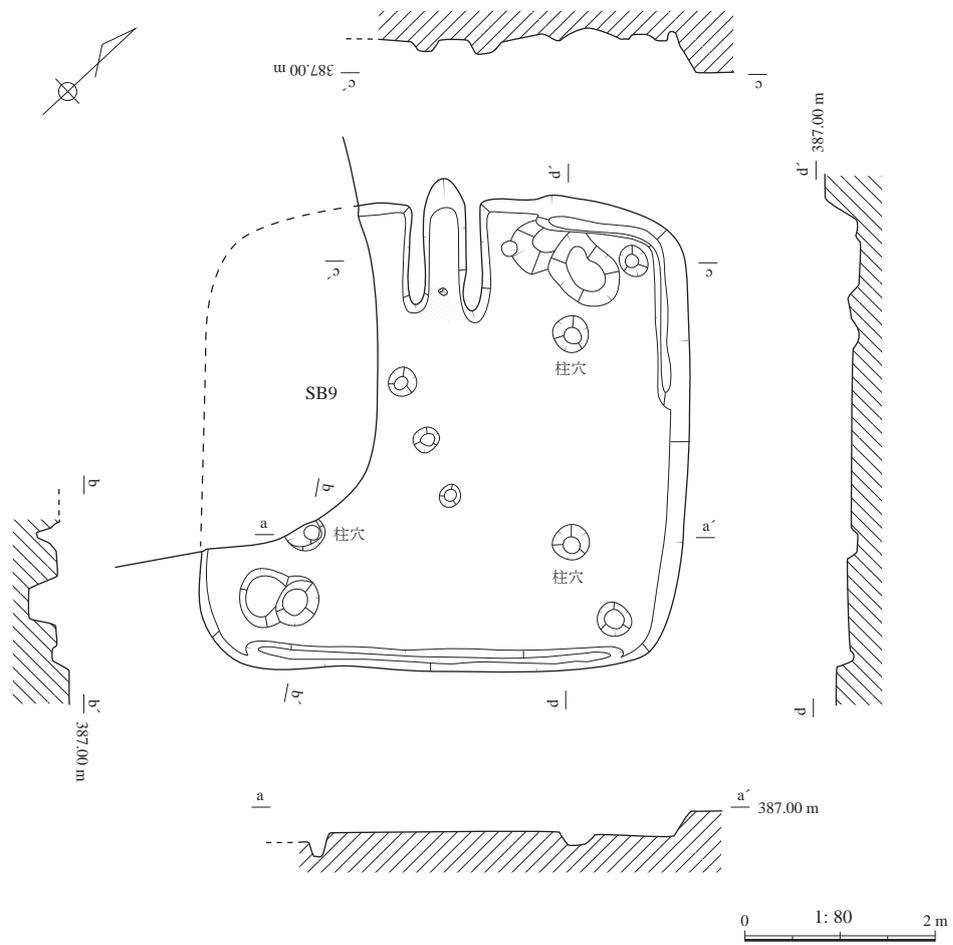


図 17 遺構実測図⑧

SB8



SB8 カマド土器出土状況

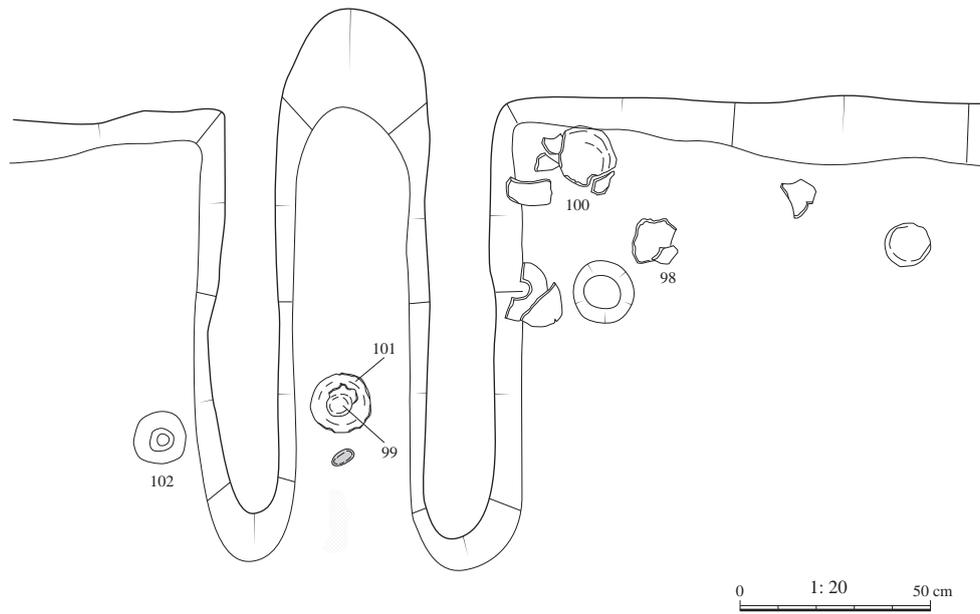


図 18 遺構実測図⑨

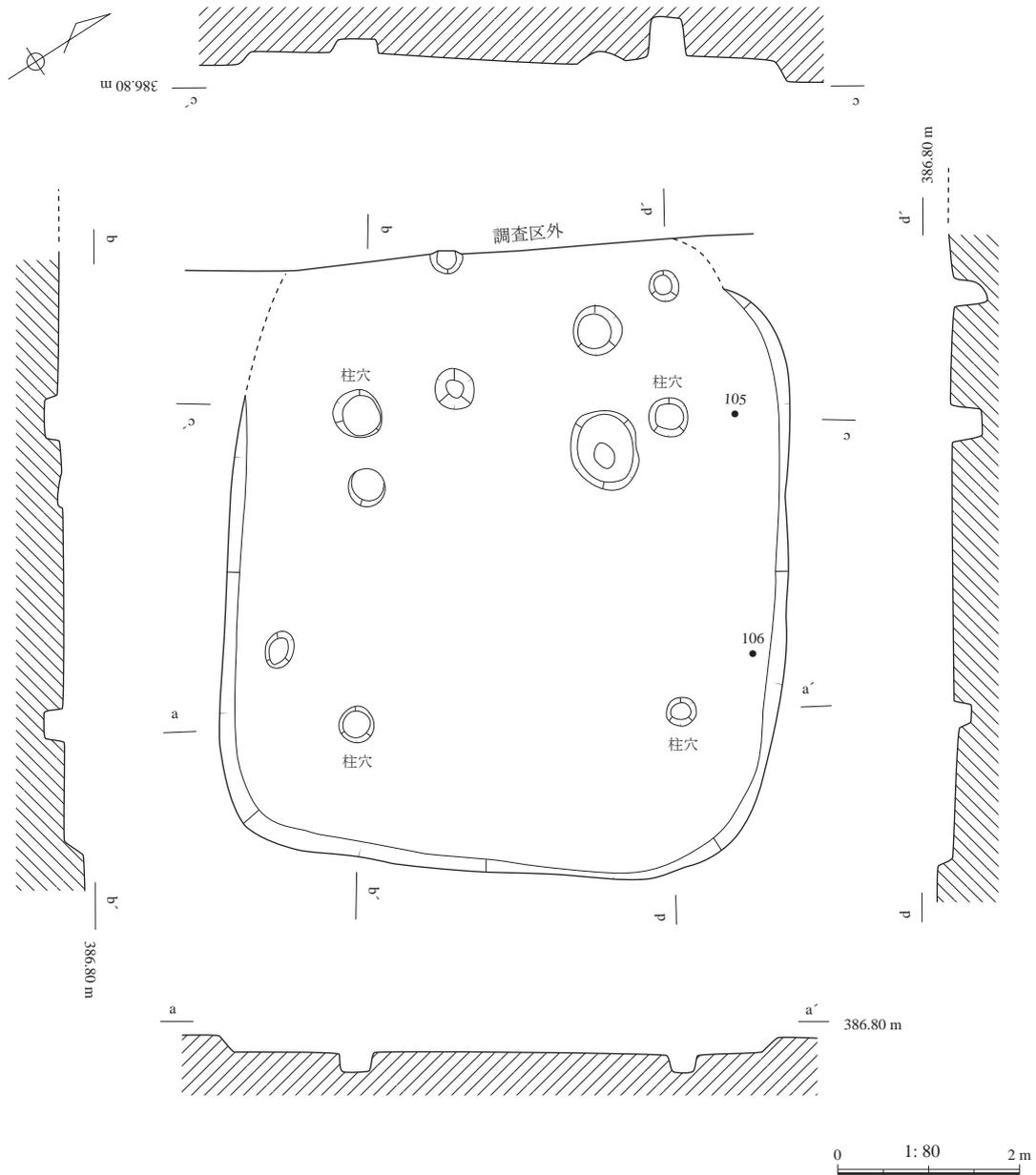
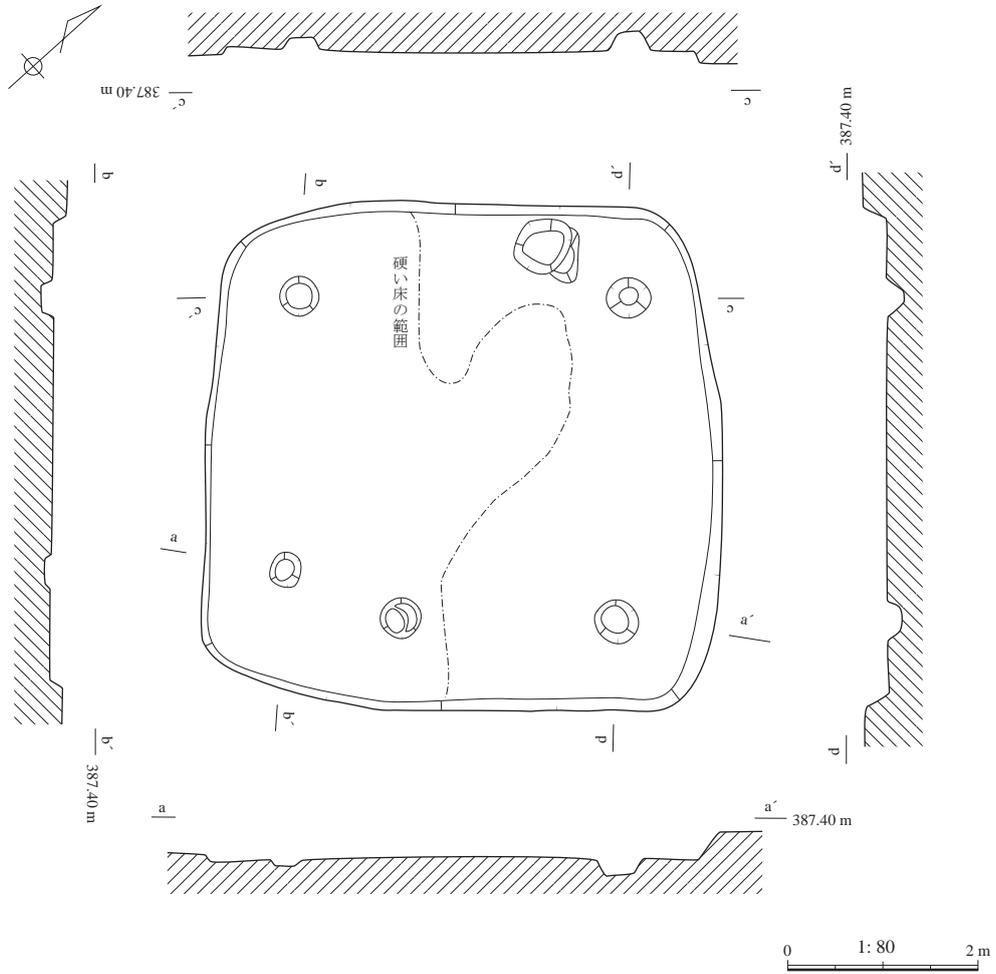


図 19 遺構実測図⑩

SB10



SB10 炭化材出土状況

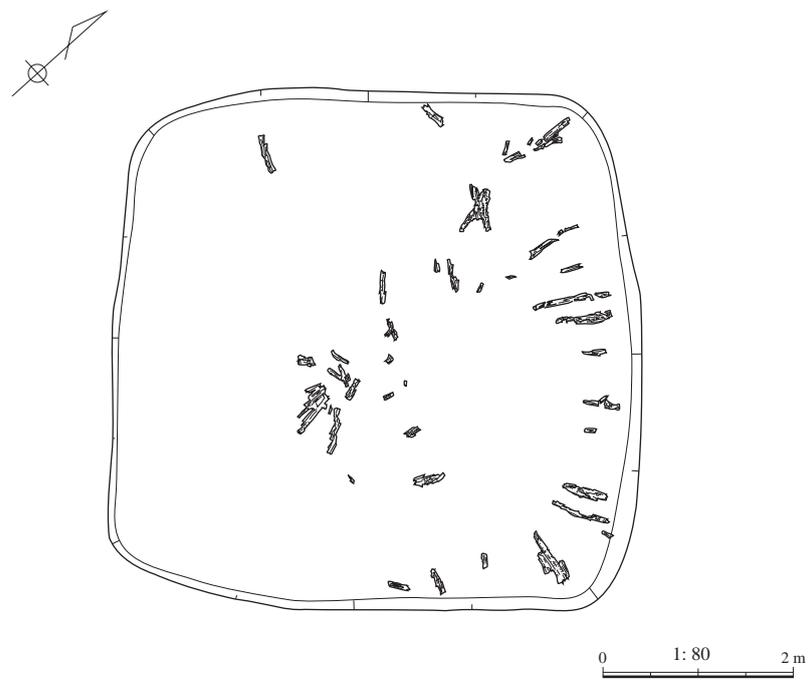


図 20 遺構実測図①

SB11

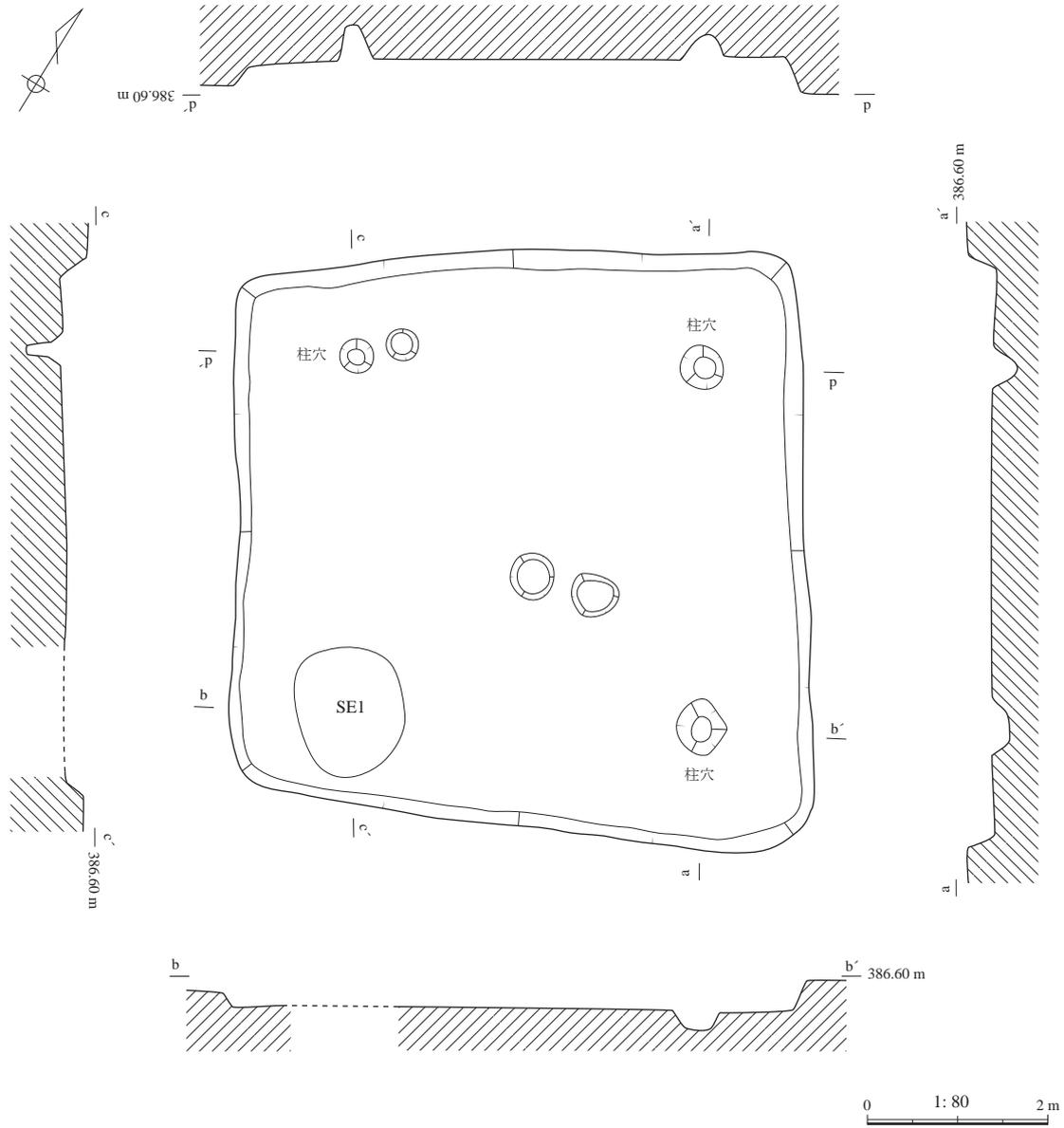
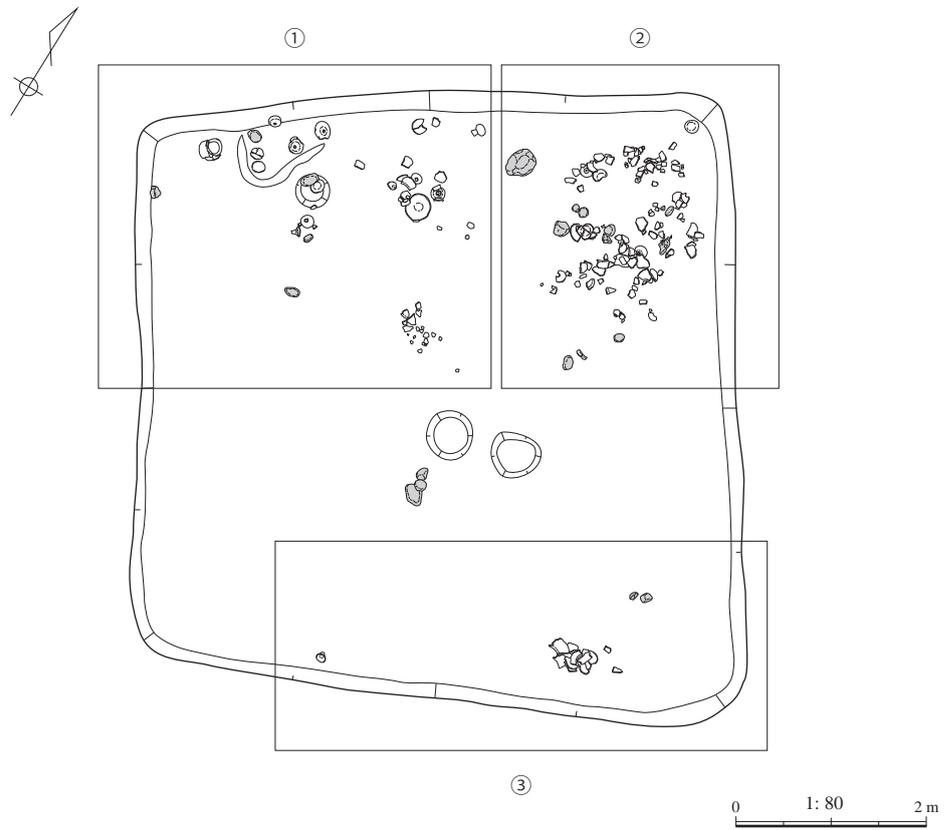


图 21 遺構実測図⑫

SB11 床面土器出土状況



SB11 床面土器出土状況①

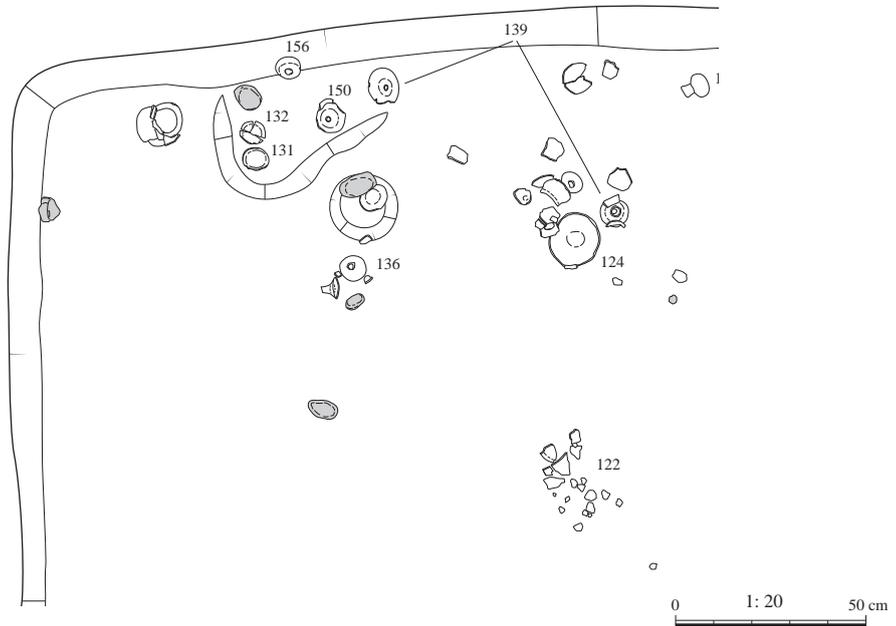
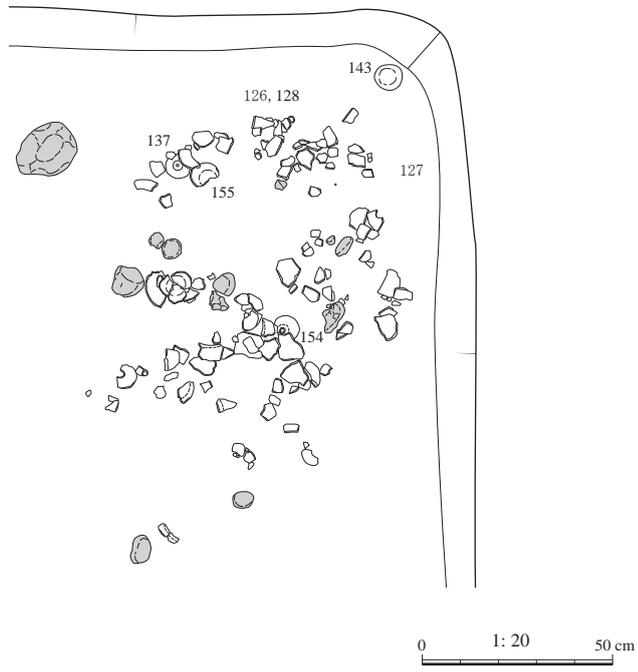


図 22 遺構実測図⑬

SB11 床面土器出土状況②



SB11 床面土器出土状況③

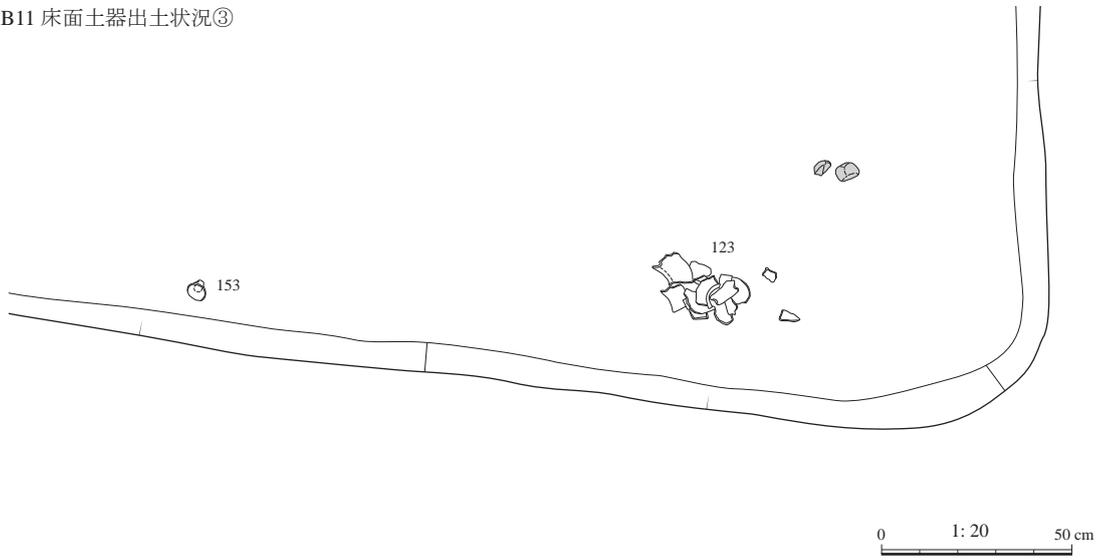
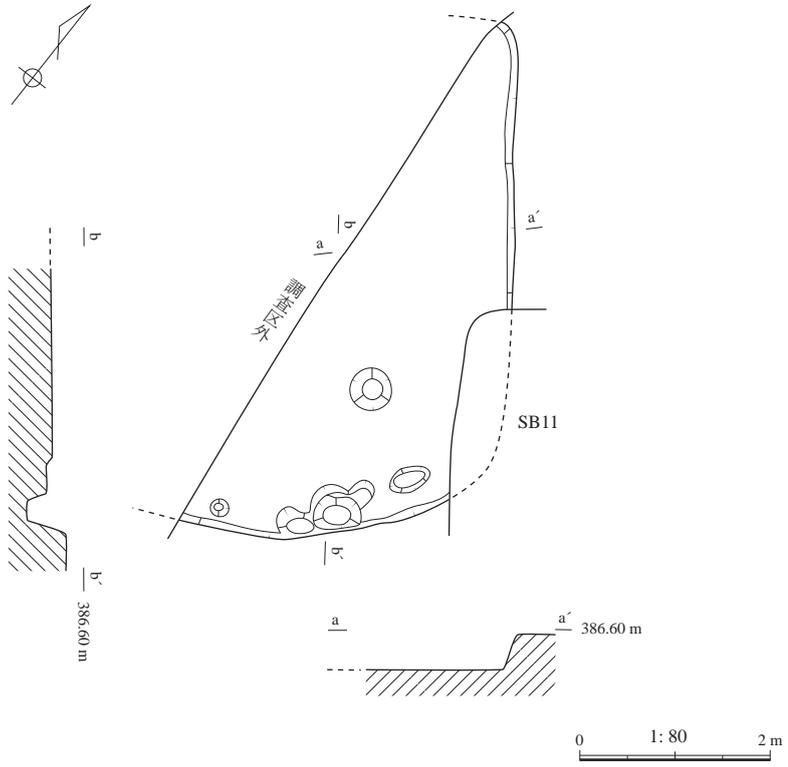


图 23 遺構実測図⑭

SB12



SB13

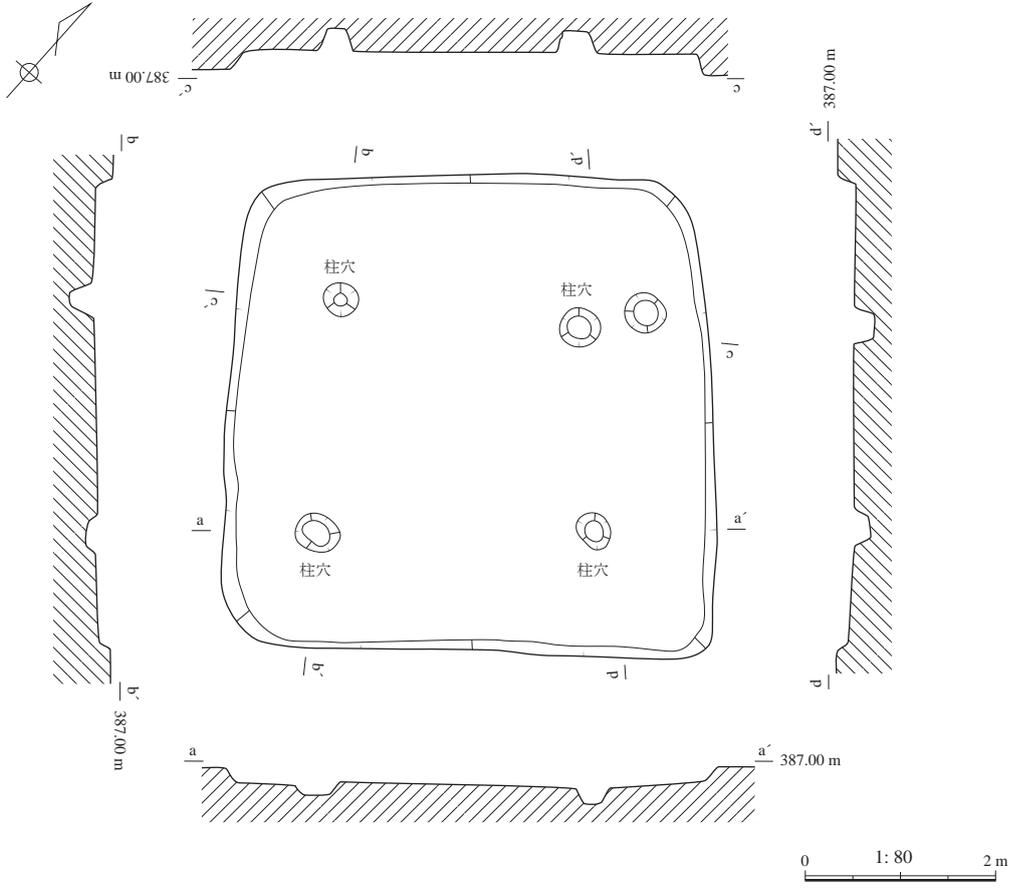


图 24 遺構実測図⑮

SB14

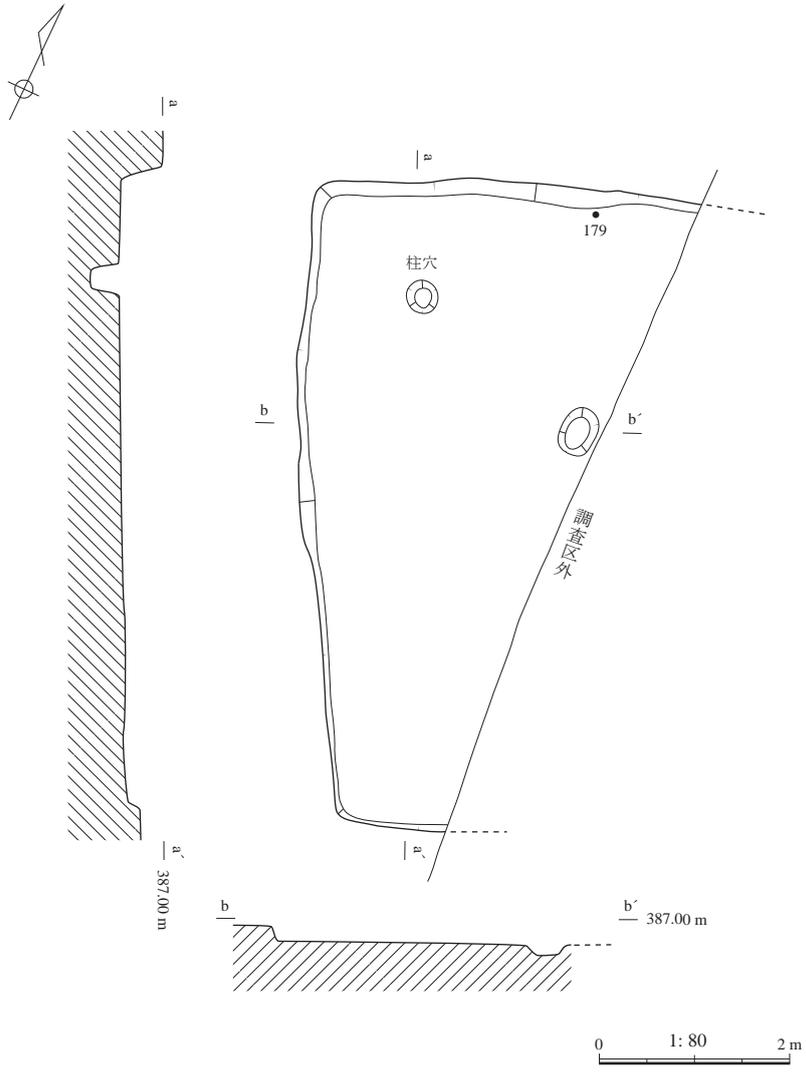
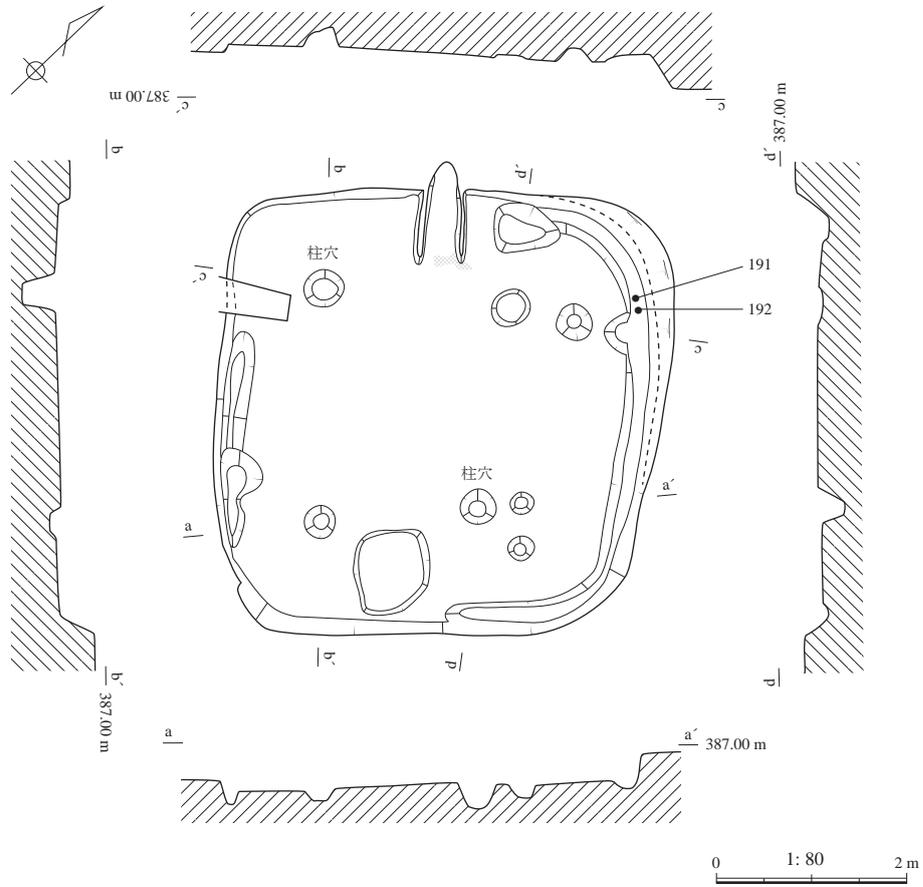


图 25 遺構実測図⑩

SB15



SB15 カマド土器出土状況

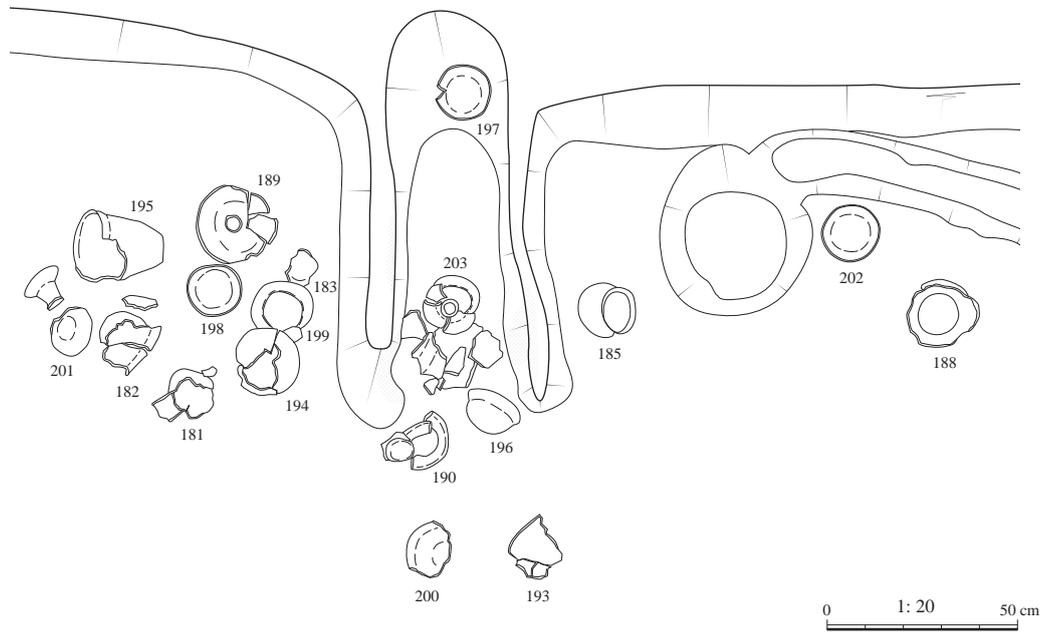


図 26 遺構実測図①

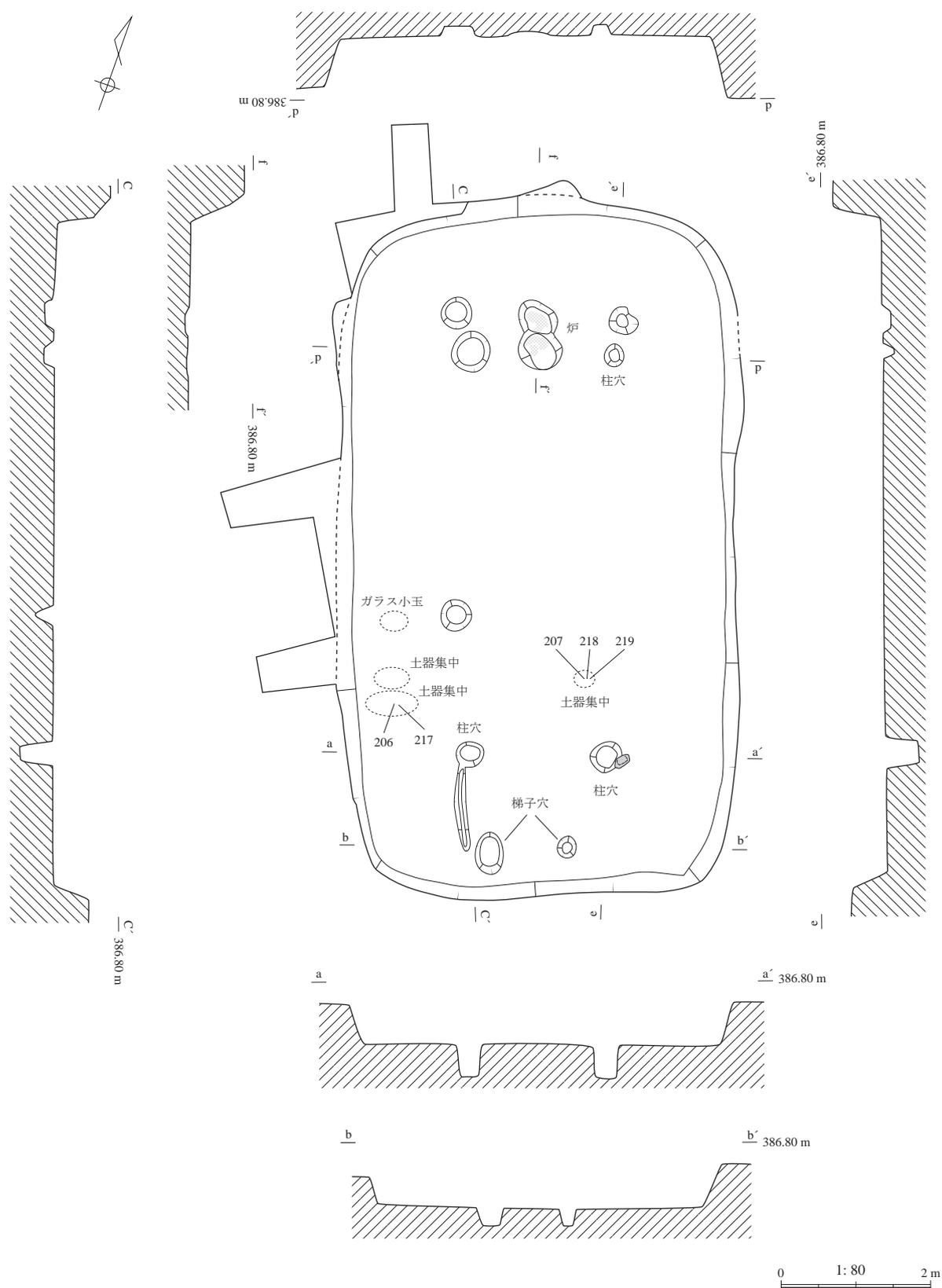


図 27 遺構実測図⑱

SB17

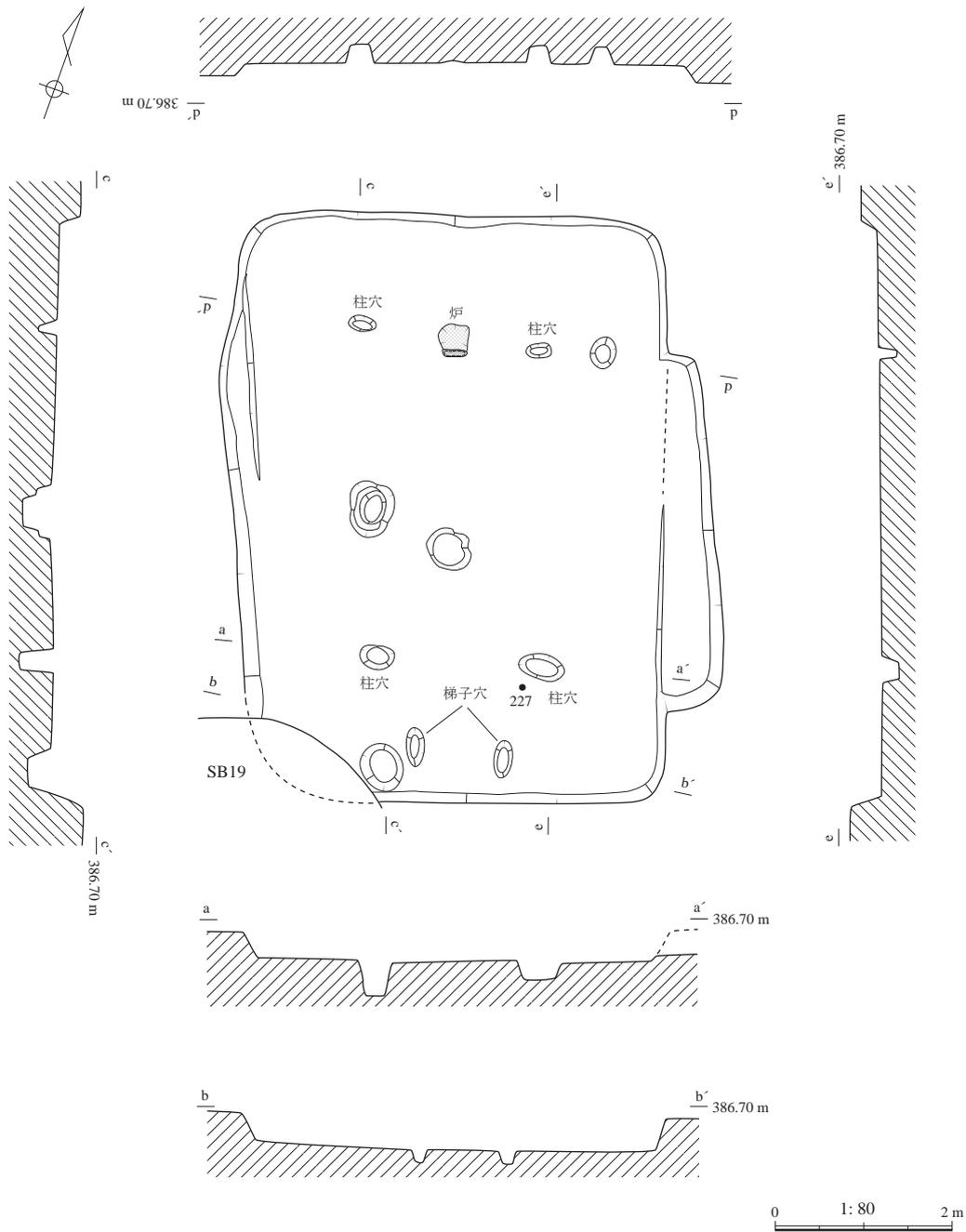


图 28 遺構実測図⑨

SB19

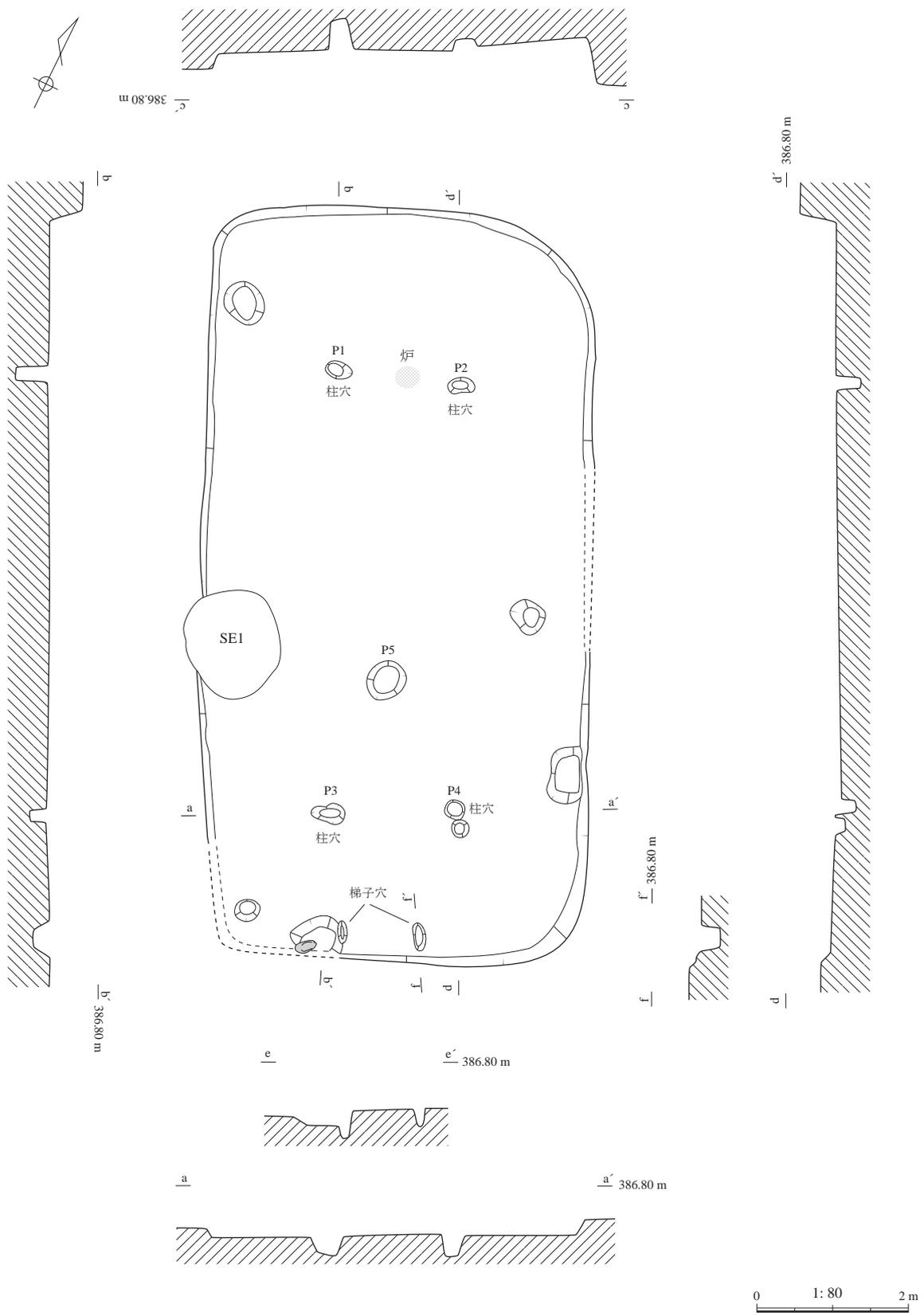


图 29 遺構実測図②

SB22

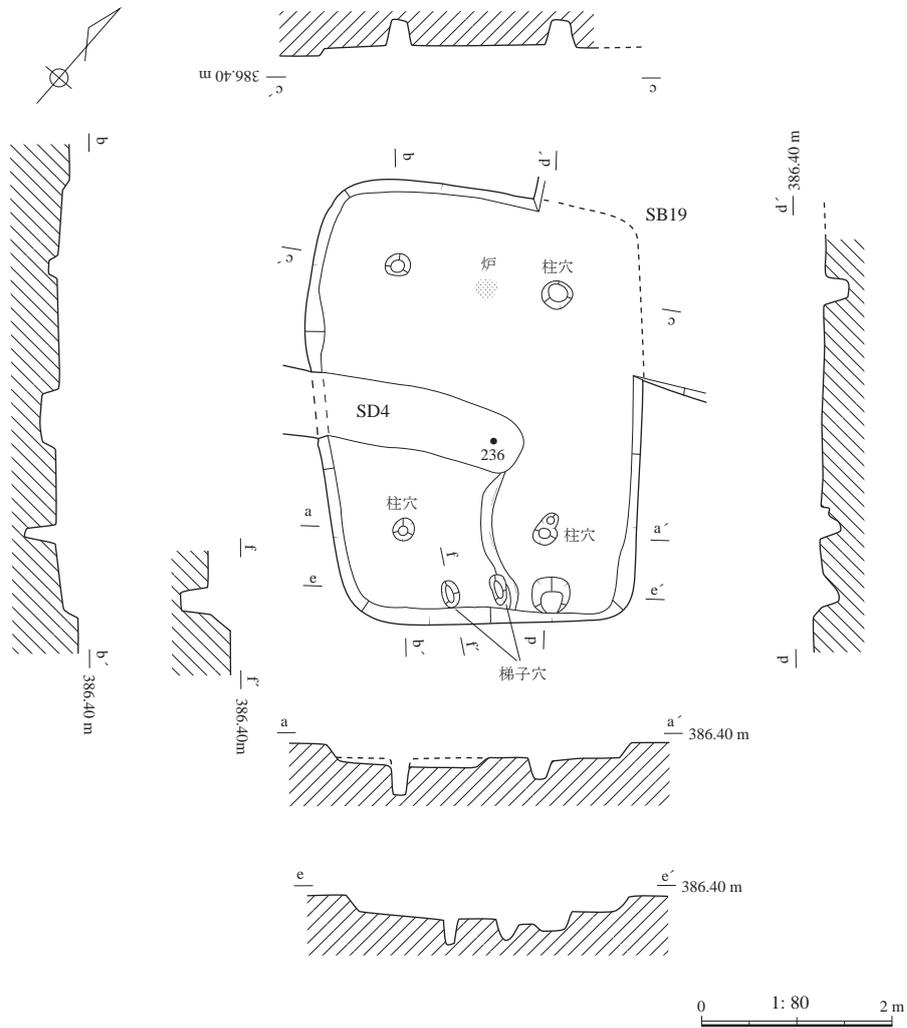


图 30 遺構実測図②

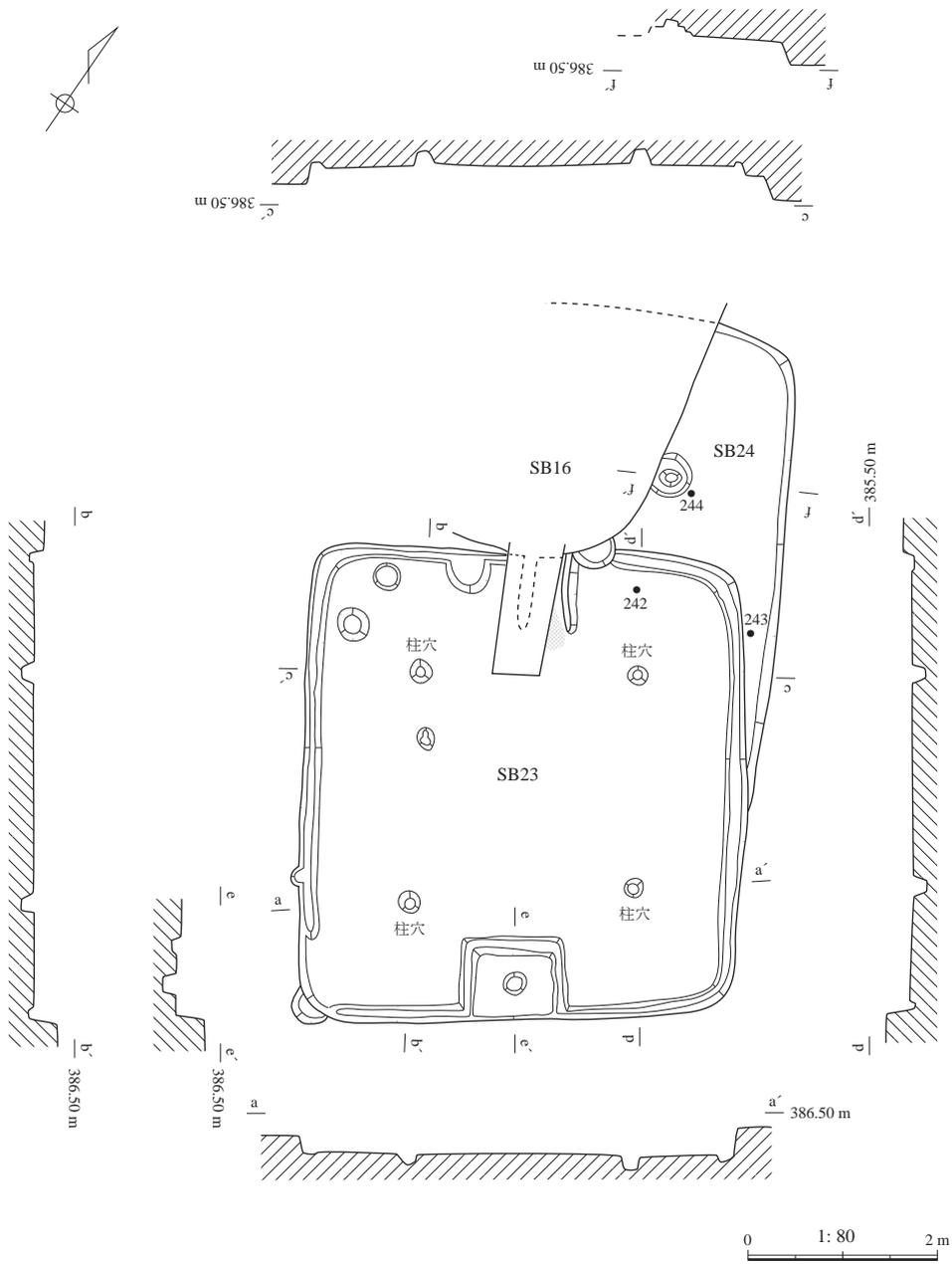
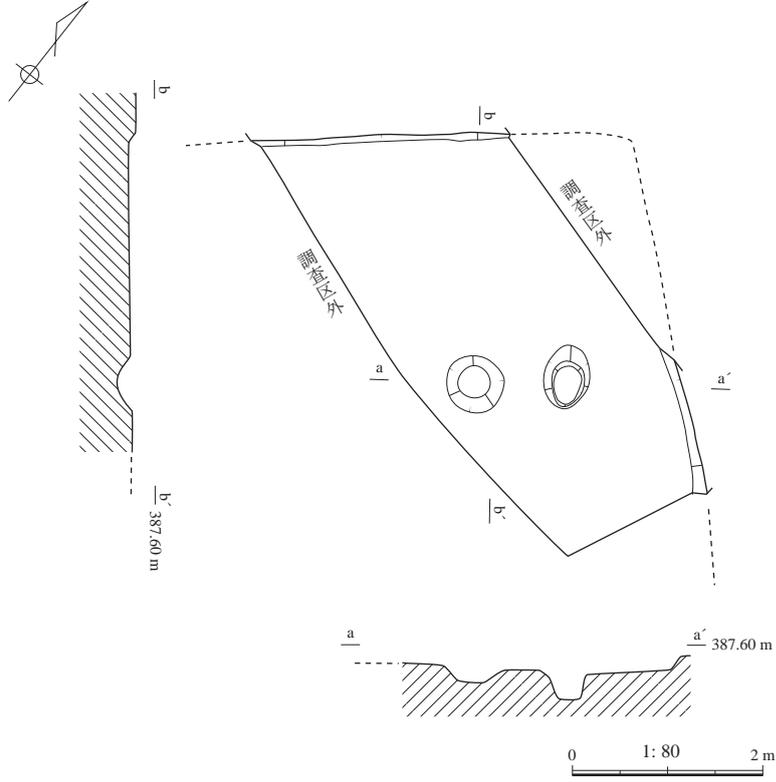


图 31 遺構実測図②

SB25



SB35

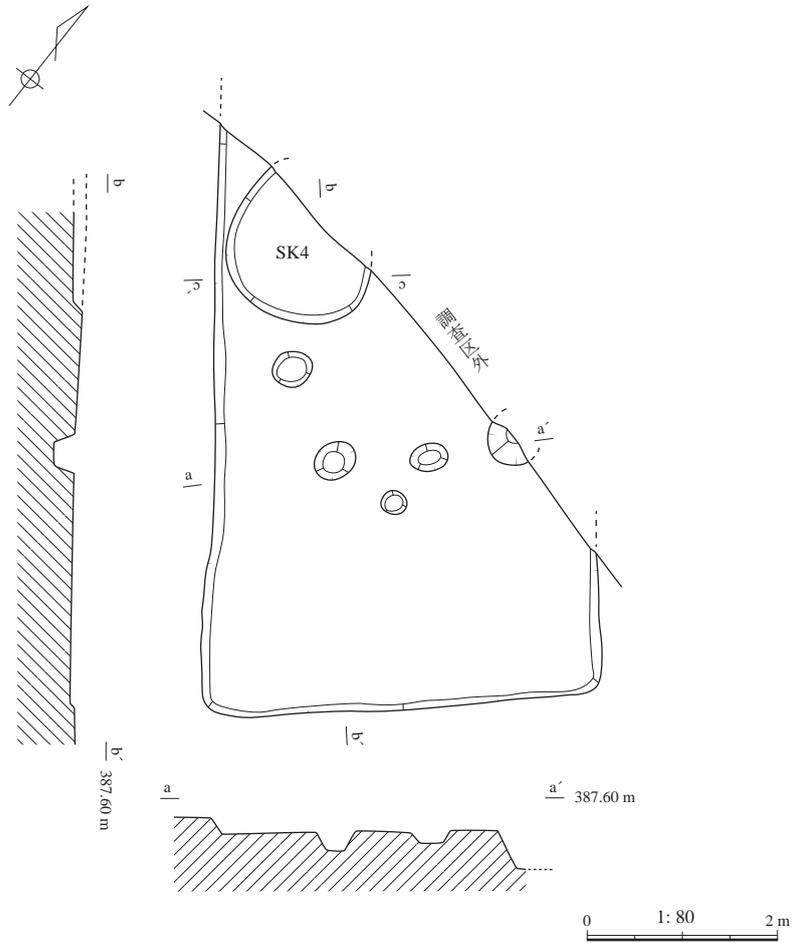


图 32 遺構実測図②

SB26

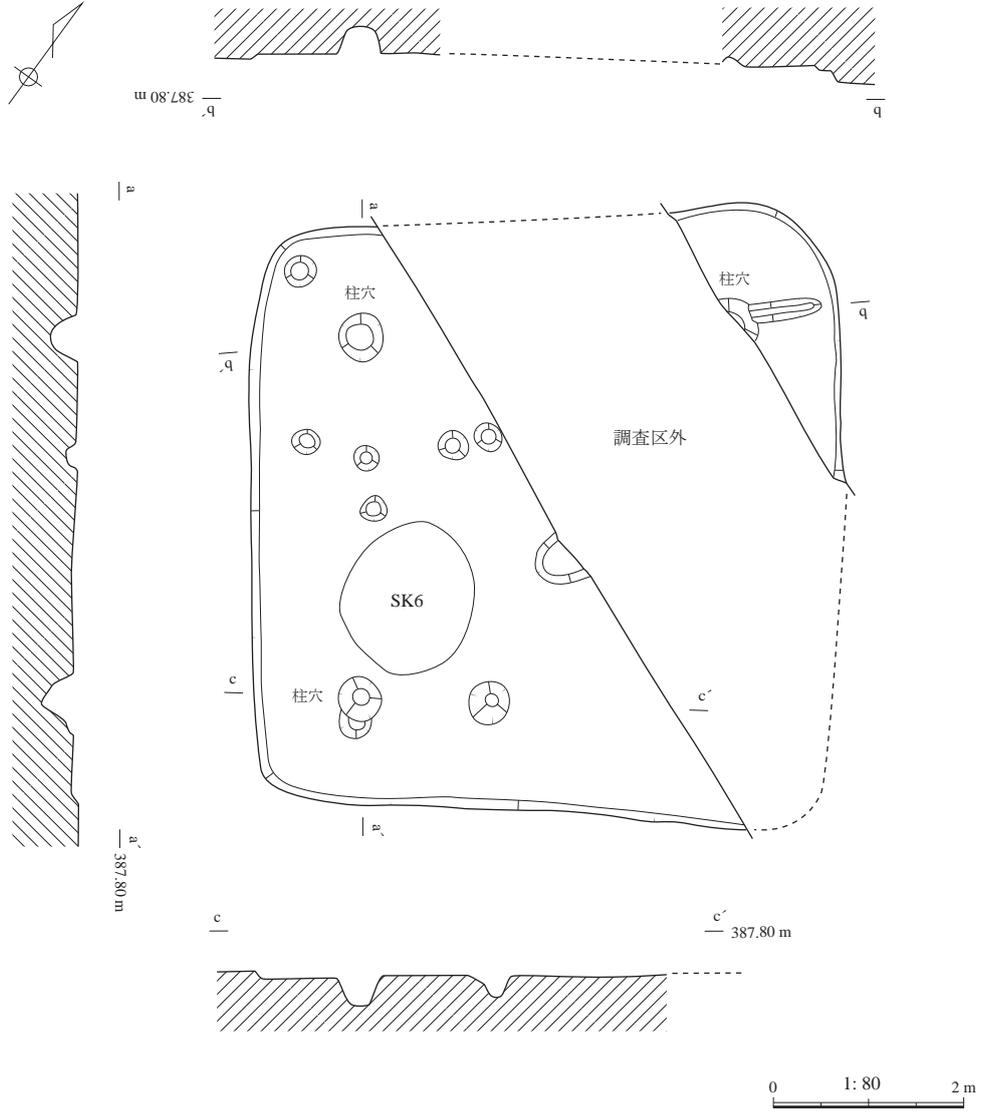
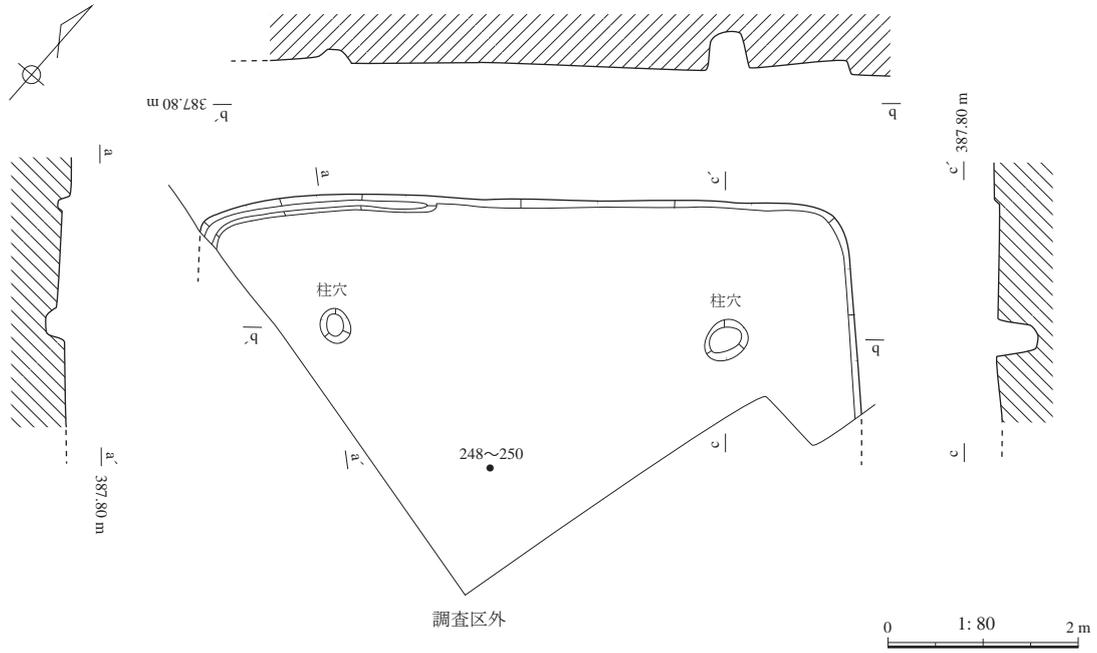


図 33 遺構実測図④

SB27



SB28

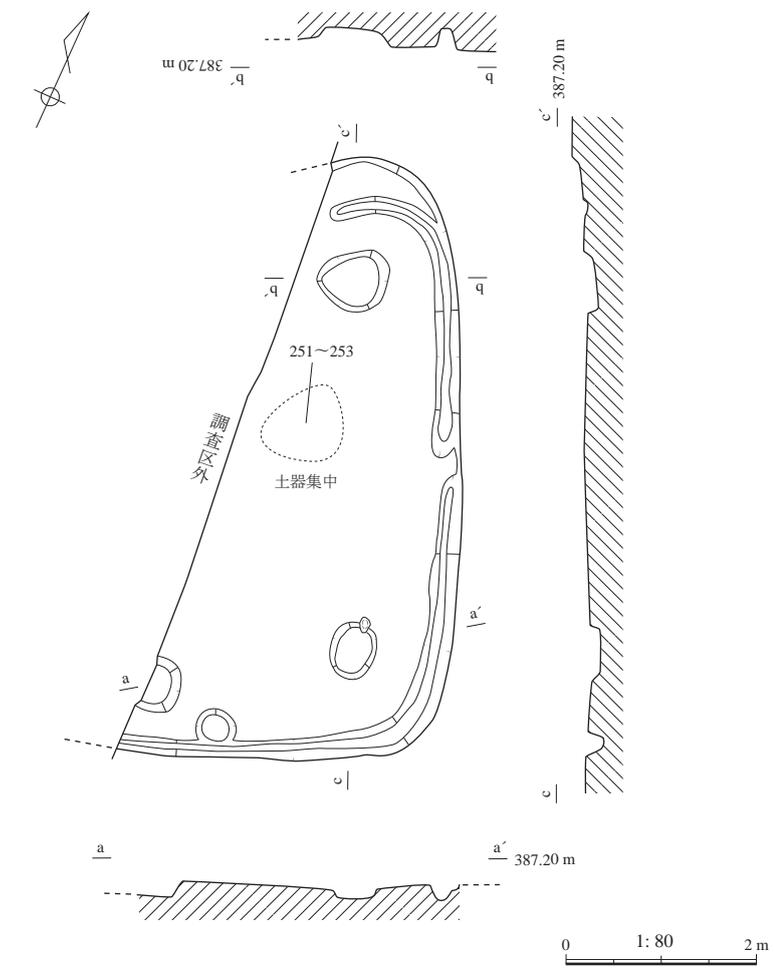
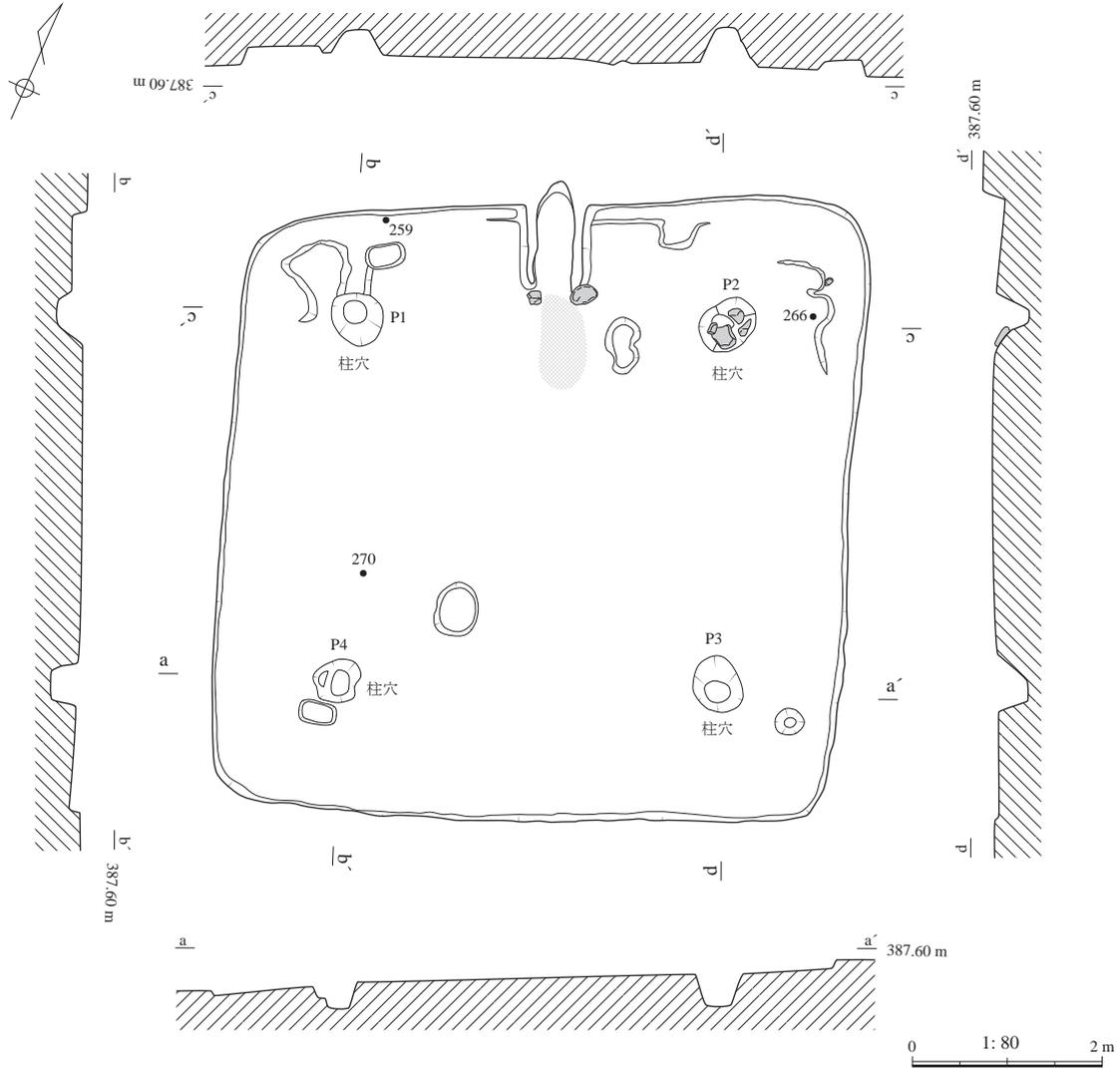


图 34 遺構実測図⑤

SB30



SB30 カマド土器出土状況

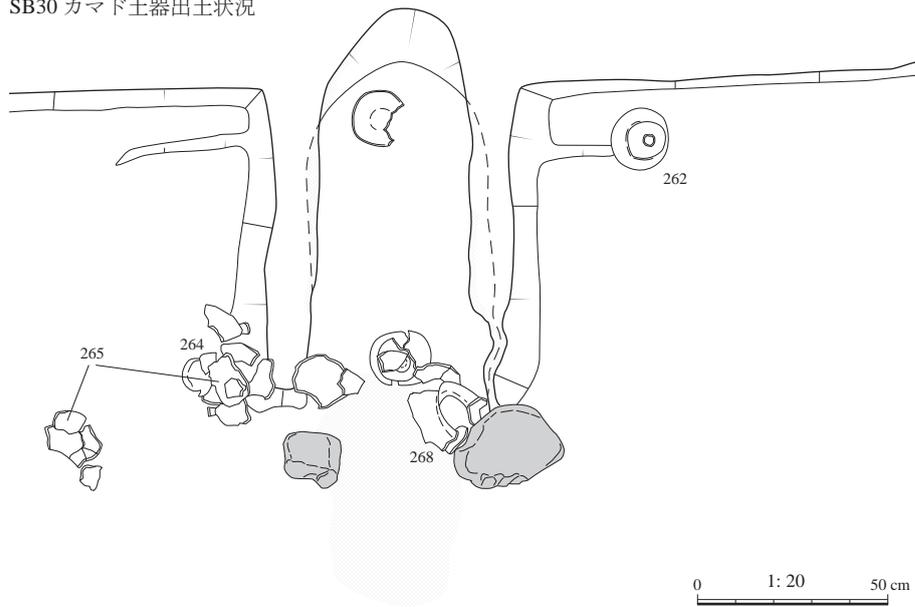


図 35 遺構実測図②⑥

SB31

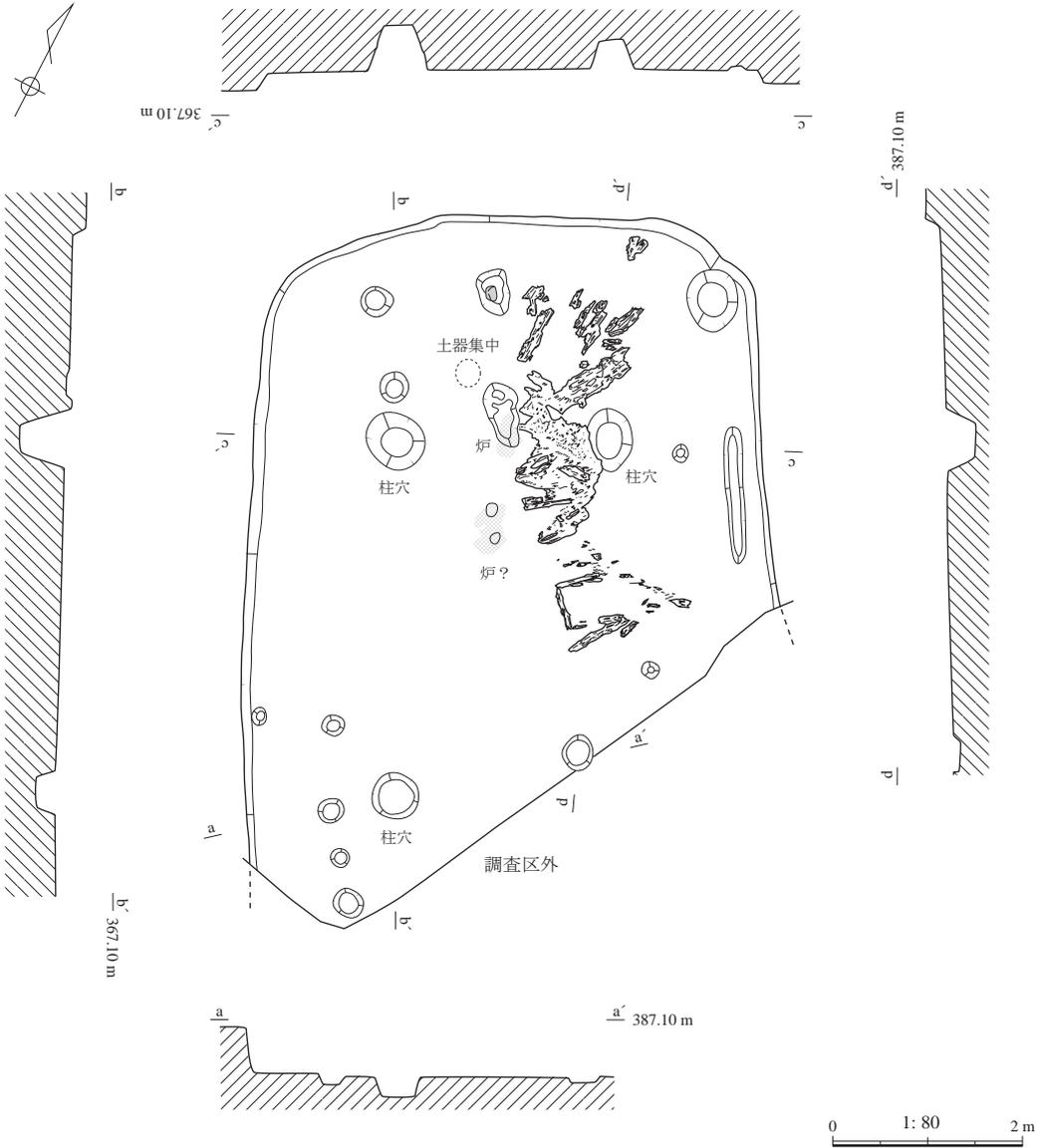
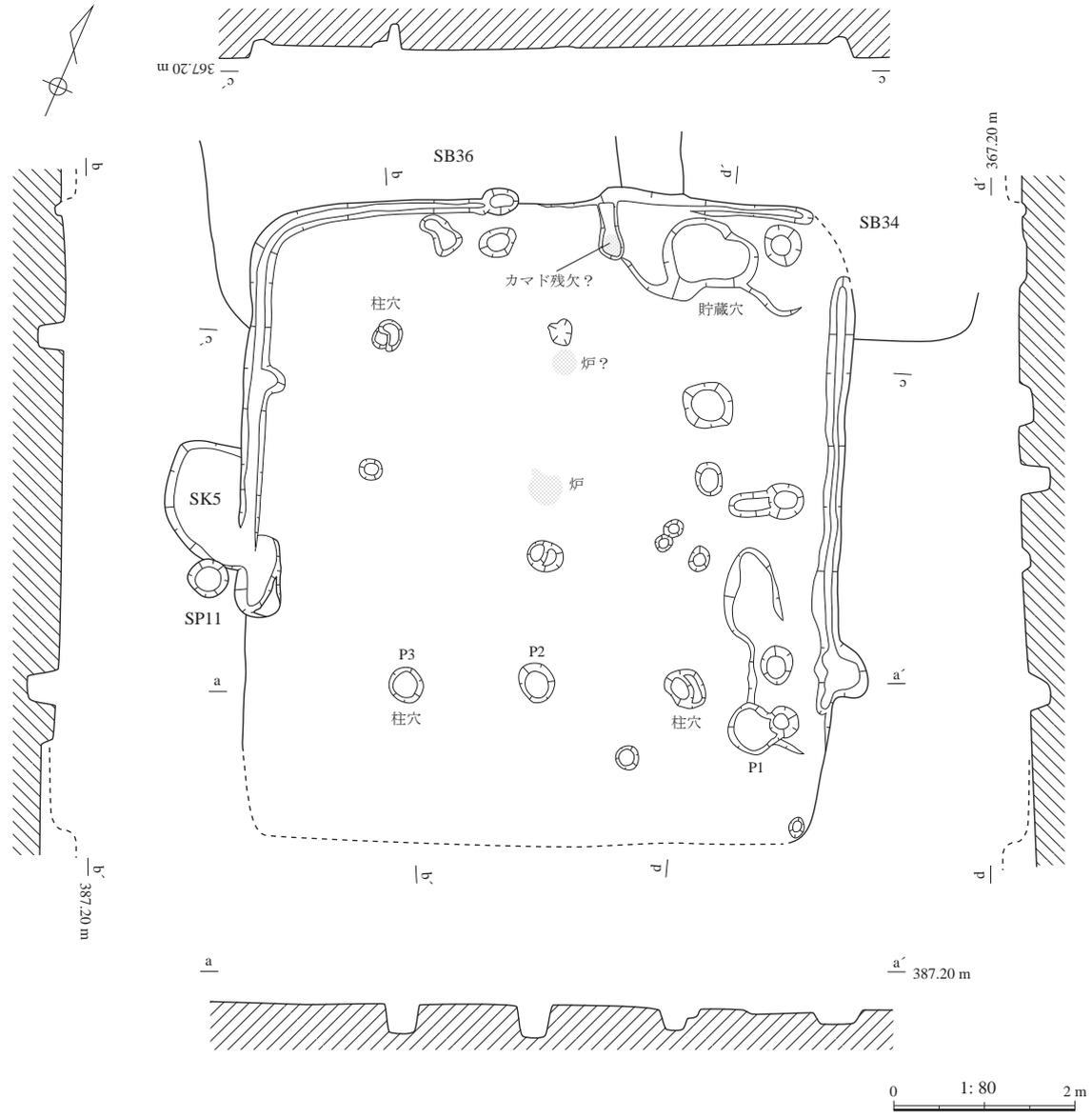


图 36 遺構実測図②

SB33



SB33 貯藏穴土器出土状況

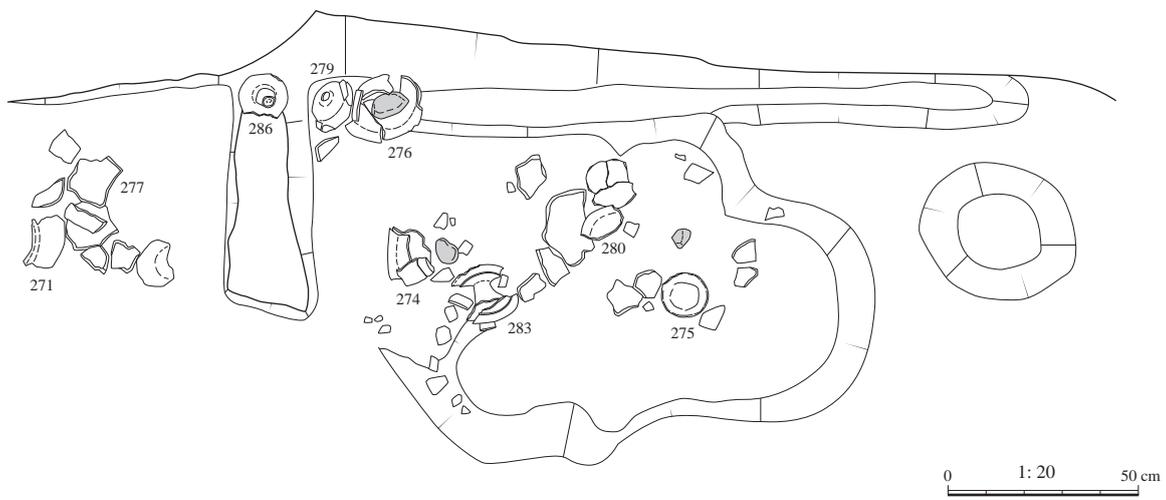
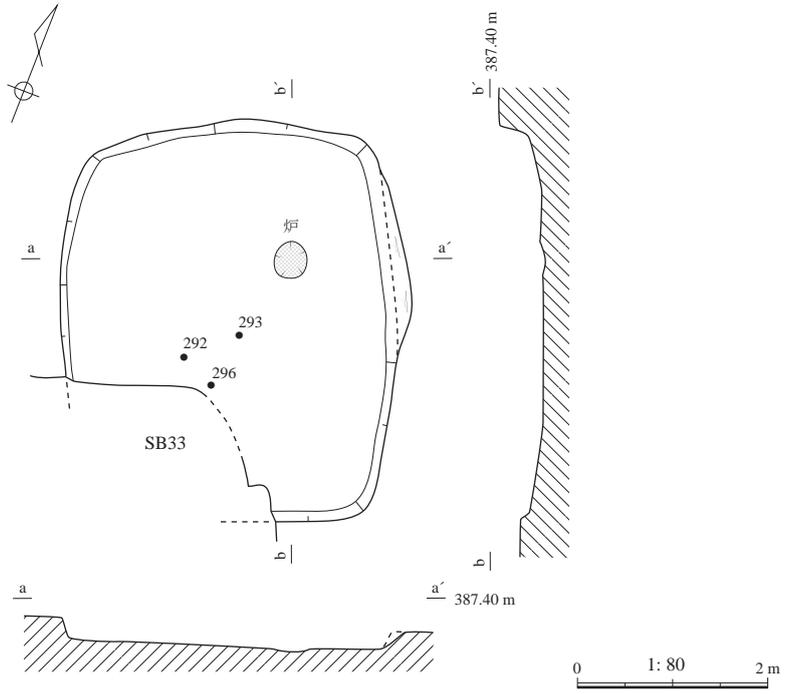


図 37 遺構実測図②

SB34



SB36

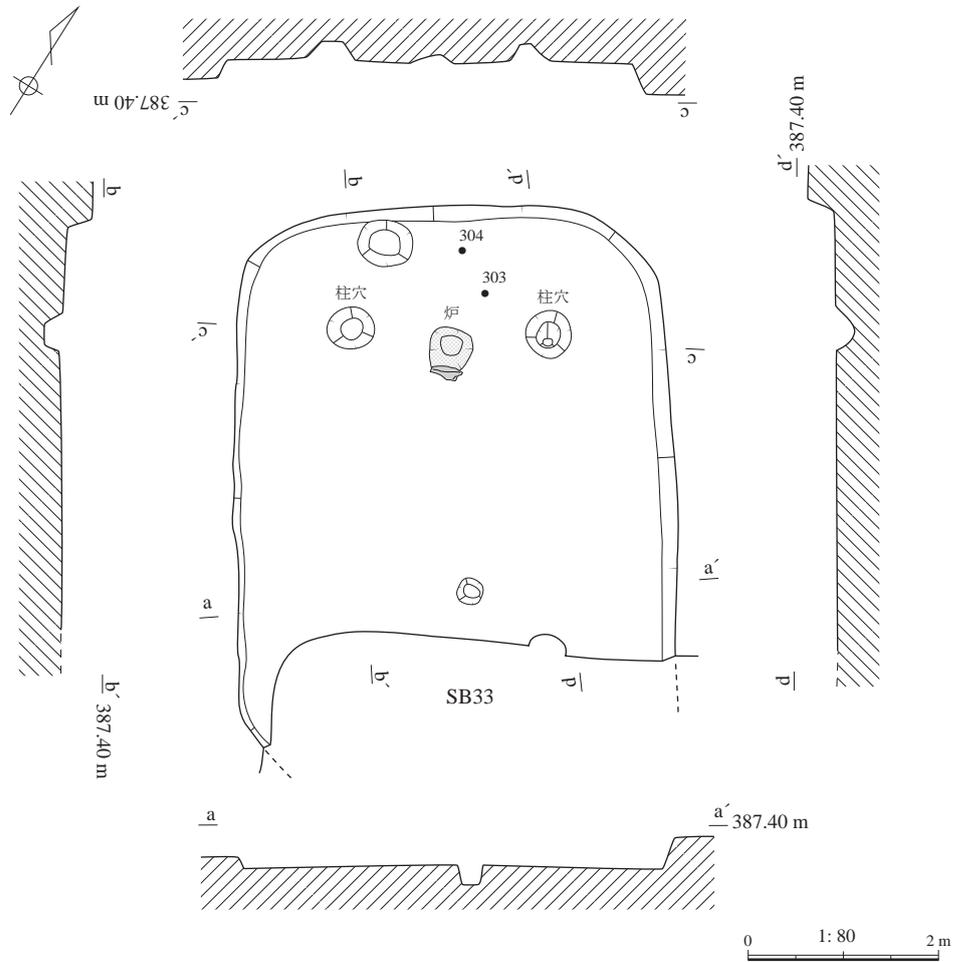


图 38 遺構実測図②

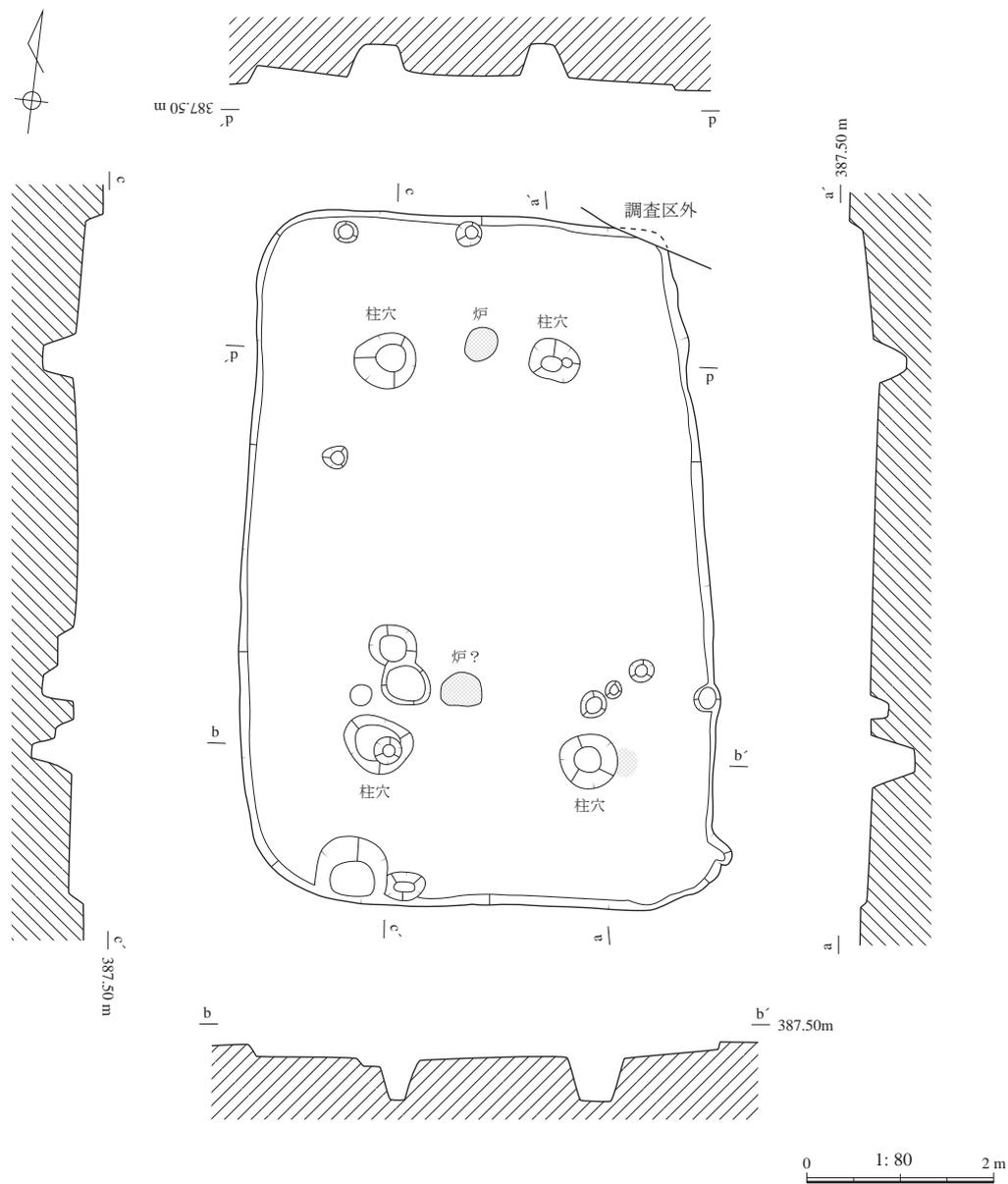
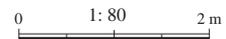
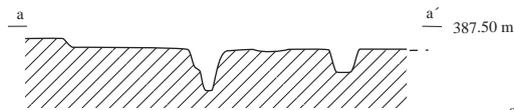
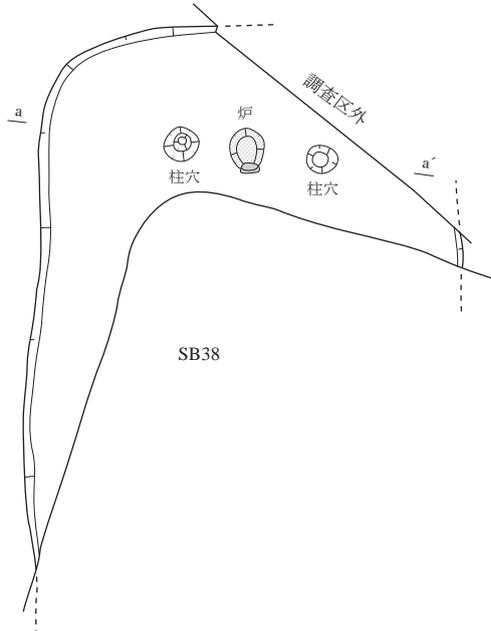


图 39 遺構実測図③

SB39



SB43

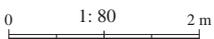
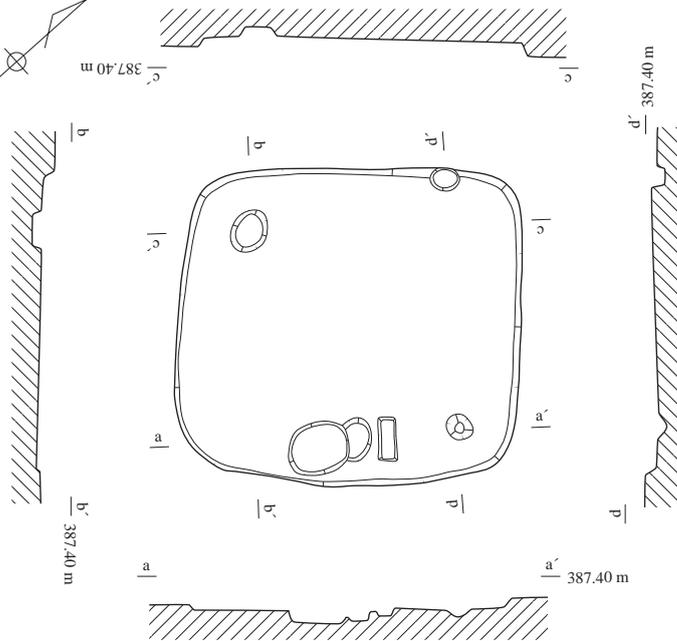


図 40 遺構実測図③

SB40

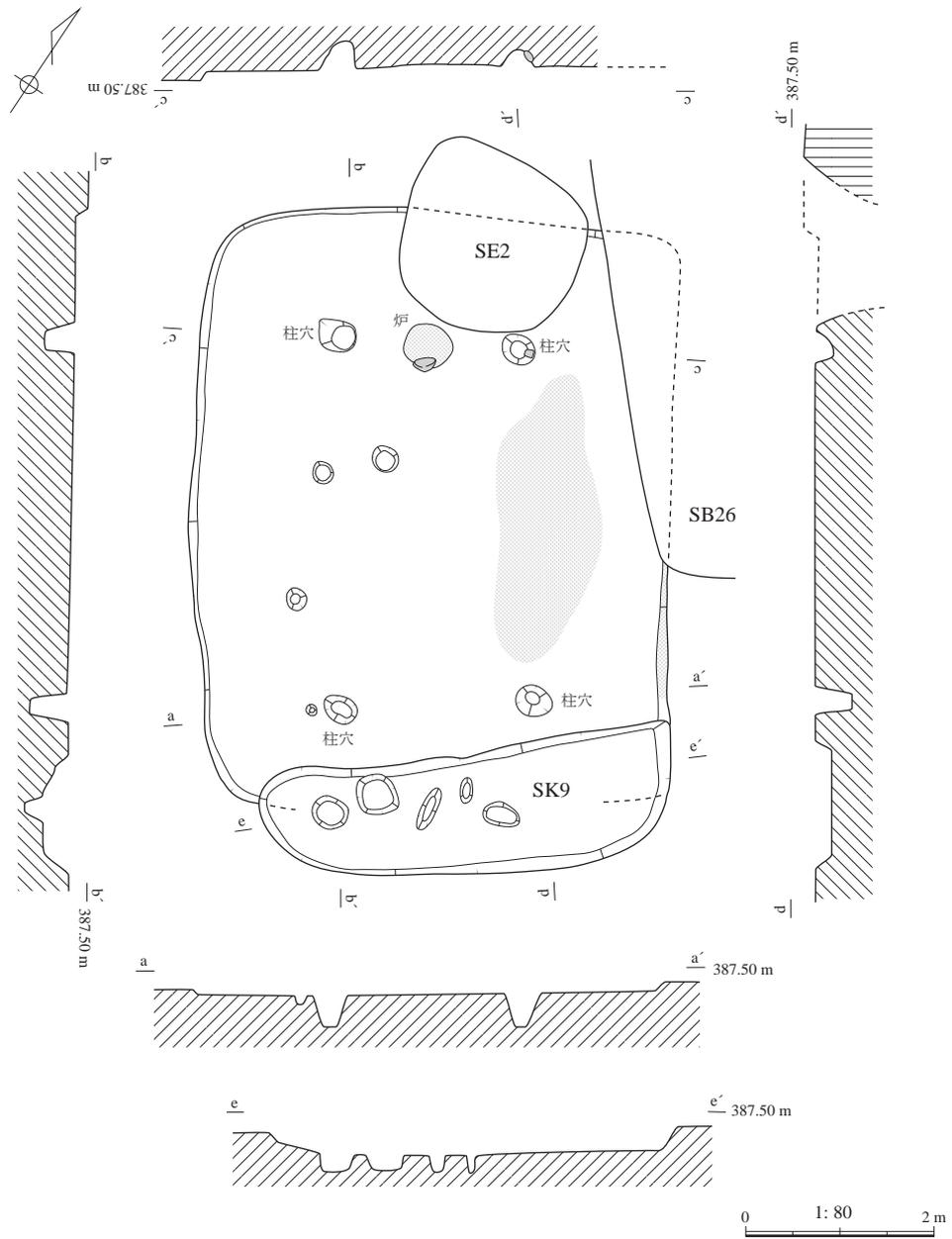
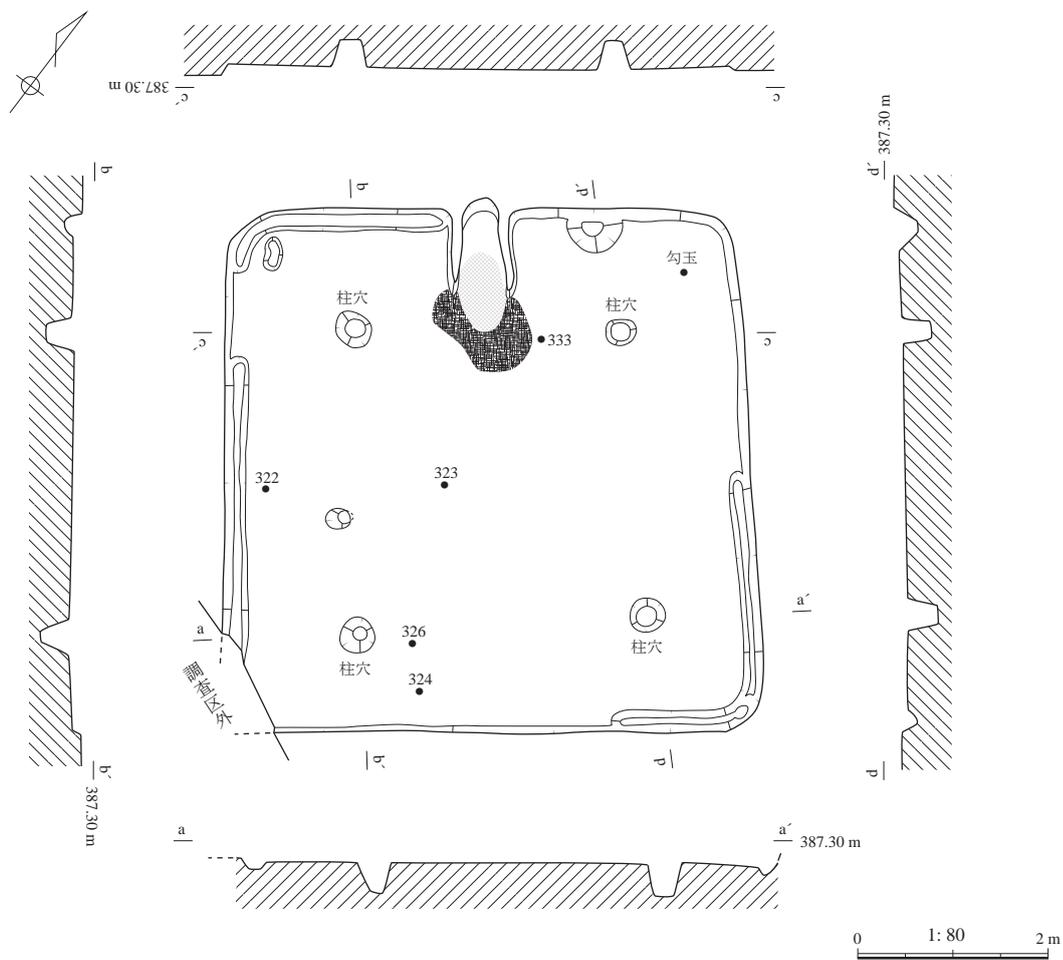


图 41 遺構実測図③

SB44



SB44 カマド土器出土状況

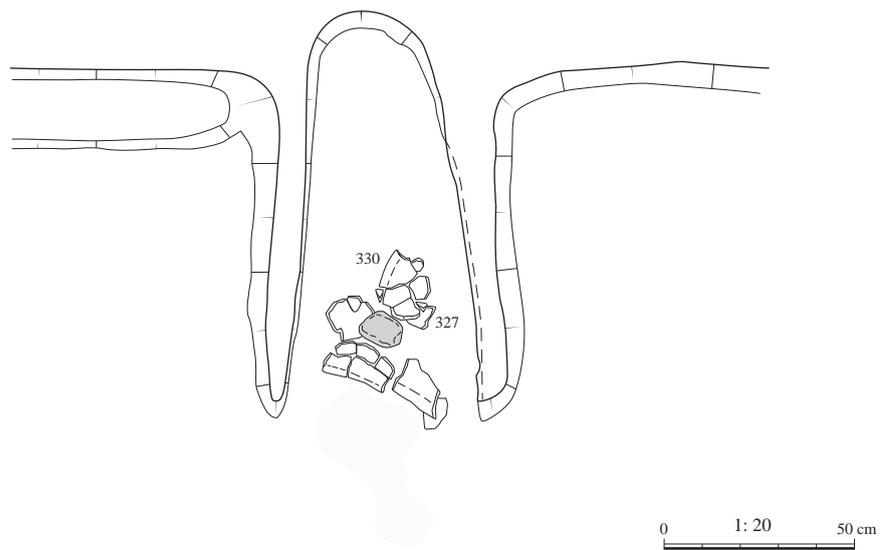
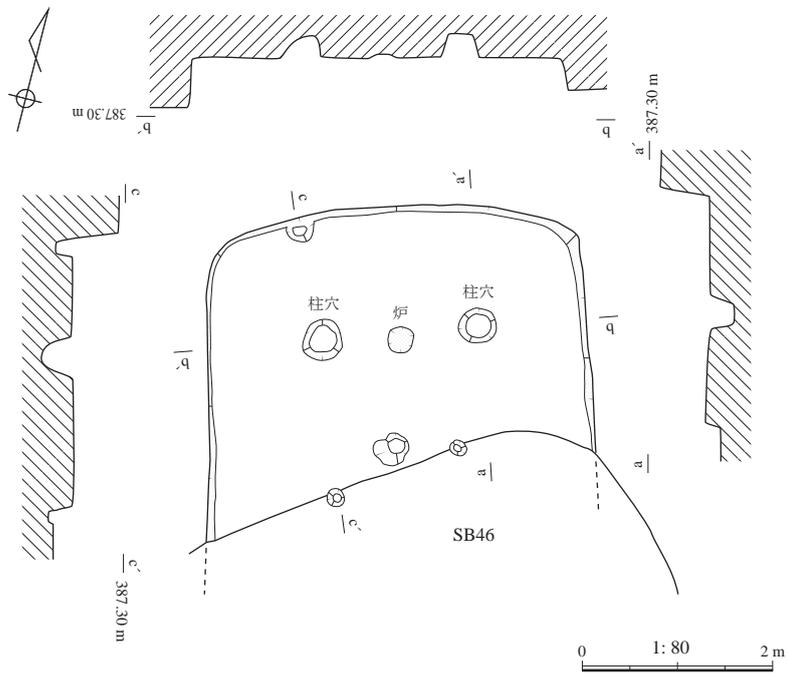


図 42 遺構実測図③

SB45



SB45 炭化材出土状況

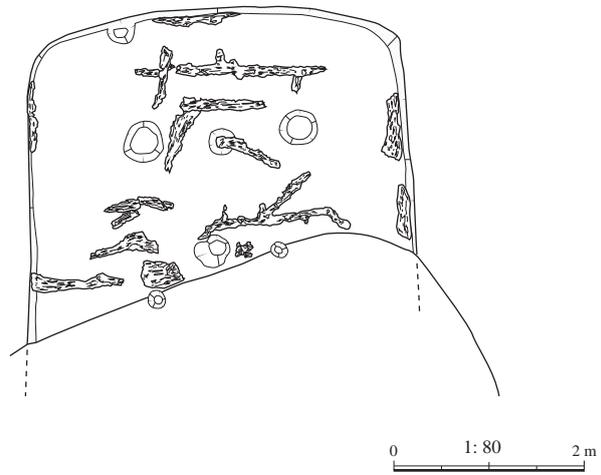
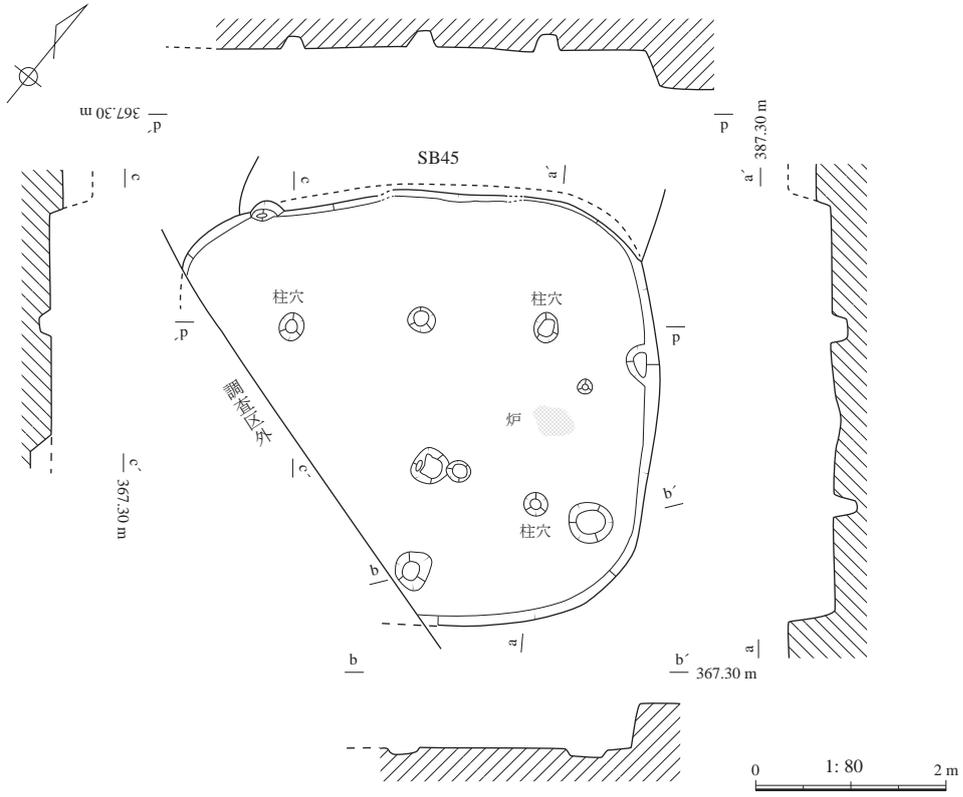


图 43 遺構実測图③

SB46



SB47

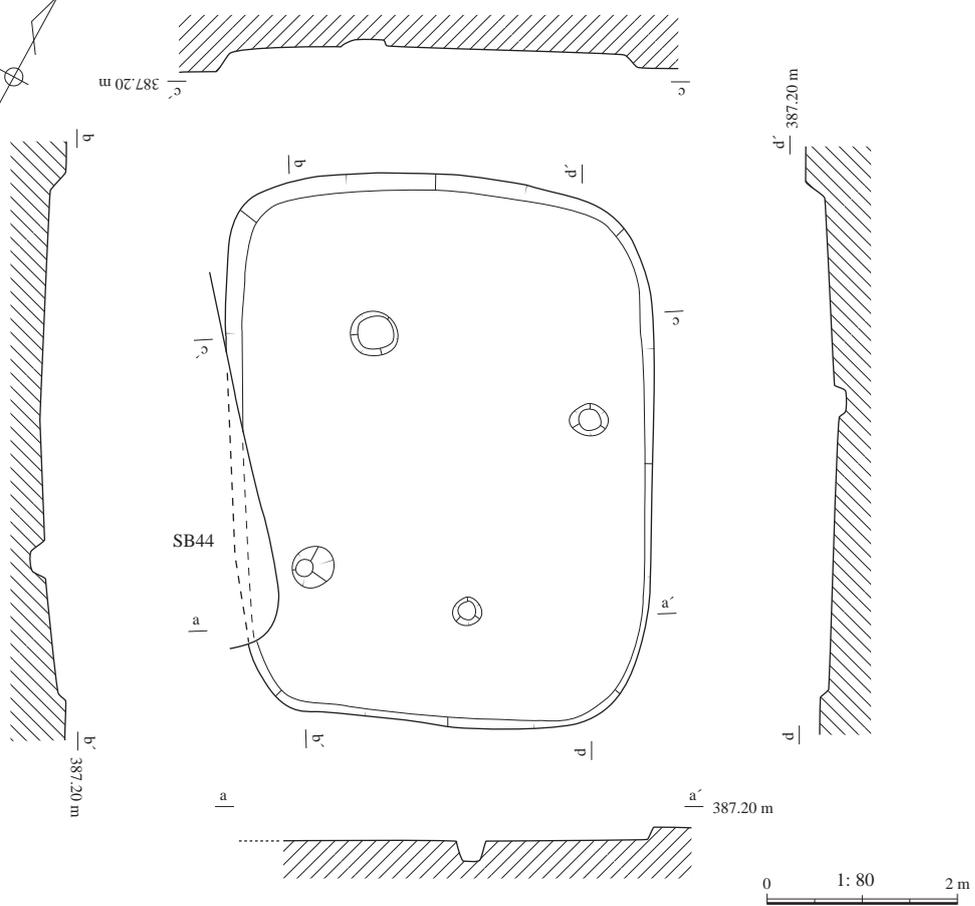


图 44 遺構実測図③

SB48

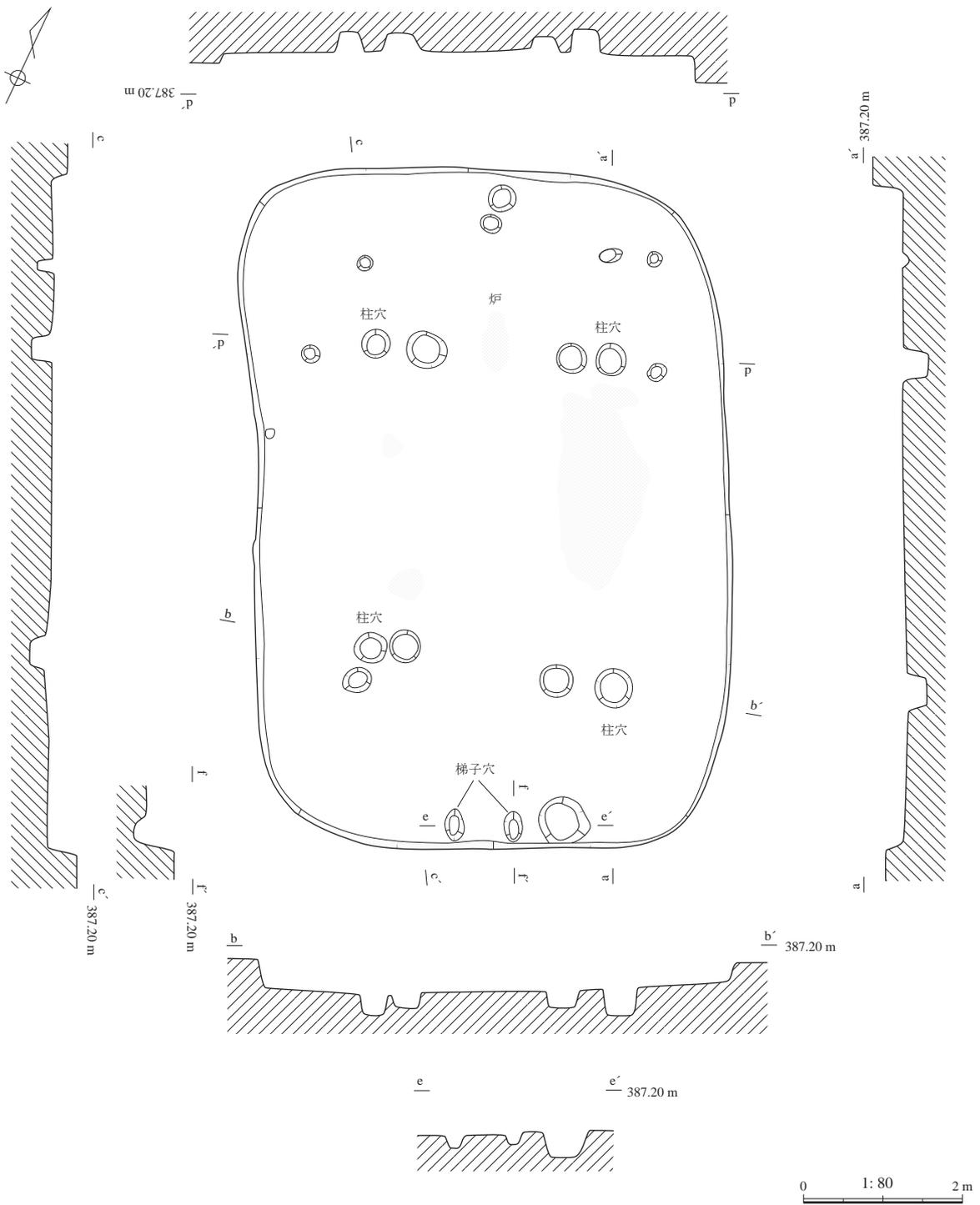


图 45 遺構実測図③⑥

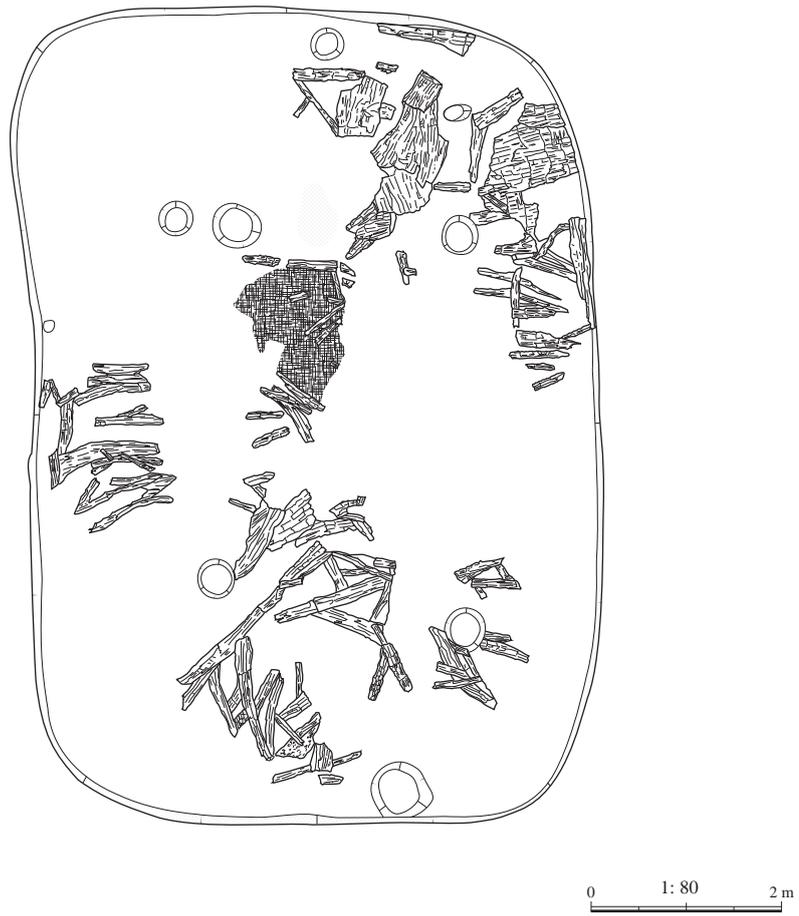
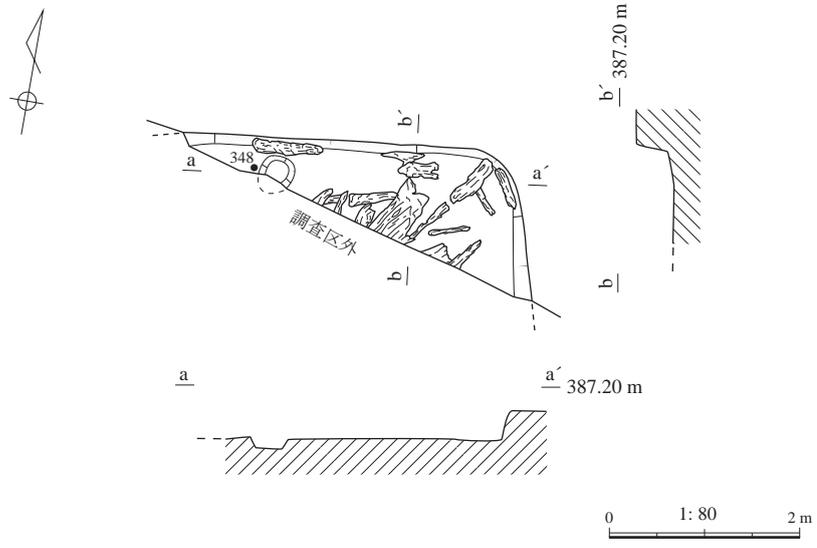


図 46 遺構実測図③⑦

SB49



SB50

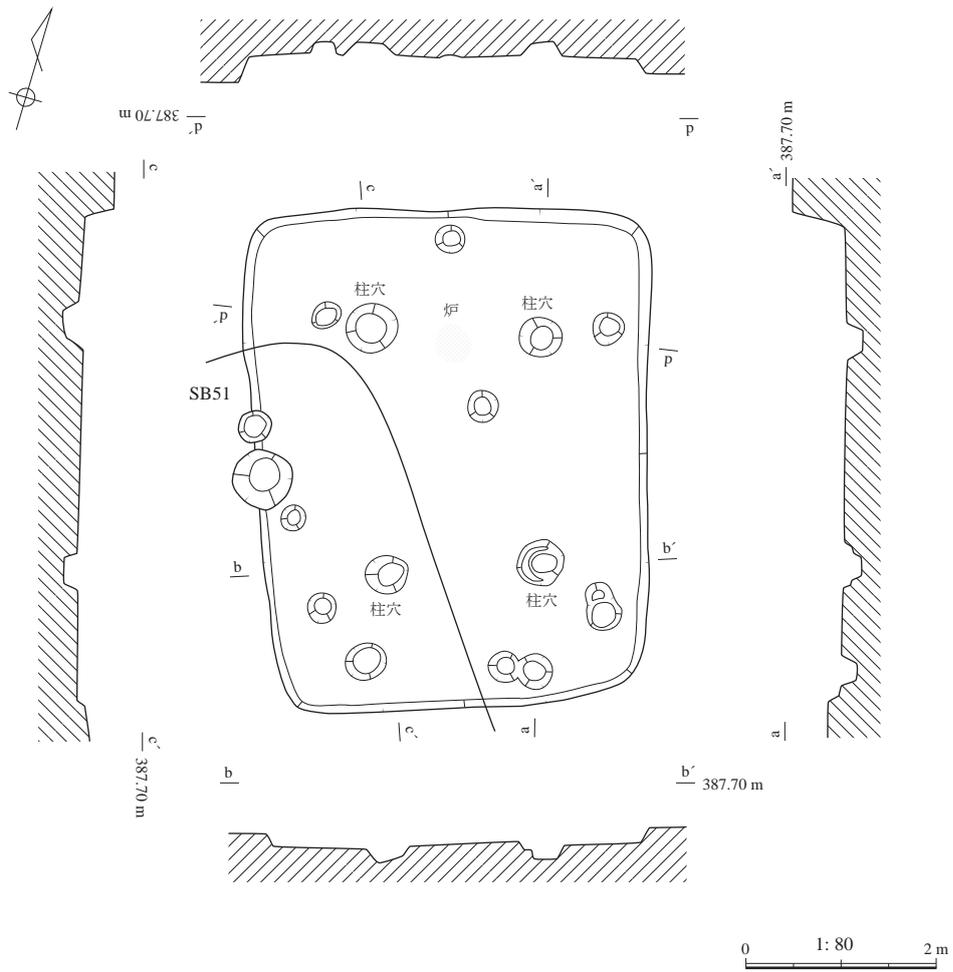


图 47 遺構実測図③

SB51

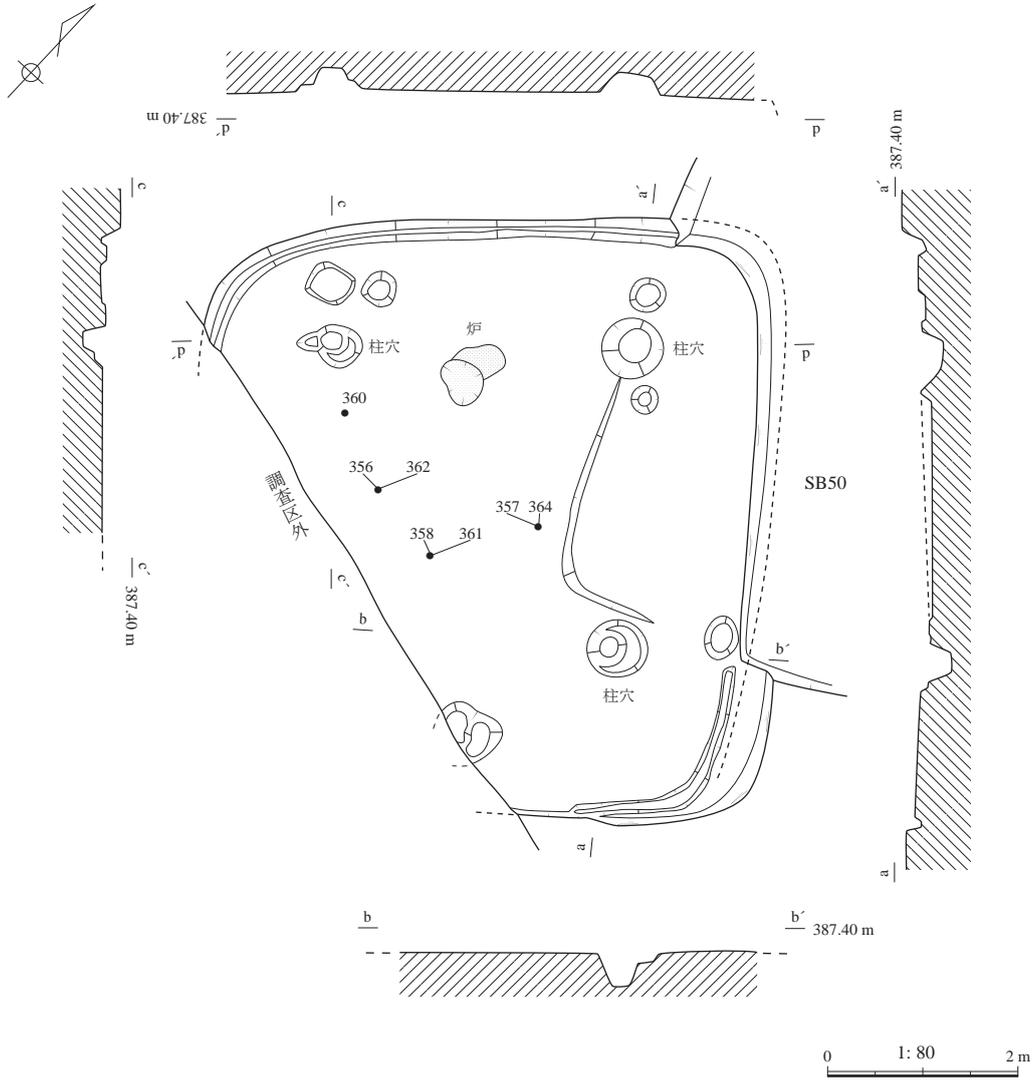
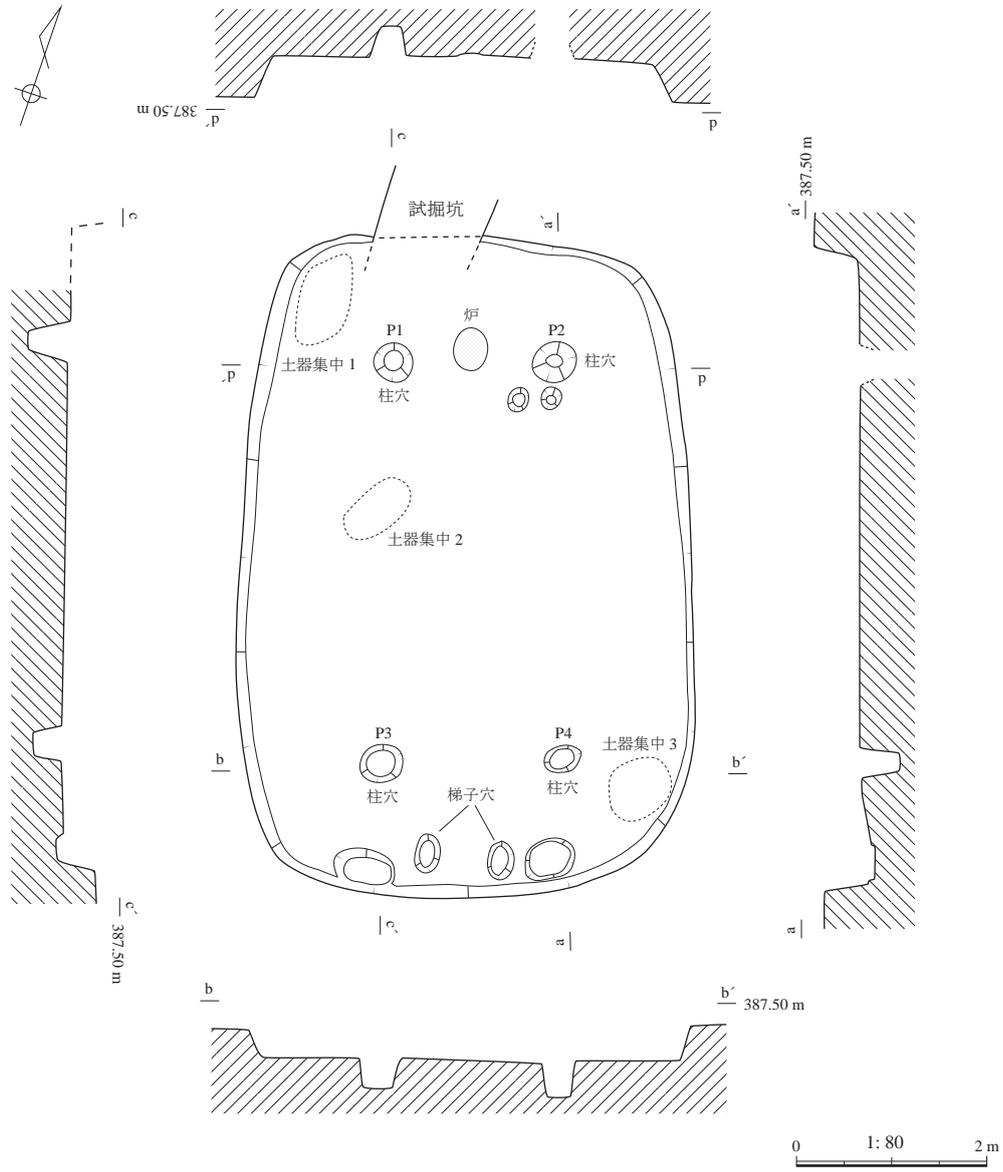


图 48 遺構実測図③

SB52



SK2

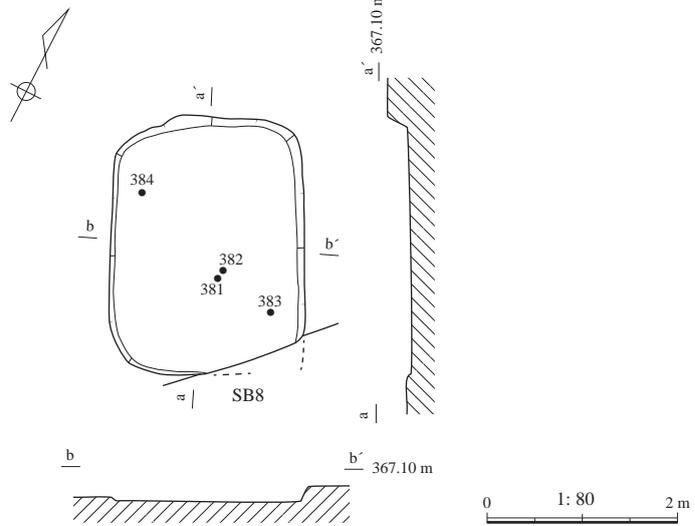


図 49 遺構実測図④

## 遺構写真



調査区脇で稼動する大型建設機械（2012年5月22日）

遺構写真1



調査区全景（A区、南東から）



調査区全景（A区、南西から）

遺構写真2



調査区全景 (B区、南から)



調査区全景 (B区、東から)

遺構写真3



調査区全景 (C区、東から)



調査区全景 (D区、南から)



調査区全景 (E区、南から)

遺構写真4



SB1 床面 (南東から)



SB1 床面土器出土状況



SB1 床面土器出土状況



SB1 完掘 (南東から)



SB2 床面 (南東から)



SB2 カマド周辺土器出土状況



SB2 完掘 (南東から)



SB2 カマド

遺構写真5



SB3 完掘（北から）



SB3 西側



SB4 土器出土状況



SB4 完掘（西から）



SB4 周溝（北西から）



SB5 床面（南東から）



SB5 床面（北西から）



SB5 土器出土状況

遺構写真6



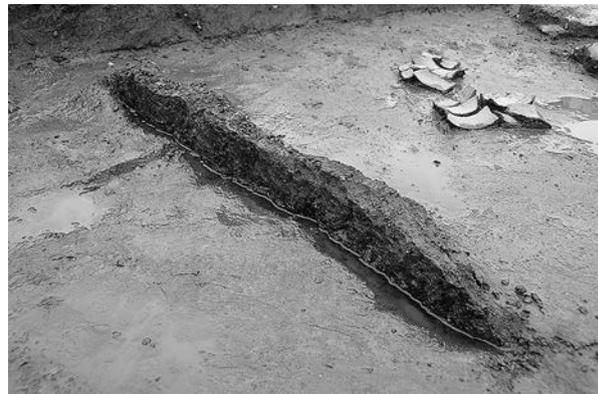
SB5 土器出土状況



SB5 土器 (69) 出土状況



SB5 土器 (59) 出土状況



SB5 炭化物出土状況



SB6 完掘 (北西から)



SB8 床面 (南東から)



SB8 カマド



SB8 完掘 (南東から)

遺構写真7



SB9 完掘 (南東から)



SB10 炭化材出土状況 (北東から)



SB10 完掘 (南西から)



SB11 床面 (南東から)



SB11 床面 (南西から)



SB11 土器出土状況



SB11 土器出土状況 (土器転用炉)



SB11 土器出土状況

遺構写真8



SB11 土器転用炉 (灰除去後)



SB11 完掘 (南東から)



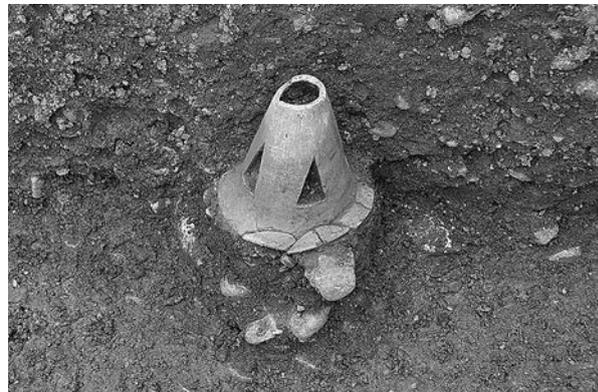
SB12 完掘 (南東から)



SB13 完掘 (北西から)



SB14 完掘 (南東から)



SB14 土器 (179) 出土状況



SB15 床面 (南東から)



SB15 カマド周辺土器出土状況 (東から)

遺構写真9



SB15 カマド周辺土器出土状況（南から）



SB15 完掘（南東から）



SB15 カマド



SB16 覆土上層集積石検出状況（北東から）



SB16 床面（南東から）



SB16 床面（北西から）



SB16 床面土器出土状況



SB16 床面ガラス小玉出土状況

遺構写真 10



SB17 完掘 (南東から)



SB17 梯子穴



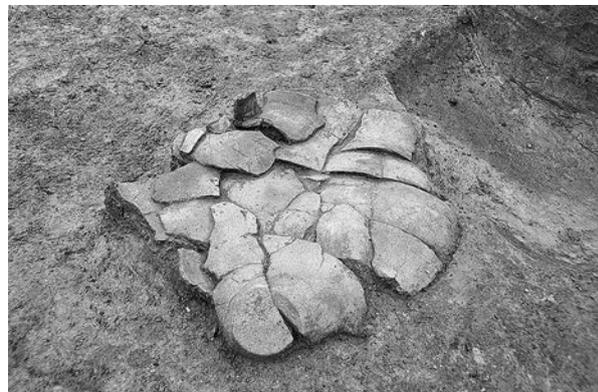
SB18 完掘 (南東から)



SB19 完掘 (南東から)



SB19 完掘 (北西から)



SB19 床面土器出土状況



SB22 完掘 (南東から)



SB22 土器出土状況

遺構写真 11



SB23 完掘 (南東から)



SB23 カマド



SB23 土器 (242) 出土状況



SB24 完掘 (南東から)



SB24 土器 (244) 出土状況



SB25 完掘 (東から)



SB26 完掘 (南東から)



SB26 完掘 (北から)

遺構写真 12



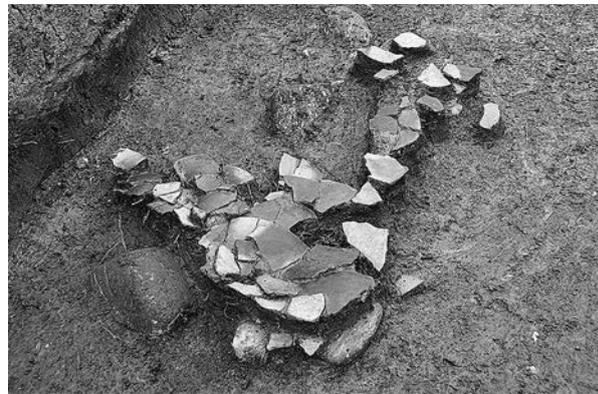
SB27 完掘（北から）



SB27 土器出土状況



SB28 完掘（南から）



SB28 土器出土状況



SB29 完掘（南西から）



SB30 完掘（南東から）



SB30 カマド



SB31 完掘（南東から）

遺構写真 13



SB31 炭化材出土状況



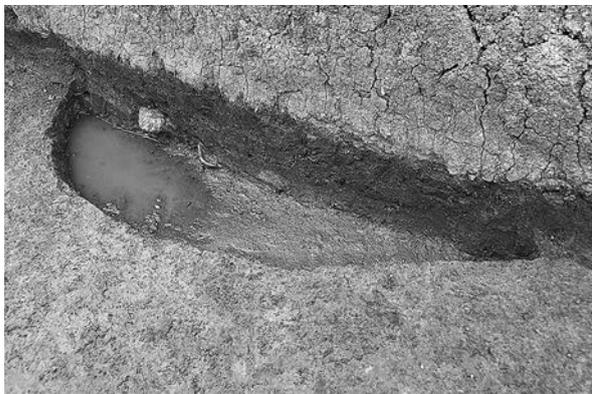
SB31 炭化材出土状況



SB31 炭化材出土状況



SB31 炭化材出土状況



SB32 完掘（北東から）



SB33 完掘（南東から）



SB33 土器出土状況



SB33 土器出土状況

遺構写真 14



SB33 土器出土状況（土坑）



SB33 土器出土状況（土坑）



SB34 完掘（南東から）



SB34 土器出土状況



SB35 完掘（南東から）



SB36 完掘（南東から）



SB37 完掘（南西から）



SB38 完掘（北西から）

遺構写真 15



SB38 床面土器出土状況



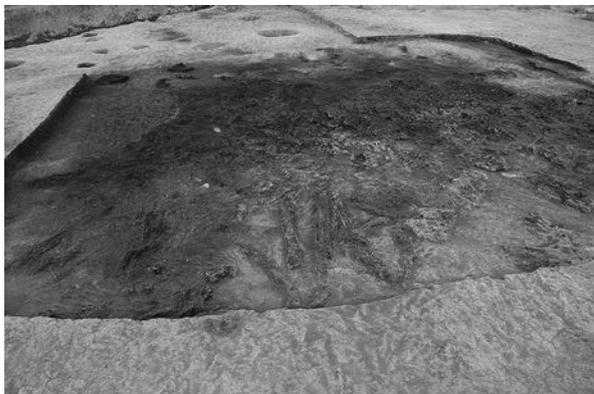
SB39 完掘（南東から）



SB39 床面被熱状況



SB40 炭化材出土状況



SB40 炭化材出土状況



SB40 炭化材出土状況



SB40 炭化材出土状況



SB40 床面被熱状況

遺構写真 16



SB40 完掘 (南東から)



SB40 地床炉 (北から)



SB43 炭化材出土状況



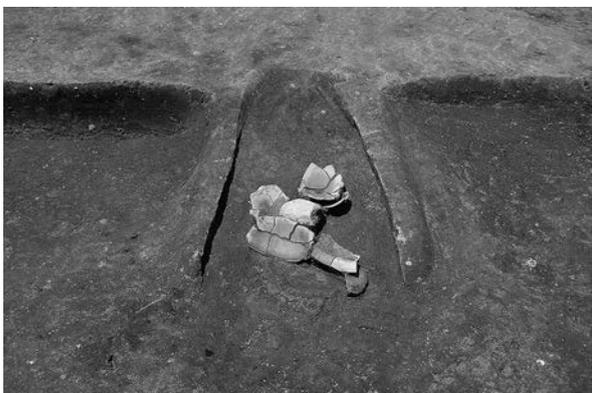
SB43 土器出土状況



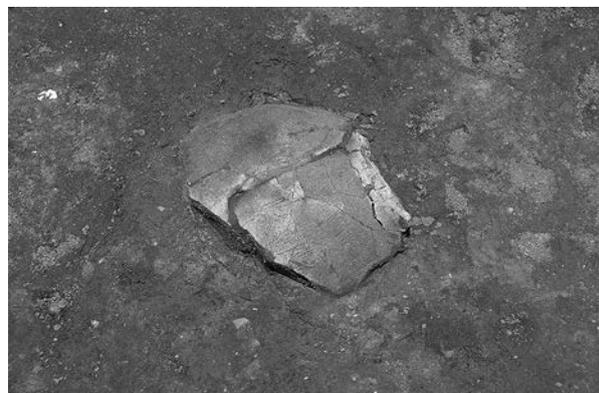
SB43 完掘 (南東から)



SB44 完掘 (南東から)



SB44 カマド



SB44 土器 (333) 出土状況

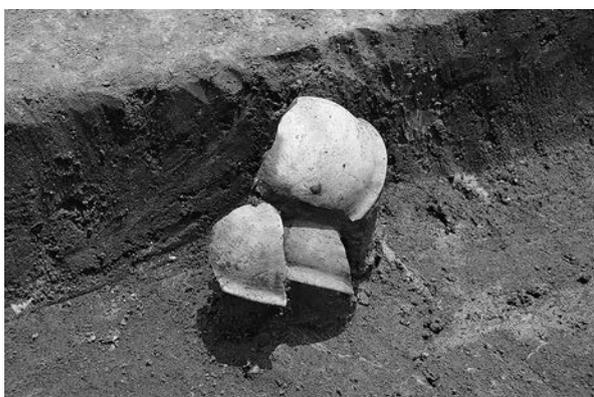
遺構写真 17



SB44 土器 (323) 出土状況



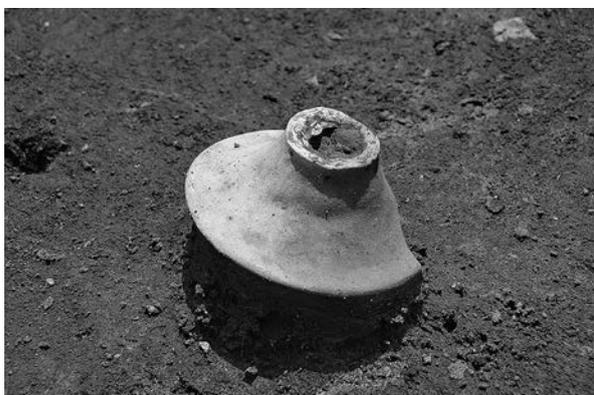
SB44 土器 (322) 出土状況



SB44 土器出土状況



SB44 土器 (326) 出土状況



SB44 土器 (324) 出土状況



SB44 勾玉出土状況



SB45 炭化材出土状況



SB45 炭化材出土状況

遺構写真 18



SB45 炭化材出土状況



SB45 完掘 (南東から)



SB46 完掘 (南西から)



SB47 完掘 (南東から)



SB48 炭化材出土状況



SB48 炭化材出土状況



SB48 炭化材出土状況



SB48 炭化材出土状況

遺構写真 19



SB48 炭化材出土状況



SB48 完掘 (南東から)



SB49 炭化材出土状況



SB49 炭化材出土状況



SB49 土器 (348) 出土状況



SB50 完掘 (南東から)



SB50 土器出土状況

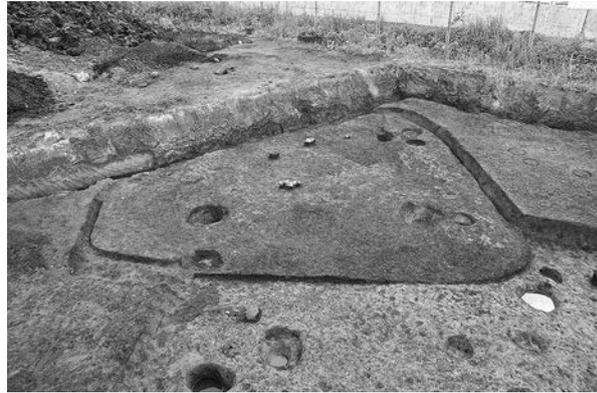


SB50 土器出土状況

遺構写真 20



SB51 完掘（南東から）



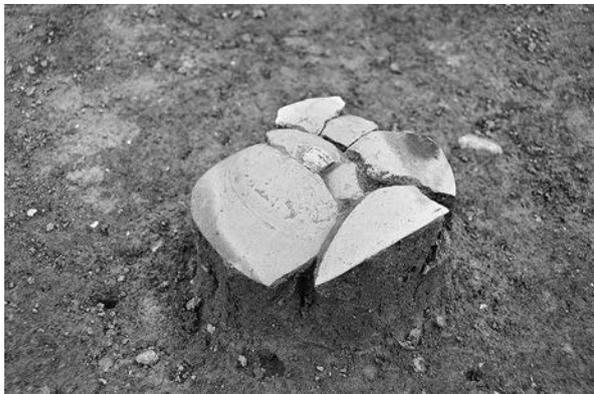
SB51 完掘（北東から）



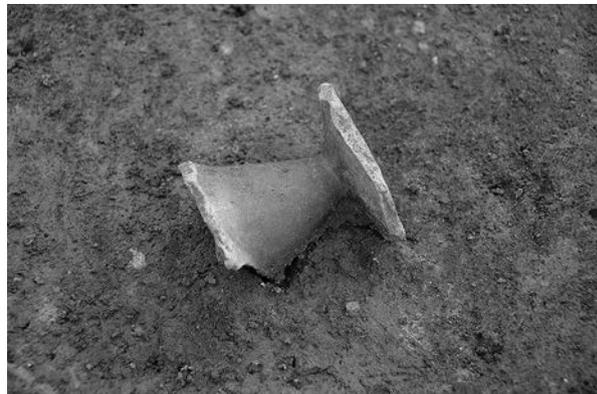
SB51 土器（357、364）出土状況



SB51 土器（358、361）出土状況



SB51 土器（356、362）出土状況



SB51 土器（360）出土状況



SB52 完掘（北東から）



SB52 完掘（南東から）

遺構写真 21



SB52 土器出土状況



SB52 土器出土状況



SB52 土器出土状況



SB52 土器出土状況



SK2 完掘 (南東から)



SK2 土器 (384) 出土状況



SK2 土器 (381 ~ 383) 出土状況



SK2 同左 (北西から)

## IV 遺物

今回の発掘調査の結果、遺構および遺構外から、総重量572,355gにおよぶ遺物が出土した。そのうち695点について図化を実施し、実測図には通して番号を付すとともに、観察所見を巻末の観察表にまとめた。なお、写真図版中の番号は実測図番号と対応している。図化の基準については各遺物の節で述べる。

### 1 土器

#### 1. 概要

出土した土器の総量は569,163gを測る。本遺物を種類ごとに分類したのち、出土した全個体のなかで、口縁部と底部の残存率がおおよそ全周の1/2を超える個体を抽出し、416点について図化を実施した(図55～74)。ただし、一部の器種については、その希少性に鑑み、残存率が1/2以下の小片であっても、できうるかぎり復元実測をおこなうことにした。

以後、本文中では、図化対象個体の選択行為を「抽出」、図化を実施した個体を「抽出遺物」と呼称する。観察結果の詳細は巻末の観察表に記し、残存状況については残存する部位と残存率とを組み合わせ、「底部1/2」というように表記した。

なお、数量の表記は抽出個体数による提示を主とし、遺構の性格に応じて、重量表記を併記する。以下、時代を追って記述をすすめる。

#### 2. 弥生時代後期

概要 1、3、5、14、16、17、19、22、28、34、36、38、40、45、48～50、52号の各住居跡および2号土坑が該当する。当遺跡出土土器群の主体を占めるが、出土量に比して「抽出個体」がわずかな住居跡も少なくない。ここではとくに豊富に出土している3遺構について概要を述べた後、該期の土器群を整理する。なお、土器群には、在地の箱清水式土器に加えて、法仏式ないしは月影式期の所産に比定しうる北陸系土器の一定量の出土を認めうる。詳細については後述する。

5号住居跡：27点を図化した。ほとんどが床面の直上より出土したもので、壺、甕、高杯、杯、鉢、蓋からなる箱清水式土器の良好な組成を示す。壺は中型のものが主体をなし、胴部は球胴化しており、頸部を屈曲も明瞭な個体が多い。58は小形で、赤彩は一切認められない。器壁もやや厚手のつくりである。底部には木葉痕を認めうる。59は北陸系の脚付壺である。甕は平底のもの(62～64)と台付のもの(65)の両者がある。いずれも口縁部の伸長化が進んでいる。69は北陸系の器台であるが、胎土は在地のものである。

52号住居跡：14点の土器を図化した。壺、甕、高杯、杯、鉢、蓋が出土している。抽出個体を一見してわかるのは、各器種における大型品の存在である。壺のうち368は残存器高67cmを超える。また366と378も口径40cm前後を測る。甕も376や379では胴部の最大径が35cmを超える。球胴化した器形で、斜行するハケメによって調整がなされる。高杯は、完形の脚部片であり、残存器高24.9cmをはかる。一方で北陸系土器も抽出している。367は北陸系の長頸壺であり、口縁部には線刻が施される。374は口縁端部に面をもつ。北陸北東部系のいわゆる「千種甕」である。このように、抽出遺物を確認する限りでは、箱清水式の大型品と北陸系土器からなる特異な組成をなす。

2号土坑：壺および甕、計4点が出土し、全点を図化した。壺(383)は口縁端部に平坦面をもつ。口縁部から肩部にゆるやかに移行し、胴部の張りは弱い。甕のうち380は北陸系の有段口縁の擬凹線甕である。

出土土器群の評価 箱清水式土器の編年については、千野浩や青木一男によって、5段階ないしは6段階に整理されている（千野1991・青木一1998）。吉田式の評価を別にすれば、両者の変遷観はおおむね定見を得ているところである。本稿ではこれらの先行研究を踏襲し、土器群の編年的位置について検討したい。

出土土器群のうち、やや古相をしめすのが、2号土坑出土土器である。特に壺は口縁端部に平坦面をもち、口縁部から肩部にゆるやかに移行し、屈曲点が認められない。後述するように有段口縁の擬凹線甕も口縁部がさほど発達しておらず、さきの位置づけと矛盾するものではない。そのほかの土器群については後期後半の箱清水式土器の盛期の所産に位置づけられる。甕の施文については頸部の簾状文を施文したのち、波状文を充填するのが基本的な施文の法式となっているが、波状文と簾状文の施文順序が逆転した個体も散見しうる（293・348等）。本稿では土器群を大別するにとどめているが、こうした法式からの逸脱を時間差によるものとみるならば、一部こうした個体を含む5号住居跡出土土器群は、より新相に位置づけられよう。

北陸系土器は遺存度を考慮しなければ、出土住居跡は11件を数える。これは検出した弥生時代後期の住居跡のうち、半数から北陸系土器が出土していることになる。

### 3. 古墳時代中期・後期

概要 2、4、6、8、9、10、11、13、15、23、30、33、35、44、51号住居跡が該当する。以下では、比較的豊富に出土している住居を抽出し、土器群を3段階に整理する。須恵器についてはその後、解説を加える。なお、ここでの古墳時代中期と後期との境界は、古墳における鋳留短甲の主体的な副葬終了をもって画するものとする。陶邑須恵器編年に対応させるならば、TK47型式期とMT15型式期がその境となる。

出土土器群の変遷 本遺跡出土の土器群は多数の高杯を含んでいる。高杯は杯と並び、鋭敏な変化をする器種のひとつである。また、外形状に加えて、脚部の整形技法や杯部との接合方法といった製作技法においても、多数の分析視角をもち、その属性は豊富である。長野盆地における古墳時代中期の高杯について研究の嚆矢となったのは、青木和明の分析である（青木和1987）。青木は土口將軍塚古墳出土高杯の編年的位置を検討するなかで、地域資料の比較検討をすすめ、杯部の内湾化、脚部の短脚化を変化の方向として示した。そのうえで、長野盆地の該期の高杯が多系列である点を指摘した。その後も、報告書のなかでくり返し整理がなされているが、論旨の明瞭性と明確な型式学的検討にもとづいた分析視角は、墳墓出土資料や集落出土資料が増大した現在においても有効性を失っていない。

以上の認識に立って、高杯を変化の基軸に据え、他の器種の消長も加味して出土土器群を3段階に整理することで、遺跡内の相対編年として変化の方向を見定めておきたい。ただし、出土総量と抽出遺物量との乖離が著しい事例もあり、抽出遺物にバイアスが生じている可能性がある。このような制約を認めた上で、「抽出遺物がおおむね組成を示す」という前提に立って検討をすすめる。ところで、本遺跡とは指呼の間にある本村東沖遺跡の出土土器については千野浩の検討がある（千野1993）。千野は同遺跡出土の土器群を整理するなかで、甕について長胴化を型式変化の方向として想定し、型式組列を措定した。そしてこれを基軸として、共伴する他の器種とのあいだに共時性を認め、6段階の変遷案を提示した（以下、本村東沖編年）。地理的距離を考慮すれば、本遺跡の土器群とは同一の変遷をたどると考えられるものであり、ここでの作業は本村東沖編年との併行関係を確認するものでもある。

古墳 i 段階：小型丸底土器3点を抽出し得た27号住居跡出土土器群をこの段階にあてる。資料が不足しており、高杯の様相等、詳細は不明である。ただ、最古相との位置づけは当該住居跡にカマドが検出されていないとする調査所見とも矛盾しない。

古墳 ii 段階：8・11・33号住居跡が該当する。高杯は屈折脚のものを主体としながらも、杯部や脚部にはヴァ

リエーションがみとめられる。細分案を以下に提示しておこう。

- 杯部a (137) 側面と底面境に弱い屈曲をもち、側面は内湾するもの。
- 杯部b (139・264) 外面に段をもつもの。
- 杯部c (140) 深く、内湾し、口縁部が外側に外反するもの。
- 杯部d (141) 深く内湾するもの。
- 脚部a (137・284) いわゆる屈折脚高杯。柱部の張りの強弱、裾部の高低などに個体差を認めうる。
- 脚部b (141) 脚がハの字状に広がるもの。
- 脚部c (139) 裾部外面に段をもつもの。

上記の分類結果が図らずも小坂延仁が示した分類案（小坂2000）とほぼ同一であるという事実は、ヴァリエーションに関していえば、墳墓供献の高杯とほぼ同一の様相を示すことを意味するとともに、各タイプが併存している状況があらためて確認されたといえる。ただし、杯部aと脚部aというような基本的な組み合わせの規範はあるにせよ、各種の組み替えがなされているのが実態であり、型式組列を設定するのは困難と言わざるをえない。系列化への固執は実体を見誤る可能性があり、この点は留意が必要であろう。杯部cの変遷については型式学的な「退化」に着目するならば、漸移的な変遷ではあるものの、内面に段をもつものからもたないものへという変化の方向を提示しうる。いずれも内面にほとんど段をもたない本遺跡出土例は、このタイプのなかでも新相に位置づけられよう。杯や高杯では内面黒色処理をもつものと、もたないものがあり、杯蓋はこの段階で消滅する。

古墳 iii 段階：2・6・9・10・15号住居跡出土土器を提示しうる。後期的土器群の定着期と位置づけられる。高杯は杯部の内外面に明瞭な屈曲を有するものが登場する。脚部も屈折脚が消滅し、ハの字状のものに変化するなど、須恵器にその系譜を求めうる形態に変化する。杯、高杯で内面の黒色処理が定着する。

絶対年代：絶対年代については、後述するように本遺跡では遺構にともなうと断定できる須恵器は認められない。ただし、後述するように、須恵器の杯蓋片（353）が51号住居跡に帰属することが確かであれば、TK47型式期に古墳 ii 段階の存続期間の一点求めうる。いずれにしる、共伴資料から年代の特定をすすめるのは困難であることから、ここではさしあたり、古墳 i 段階を本村東沖編年の第3段階、古墳 ii 段階を第4段階～第5段階、古墳 ii 段階を第6段階に対応させることで、併行関係を示しておく。古墳 ii 段階については、資料数が限られることもあって、大別するにとどめているが、上述の対応関係が確かであれば、半世紀程度の年代幅をもつことになる。理念的には古相と新相に細分できる可能性を残す。

本遺跡出土の古墳時代土器群は、大半がカマド導入期以降の所産に位置づけられるものである。比較的、量的に充実した資料の存在は、カマド導入と須恵器の登場によって生じた土器様式の変化の道程を示す基準資料に位置づけることができる。

古式須恵器 2点出土しており、どちらも杯蓋の口縁部片である。353は50号住居跡の覆土中より出土したものであるが、伴出土器と年代が合致しないことから、遺構が重複する関係にある51号住居跡に帰属する可能性がある。口径12cm、残存器高cmを測る。口縁部はほぼ垂直に落ち、天井部との境にはやや下方に伸びる明瞭な稜をもつ。口唇部は内面に段をもつ。こうした形態的特徴より陶器須恵器編年のTK47型式併行期に比定しうる。

402は遺構外からの出土である。口径12.8cm、器高4.1cmを測る。天井部は時計回りの回転ヘラケズリが施される。口縁部と天井部を画する稜は弱い。口縁部は直線的にゆるやかに広がる。口唇部にはわずかな接地面をもち、内面には段をもたない。全体的に厚手のつくりといえる。こうした形態的特徴よりMT15型式併行期に比定しうる。

両者とも遺構外からの出土である点に憾みが残る。ただし352については、色調は青灰白色を呈し、黒色斑点を観察しうる。

こうした属性は風間栄一が提唱した「浅川型須恵器」の特徴に合致するものであり（風間1998）、本例もその一例として加えておきたい。

#### 4. 平安時代

杯類および羽釜片、計6点を抽出した（405～409・412）。405・406は土師器の高台杯である。405には放射状の暗文を認めうる。407・408は底部回転糸切り調整の無台杯である。409は底部回転糸切り調整の須恵器の無台杯である。413は羽釜の突帯部片である。すべて遺構にともなうものではないが、その出土位置を改めて確認すると、調査区の北東側に出土が集中していることから、何らかの遺構が存在した可能性は否定できない。

## 2 その他の遺物

### 1. 概要

土製品、石製品、ガラス製品、鉄製品が出土しており、計272点について図化を実施した（図74～77）。図化の基準については各遺物の段で説明を加える。

### 2. 土製品

残存状態が良好で、機能や用途が明らかなもの2点について図化を実施した。

紡錘車（417） 遺構外より1点出土しており、側面が一部欠損している。色調は淡褐色を呈し、焼成は甘い。

匙形土製品（418） 19号住居跡の床面より出土した。残存長6.4cmを測り、両面に赤彩が施されている。

### 3. 石製品・ガラス製品

総重量は3,155gを測る。機能や用途が明らかなものを石製品およびガラス製品として抽出した。そのうち、装身具である玉類（勾玉、管玉、ガラス小玉）について図化を実施し、そのほかについては写真掲載とした。

勾玉（419） 44号住居跡の床面より、滑石製の勾玉が1点出土した。外形はやや強い湾曲をもったc字形を呈し、両面には斜行する擦痕を認めうる。穿孔方法は片面穿孔である。

管玉（420・421） 2点が出土した。420は4号住居跡の覆土中より出土したもので、全長2.5cmを測る。穿孔方法は片面穿孔である。421は3号住居跡の覆土中より出土したもので、断面形状が不定八角形状をなす未成品である。全長1.8cmを測り、穿孔方法は両面穿孔である。石材はどちらも緑色凝灰岩製である。

ガラス小玉（422～686） 16号住居跡の床面直上より265点以上が出土した。総重量は21,32gを測る。色調はスカイブルーを呈する個体と黄緑色を呈する個体とがある。完形の個体は265点であるが、相互に接合関係を認めることができない小片が10点以上含まれており、実際の出土点数は270を超えるものと推定しうる。観察表については点数が多いため、割愛し散布図に代える。詳細については後述する。

石鏃（687・688後者のみ写真掲載） 2点出土した。687は有茎式の石鏃片である。13号住居跡の覆土中層より出土したもので、材質はチャート製である。688は18号住居跡の覆土中より出土した頁岩製の未成品である。どちらも、混入品である。

打製石斧（689写真掲載） 結晶片岩の可能性のある打製石斧1点が11号住居跡の覆土中層より出土した。

磨石（690写真掲載） 22号住居跡より1点出土した。頁岩製で両面に磨面が認められ、光沢を帯びる。端部付近にはわずかにベンガラが付着を認めうる。

砥石（691写真掲載） 方形をなす頁岩製の砥石である。5・6号住居跡の覆土中層より出土したものである。

凹石（692・693写真掲載） 2点出土した。いずれも石英安山岩製である。692は34号住居跡より出土した

もので、孔は深く、外形は不定形をなす。693は52号住居跡より出土したもので、浅い孔をもつ。

#### 4. 鉄製品

2点出土しており、総重量は37.33gを測る。なお重量は土砂等が付着した状態での計測値である。

鉄 鏝(694) 残存長5.2cmを測る、鉄鏝の鏝身部片である。レンズ状の断面形状をなし、先端部は上方に変形している。5号住居跡に帰属すると考えられる柱穴内より出土したが、6号住居跡に帰属する可能性も否定できない。

不明鉄製品(695) 33号住居跡より出土したもので、残存長7cmを測る。湾曲した平面形状を呈することから、当初は鉄鎌の可能性想定したが、断面形状が片丸形をなすなど疑問ものこる。鍬先や鋤先の可能性もある。

### 3 長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器

#### 1. 概要

長野女子高校校庭遺跡の遺構および遺構外からは、一定量の北陸系土器が出土した。壺、甕、高杯、器台、蓋があり、多くは小片であるが、ほぼ完形の個体も含まれている。本遺跡の北陸系土器群は、箱清水式土器との併行関係をさぐるうえで重要な基準資料であることに加え、該期における地域間交流を考える重要な手がかりとなりうる資料といえる。以上の認識に立って、本節ではまず個別の事例を提示し、観察所見を記述する。その上で、編年的位置と系譜について検討をすすめる。

#### 2. 事例の提示

図50に本遺跡から出土した北陸系土器を示す。21点を図化しているが、北陸系土器についてはその希少性に鑑み、残存率が1/2以下の小片であっても、できうるかぎり復元実測をおこなっている。したがって、遺存度による抽出の遺漏を考慮する必要はないと考えてよい。なお、図50の遺物番号は本節においてあらたに付したものであり、遺物図版の番号とは異なる。

搬入品の弁別 外来系土器の検討においては純粋な搬入品と在地における形態模倣品(以下、在地模倣品)との弁別が重要な分析視角となる。その際に重要となるのが、色調や胎土、焼成の識別である。本遺跡出土の北陸系土器群は、その差異より以下の2群に大別しうる。

a群：色調は壺、高杯は黄橙色、甕は黒褐色を呈し、胎土は白、赤、黒の砂粒を含む。

b群：色調は明黄褐色ないしは灰白色を呈する。胎土は雲母を含む。焼成は軟質であり、器面が荒れる個体も多い。

前者は伴出する箱清水式土器と通底する特徴である。一方、後者の特徴は箱清水式土器には一切認められず、筆者の実見した限りでは、北陸北東部系土器と共通する。究極的には胎土分析による実証が必要であるが、ここでは、さしあたり前者の特徴を持ち合わせた個体を在地模倣品、後者の特徴を持ち合わせた個体を搬入品として認定することにしたい。

壺(1・2) 2点出土しており、どちらもほぼ完形の個体である。1は、5号住居跡の床面より出土した台付裝飾壺である。体部の外形は扁平な球形をなし、最大径の位置に幅2.8cmを測る4段の帯状突帯をめぐらす。口径は9.2cmを測り、有段口縁をなす。口縁部の外面には擬凹線が施される。脚端部は欠損しているものの、本願地の出土例を参考にするならば、わずかに外反する端部形状を想定しうる。器壁はやや薄手である。外面は磨滅が激しく調整は不明であるが、わずかにベンガラが付着しており、赤彩が施されていたことがわかる。内面はナデ調整が施され、胴部中位から上位にかけて輪積み痕を比較的明瞭に確認しうる。焼成は軟質である。色調等の特徴はb群であり、搬入品と推定しうる。

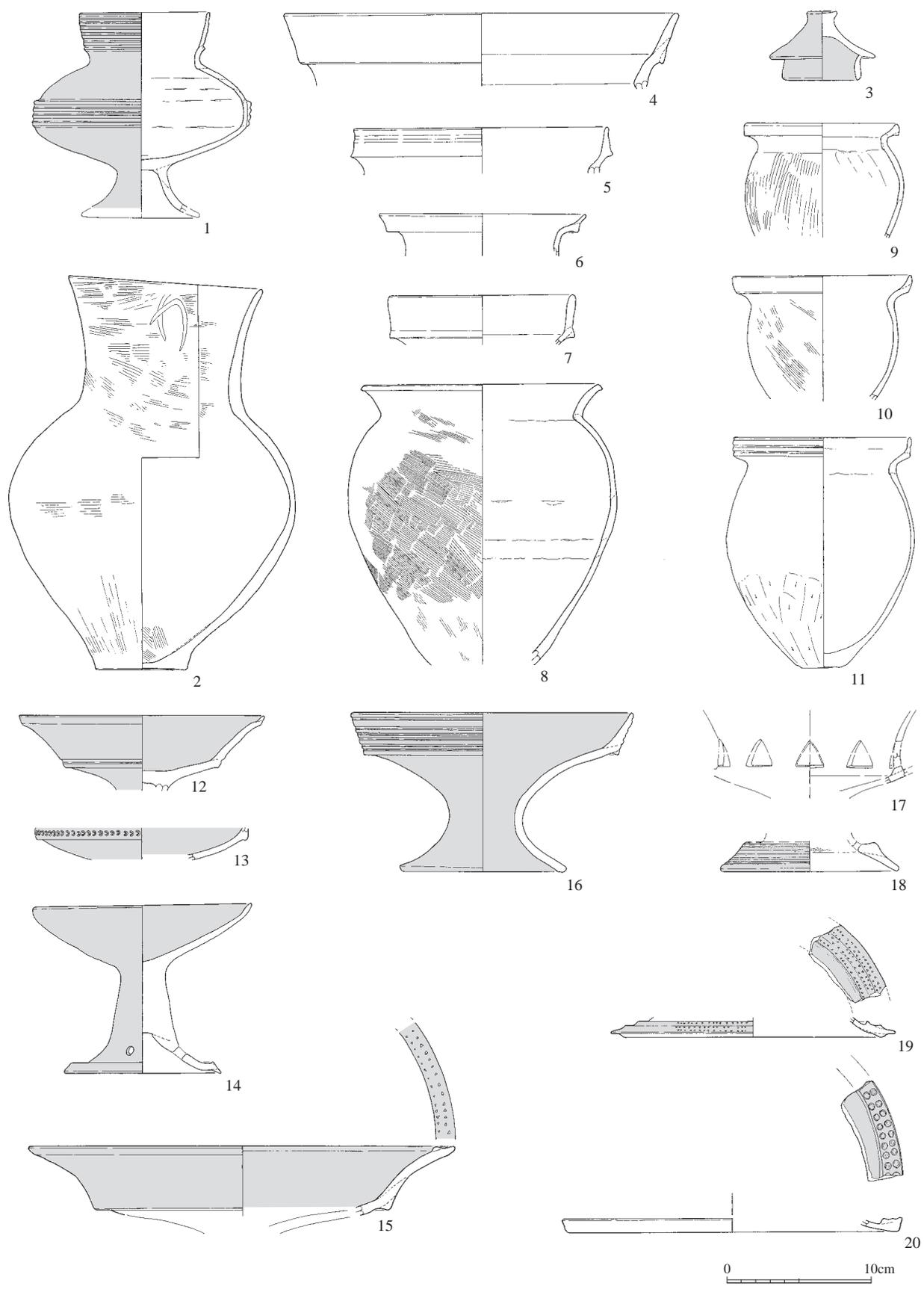


図50 長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器

2は、52号住居跡の床面より出土した、完形の長頸壺である。体部はやや縦長で中位よりやや上に最大径をもち、わずかに外反する口縁部にいたる。口唇部はやや肥厚ぎみに丸く収まる。調整は、外面は横位ハケ調整のち斜位ないしは縦位のナデ調整が施される。器壁は最大厚0.4cmを測り、やや厚手である。色調等の特徴はb群であり、搬入品と推定しうる。本例で注目すべきは、口縁部の外面に篋書きによる線刻である。垂下する弧線の上に、への字状の弧線が刻線されており、対象物を特定し得ない。「記号文」ないしは抽象化の進行した「絵画文」と推定しうる。

蓋 (3) 完形の蓋1点が、5号住居跡の床面より1とやや離れた位置で出土した。口径5cmを測り、直立ぎみの発達した受け部をもつ。外面は全面に赤彩が施される。色調等はa群である。

甕 (4～11) 口縁部の形状より有段口縁のものと同単純口縁のものに大別でき、さらに以下の3種に細別しうる。

a類 (5・6・9～11) 短い口縁をもつものをa類とした。5は口縁部外面に内傾する面をもつ。表面の磨滅によって判然としないながら、2条の擬凹線を認めうる。6は、口唇部に面取りが施され、ほぼ直立する頸部より細身の二次口縁がやや外傾しながら立ちあがる。9は、口縁部は、頸部より強く外側に屈曲する。端部の下半はわずかに下方に垂下する、いわゆる「付加状口縁」である。外面には幅広の面をもつ。10は、短い二次口縁部が内湾ぎみに立ちあがる。11は2号土坑より出土した完形品である。口径12.4cm、器高16.4cmを測る。外形は倒卵形を呈する。口縁部には3条の擬凹線が施される。外面はケズリ調整であるが、内面には一切ケズリが施されない。故地のもものは内面にも篋ケズリ調整が施されるのが通有であり、本例は製作技法における規範が遵守されない、模倣品としての姿を示しているといえよう。a類は色調等はa群であり、在地模倣品と考えられる。

b類 (4・7) 発達した口縁が直線的に立ちあがる有稜口縁をもつ甕をb類とした。このうち4は復元値に誤りがなければ、口径27.8cmを測る大型品といえるが、残存率は1/4に満たないことから、修正の余地もある。色調等はb群である。

c類 (8) 単純口縁のもの1点をc類とした。52号住居跡より出土した、いわゆる「千種甕」である。口縁部と胴部は相互に接合関係にはないが、焼成や色調、胎土より同一個体として復元したものである。胴部は上方に最大径をもち、肩部が張る。器壁は薄手のつくりである。表面には斜位のハケメ調整が施され、所々に焦げが付着している。口縁部はやや外反し、ナデによって仕上げられる。口唇部に面をもつ。色調等はb群であり、搬入品と推察しうる。

高 杯 (12～15・19・20) 6点を数える。有段高杯の杯部、鉢形高杯、脚部の小片があり、全形を知りうるのは14のみである。なお、この中には、器台の可能性をもつ個体が含まれている。

12・13・15は有段高杯である。12は屈曲部外面に一条の沈線をもつ。口縁端部はわずかにつまみ上げられ、受け口状になる。内外面に赤彩が施される。13は高杯の杯部下半である。外面には逆c字文が連続的に配される。15は復元口径30cmを測る大型品である。稜部はわずかに垂下し、口縁部は強く外反する。口唇部内面は粘土帯を付加することでわずかな凹みをもった平坦面が形成されており、2点一対となった三角刺突紋が施される。両面に赤彩が施される。20は脚端部片で、外面に二箇所の粘土帯を付加することで、段部を作出し、上部に二列、下部に一列の三角刺突文を連続的に配している。また、内面にも粘土帯を付加することで、平坦面を形成している。21は、脚端部は折り返し状をなし、2個一対の円形文が連続的に配される。故地での形態を参考にすれば、末広りのまま、柱状の脚部にいたる脚形状に復元しうる。14はほぼ完形の鉢形高杯である。脚部は中実で、裾部には三方の円孔が穿孔される。杯部は浅く、端部付近で内湾する。色調は白色をなすが外面の磨滅による可能性が高い。搬入品の可能性を残すものの、さしあたりa群に区分しておく。

器台（16・17・18）3点を数える。16はほぼ完形の器台である。口径19.6cmを測る。受け部と脚部が外反し、脚端部には面をもつ。受部は有段をなし、粘土貼付けによるわずかな垂下帯をもつ。外面には6条の擬凹線文が施される。両面に赤彩が施される。17は有透装飾器台の受け部片と推定される小片である。遺存度は受け部のわずか1/10ほどであるが、その稀少性を鑑みて、図化を実施したものであり、受部径や傾きは修正される可能性がある。透孔については、わずかに認められた受部の形状と受部の径を勘案し、最終的に三角形透かしに復元している。受け部口縁の形状については装飾器台であることが間違いなければ、垂下する幅広の口縁部が想定されるが、遺存度の低さからここでは復元線は記していない。焼成は不良である。18は底径12.4cmを測る脚部片である。外面には明瞭な段をもち円孔が穿孔される。端部には6条の擬凹線文が施される。色調等はいずれもa群である。

### 3. 編年的位置と系譜

**編年的位置** 赤澤徳明は静岡県沼津市高尾山古墳出土の北陸系土器について検討をすすめる中で、東海や関東地域で出土する北陸系土器について時期が合致しないという指摘をふまえ、模倣された土器の本来の時期を示すとした。そのうえで「世代を越えての模倣」を想定している（赤澤2013）。先述のとおり、本遺跡出土土器群の多くは胎土の観察結果より在地模倣品である可能性が高く、本貫地のものとは異なった型式変化をしている可能性がある。この点に留意したうえで、高杯を中心いくつかの個体について編年的位置を検討する。

壺：1については、装飾台付壺の盛行期は月影期である。本例も同期の所産と考えられる。2については法仏期と位置づけられるが、月影期まで一定量残存するようであり、詳細な年代の特定は難しい。

甕：多くが口縁部の小片であり、明確な時期比定は困難である。ただし、さきに示した分類案はおおむね時期差を示している。口縁部がさほど発達していないa類については、法仏期でも古相に位置づけられよう。

高杯：有段高杯については綿密な属性分析が地域を単位として実施されており（坂井1985、南1987、高橋2000、堀2002）、杯部の形態のみでも時期の特定が可能な状況にある。それぞれの変遷観は対象としている地域が異なっており、編年を参照するために必要な故地の特定は、現状では難しい。隣接地域である越後の高杯、器台については滝沢規朗の分析（滝沢2010）があり、ここでは滝沢の編年を援用する。ただ、いずれの編年をもちいても、有段部の増長、小型化が変化のメルクマールとなっており、大枠としては年代比定に誤りはないものとする。滝沢はまず、系譜を考慮して大別したのち、口径、稜径、口縁有段部長、器高について計測値の相関関係から細分をすすめている。滝沢の変遷観に照らすならば、12は高杯A類に該当する。伸び率・稜径率は3類に最も近い数値を示す。19は高杯A類に該当する。伸び率および稜径率は3類となる。両者は滝沢編年の様相3に相当し、法仏期の中段階から新段階にあたる。14については口縁部や脚端部がほとんど発達しておらず、法仏期でもかなり古い段階に位置づけられよう。

**相伴遺物による検証** ここで、在地の箱清水式土器群との相伴関係について確認しておきたい。ただし、同土器群との良好な相伴資料は限定されている。詳細は先述しているが、ここでは5号住居址および2号土坑出土資料を再度一括資料として例示する。5号住居址出土土器のうち壺は、大型から中型のものが主体をなす、50や52は胴部が球胴化しており、頸部も屈曲が明瞭な個体が多い。58は小形で、赤彩は一切認め

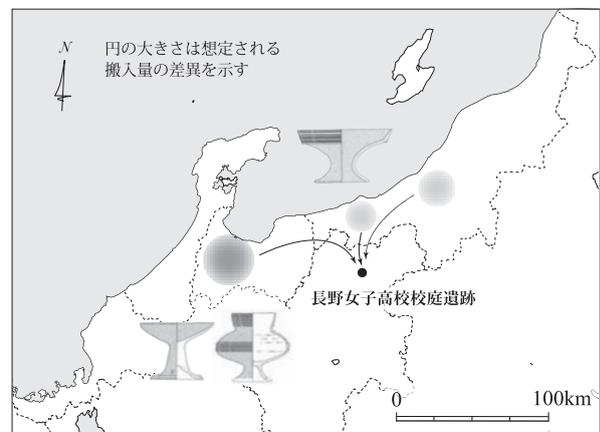


図51 北陸系土器の想定移動ルート

られない。甕には波状文と簾状文の施文順序が逆転した個体も散見しうる。千野編年（千野1991）の4段階でも最新相に位置づけられる。北陸系土器群に対してやや古相の感がある。2号土坑からは壺と甕3点が出土している。このうち壺(384)は口縁端部に平坦面をもつ。口縁部から肩部へゆるやかに移行し、胴部の張りは弱い。千野編年の3段階に位置づけられる。

以上、北陸系土器群は一部古相をふくむものの、おおむね法仏式～月影式の古段階を中心とした時期の所産ととらえられる。その位置づけは、箱清水式土器群のそれとも齟齬をきたすものではない。

系 譜 本遺跡出土の北陸系土器群は、搬入品、在地模倣品ともに北陸北東部に系譜を求めることができる。図51に示したように、候補地としては越中の砺波平野や富山平野、越後の高田平野や信濃川流域が挙げられる。1については、台付装飾壺の集成をすすめた宮本哲郎によると、越中に事例が多いという（宮本1986）。また14についても越中に事例が多い。このように、故地を越中付近に限定できる個体がある。ただし、搬入品と推察した個体については、本貫地のものと比較して細部の形態を異にする個体が多い。1は本貫地のものに比べ、広口である。3の蓋がこれと対応すると考えられるが、蓋の口径よりも壺の口径の方が大きいために、蓋としての機能をなさない。胎土等の特徴はa群であり、搬入時よりのセット関係ではないことは明らかである。2についても、本貫地のものは口縁部に段をもつなどの差異がある。この点は留意する必要がある。

#### 4. 結 語

以上、長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器について検討をすすめてきた。北陸系土器の出土量は、1990年代と比較しても、あまり増加していない。そうした状況もあってか、研究も進展しているとは言い難い。この点において、一定量の搬入品の可能性をもつ個体を含み、一括性が高い本遺跡出土土器群は、高い資料的価値を内包するもの評価しうる。残された課題は多いが、該期における周辺地域との広範な交流を知りうる重要な資料と位置づけられよう。

本稿を草するにあたっては、新潟県教育庁 滝沢規朗氏に本遺跡出土の北陸系土器を実見していただき、多数の有益なご教示をいただいた。また、関連文献もご紹介していただいた。文末であるが記して感謝の意を申し上げたい。

## 4 16号住居跡出土のガラス小玉

### 1. 概 要

16号住居跡からは265点をこえるガラス小玉が出土した。その出土点数は県内において類をみない。ガラス小玉は一般的に被葬者の装身具として墳墓から出土するのが一般的であり、住居跡という特異な出土状況は、来歴の解明をはじめとして多くの検討課題が残されている。本節では、事実関係の整理をすすめたのち、長野県内の事例を提示し、出土の意義について若干の検討をおこなう。

### 2. 出土状況

住居のほぼ中央部の西壁より、50cmほど離れた位置で、すべて基盤層直上の粘性土層中より出土したものであり、床面に張り付くように、40cm四方の範囲にまとまっていた。当該住居跡は当遺跡のなかでも特に湧水が激しく、取り上げに時間的な猶予を許さない状況であった。そこで、現状で確認しえた個体については写真撮影を実施した後、取り上げ作業をおこない、出土が予想される周辺70cmの範囲の覆土について持ち帰って水洗をすることにした。したがって、出土位置のドット図やエレベーション図は作成していない。出土点数が大量であったため、住居跡の埋没後、覆土内に墓抗が掘削された可能性もあるとみて、小口板据穴の痕跡を探したが、

一切確認できなかった。

現状においては住居跡にともなう遺物であることは確実であり、伴出土器が示すように、弥生時代後期後半の所産と解して差し支えなかろう。ただし、長野盆地では住居を墓として使用した事例も認められる。その意義については後述する。

### 3. 分類と製作技法

分類 図52に、ガラス小玉の全高および全幅の散布図を示した。図上のドット数は実際の点数よりも少なく表示されているが、これは、寸法は同じ個体については、ドットが重複するためである。この点を確認したうえで寸法と色調に着目

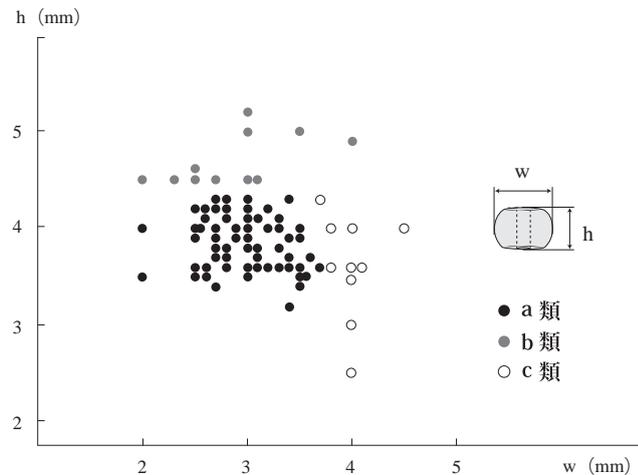


図52 ガラス小玉の寸法

するならば、さしあたり、以下のとおり分類しうる。なお、遺物図版については、そうした分類を考慮せずに実測図を配置してある。

- |      |     |                                   |
|------|-----|-----------------------------------|
| a.形態 | a類  | 全高3.2mm～4.2mm、直径2.5～3.5mm前後を測る一群。 |
|      | b類  | 全高4.5mmをこえる縦長の一群。                 |
|      | c類  | 直径3.7mmをこえる横長の一群。                 |
| b.色調 | I類  | スカイブルーを呈するもの。                     |
|      | II類 | 黄緑色を呈するもの。                        |

寸法については漸移的ではあるものの、a類として示したように、全高3.2mm～4.2mm、直径2.5～3.5mmの範囲に寸法が集中していることがわかる。一方で明瞭な分布におけるまとまりはみだしがたいものの、b類やc類のように分布に集中域から逸脱した個体も散見される。ただし、側面形状が斜めに變形している個体も同一基準で計測しているために、こうした個体が含まれている可能性は多分にある。微視的にみれば、ヴァリエーションは認めうるものの、1mm～2mmの差異は個体差の範囲に収まるといえる値であり、一括して製作されたものとみてよいだろう。

色調のうち、II群としたものは、剥離などが激しい個体が多く、図化しえなかった小片に多く含まれる。成分分析を実施しえていない点で憾みが残るが、X線写真の撮影結果をみても、透過度に大きな差異はみとめられない。こうした事実をあわせて検討するならば、成分比による発色の違いとは考えにくく、現状では風化による変色の可能性を第一の候補として挙げるができる。

製作技法 ガラス玉の製作技法については以下、4つの方法がある（齊藤・田村2013）。

- ① 引き延ばし法（管切り法） 中空のガラス管を引き延ばし、切断する技法。気泡が孔に平行し、筋状にのびる。
- ② 鋳型法 ガラス片を鋳型に入れて再加熱する技法。内部に気泡粒が充満する。
- ③ 巻き付け法 芯棒にガラス管を巻き付ける技法。気泡は孔に直行し、孔の形状は直線的となる。
- ④ 連珠法 引き延ばしたガラス管を再加熱し、棒状金具を差し込んで切り込みを入れる方法。

ここでは、遺物番号の423から433について実体顕微鏡観察を実施し、製作技法の特定をすすめた。その結果、全体として不純物は比較的少なく、円形の気泡を観察しえた。また全点を対象としたX線透過画像においても、円形の気泡を確認しうる。①の指標となる筋状の連続については判然としないため、②の可能性も排除できない。ただし、側面形状をみても片方が傾斜している個体が多く認められる。こうした形状を加味するならば、い

わゆる管切り法によって製作されたと考えられる。

### 3. ガラス小玉の出土例

長野県内のガラス小玉 表4に長野盆地を中心に県内の弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのガラス玉の出土例を示す。

市内の事例については点数にかかわらず集成し、その他の地域についてはとくに40点をこえる事例に限定して集成している。したがって、悉皆的なデータではないが、多量出土の特異性を提示するという本節の目的に照らすならば、そこに一定度の有意性は認められると考える。

表を一見してわかるのは、墳墓からの出土が大多数を占める点である。これは、ガラス小玉が被葬者の身体を飾る装身具として用いられた結果といえる。点数については200点を超えるのは剣ノ宮遺跡跡のみであり、その100点前後、50点前後、10点前後とつづく。一方で住居跡からの出土例は事例も少なく、点数も1～2点にとどまっている。こうした中で、本例を再度確認するならば、その出土点数は墳墓出土例をもしのぎ、現状では長野県内最多を数える。

関東甲信地域のガラス小玉 次に、関東甲信地域のなかで比較を試みたい。図53は齊藤あやが示したグラフ(齊藤2012)をもとに、単純に出土総数のみに着目して筆者が作成したものである。これをみると本例が出土した弥生時代後期後半段階では千葉県がもっとも多く、ついで静岡県、長野県の順となる。ここに本例約270点を

表4 長野県内におけるガラス玉出土遺跡

遺跡名	所在	点数	時代	出土遺構(番号)	特筆遺物
根塚	下高井郡木島平村	134	弥生後期	木棺墓	鉄剣
水内坐一元神社	ガーデンパーク 長野市小島	4	弥生後期	住居跡(SB5)	
長野女子高校校庭	長野市三輪	265+	弥生後期	住居跡(SB16)	
檀田	長野市檀田	78	弥生後期	方形周溝墓(SDZ1)	鉄釧・銅釧
檀田	長野市檀田	2	弥生後期	円形周溝墓(SDZ2)	
本村東沖	長野市上松	10	弥生後期	木棺墓(SK3)	銅釧・鉄鏃
本村東沖	長野市上松	4	弥生後期	円形周溝墓(SZ2)	鉄釧
吉田古屋敷	長野市上松	18	弥生後期	木棺墓(BSJ1)	
吉田四ツ屋	長野市吉田	11	弥生後期	土器棺(SK1)	
春山	長野市若穂綿内	11	弥生後期	土器棺(SK1)	
春山	長野市若穂綿内	1	弥生後期	住居跡(SB13)	
春山	長野市若穂綿内	1	弥生後期	住居跡(SB16)	
春山	長野市若穂綿内	1	弥生後期	住居跡(SB42)	銅釧
村東山手	長野市松代町大室	18	弥生後期	土坑墓(SM01)	
北平1号	長野市松代町東寺尾	16	古墳初頭	墳丘墓	
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	1	弥生後期	土器棺(203)	
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	19	弥生後期	土器棺(202)	
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	2	弥生後期	円形周溝墓(SM211)	鉄釧
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	15	弥生後期	円形周溝墓(SM103)	
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	3	弥生後期	円形周溝墓(SM241・242)	
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	9	弥生後期	住居跡(SB211)?	
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	10	弥生後期	円形周溝墓(SM221周溝内)	
篠ノ井 新幹線	長野市篠ノ井塩崎	6	弥生後期	土坑墓(SK214)	鉄釧
篠ノ井 篠ノ井バイパス	長野市篠ノ井塩崎	2	弥生後期	住居跡(SB003)	
篠ノ井 篠ノ井バイパス	長野市篠ノ井塩崎	1	弥生～古墳	住居跡(SB018)	
篠ノ井 篠ノ井バイパス	長野市篠ノ井塩崎	1	弥生～古墳	住居跡(SB023)	
篠ノ井 篠ノ井バイパス	長野市篠ノ井塩崎	1	弥生後期	住居跡(SB024)	
石川条里 宮ノ前	長野市篠ノ井塩崎	1	弥生後期	住居跡(SB39)	
篠ノ井 聖川堤防	長野市篠ノ井塩崎	3	弥生後期	土器棺(SDZ4)	
篠ノ井 聖川堤防	長野市篠ノ井塩崎	9	弥生後期	円形周溝墓(SK10)	鉄釧
塩崎 市道松節小田井神社	長野市篠ノ井塩崎	9	弥生後期	土器棺	
剣ノ宮	塩尻市上西条	245	弥生後期	方形周溝墓(6号)	鉄釧
丘中学校	塩尻市広丘	110	弥生～古墳	方形周溝墓	鉄釧
後家山	佐久市後家山	54	弥生後期	木棺墓(1号)	鉄釧
清水9	飯田市松尾	42	弥生後期	方形周溝墓	

加えると、長野県における出土総数は千葉県と比肩する数となる。一方で神奈川県等、残りの地域をみると、いずれも総数は150点に満たない。こうしてみると本例は県内のみならず、関東甲信の諸地域と比較しても該期の中でも際立った出土点数であることがわかる。

#### 4. 多量出土の意義

**住居内埋葬** 本例の来歴については出土状況の特異さも相まって、解明は困難といわざるをえない。さきに述べたように、住居跡の床面には墓坑が掘削された痕跡を確認できないため、覆土内埋葬の可能性も否定される。このため副葬品としての埋納以外の履歴、すなわち本遺跡にガラス小玉の工房跡が存在する、ないしは再分配・流通に関わった集落であり、何らかの理由で住居跡に保管ないしは廃棄された、といった仮説が成立する余地もある。

ただし、長野盆地では、住居跡が墓として利用された事例があることから、ここでは「住居内埋葬」と仮称して事例を提示したのち、本例の当否について検討したい。

中野市牛出古窯遺跡SB05：床面付近より、管玉11、ガラス小玉5、勾玉4、砥石1、ヤリガンナ？、骨片1が出土している（図54左）。玉類には位置を図示したものほかに、覆土の水洗によって確認されたものがある。管玉は全て片面穿孔品で、石材は滑石5、鉄石英5、メノウ1に分けられる。ガラス小玉はスカイブルーを呈する。勾玉はヒスイ製3点、石材不明1点を数える。骨片は小片であり、人骨かどうかの判断はなしえない。土器は完形ないしは、完形に近い個体が多く、いずれも古墳時代前期の所産である。なお、同住居跡は拡張されており、調査者は新住居跡が機能を失ったのち埋葬施設になったとしている。また、覆土内埋葬の可能性もあるものとみて土層の観察をおこなったものの、掘り込みは確認しえなかったという。

長野市榎田遺跡SB1447：床面から3体の人骨とともに玉類が出土した（図54右）。1号人骨は頭を南に向け、左に横臥している。成人男性の可能性が高い。2号人骨は頭位を西に向け頸骨付近より勾玉1、棗玉1、管玉3、ガラス玉4が出土している。勾玉は蛇紋岩製、棗玉は黒曜石製、管玉は碧玉および緑色凝灰岩製である。人骨は女性の可能性が高い。3号人骨は頭位を北にむけ、右に横臥している。胴部より碧玉および緑色凝灰岩製の管玉2点が出土している。土器類はいずれも床面より浮いた位置で出土しており、榎田編年4段階（古墳時代前期）に位置づけられる。

16号住居跡からは人骨が一切出土しておらず、玉類の出土点数にも圧倒的な格差が認められるなど、いま示した2例とは相違点がある。加えて両例は古墳前期の事例であり、比較は慎重にすすめる必要がある。しかしながら、出土状況の特徴を勘案したとき、やはり副葬品と考えれば、出土点数の多さに対する疑問は解決するのであり、まとまった状態での出土状況も装身具として一連の状態であったと解することができる。

以上より、現状の理解では、竪穴住居跡が墓として利用され、ガラス小玉が被葬者の装身具として副葬された可能性を高く見積もることができよう。

**ガラス小玉の流通** 齊藤あやは、関東甲信地域における弥生時代のガラス小玉の分布を検討したうえで、その流入ルートについて、日本海側のルートと太平洋沿岸のルートの二通りを想定した。日本海側については新潟県→長野県北信地域→同東信地域→群馬県→埼玉県→東京都というルートを想定しており、色調については淡青色が中心になるという（齊藤2012）。齊藤は流通の形態には言及していないが、完成品の流通なのか、素材の流通

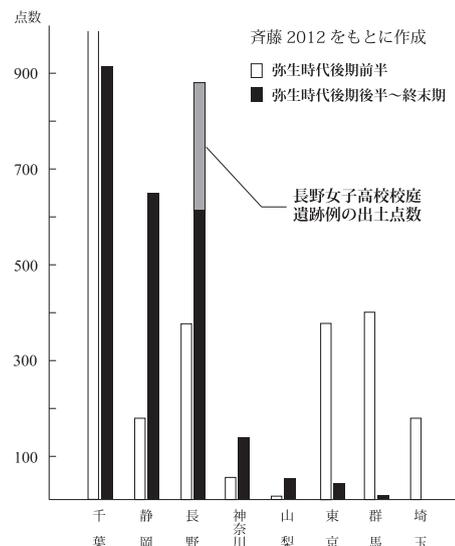


図53 関東甲信地域におけるガラス玉の出土数

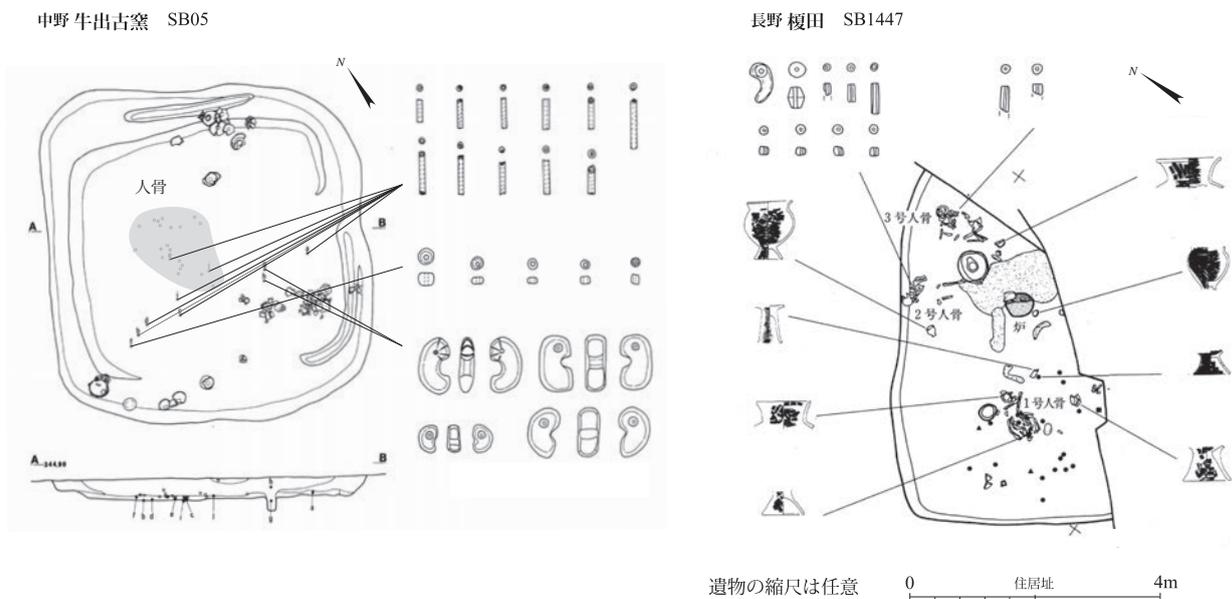


図54 住居内埋葬の諸例

なのかという違いは、該期におけるガラス玉の製作、流通の具体相を考えるうえで重要な論点である。こうした検討を欠いた理解には不備が残るが、本例も日本海ルートを経由して流入した可能性が高い。

釧との共伴 表4で注目したいのは、ガラス小玉出土遺構で鉄釧や銅釧との伴出事例が多いという事実である。鉄釧や銅釧といった金属製品の共伴例についてはかねてから指摘されてきたところであり（岩本2002・土屋2009）、今回あらためて共伴率の高さが確認されたといえる。螺旋状鉄釧は中部高地と関東地方に分布が偏在する器物であり、該期における鉄の流通と絡めて議論が展開されてきた。その製作地については中部高地での一括生産を想定する意見もある。しかしながら、中部高地の鉄釧は線幅が4mm程を測り、幅が8mmを越える関東地方の鉄釧と明らかに異なる。段数や、断面形態にも大きな違いを見出せることから、一括生産とする見解には賛同しかねるものであり、関東と中部高地それぞれの地域で生産していたと考えるのが妥当であろう。製作地の問題はさておくとしても、鉄素材もガラス製品ないしはガラス素材とともに、日本海ルートを経由して流入している可能性を高く見積もることができる。言い換えれば、当時稀少であった鉄製品を惜しみなく副葬する当地の習俗は、長野盆地への豊富な鉄の流入を示す証左といえよう。

こうした器物を入手するためには窓口ともいえる北陸の諸地域との交流が不可欠であったといえ、北陸系土器が多く出土するという事実も、こうした文脈のなかで理解することが可能であろう。

## 5. 結 語

以上、長野女子高校校庭遺跡出土のガラス小玉について検討をすすめてきた。時間的制約もあって成分分析を実施し得ていない点に憾みが残るが、住居内埋葬に伴う副葬品であること、県内はもとより関東甲信地域地域でも卓越した出土数を誇ることを知り得た点において本節の目的は一定程度達成されたものとする。本資料は該期の広範な地域間交流をうかがい知ることができる重要な資料と評価できよう。

ガラス小玉のX線写真の撮影および顕微鏡にあたっては、長野県立歴史館 学芸部考古資料課 白沢勝彦氏にご高配を賜り、関連文献についてもご紹介いただいた。また、住居内埋葬の事例については、長野県埋蔵文化財センター 鶴田典昭氏にご教示をいただいた。文末であるが記して両氏に感謝の意を申し上げたい。

## 参考文献

- 赤澤徳明 2013 「東海から南関東で出土する北陸系土器について」『西相模考古』第22号、西相模考古学会、pp.99—104。
- 青木和明 1987 「土口將軍塚古墳出土土師器の編年的位置」『長野県史跡 土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』、長野市教育委員会、更埴市教育委員会、pp.92—99。
- 青木一男 1998 「第4章 成果と課題 第1節中部高地型櫛描文系土器群の理解」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その3— 松原遺跡 弥生総論6 弥生後期・古墳前期』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36、pp.197—229。
- 岩本 崇 2002 「東日本における弥生時代鉄釧の製作背景」『古代文化』第54巻第2号、
- 風間栄一 1998 「長野市地附山古墳群上池ノ平古墳群出土の須恵器」『信濃』50—7、信濃史学会、pp.443—461。
- 小坂延仁 2008 「大室第168号墳出土土師器の位置付けについて」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅱ—大室谷支群・大石単位支群の調査—』、東京堂出版、pp.67—73。
- 斉藤あや 2012 「弥生時代時代におけるガラス玉の流入～関東地方とその周辺を中心に～」『西相模考古』第21号、pp.29—38。
- 斉藤あや・田村朋美 2013 「小田部古墳出土のガラス玉の再検討」『西相模考古』第22号、西相模考古学会、pp.1—10。
- 坂井秀弥 1985 「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17、pp.9—27。
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内土器研究』XXⅡ、庄内土器研究会、pp.21—41。
- 滝沢規朗 2010 「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号、奥三面を考える会、pp.41—88。
- 土屋了介 2009 「螺旋状鉄釧の基礎的研究—形態と数量的要素を中心に—」『日々の考古学』2
- 千野 浩 1991 「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』41—4、信濃史学会、pp.286—297。
- 千野 浩 1993 「本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について」『本村東沖遺跡—長野高等学校校舎改築に伴う発掘調査報告書—』、長野市教育委員会、pp.180—184。
- 南 久和 1987 「月影式土器小考」『金沢市押野西遺跡』、pp.59—86、金沢市教育委員会。
- 宮本哲郎 1986 「台付裝飾壺の系譜—北加賀の資料を中心とした基礎的考察—」『石川県考古学会誌』29、pp.43—68。
- 堀 大介 2002 「附編 古墳成立期の土器編年—北陸南西部を中心に—」『朝日山』、朝日町教育委員会、pp.1—114。

## 資料文献 (本文ないしは図表において言及、提示した資料のみ記載)

- 根 塚 高橋桂・吉原佳市 2002 『根塚遺跡—墳丘墓とその評価を中心として—』、木島平村埋蔵文化財調査報告書12、木島平村教育委員会。
- 水内坐一元神社 青木和明・長瀬出・加藤拓也 2006 『水内坐一元神社遺跡(4)—(株)山二小島団地二期工事地点・ガーデンパーク小島団地造成地点—』、長野市の埋蔵文化財第113集、長野市教育委員会。
- 檀 田 清水竜太・山下大輔 2004 『檀田遺跡(2) 長野市檀田土地区画整理事業(仮称)西友檀田店舗工事・アークロスプラザ長野北建設工事ともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』第2分冊(図版編)、長野市の埋蔵文化財第105集、長野市教育委員会。
- 本村東沖 千野浩編 1995 『本村東沖遺跡Ⅱ—市営住宅上松団地2号棟建設事業ともなう埋蔵文化財発掘調査報告書—』、長野市の埋蔵文化財第67集、長野市教育委員会。
- 吉田古屋敷 矢口忠良・飯島哲也・森田利枝 2007 『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡(3)—JR吉田踏切除去(市道吉田朝陽線)事業地点—』、長野市の埋蔵文化財第118集、長野市教育委員会。
- 吉田四ツ屋 寺島孝典・風間栄一・山田美弥子 1993 『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(6)・棗河原遺跡』、長野市の埋蔵文化財第75集、長野市教育委員会。
- 榎 田 土屋積・百瀬長秀・広田和穂ほか編 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書37—長野市内その10—榎田遺跡 第一分冊』、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書12、長野県埋蔵文化財センター。
- 春 山 白居直之編 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11—長野市内その9—春山・春山B遺跡』、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書45、長野県埋蔵文化財センター。
- 村東山手 白居直之編 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8—長野市内その6—村東山手遺跡』、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書44、長野県埋蔵文化財センター。
- 北平1号 土屋積・青木一男・町田勝則 1996 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7—長野市内その5—大星山

- 古墳群・北平1号墳』、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20、長野県埋蔵文化財センター。
- 篠ノ井 新幹線 市川隆之・両角英敏・渋谷昌英・田中正治郎 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4—長野市内その1—篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡』、(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書33、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局・長野市・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター。
- 篠ノ井バイパス 風間栄一・石丸敦史・柴田洋孝 2007 『篠ノ井遺跡群(6) 主要地方道長野上田線 塩崎バイパス 国庫補助事業地点—』長野市の文化財第117集、長野市教育委員会。
- 篠ノ井 聖川堤防 青木和明・寺島孝典・森泉かよ子・白沢勝彦 1992 『篠ノ井遺跡群(4) —聖川堤防地点—』長野市の文化財第46集、長野市教育委員会。
- 石川条里 宮ノ前 青木和明・風間栄一・千野浩・矢口忠良 1994 『石川条里遺跡(8) —宮ノ前地点—』長野市の文化財第66集、長野市教育委員会。
- 塩崎 市道松節 矢口忠良編 1986 『塩崎遺跡群Ⅳ—市道松節—小田井神社地点遺跡—』長野市の文化財第18集、長野市教育委員会・長野市遺跡調査会。
- 丘中学校 小林康男編 1983 『丘中学校遺跡』、塩尻市教育委員会。
- 後家山 富沢一明ほか編 2004 『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡ⅠⅡ』佐久市埋蔵文化財調査報告第121集、佐久市教育委員会。

#### 挿図出典

図50～52：筆者作成

図53：斉藤2010をもとに筆者作成

図54：報告書より転載、一部改変。

表4：筆者作成

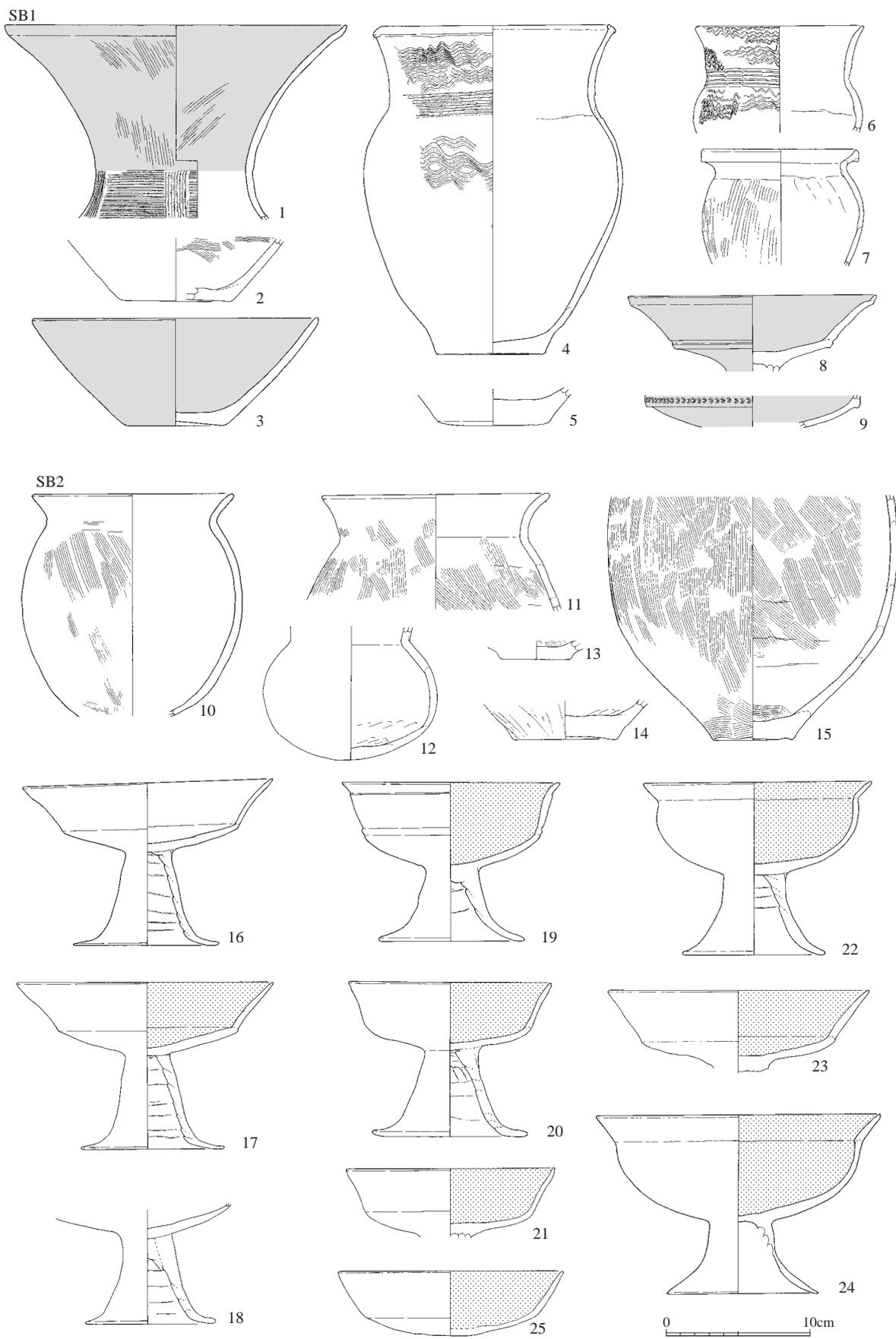


图 55 遗物实测图①

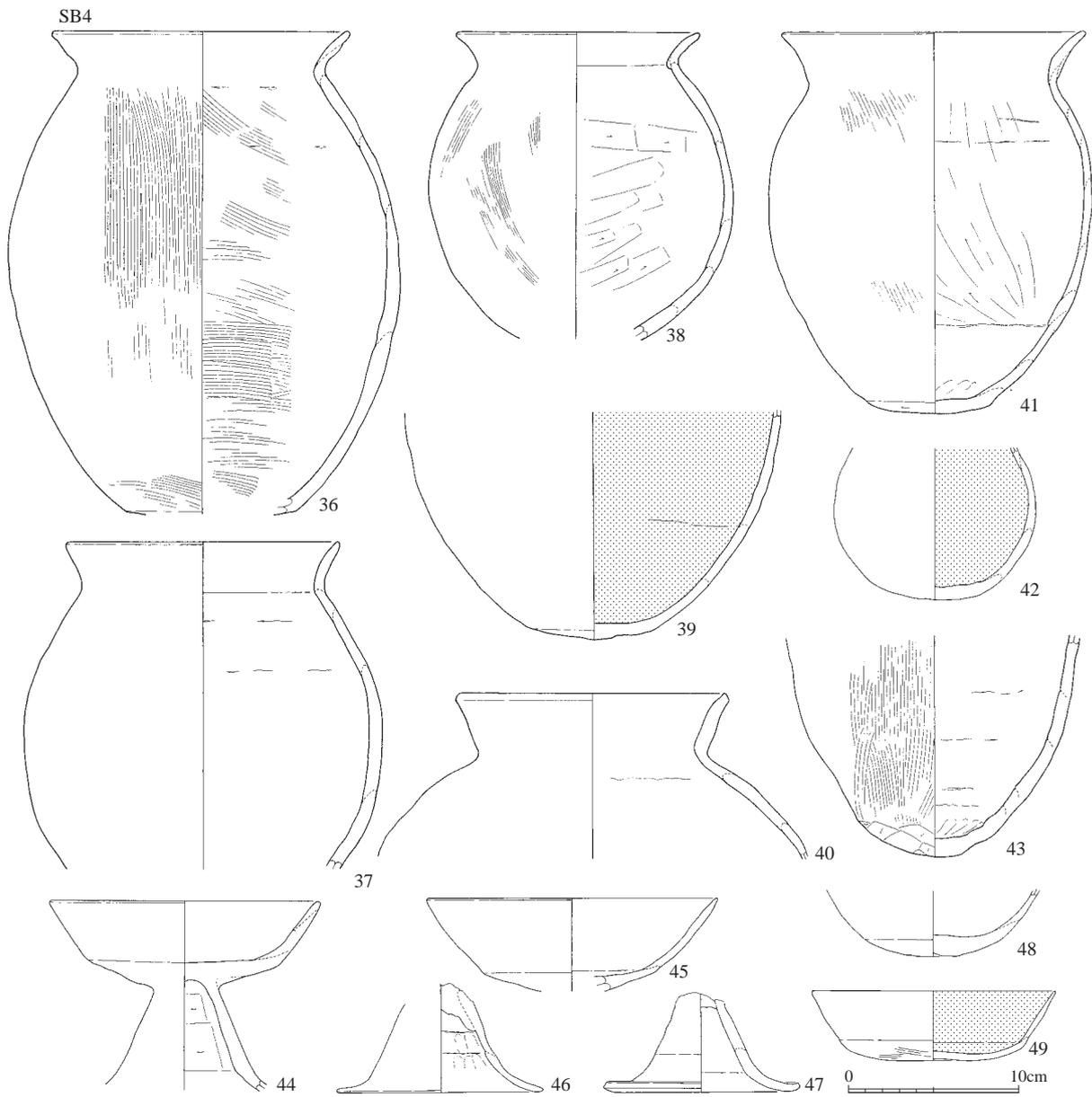
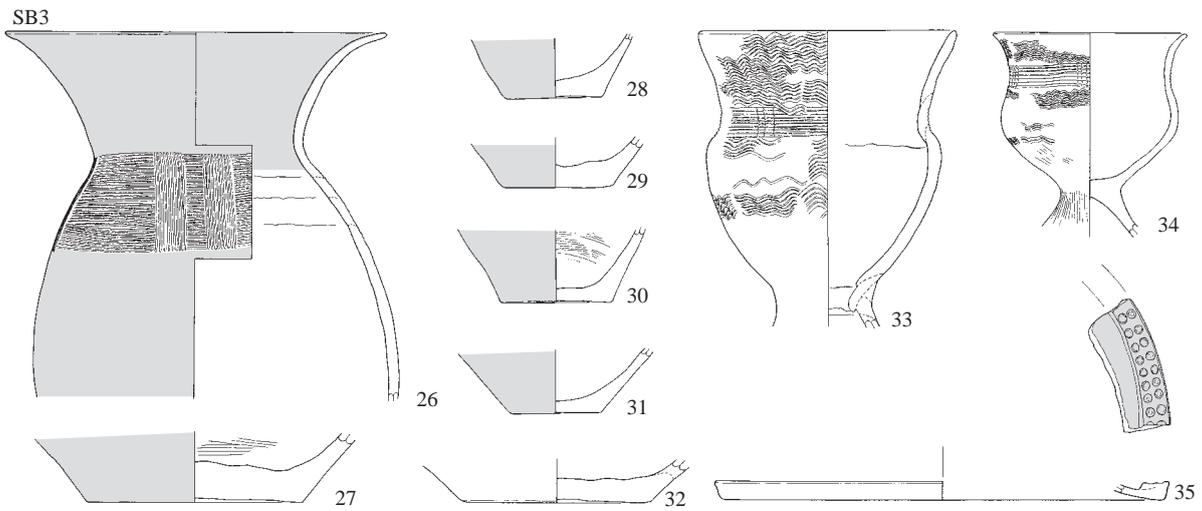


图 56 遗物实测图②

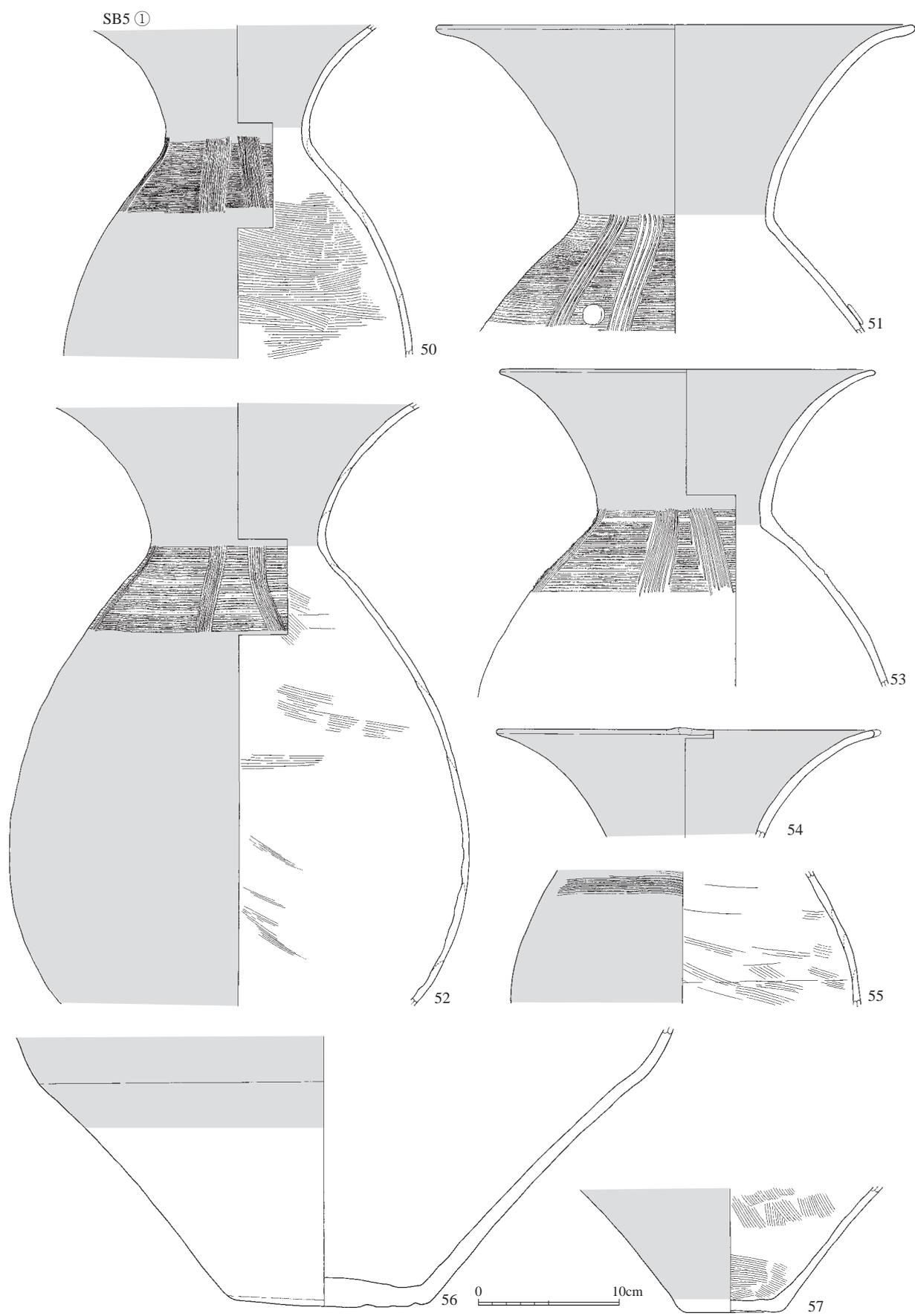


图 57 遗物实测图③

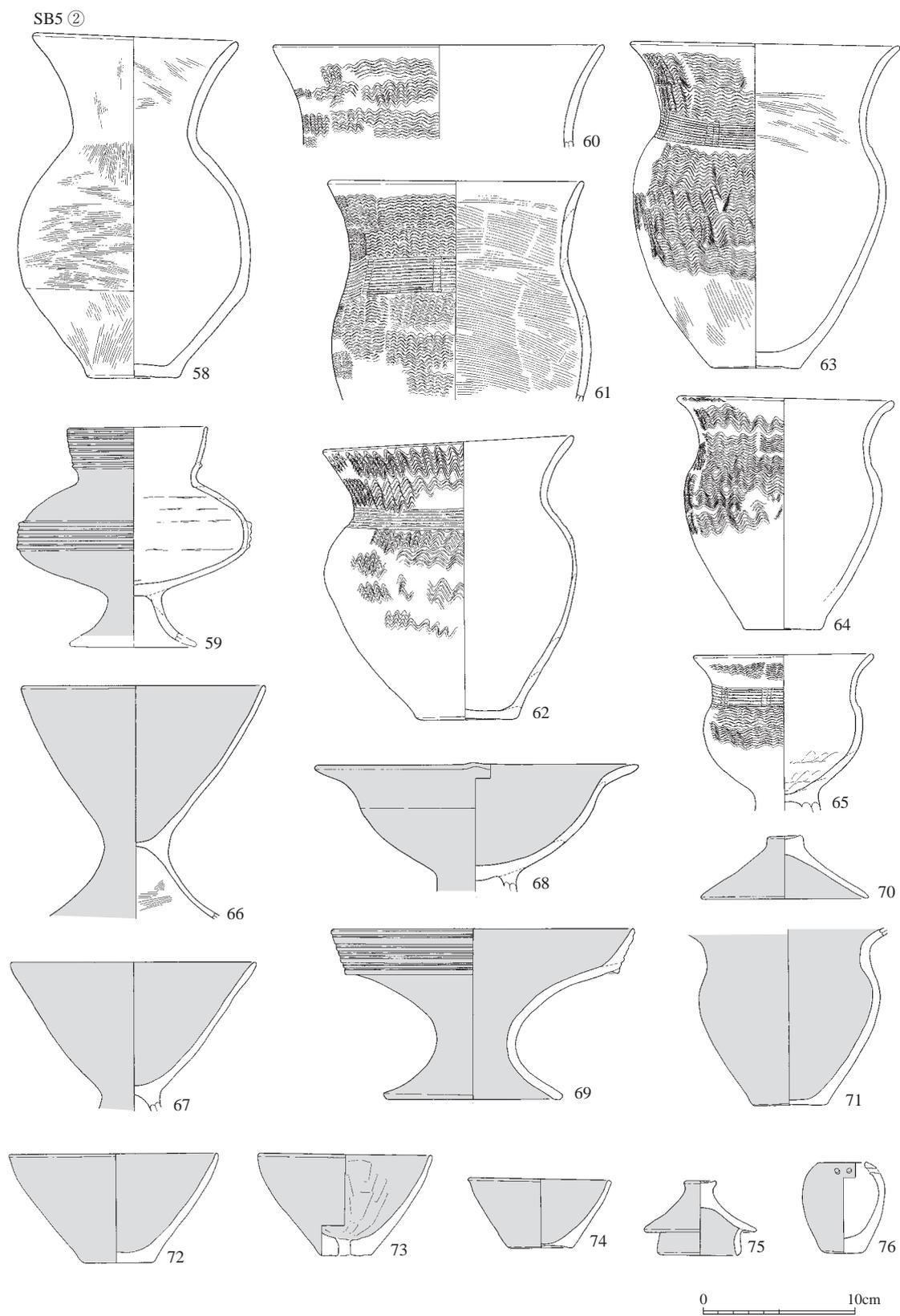


图 58 遗物实测图④

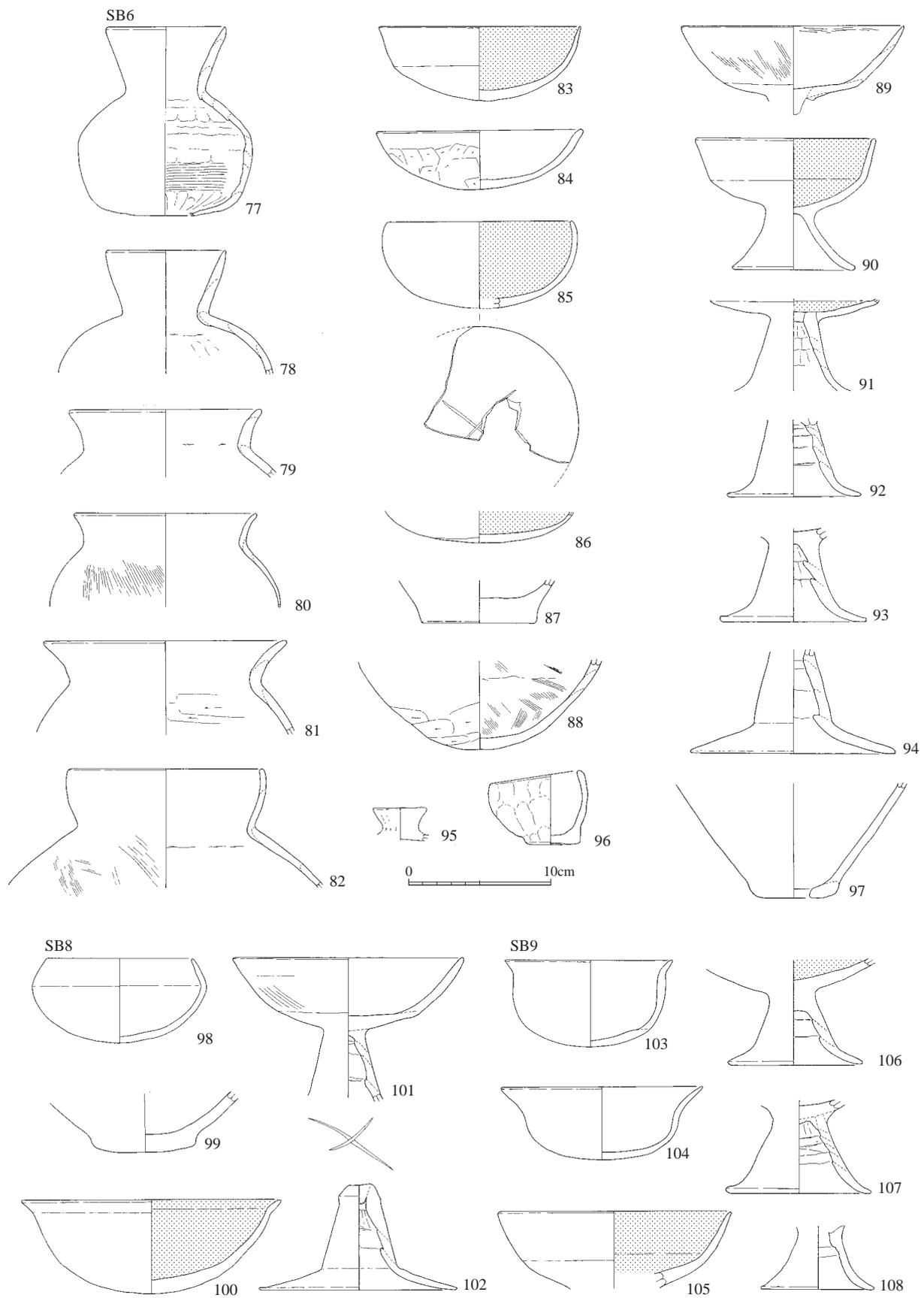


图 59 遺物実測図⑤

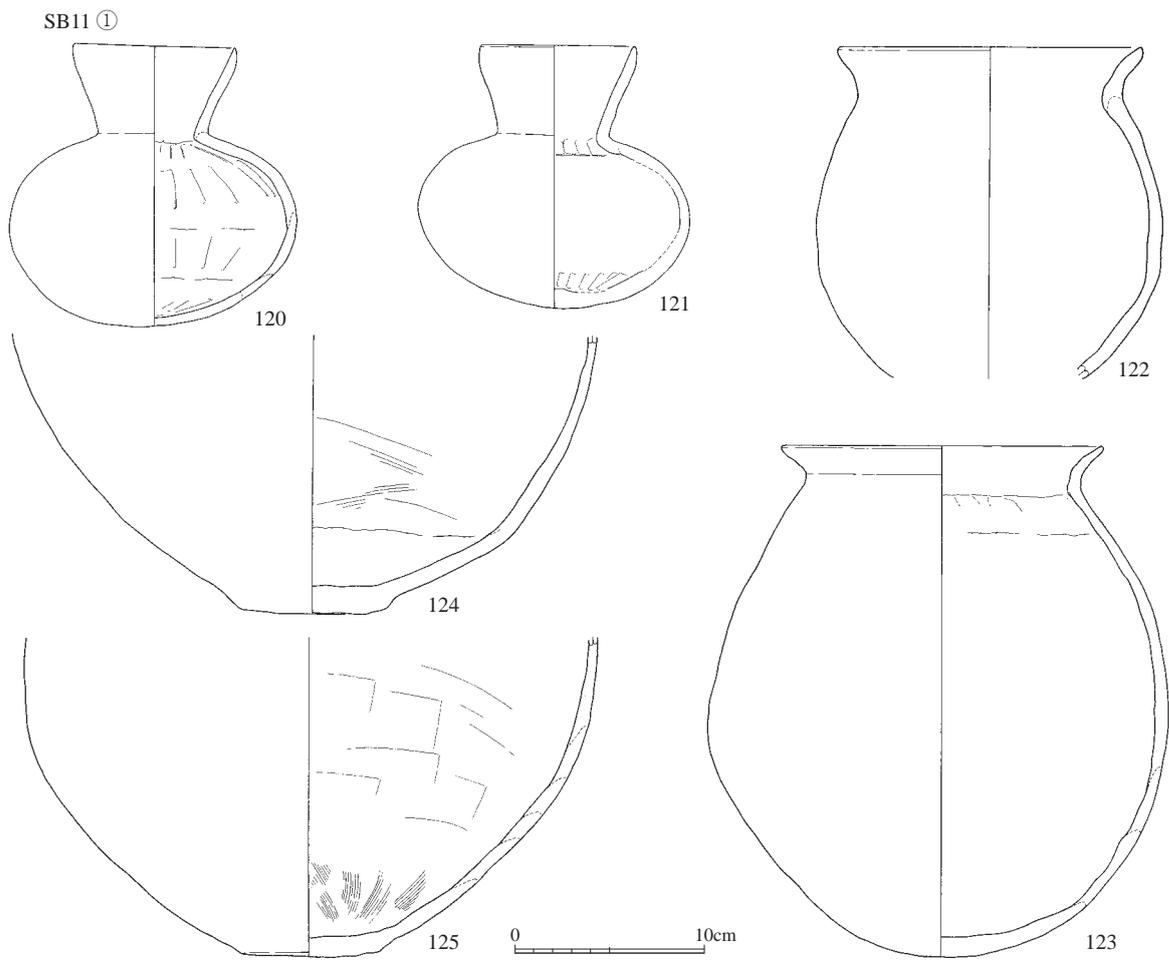
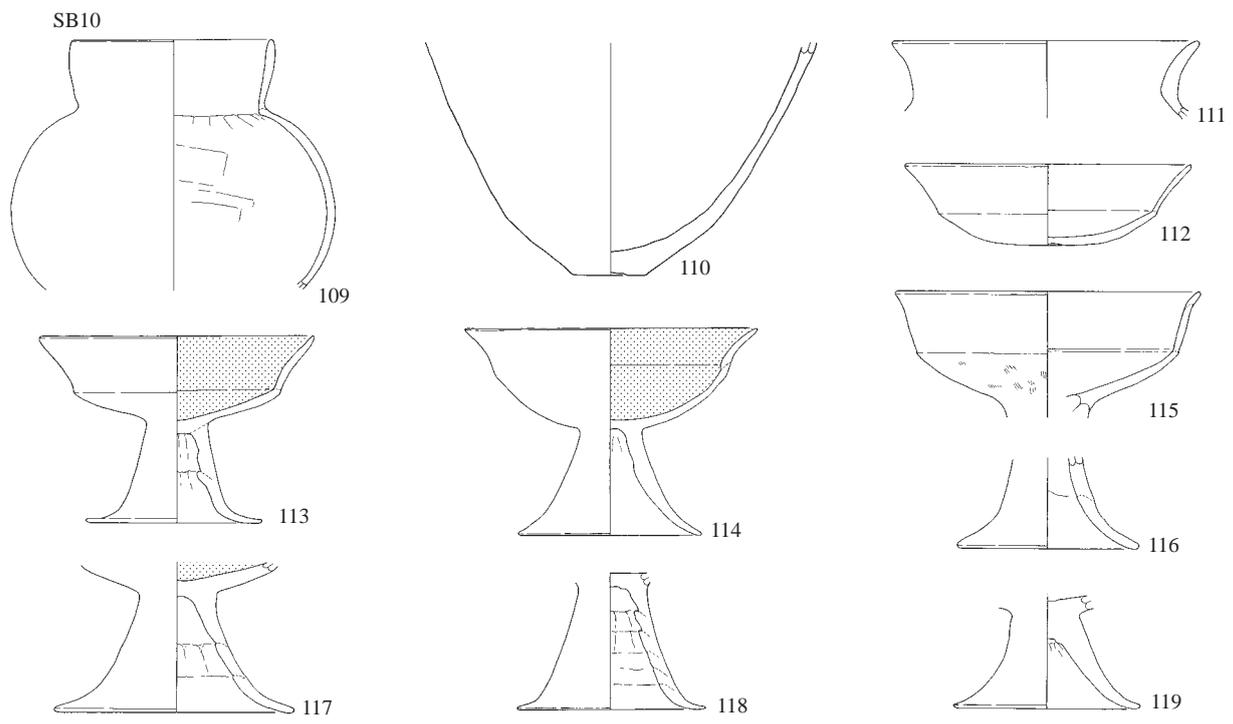


图 60 遗物实测图⑥

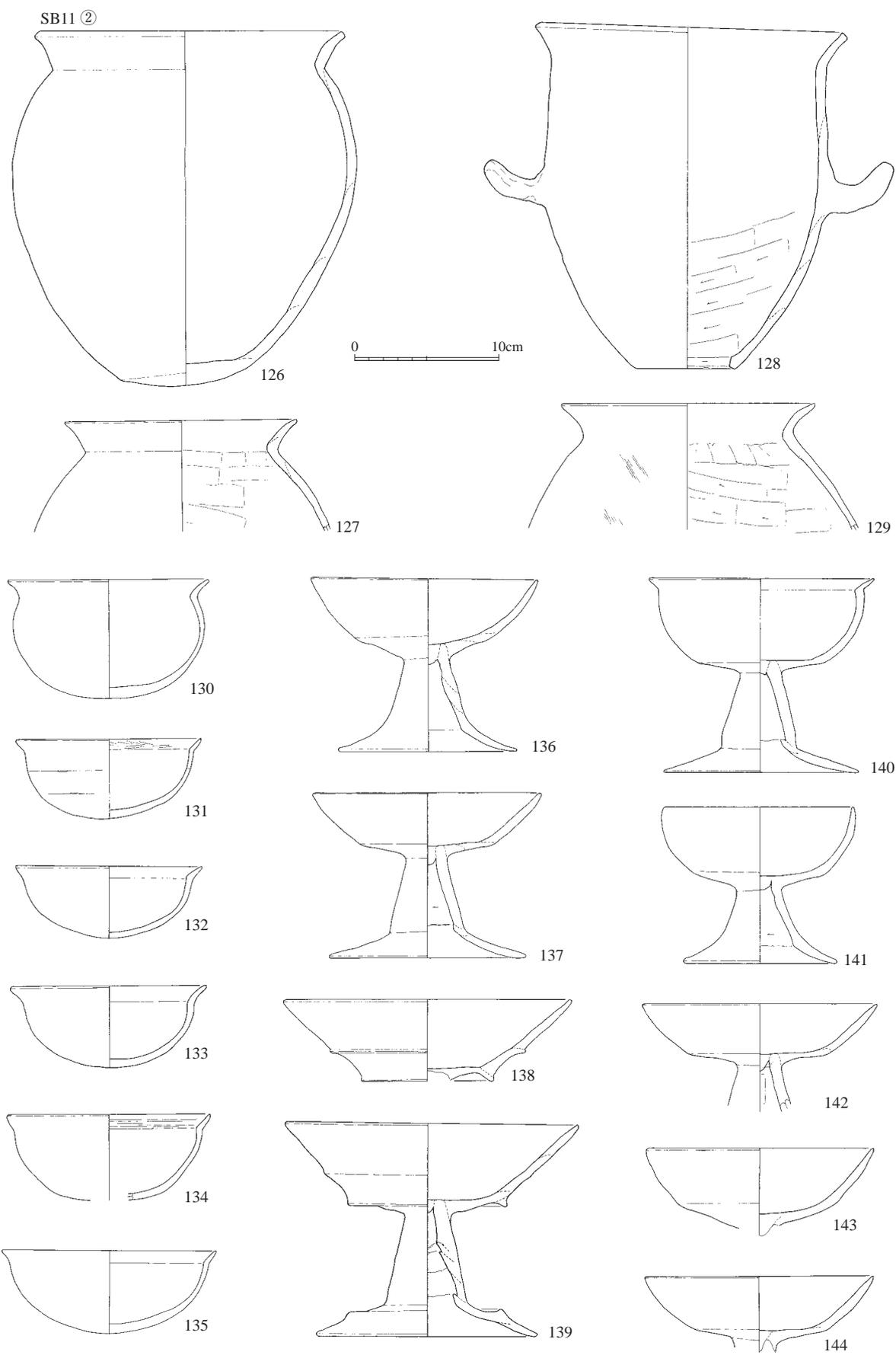
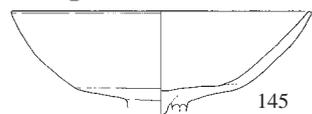
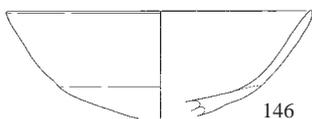


图 61 遺物実測図⑦

SB11 ③



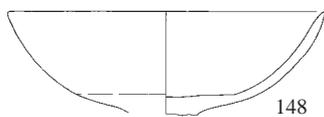
145



146



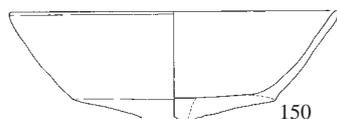
147



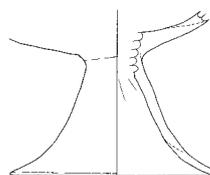
148



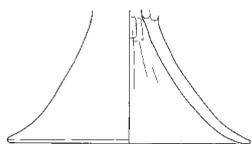
149



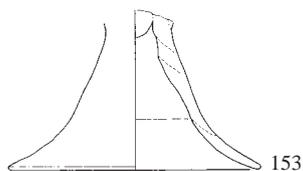
150



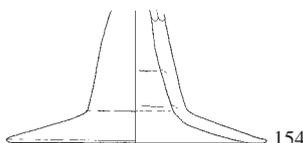
151



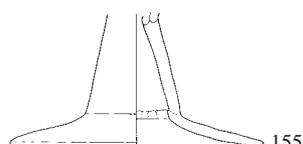
152



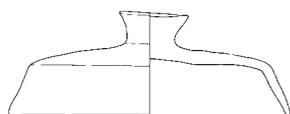
153



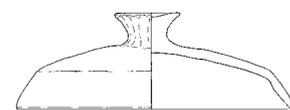
154



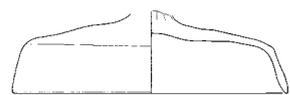
155



156



157



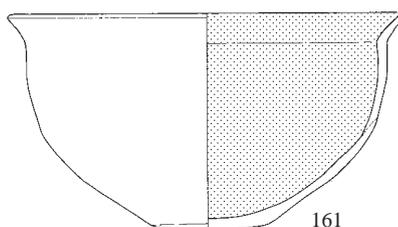
158



159

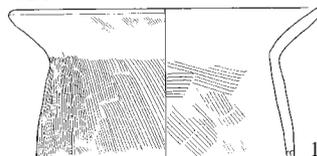


160

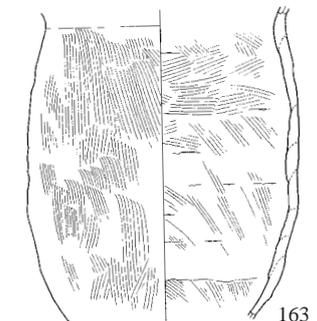


161

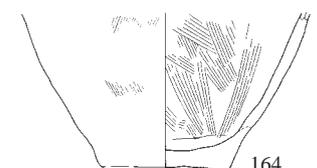
SB13



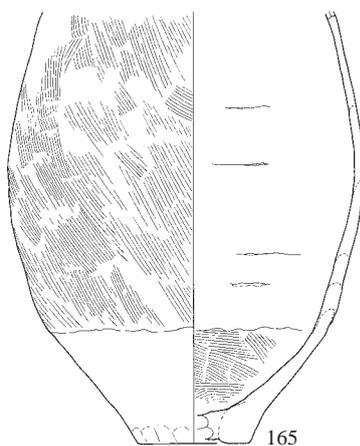
162



163



164



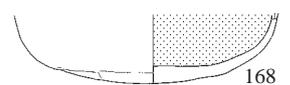
165



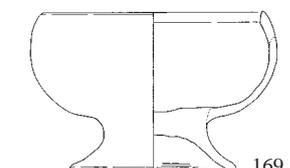
166



167



168



169



170



图 62 遗物实测图⑧

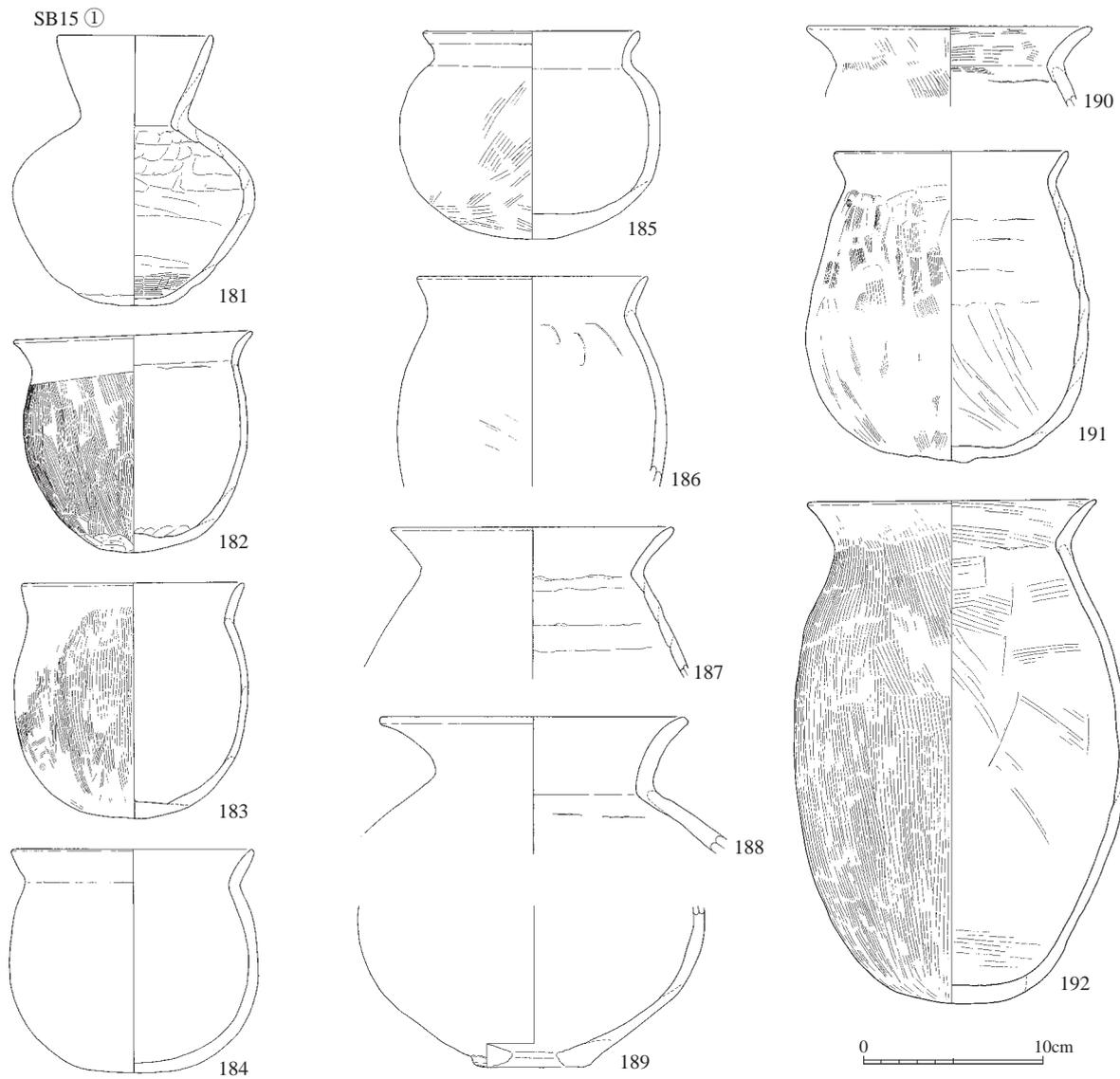
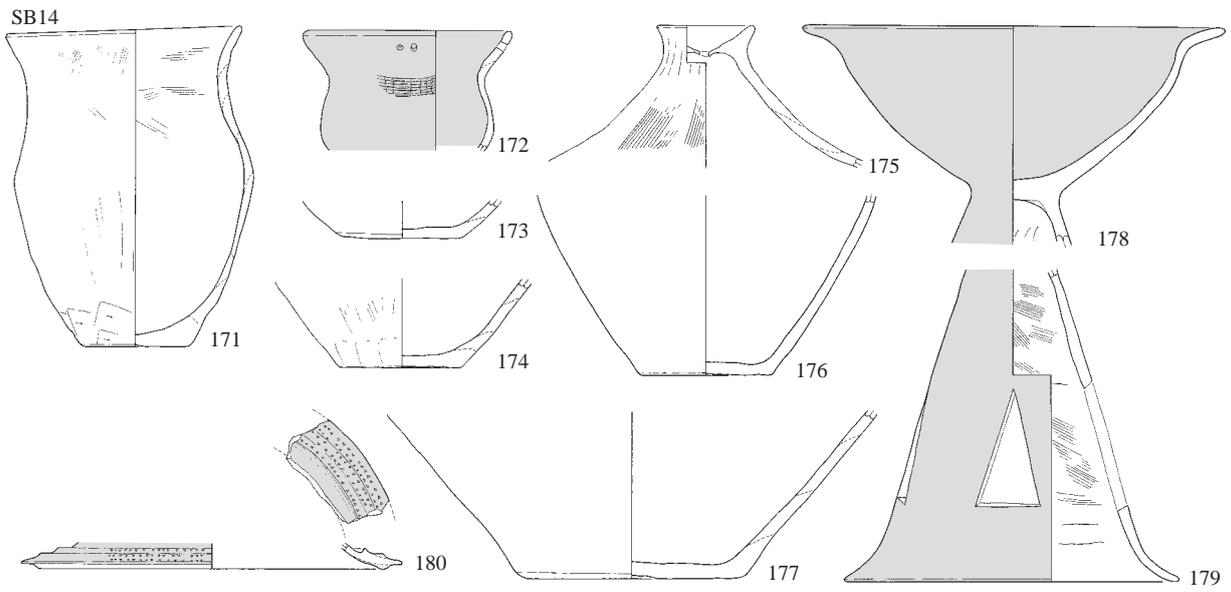
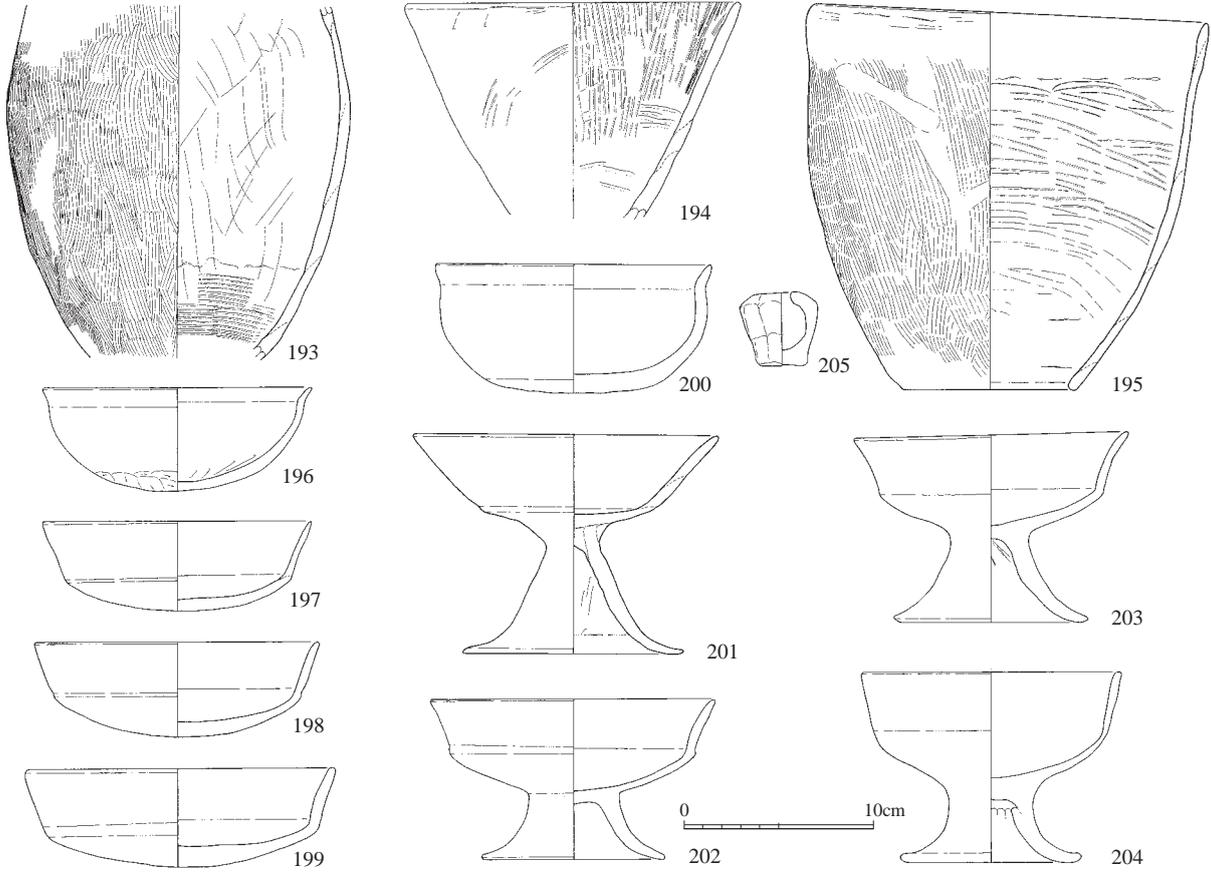


图 63 遗物实测图⑨

SB15 ②



SB16

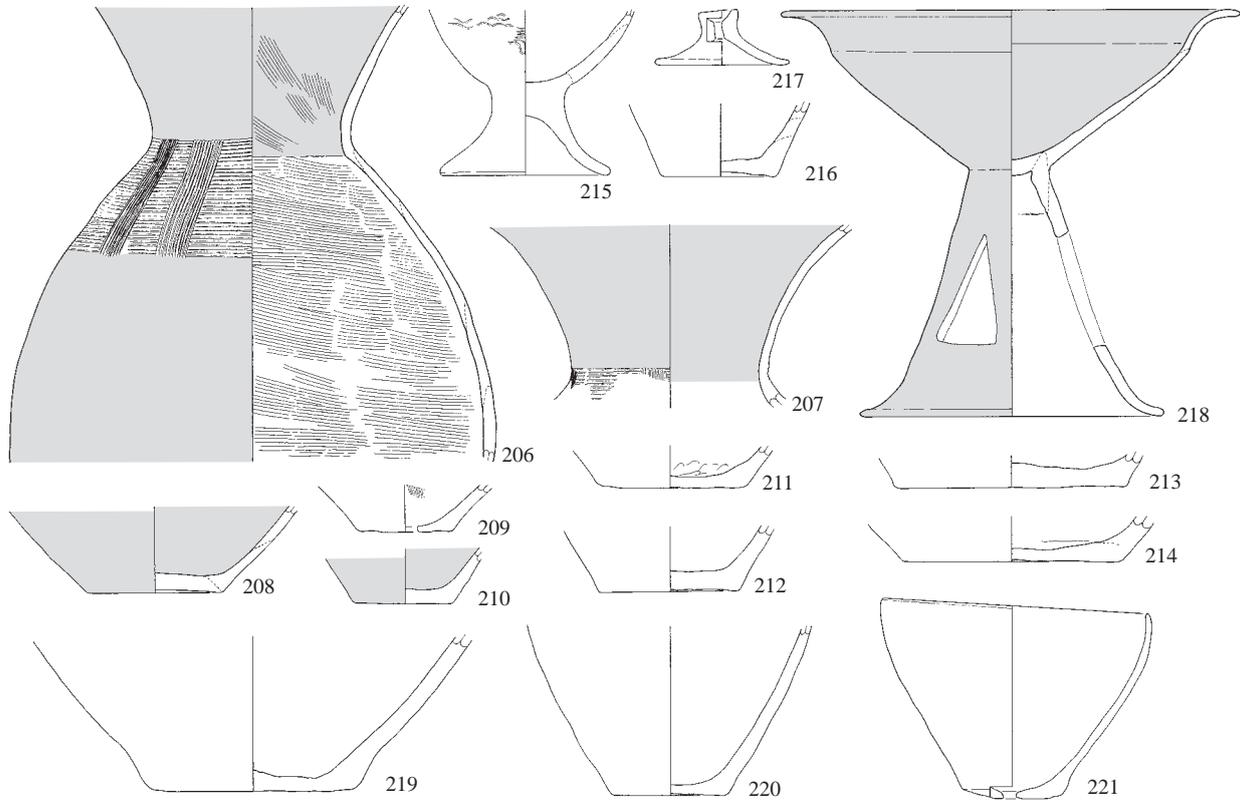


图 64 遺物実測図⑩

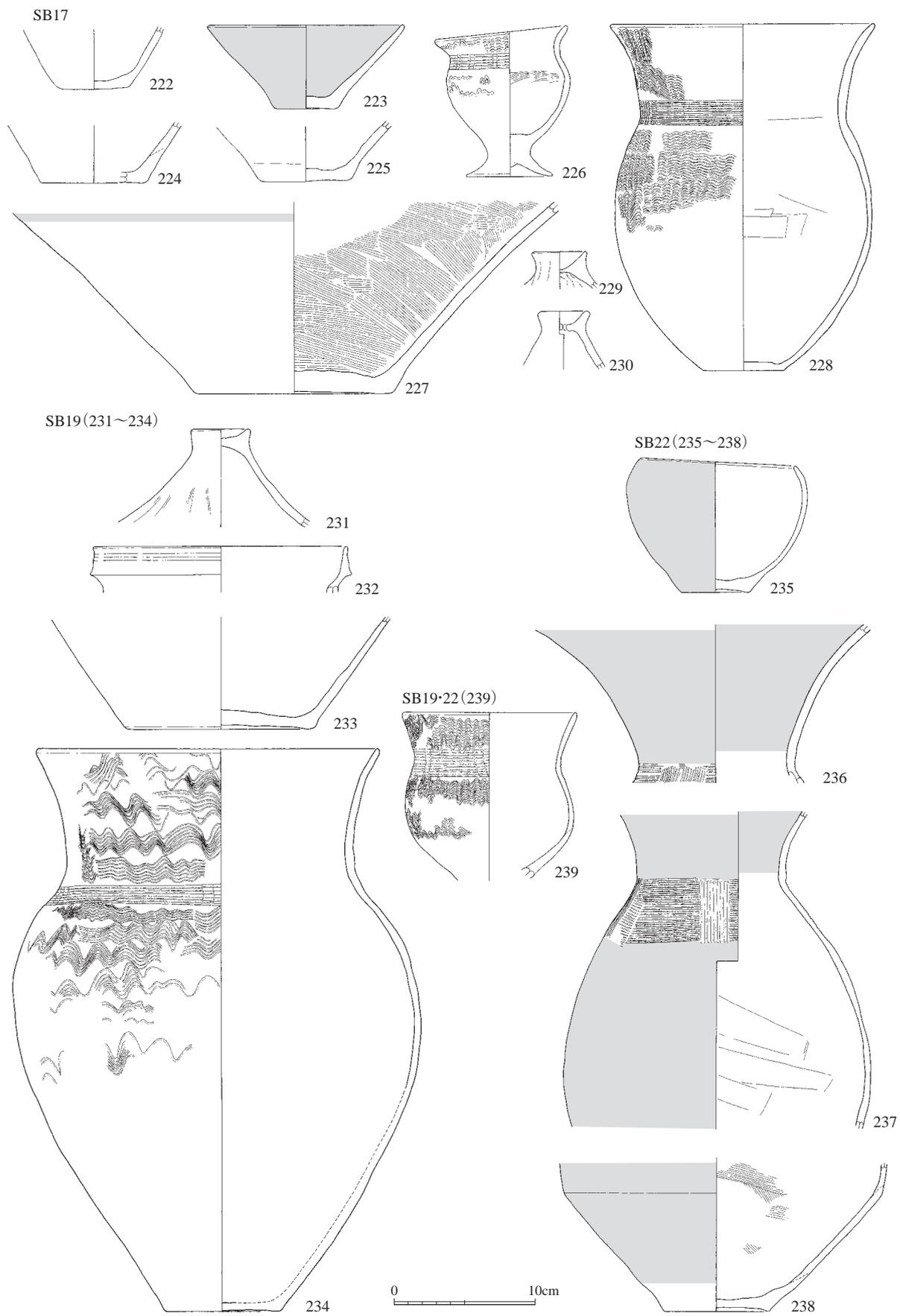


图 65 遺物実測図①

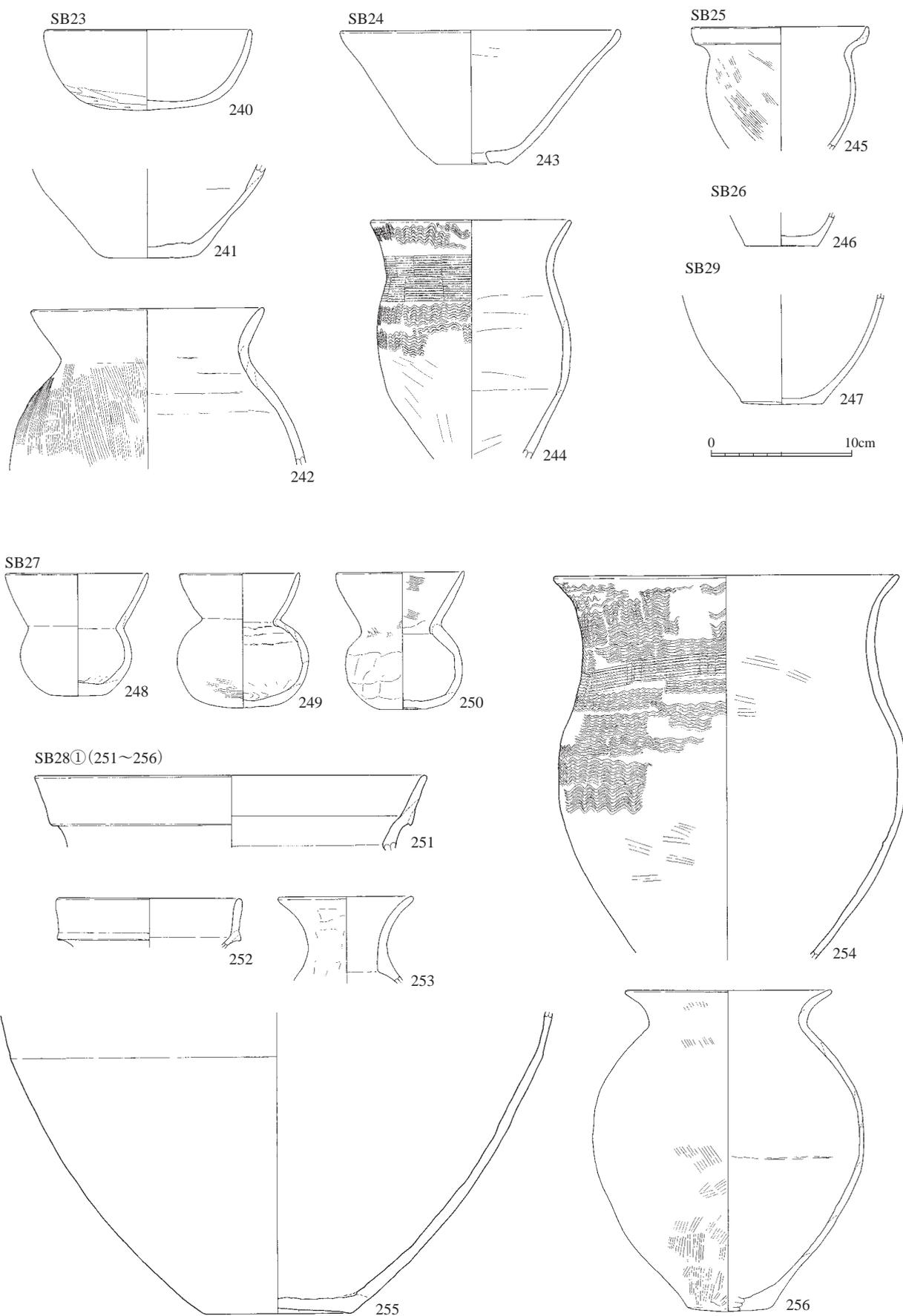


图 66 遺物実測図⑫

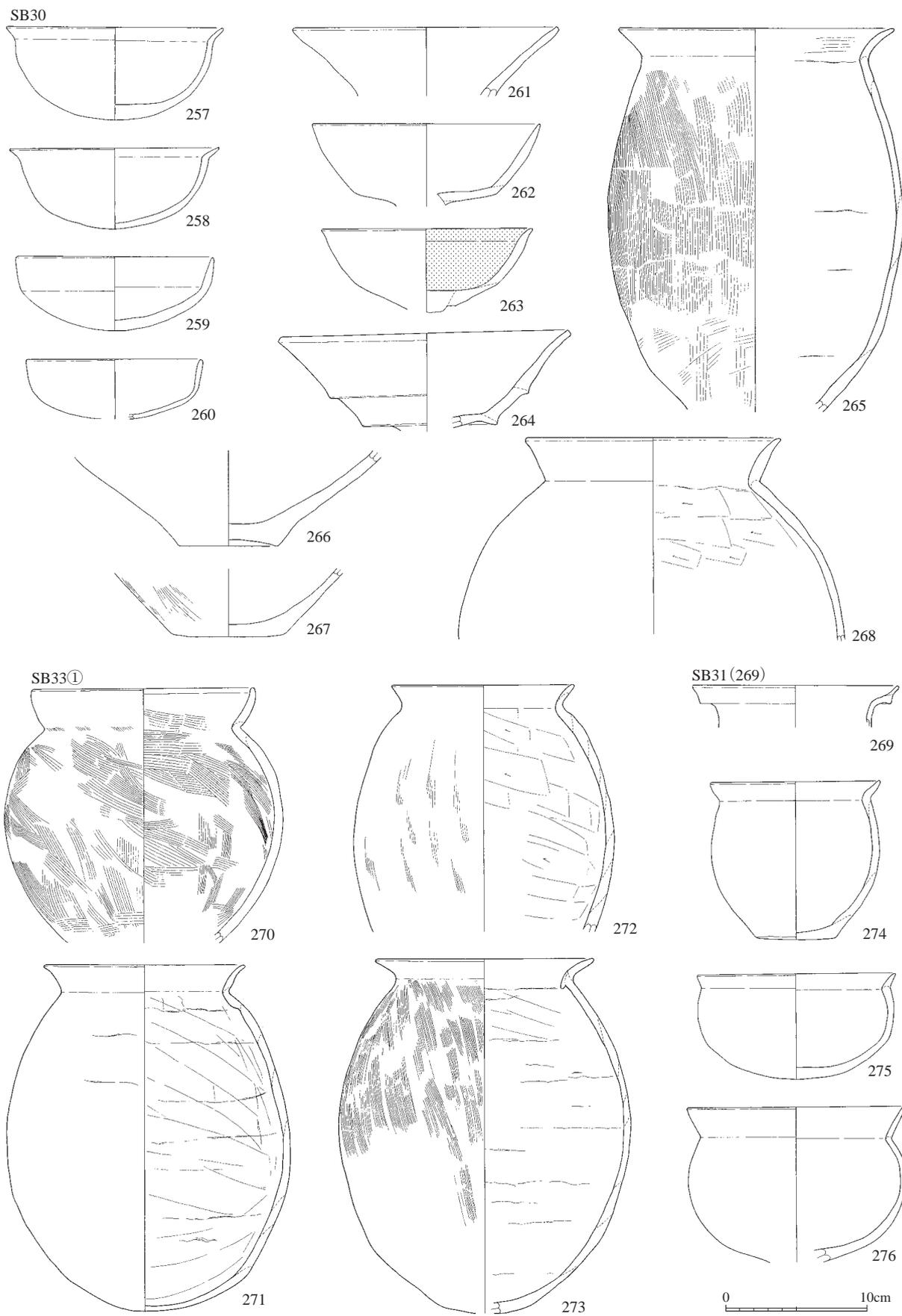


图 67 遗物实测图⑬

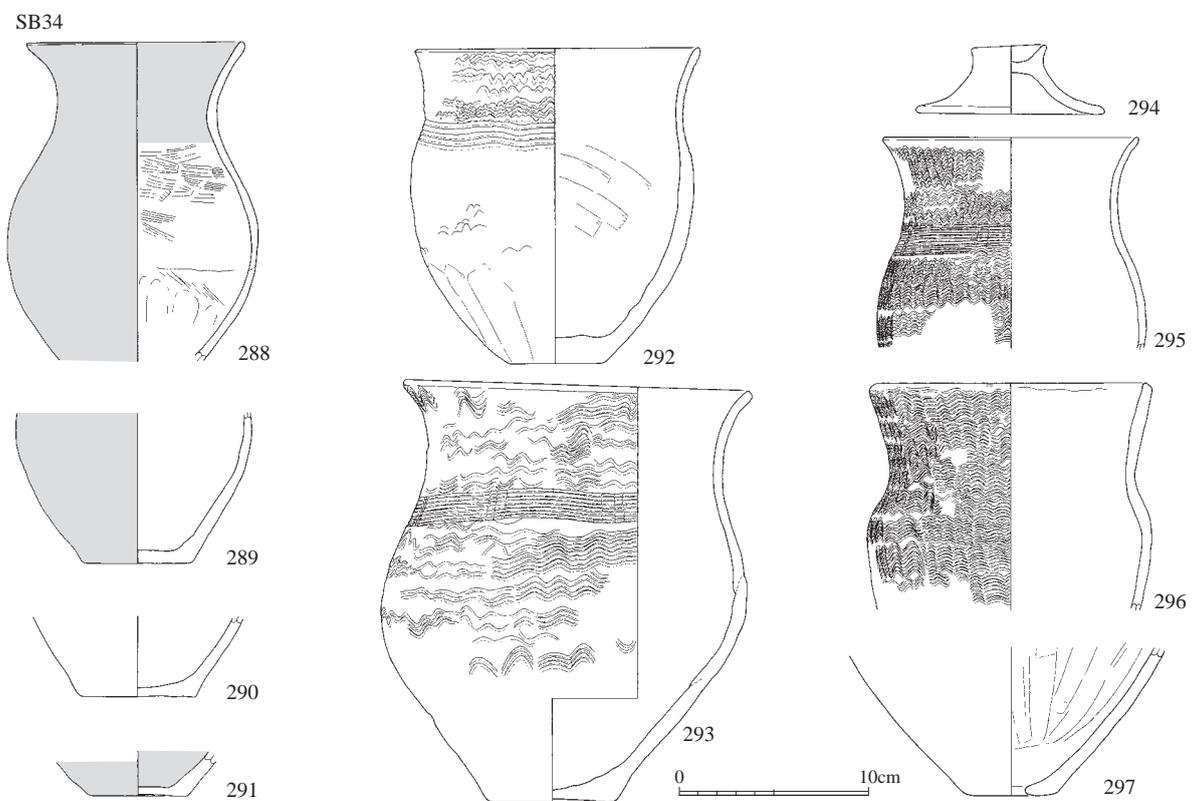
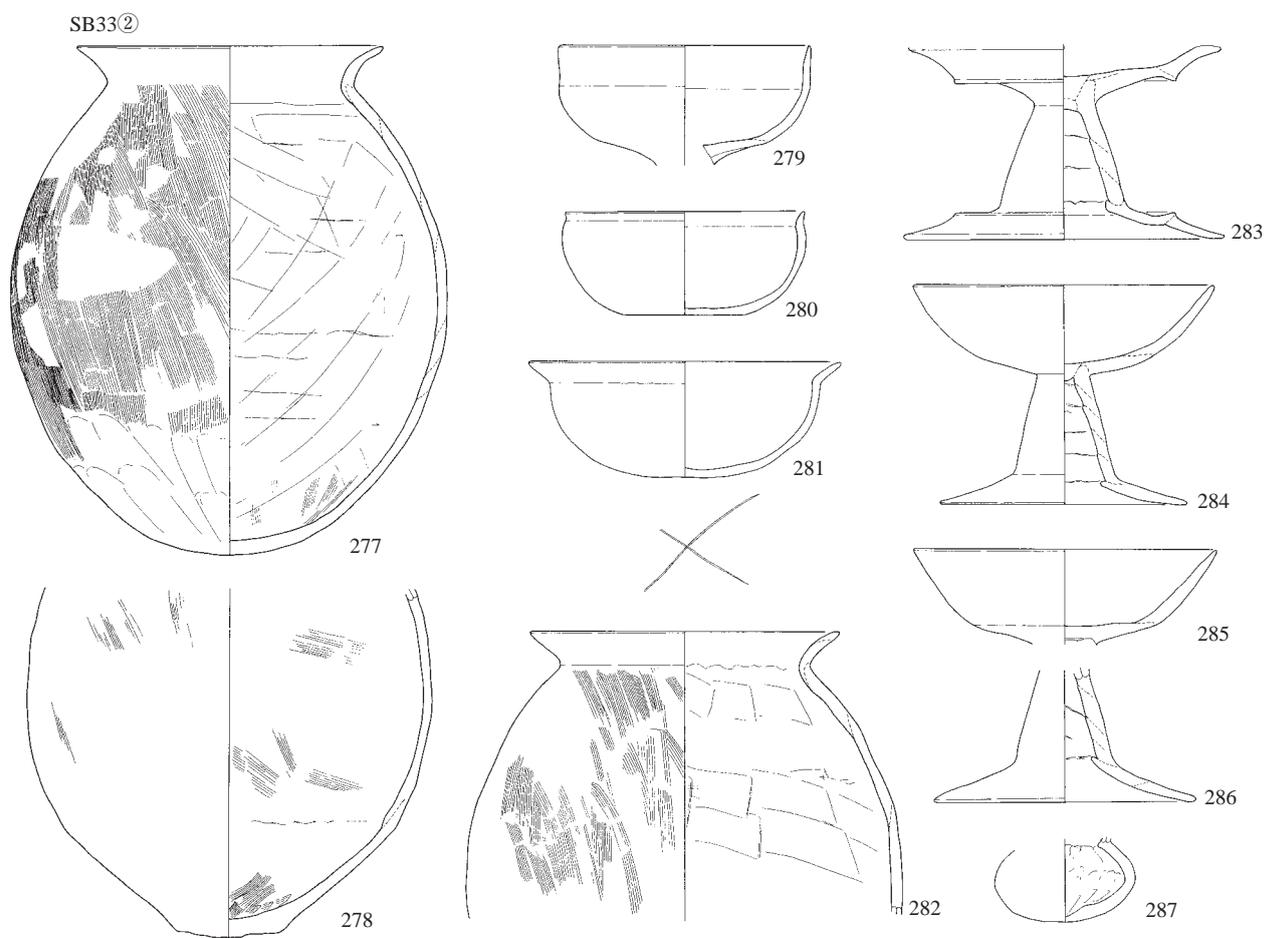


图 68 遗物实测图⑭

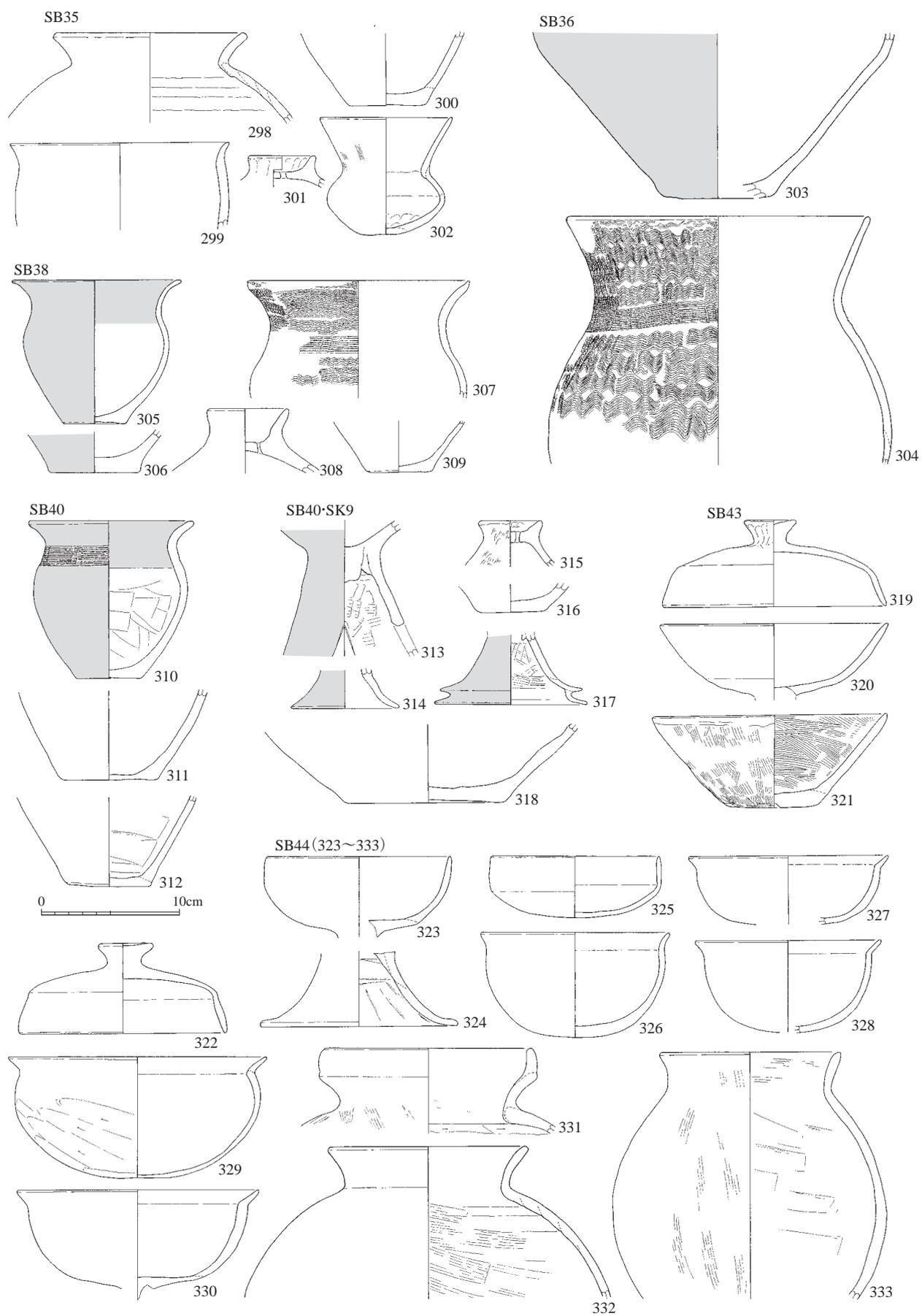


图 69 遗物实测图⑤

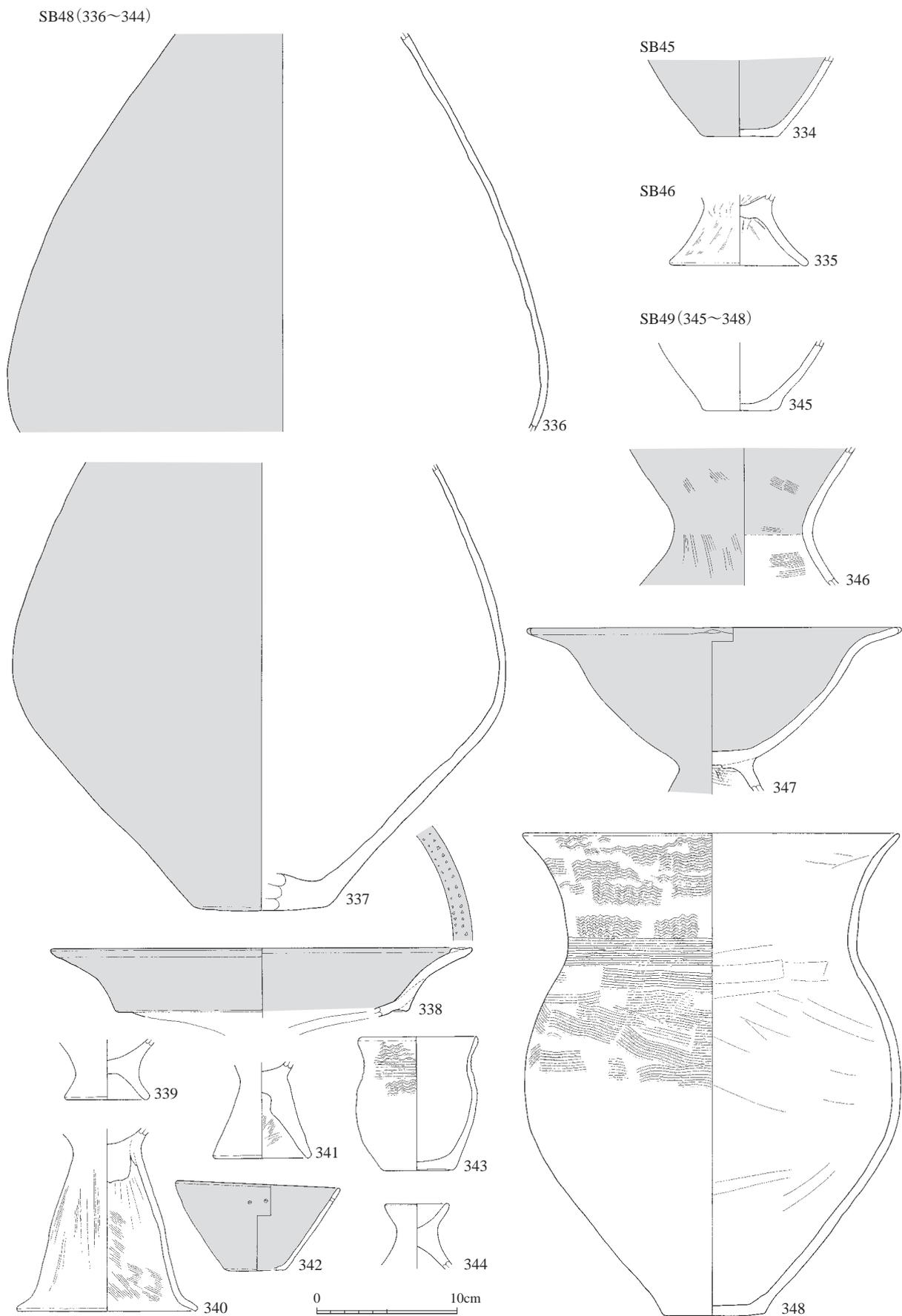


图 70 遗物实测图⑩

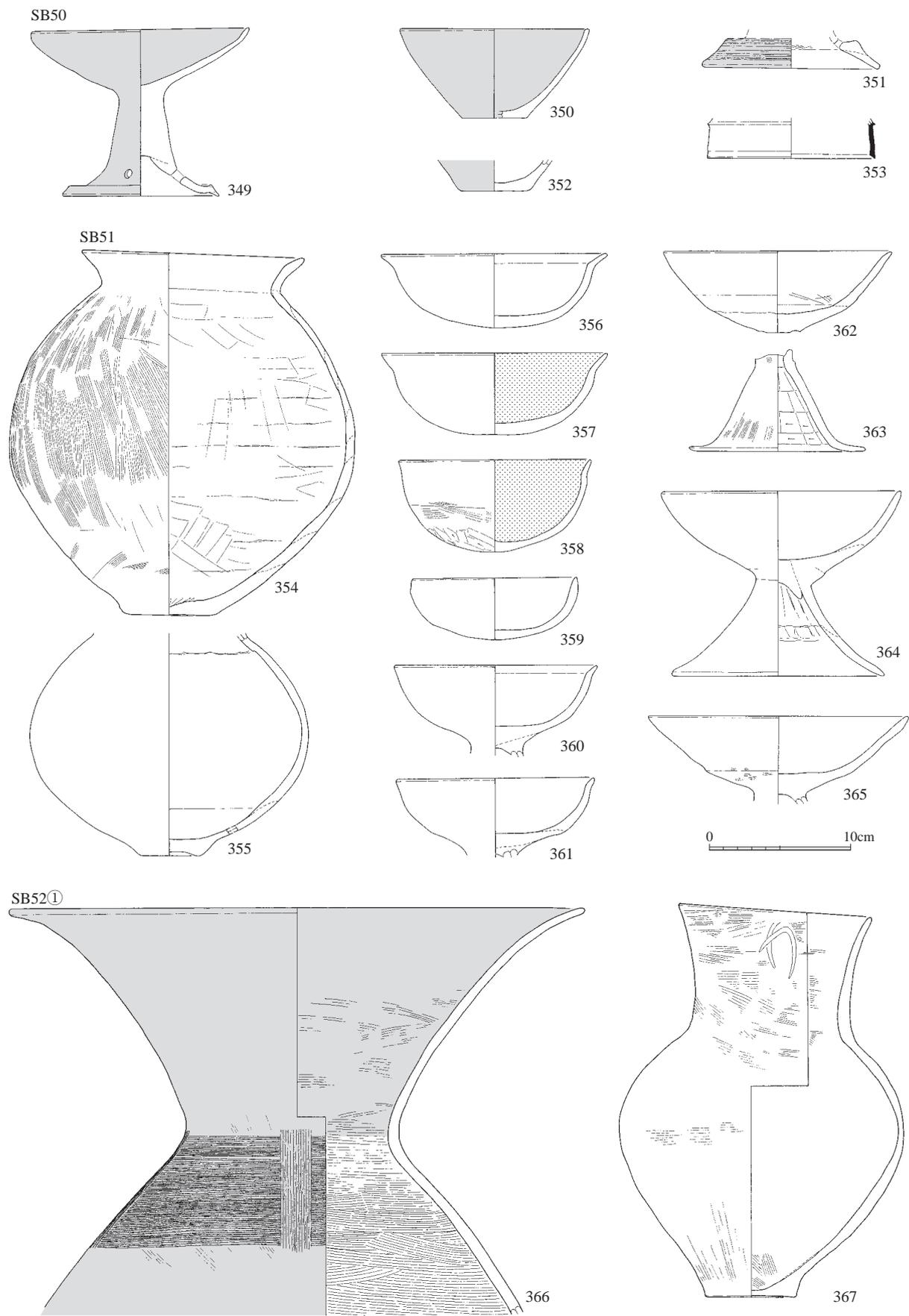


图 71 遺物実測図⑰

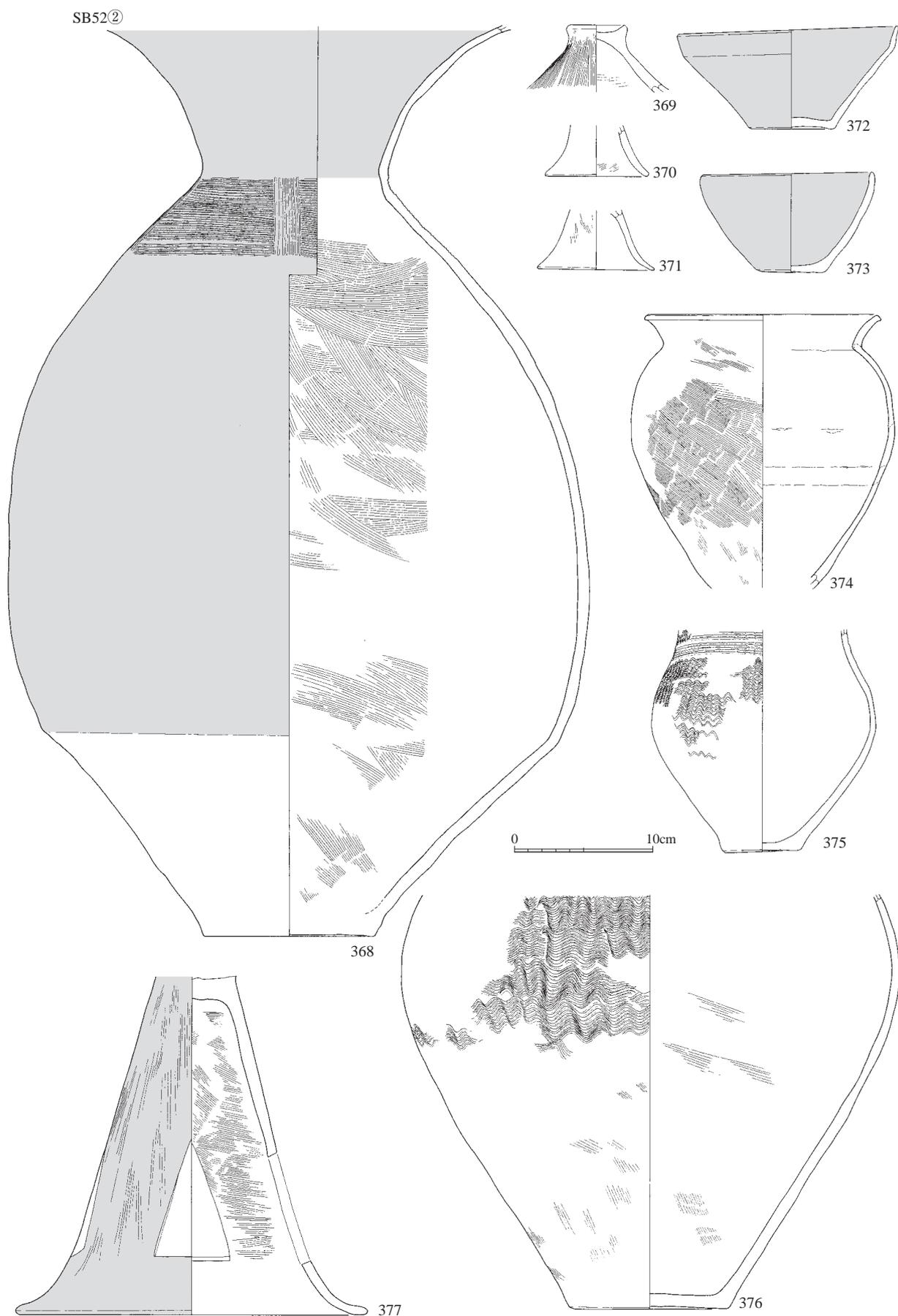


图 72 遗物实测图⑱

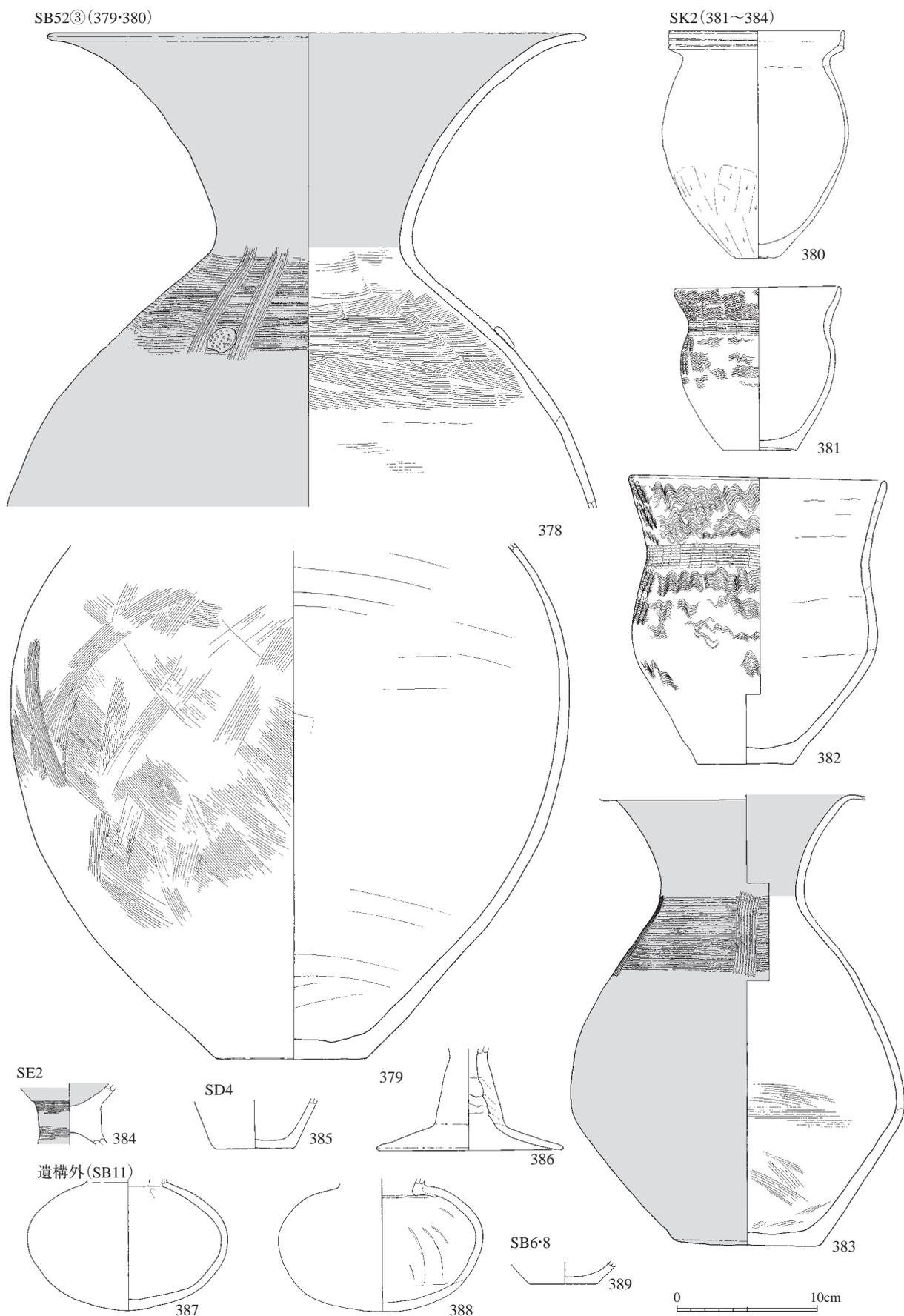
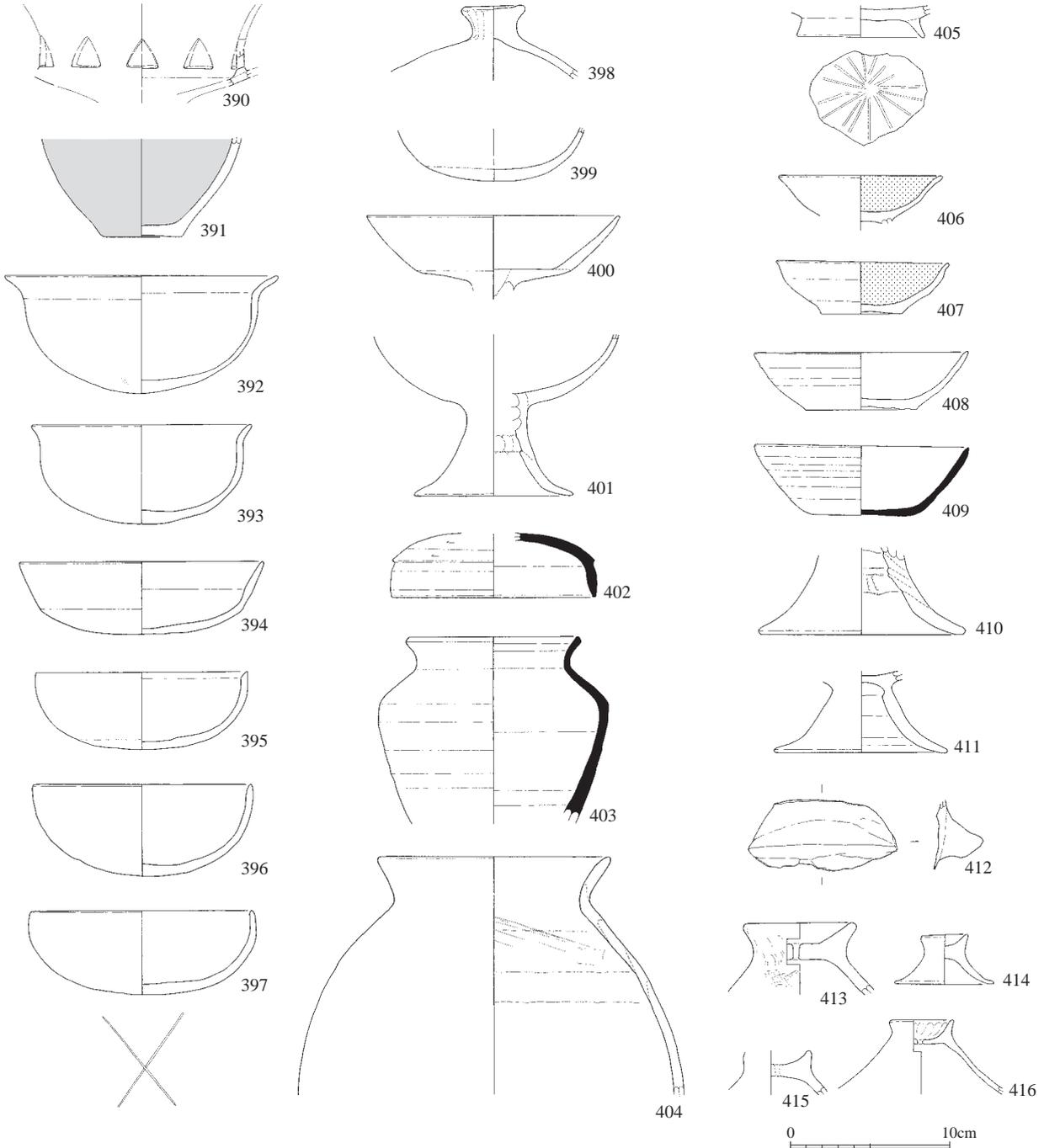
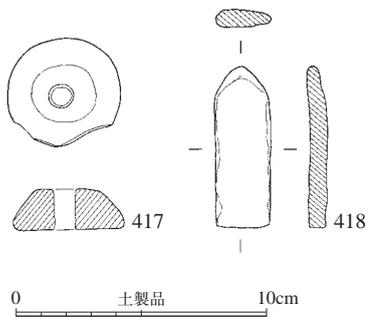


图 73 遺物実測図⑱

遺構外



土製品



石製品・鉄製品

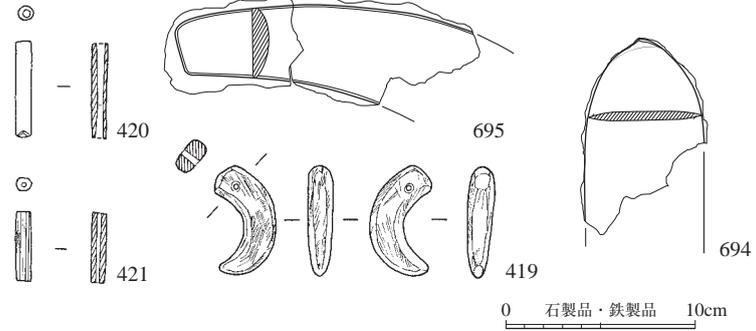
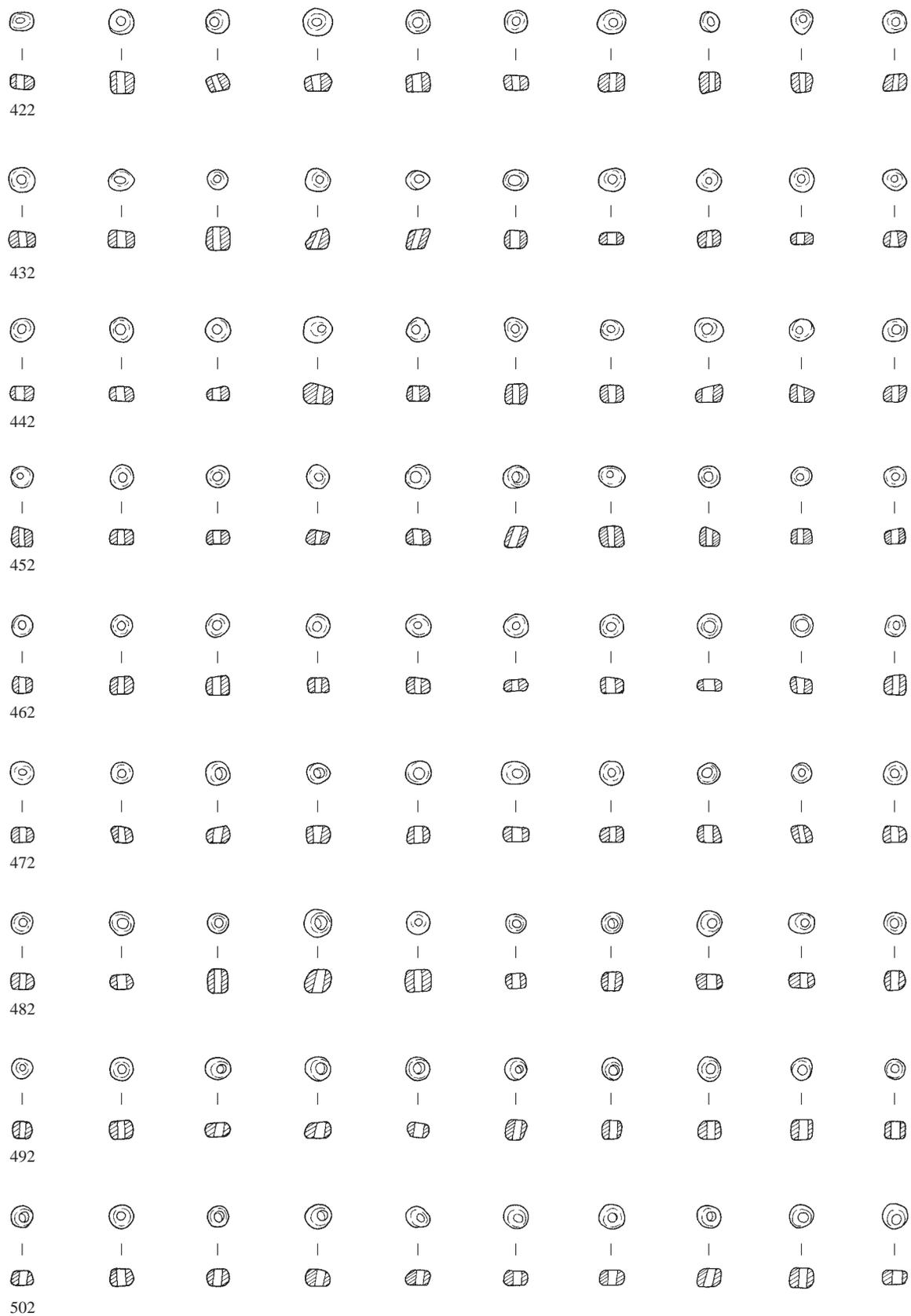


图 74 遺物実測図②



0 2.5cm

图 75 遗物实测图②

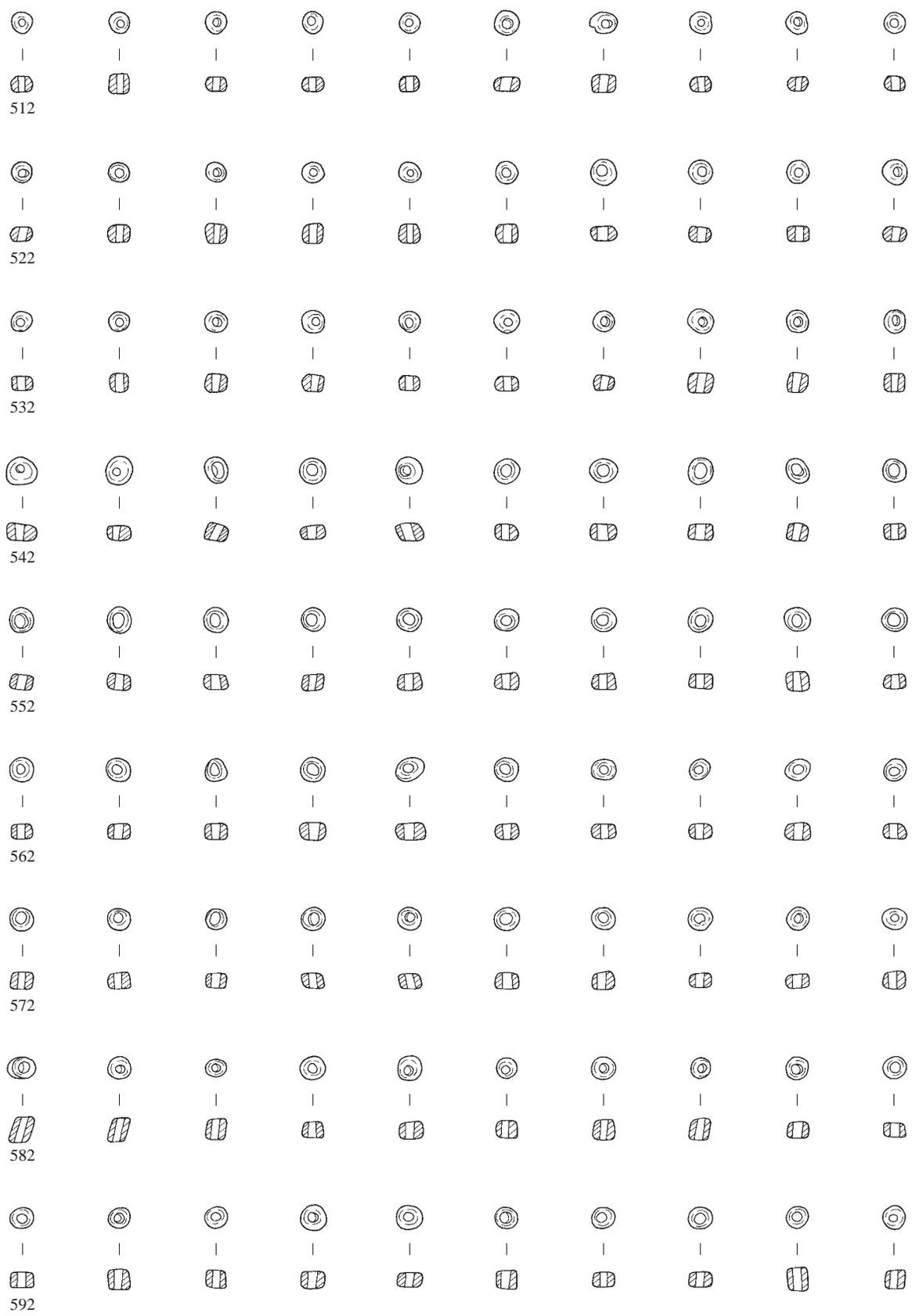


图 76 遗物实测图②

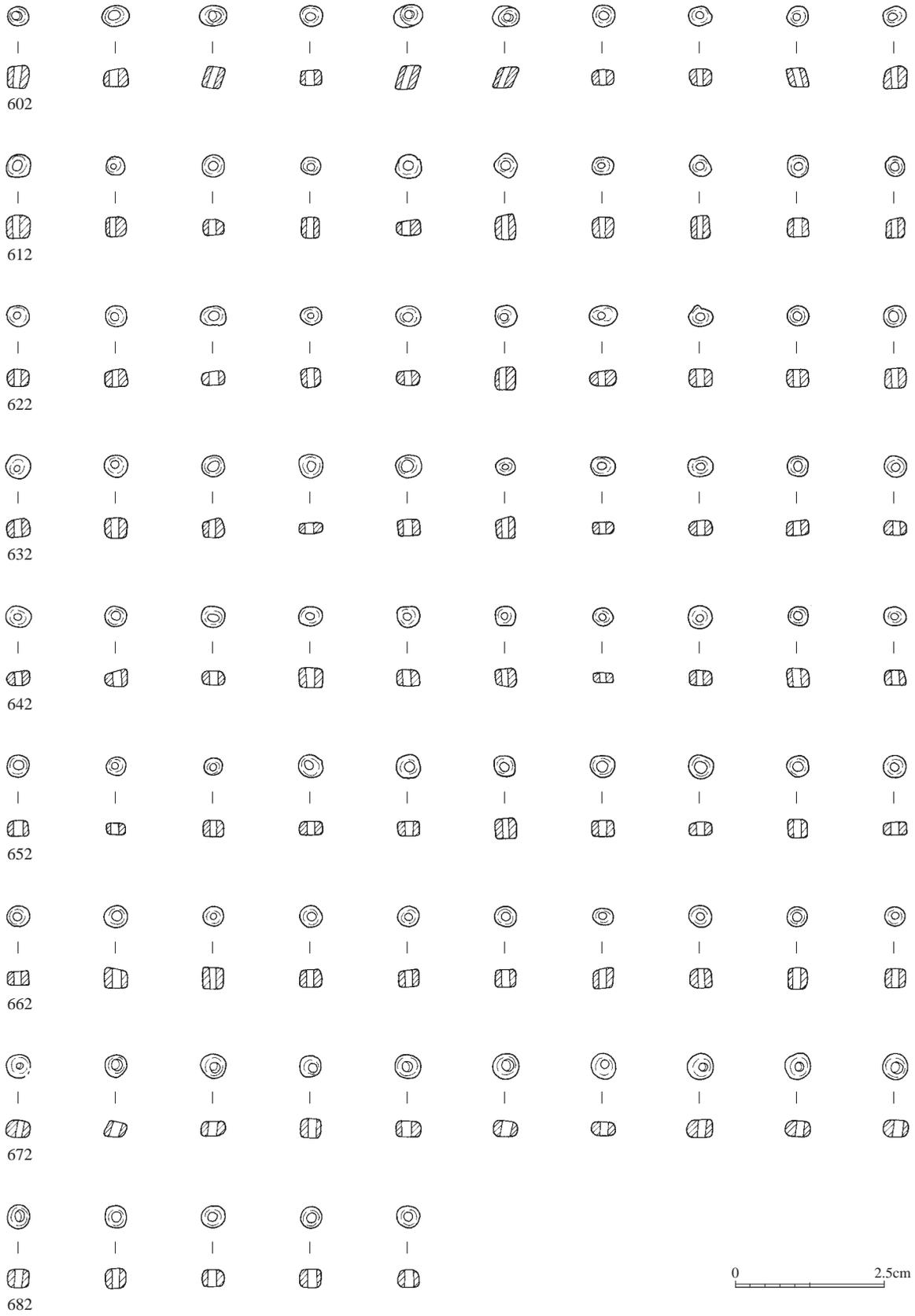


图 77 遗物实测图②③

## 出土遺物観察表



### 凡 例

遺存度：分数表示、10%単位で切り上げ

黒色：内面黒色処理

回転糸切：底部回転糸切調整

ハケ：ハケメ調整

ナデ：ナデ調整

ミガキ：ミガキ調整

櫛波：櫛描波状紋

櫛T：櫛描T文字

簾：櫛描簾状紋

口：口縁部

胴：胴 部

底：底 部

図版 番号	出土遺構		整理No.	時 代	種 別	器種	部 位	遺 存	寸法 (cm)			成形・調整・その他		写真	
	記号	位置							口径	底径	器高	外 面	内 面		
図40	1	SB1	床面直上	SB1-2	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	1/1	23.6			赤彩・櫛T	赤 彩	○
	2	SB1	P5	SB1-8	弥生後期	弥生土器	壺	底 部	1/2		8.0		ミガキ	ミガキ	
	3	SB1	床面直上	SB1-5	弥生後期	弥生土器	鉢	口～底	1/3	19.8	6.8	6.5	赤 彩	赤 彩	
	4	SB1	床面直上	SB1-9	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	2/3	16.8	7.5	23.0	櫛波・簾	ナ デ	
	5	SB1	床面直上	SB1-3	弥生後期	弥生土器	甕	底 部	2/3				ナ デ	ナ デ	
	6	SB1	床面直上	SB1-4	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	2/3	11.6			櫛波・簾	ナ デ	
	7	SB1	床面直上	SB1-1	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/2	10.9			ハ ケ	ナ デ	
	8	SB1	床面直上	SB1-6	弥生後期	弥生土器	高杯	杯 部	1/2	17.2			赤 彩	赤 彩	○
	9	SB1	覆土中～下層	SB1-7	弥生後期	弥生土器	高杯	杯 部	1/2		5.5		赤 彩	赤 彩	○
	10	SB2	床面直上	SB2-11	古墳後期	土 師 器	甕	口～胴	3/4	14.0			ハ ケ	ナ デ	○
	11	SB2	床面直上	SB2-2	古墳後期	土 師 器	鉢	口 縁	1/1	15.7			ハ ケ	ナ ケ	
	12	SB2	床面直上	SB2-7	古墳後期	土 師 器	鉢	頸～底	2/3				ミガキ	ナ デ	
	13	SB2	覆土下層	SB2-15	古墳後期	土 師 器	甕	底 部	2/3		5.0		ナ デ?	ハ ケ	
	14	SB2	覆土上層	SB2-14	古墳後期	土 師 器	甕	底 部	2/3		7.2		ケズリ	ナ デ	
	15	SB2	床面直上	SB2-10	古墳後期	土 師 器	甕	胴～底	1/2		5.5		ハ ケ	ハ ケ	
	16	SB2	床面直上	SB2-6	古墳後期	土 師 器	高杯	口～底	4/5	17.2	10.0	11.4	ミガキ	ミガキ	○
	17	SB2	床面直上	SB2-1	古墳後期	土 師 器	高杯	口～底	4/5	17.7	9.9	11.7	ミガキ	黒 色	○
	18	SB2	床面直上	SB2-9	古墳後期	土 師 器	高杯	脚 部	1/1		8.9		ミガキ	ミガキ	
	19	SB2	床面直上	SB2-5	古墳後期	土 師 器	高杯	口～脚	1/1	15.1	10.1	11.2	ミガキ	黒 色	○
	20	SB2	床面直上	SB2-40	古墳後期	土 師 器	高杯	口～底	3/4	13.9	10.7	10.8	ミガキ	黒 色	○
	21	SB2	床面直上	SB2-41	古墳後期	土 師 器	高杯	杯 部	1/1	14.3			ミガキ	黒 色	
	22	SB2	床面直上	SB2-4	古墳後期	土 師 器	高杯	口～脚	1/1	15.8	9.8	12.1	ミガキ	黒 色	○
	23	SB2	床面直上	SB2-42	古墳後期	土 師 器	高杯	杯 部	1/1	18.0			ミガキ	黒 色	
	24	SB2	カマド周辺	SB2-3	古墳後期	土 師 器	高杯	口～底	4/5	19.7	10.4	12.5	ミガキ	黒 色	
	25	SB2	床面直上	SB2-8	古墳後期	土 師 器	杯	口～底	2/3	15.6		4.5	ミガキ	黒 色	
図41	26	SB3	覆土中層	SB3-1	弥生後期	弥生土器	壺	口～胴	1/2	20.0		19.5	赤彩・櫛T	赤 彩	○
	27	SB3	覆土下層	SB3-7	弥生後期	弥生土器	壺	底 部	1/2		11.4		赤 彩	ハ ケ	
	28	SB3	覆土下層	SB3-5	弥生後期	弥生土器	壺	底 部	1/1		5.1		赤 彩	ナ デ	
	29	SB3	覆土下層	SB3-6	弥生後期	弥生土器	壺	底 部	1/1		5.9		赤 彩?	ナ デ	
	30	SB3	覆土中～下層	SB3-4	弥生後期	弥生土器	壺	底 部	1/1		5.9		赤 彩	ハ ケ	
	31	SB3	覆土下層	SB3-17	弥生後期	弥生土器	杯	底 部	1/2		4.8		赤 彩	ナ デ	
	32	SB4	覆 土	SB4-14	弥生後期	弥生土器	壺	底 部	1/3		10.0		ナ デ	ナ デ	
	33	SB3	覆土下層	SB3-2	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/2	13.6		15.7	櫛波・簾	ナ デ	
	34	SB3	覆土下層	SB3-3	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/2	10.2		10.8	櫛波・簾	ナ デ	
	35	SB3	床面直上	SB2-13	弥生後期	弥生土器	器台	底 部	1/12		23.4		赤 彩	ミガキ?	○
	36	SB4	床面直上	SB4-1	古墳中期	土 師 器	甕	口～底	1/2	17.5	9.9		ハケ・ナデ	ハ ケ	○
	37	SB4	床面直上	SB4-15	古墳中期	土 師 器	甕	口～胴	1/3	16.0			ミガキ?	ナ デ	
	38	SB4	床面直上	SB4-12	古墳中期	土 師 器	甕	口～底	5/6	14.3			ナ デ?	ナ デ	○
	39	SB4	床面直上	SB4-11	古墳中期	土 師 器	甕	胴～底	1/3		6.6		ナ デ	黒 色	
	40	SB4	床面直上	SB4-10	古墳中期	土 師 器	甕	口～胴	1/2	16.0			ナ デ?	ナデ?	
	41	SB4	床面直上	SB4-2	古墳中期	土 師 器	甕	口～底	1/2	17.8	7.4	22.4	ナ デ	ナ デ	
	42	SB4	床面直上	SB4-6	古墳中期	土 師 器	壺	胴～底	1/3				ミガキ	黒 色	
	43	SB4	床面直上	SB4-5	古墳中期	土 師 器	甕	胴～底	3/4		8.0		ハ ケ	ナ デ	
	44	SB4	床面直上	SB4-8	古墳中期	土 師 器	高杯	口～脚	3/4	15.8			ミガキ	ミガキ	○
	45	SB4	床面直上	SB4-13	古墳中期	土 師 器	高杯	杯 部	1/1	17.0			ミガキ	ミガキ	
	46	SB4	床面直上	SB4-4	古墳中期	土 師 器	高杯	脚 部	3/4		12.1		ミガキ	ナ デ	
	47	SB4	床面直上	SB4-9	古墳中期	土 師 器	高杯	脚 部	3/4		11.5		赤 彩	ナ デ	
	48	SB4	床面直上	SB4-3	古墳中期	土 師 器	杯	底 部	1/2		8.0		ミガキ	ミガキ	
	49	SB4	床面直上	SB4-7	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	1/3	14.2	11.0	4.1	ミガキ	黒 色	
	図42	50	SB5	床面直上	SB5-48	弥生後期	弥生土器	壺	頸～胴	2/3				赤彩・櫛T	赤彩・ハケ
51		SB5	床面直上	SB5-2	弥生後期	弥生土器	壺	口～頸	1/2	34.0			赤彩・櫛T	赤 彩	○
52		SB5	床面直上	SB5-5	弥生後期	弥生土器	壺	口～胴	1/3				赤彩・櫛T	赤彩・ハケ	
53		SB5	床面直上・P1・3	SB5-10	弥生後期	弥生土器	壺	口～胴	3/4	26.6			赤彩・櫛T	赤 彩	○
54		SB5	床面直上	SB5-8	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	1/3	26.8			赤 彩	赤 彩	
55		SB5	床面直上	SB5-9	弥生後期	弥生土器	壺	胴 部	2/3				赤彩・櫛文	ハケ・ナデ	
56		SB5	床面直上・SB6覆土	SB5-4	弥生後期	弥生土器	壺	胴～底	1/1		14.1		赤 彩	ナ デ	
図43	57	SB5	覆土・P2	SB5-12	弥生後期	弥生土器	壺	底 部	1/1		7.0		赤 彩	ハ ケ	
	58	SB5	床面直上	SB5-45	弥生後期	弥生土器	壺	口～底	3/4	13.5	6.1	22.5	ハケ・ミガキ	ハ ケ	○
	59	SB5	床面直上	SB5-39	弥生後期	弥生土器	壺	口～底	2/3	9.2			赤 彩	ナ デ	○
	60	SB5	床面直上	SB5-11	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	1/1	21.8			櫛波	ミガキ	
	61	SB5	床面直上	SB5-3	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	4/5	16.8			櫛波・簾	ハ ケ	
	62	SB5	床面直上・P3	SB5-34	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	2/3	16.4	6.8	18.3	櫛波・簾	ナ デ	○
	63	SB5	覆土～床面	SB5-38	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	5/6	17.6	5.8	21.4	櫛波・簾	ハケ・ナデ	○
	64	SB5	床面直上	SB5-44	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	8/9	14.2	4.1	15.3	櫛波・簾	ミガキ?	○
	65	SB5	床面直上	SB5-37	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	1/1	11.8			櫛波・簾	ナ デ	○

図版 番号	出土遺構		整理No,	時 代	種 別	器種	部 位	遺 存	寸法 (cm)			成形・調整・その他		写 真	
	記号	位置							口径	底径	器高	外 面	内 面		
図43	66	SB5	床面直上	SB5-35	弥生後期	弥生土器	高杯	口～脚	1/2	16.0			赤 彩	赤 彩	
	67	SB5	床面直上	SB5-7	弥生後期	弥生土器	高杯	杯 部	1/1	16.1			赤 彩	赤 彩	
	68	SB5	床面直上	SB5-13	弥生後期	弥生土器	高杯	杯 部	1/5	21.2			赤 彩	赤 彩	
	69	SB5	床面直上	SB5-46	弥生後期	弥生土器	器台	口～底	3/4	19.9	11.7	11.3	赤 彩	赤 彩	○
	70	SB5	床面直上	SB5-41	弥生後期	弥生土器	蓋	蓋 部	4/5	11.0	2.4	4.2	赤 彩	赤 彩	○
	71	SB5	床面直上	SB5-40	弥生後期	弥生土器	甕	頸～底	1/1		5.0		赤 彩	赤 彩	○
	72	SB5	床面直上	SB5-6	弥生後期	弥生土器	杯	口～底	2/3	13.7	4.8	7.2	赤 彩	赤 彩	
	73	SB5	床面直上	SB5-36	弥生後期	弥生土器	甌	胴 部	1/1	11.4	3.4	6.7	赤 彩	赤 彩	○
	74	SB5	床面直上	SB5-43	弥生後期	弥生土器	杯	杯 部	4/5	9.4	4.3	4.5	赤 彩	赤 彩	○
	75	SB5	床面直上	SB5-47	弥生後期	弥生土器	蓋	蓋 部	1/1	4.5	2.2	4.9	赤 彩	赤 彩	○
76	SB5	床面直上	SB5-42	弥生後期	弥生土器	小壺	胴 部	1/1	3.2	2.2	6.0	赤 彩	ナ デ	○	
図44	77	SB6	覆 土	SB5-5	古墳中期	土 師 器	壺	口～底	2/5	8.4	5.0	13.3	ミガキ	ミガキ・ハケ	
	78	SB6	覆 土	SB5-7	古墳中期	土 師 器	壺	口～胴	1/3	8.4			ミガキ	ミガキ・ナデ	
	79	SB6	SB3・6検	SB3・6検-2	古墳中期	土 師 器	甕	口縁部	2/3	13.4			ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	
	80	SB6	覆 土	SB5-9	古墳中期	土 師 器	甕	口縁部	1/3	12.8			ナデ・ハケ	ナ デ	
	81	SB6	覆 土	SB5-8	古墳中期	土 師 器	甕	口縁部	1/3	17.0			ナ デ	ナ デ	
	82	SB6	覆 土	SB5-6	古墳中期	土 師 器	壺	口縁部	1/3	13.7			ハケ・ミガキ	ミガキ・ナデ	
	83	SB6	床面直上	SB5-2	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	1/2	14.1		5.3	ナデ・ケズリ	黒 色	
	84	SB6	床面直上	SB5-1	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	1/1	14.5		4.2	ナデ・ケズリ	ミガキ	
	85	SB6	床 面 下	SB5-10	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	1/3	12.8		6.1	ミガキ	黒 色	
	86	SB6	床 面 下	SB5-11	古墳中期	土 師 器	杯	底 部	2/3				ミガキ	黒 色?	
	87	SB6	SB5覆土上層	SB5-14	古墳中期	土 師 器	甕	底 部	1/2		8.0		ナ デ	ナ デ	
	88	SB6	覆 土	SB5-15	古墳中期	土 師 器	甕	底 部	1/2				ケズリ	ハケ・ナデ	
	89	SB6	覆 土	SB5-4	古墳中期	土 師 器	高杯	杯 部	2/3	15.5			ハケ・ナデ	ハケ・ミガキ	
	90	SB6	覆 土	SB4・5・6検-9	古墳中期	土 師 器	高杯	口～底	1/2	12.6	8.6	9.25	ミガキ	黒 色	
	91	SB6	覆 土	SB5・6検-1	古墳中期	土 師 器	高杯	脚部	2/3		9.0		ミガキ	黒 色	
	92	SB6	SB5覆土上層	SB5-16	古墳中期	土 師 器	高杯	脚 部	1/1		9.4		ミガキ	ナ デ	
	93	SB6	床面直上	SB5-3	古墳中期	土 師 器	高杯	脚 部	3/4	10.2			ミガキ	黒 色	
	94	SB6	覆 土	SB4・5・6検-1	古墳中期	土 師 器	高杯	脚 部	2/3	14.3			ミガキ	ナ デ	
	95	SB6	覆 土	SB3・6検-1	古墳中期	土 師 器	蓋	つまみ	1/1		3.8		ナ デ	ナ デ	
	96	SB6	覆 土	SB4・5・6検-2	古墳中期	土 師 器	手捏	口～底	2/3	6.6	3.8	4.9	ナ デ	ナ デ	
97	SB6	覆 土	SB5-17	古墳中期	土 師 器	甌	底 部	1/3		5.9		ナ デ	ナ デ		
98	SB8	床面直上	SB8-5	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	1/2	10.3		6.0	ミガキ	ミガキ	○	
99	SB8	床面直上	SB 8-2	古墳中期	土 師 器	甕	底 部	1/1		7.0		ナ デ	ナ デ		
100	SB8	床面直上	SB 8-4	古墳中期	土 師 器	鉢	口～底	2/3	18.2		6.7	ミガキ?	黒 色		
101	SB8	床面直上	SB 8-1	古墳中期	土 師 器	高杯	口～脚	2/3	16.2			ハケ・ミガキ	ミガキ		
102	SB8	床面直上	SB 8-3	古墳中期	土 師 器	高杯	杯 部	1/1	13.9			ミガキ	ナ デ?		
103	SB9	床下・覆土上	SB 9-7	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	2/3	11.8		6.1	ミガキ	ミガキ	○	
104	SB9	覆土上～下層	SB 9-4	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	1/2	14.1			ミガキ?	ミガキ	○	
105	SB9	床面直上・A区検出	SB 9-2	古墳中期	土 師 器	高杯	杯 部	1/2	16.3			ミガキ	黒 色		
106	SB9	床面直上	SB 9-1	古墳中期	土 師 器	高杯	杯～脚	1/2		9.4		ミガキ	黒 色		
107	SB9	床 面 下	SB 9-6	古墳中期	土 師 器	高杯	脚 部	1/1		10.2		ミガキ	ミガキ		
108	SB9	SB8・9覆土上層	SB 8・9	古墳中期	土 師 器	高杯	脚 部	1/1		8.0		外ミガキ	ナ デ		
図45	109	SB10	床面直上	SB10-4	古墳中後	土 師 器	壺	口～胴	1/3	10.6			ミガキ	ミガキ・ナデ	○
	110	SB10	床面直上	SB10-2	古墳中後	土 師 器	甕	胴～底	1/2		3.9		ナ デ	ナ デ	
	111	SB10	覆土上層・中層	SB 10-5	古墳中後	土 師 器	甕	口縁部	2/3	16.1			ナ デ	ナ デ	
	112	SB10	覆土下層	SB 10-12	古墳中後	土 師 器	杯	口縁部	2/5	15.0		4.3	ミガキ	ミガキ	
	113	SB10	覆土上層	SB 10-6	古墳中後	土 師 器	高杯	口縁部	1/2	14.4	9.2	9.9	ミガキ	黒 色	
	114	SB10	覆土上層	SB 10-7	古墳中後	土 師 器	高杯	口縁部	1/2	15.3	9.6	11.0	ミガキ	黒 色	
	115	SB10	覆土上～下層	SB 10-10	古墳中後	土 師 器	高杯	口縁部	1/2	16.0			ミガキ	ミガキ?	
	116	SB10	床面直上	SB 10-3	古墳中後	土 師 器	高杯	脚 部	1/1		9.5		ミガキ	ナ デ	
	117	SB10	床面直上	SB 10-1	古墳中後	土 師 器	高杯	脚 部	1/2	12.6			ミガキ	黒 色	
	118	SB10	覆土上層	SB 10-8	古墳中後	土 師 器	高杯	脚 部	1/1		9.9		ミガキ	黒 色	
	119	SB10	覆土上層	SB 10-9	古墳中後	土 師 器	高杯	脚 部	1/2		9.8		ミガキ	ナ デ	
	120	SB11	床面直上	SB 11-34	古墳中期	土 師 器	壺	口～底	1/1	8.4		14.8	ミガキ	ミガキ・ナデ	○
	121	SB11	床面直上	SB 11-16	古墳中期	土 師 器	壺	口～底	1/1	8.2		14.0	ミガキ	ミガキ・ナデ	○
	122	SB11	床面直上	SB 11-29	古墳中期	土 師 器	甕	口～胴	1/3	16.0			ナ デ	ナ デ	
	123	SB11	床面直上	SB 11-30	古墳中期	土 師 器	甕	口～底	5/6	16.8		21.7	ナ デ	ナ デ	○
	124	SB11	床面直上	SB 11-39	古墳中期	土 師 器	甕	胴～底	1/3		8.0		ミガキ	ナ デ	
	125	SB11	床面直上	SB 11-3	古墳中期	土 師 器	甕	胴～底	1/2		7.4		ハケ・ミガキ	ナ デ	
図46	126	SB11	床面直上	SB 11-12	古墳中期	土 師 器	甕	口～底	1/2	21.4	9.1	24.7	ミガキ?	ナ デ?	○
	127	SB11	床面直上	SB 11-2	古墳中期	土 師 器	甕	口縁部	1/3	16.0			ナ デ	ナ デ	
	128	SB11	床面直上	SB 11-13	古墳中期	土 師 器	甕	口～底	5/6	21.5	6.9	23.8	ミガキ・ナデ	ナデ・ケズリ	○
	129	SB11	床面直上	SB 11-19	古墳中期	土 師 器	甕	口～胴	1/2	17.5			ナ デ	ナ デ	
	130	SB11	床面直上	SB 11-38	古墳中期	土 師 器	杯	口～底	1/2	13.8		8.3	ミガキ	ミガキ	

図版 番号	出土遺構		整理No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他		写真	
	記号	位置							口径	底径	器高	外面	内面		
図46	131	SB11	床面直上	SB 11-35	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/1	12.8		5.6	ナデ・ミガキ	ミガキ	○
	132	SB11	床面直上	SB 11-27	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/1	12.8		5.0	ミガキ?	ミガキ	○
	133	SB11	床面直上	SB 11-22	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/1	13.5		5.7	ミガキ	ミガキ	○
	134	SB11	床直上・覆土	SB 11-42	古墳中期	土師器	杯	口～底	2/3	14.0			ナデ・ミガキ	ミガキ	○
	135	SB11	床直上・覆土	SB 11-41	古墳中期	土師器	杯	口～底	2/3	14.7		5.8	ミガキ?	ミガキ?	○
	136	SB11	床面直上	SB 11-28	古墳中期	土師器	高杯	口～脚	1/1	15.7	12.3	12.0	ミガキ	ミガキ	○
	137	SB11	床面直上	SB 11-18	古墳中期	土師器	高杯	口～底	1/2	15.9	13.6	11.5	ミガキ	ミガキ	○
	138	SB11	床面直上	SB 11-9	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/2	20.0			ミガキ	ミガキ	○
	139	SB11	床面直上	SB 11-25	古墳中期	土師器	高杯	口～脚	1/1	20.3	15.3	14.9	ミガキ	ミガキ	○
	140	SB11	床面直上	SB 11-10	古墳中期	土師器	高杯	口～底	1/2	15.6	13.5	13.5	ミガキ	ミガキ	○
	141	SB11	床面直上	SB 11-21	古墳中期	土師器	高杯	口～底	4/5	13.0	10.6	10.9	ミガキ	ミガキ	○
	142	SB11	床面直上	SB 11-8	古墳中期	土師器	高杯	口～脚	2/3	16.2			ミガキ	ミガキ	○
	143	SB11	床面直上	SB 11-1	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	15.8			ミガキ?	ミガキ	○
	144	SB11	床面直上	SB 11-6	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	15.8			ミガキ	ミガキ	○
145	SB11	床面直上	SB 11-7	古墳中期	土師器	高杯	杯部	5/6	15.8			ミガキ	ミガキ	○	
146	SB11	床面直上	SB 11-20	古墳中期	土師器	高杯	杯部	2/3	16.1			ミガキ	ミガキ	○	
147	SB11	床面直上	SB 11-5	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	15.9			ミガキ	ミガキ	○	
148	SB11	床面直上	SB 11-24	古墳中期	土師器	高杯	杯部	2/3	16.6			ミガキ	ミガキ	○	
149	SB11	床面直上	SB 11-37	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	16.2			ハケ・ミガキ	ミガキ	○	
150	SB11	床面直上	SB 11-36	古墳中期	土師器	高杯	杯部	4/5	17.3			ミガキ	ミガキ	○	
151	SB11	覆土中～下層	SB 11-43	古墳中期	土師器	高杯	脚部	2/3		11.2		ミガキ	ナデ	○	
152	SB11	床面直上	SB 11-40	古墳中期	土師器	高杯	脚部	1/1		12.8		ミガキ	ナデ	○	
153	SB11	床面直上	SB 11-32	古墳中期	土師器	高杯	杯部	4/5		13.3		ミガキ?	ナデ	○	
154	SB11	床面直上	SB 11-11	古墳中期	土師器	高杯	脚部	1/1		13.5		ミガキ	ナデ	○	
155	SB11	床面直上	SB 11-17	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1		13.3		ミガキ	ナデ	○	
156	SB11	床面直上	SB 11-26	古墳中期	土師器	蓋	蓋部	1/1	14.8	3.6	5.5	ナデ?	ナデ	○	
157	SB11	床面直上	SB 11-15	古墳中期	土師器	蓋	口～摘	1/2	14.6		5.1	ミガキ	ナデ	○	
158	SB11	床面直上	SB 11-23	古墳中期	土師器	蓋	口～摘	3/4	14.5			ミガキ	ミガキ?	○	
159	SB11	覆土中～下層	SB 11-44	古墳中期	土師器	蓋	口～摘	5/6		14.2				○	
160	SB11	床面直上	SB 11-14	古墳中期	土師器	蓋	口～胴	2/3	14.6			ミガキ	ナデ	○	
161	SB11	北壁内	SB 11-45	古墳中期	土師器	鉢	口～底	1/5	21.1	6.3	11.4	ミガキ	黒色	○	
162	SB13	床面直上	SB 13-3	古墳中後	土師器	甕	口～胴	1/4	16.4			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	
163	SB13	床面直上	SB 13-2	古墳中後	土師器	甕	胴部	1/2				ハケ	ハケ	○	
164	SB13	床面直上	SB 13-4	古墳中後	土師器	甕	底部	1/1		6.8		ハケ・ナデ	ハケ	○	
165	SB13	床面直上	SB 13-1	古墳中後	土師器	甕	胴～底	3/4		6.0		ハケ・底：輪台	ナデ	○	
166	SB13	覆土上～中層	SB 13-6	古墳中後	土師器	甕	胴～底	3/4		6.6		ハケ	ハケ・ナデ?	○	
167	SB13	覆土上層	SB 13-8	古墳中後	土師器	杯	口～底	1/2	13.6		5.1	ナデ	ナデ	○	
168	SB13	床面直上	SB 13-5	古墳中後	土師器	杯	底部	1/1		8.6		ミガキ	黒色	○	
169	SB13	床面直上	SB 14-9	古墳中後	土師器	高杯	口～底	3/5	11.6	8.7	8.4	ミガキ	ミガキ	○	
170	SB13	床面直上	SB 14-1	古墳中後	土師器	杯	口～底	1/2	16.6		6.8	ミガキ?	ミガキ?	○	
171	SB14	覆土中～下層	SB 14-12	弥生後期	土師器	甕	口～底	1/2	12.4	5.8	17.0	ハケ・ミガキ?	ハケ・ミガキ?	○	
172	SB14	覆土上～下層	SB 14-3	弥生後期	弥生土器	甕?	口～胴	1/4	11.0			赤彩・楡廉	赤彩	○	
173	SB14	覆土中層	SB 14-8	弥生後期	土師器	甕	底部	1/1		6.8		ナデ	ナデ	○	
174	SB14	覆土上層	SB 14-7	弥生後期	土師器	甕	底部	1/1		6.5		ハケ・ミガキ?	ミガキ?	○	
175	SB14	覆土上層	SB 14-6	弥生後期	弥生土器	蓋	摘～胴	1/6		5.2		ハケ	ナデ	○	
176	SB14	覆土上層	SB 14-5	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		7.2		ナデ	ナデ	○	
177	SB14	覆土上層	SB 14-4	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		12.1		ナデ	ナデ	○	
178	SB14	覆土下層	SB 14-10	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	3/4	22.2			赤彩	ナデ	○	
179	SB14	床面直上	SB 14-2	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	1/1		17.6		赤彩	ハケ・ナデ	○	
180	SB14	覆土下層	SB 14-11	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	1/12		20.0		赤彩・三角透4	ナデ	○	
181	SB15	床面直上	SB 15-4	古墳中期	土師器	壺	口～底	2/3	8.6		15.1	ミガキ	ナデ	○	
182	SB15	床面直上	SB 15-2	古墳中期	土師器	甕	口～底	2/3	13.2		12.2	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	
183	SB15	床面直上	SB 15-39	古墳中期	土師器	甕	口～底	1/2	12.1	5.6	13.2	ハケ	ナデ	○	
184	SB15	覆土中～下層	SB 15-23	古墳中期	土師器	甕	口～底	1/3	13.0	7.8	12.5	ミガキ	ミガキ	○	
185	SB15	床面直上	SB 15-17	古墳中期	土師器	甕	口～底	1/1	12.1		11.6	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	
186	SB15	覆土中～下層	SB 15-40	古墳中期	土師器	甕	口～胴	1/3	12.6			ナデ・ミガキ	ナデ	○	
187	SB15	床面直上	SB 15-14	古墳中期	土師器	甕	口～胴	2/3	15.8			ミガキ	ミガキ・ナデ	○	
188	SB15	床面直上	SB 15-19	古墳中期	土師器	甕	口縁部	1/1	17.0			ミガキ	ミガキ・ナデ	○	
189	SB15	床面直上	SB 15-8	古墳中期	土師器	甕	胴～底	1/2		6.6		ミガキ・底部穿孔	ハケ・ミガキ	○	
190	SB15	床面直上	SB 15-15	古墳中期	土師器	甕	口縁部	1/1	15.8			ナデ・ハケ	ハケ・ナデ	○	
191	SB15	床面直上	SB 15-20	古墳中期	土師器	甕	口～底	3/4	13.0		17.4	ナデ・ハケ	ナデ	○	
192	SB15	床面直上	SB 15-21	古墳中期	土師器	甕	口～底	3/4	15.6	7.4	28.0	ハケ	ナデ	○	
193	SB15	床面直上	SB 15-10	古墳中期	土師器	甕	胴部	1/2				ハケ	ナデ	○	
194	SB15	床面直上	SB 15-5	古墳中期	土師器	甕	口～胴	2/3	17.8			ハケ	ハケ	○	
195	SB15	床面直上	SB 15-1	古墳中期	土師器	甕	口～底	1/1	20.7	9.0	20.1	ハケ	ハケ	○	

図版 番号	出土遺構		整理No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他		写真
	記号	位置							口径	底径	器高	外面	内面	
196	SB15	床面直上	SB 15-11	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/1	14.1		5.5	ミガキ・ケズリ	ミガキ	
197	SB15	床面直上	SB 15-16	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/1	14.1		4.8	ミガキ	ミガキ	○
198	SB15	床面直上	SB 15-7	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/1	15.0		5.0	ミガキ	ミガキ	
199	SB15	床面直上	SB 15-6	古墳中期	土師器	杯	口～底	3/4	16.3		5.2	ミガキ	ミガキ	○
200	SB15	床面直上	SB 15-9	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	14.6		6.8	ハケ・ミガキ	ミガキ	
201	SB15	床面直上	SB 15-3	古墳中期	土師器	高杯	口～底	2/3	16.1	11.6	11.6	ミガキ	ミガキ	○
202	SB15	床面直上	SB 15-18	古墳中期	土師器	高杯	口～脚	1/1	15.0	9.6	8.5	ミガキ	ミガキ	
203	SB15	床面直上	SB 15-13	古墳中期	土師器	高杯	口～脚	1/1	14.4	10.2	10.0	ミガキ	ミガキ	
204	SB15	床面直上	SB 15-12	古墳中期	土師器	高杯	口～底	1/2	13.6	9.6	10.1	ミガキ	ミガキ	
205	SB15	床面直上	SB 15-22	古墳中期	土師器	手捏	胴部	1/1	1.8	2.4	3.9	ナデ	ナデ	
206	SB16	床面直上	SB 16-1	弥生後期	弥生土器	壺	頸～胴	1/2				赤彩・櫛T	赤彩・ハケ	○
207	SB16	床面直上	SB 16-5	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	3/4				赤彩・櫛T	赤彩	
208	SB16	覆土中～下層	SB 16-16	弥生後期	弥生土器	鉢	底部	1/1		7.0		赤彩	赤彩	
209	SB16	覆土中層	SB 16-15	弥生後期	弥生土器	甗	底部	1/1		5.0		ミガキ	ハケ・ナデ	
210	SB16	覆土上～中層	SB 16-8	弥生後期	弥生土器	鉢	底部	1/1		5.2		赤彩	赤彩	
211	SB16	覆土中～下層	SB 16-18	弥生後期	弥生土器	甗	底部	1/1		7.9		ナデ・ミガキ	ミガキ	
212	SB16	覆土上～中層	SB 16-13	弥生後期	弥生土器	甗	底部	1/2		7.4		ミガキ	ハケ・ナデ	
213	SB16	覆土上～中層	SB 16-14	弥生後期	弥生土器	壺	底部	2/3		12.0		ナデ	ナデ	
214	SB16	覆土中～下層	SB 16-19	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		11.7		ミガキ	ナデ	
215	SB16	覆土中～下層	SB 16-17	弥生後期	弥生土器	台甗	胴～底	2/3		9.0		ミガキ・櫛波	ミガキ	
216	SB16	覆土上～中層	SB 16-11	弥生後期	弥生土器	甗	底部	2/3		6.1		ナデ	ナデ	
217	SB16	床面直上	SB 16-2	弥生後期	弥生土器	蓋	蓋部	1/1	7.1	2.1	3.0	ミガキ	ミガキ	
218	SB16	床面直上	SB 16-3	弥生後期	弥生土器	高杯	口～底	2/3	24.1	16.0	21.6	赤彩・三角透3	赤彩	○
219	SB16	床面直上	SB 16-4	弥生後期	弥生土器	甗	底部	1/2		10.6		ミガキ	ナデ	
220	SB16	覆土上～中層	SB 16-7	弥生後期	弥生土器	甗	底部	1/3		6.0		ミガキ	ナデ	
221	SB16	床面直上	SB 16-21	弥生後期	弥生土器	甗	口～底	1/2	14.0	5.2	10.2	ミガキ・赤彩?	ミガキ・赤彩?	
222	SB17	覆土中～下層	SB 17-4	弥生後期	弥生土器	甗	底部	1/1		5.0		ミガキ	ミガキ	
223	SB17	覆土中～下層	SB 17-6	弥生後期	弥生土器	杯	口～底	1/2	14.0	4.6	6.0	赤彩	赤彩	○
224	SB17	覆土下層	SB 17-8	弥生後期	弥生土器	壺	底部	2/3		7.6		ミガキ	ナデ・ミガキ	
225	SB17	覆土上～中層	SB 17-2	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		6.7		赤彩?	ナデ	
226	SB17	覆土上～中層	SB 17-7	弥生後期	弥生土器	台甗	口～底	2/3	9.6	6.2	10.3	櫛波・籬	ハケ・ナデ	○
227	SB17	床面直上	SB 17-9	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		14.0		ミガキ・赤彩?	ハケ	
228	SB17	覆土中～下層	SB 17-5	弥生後期	弥生土器	甗	口～底	1/2	18.8	5.7	24.6	櫛波・籬	ミガキ・ナデ	
229	SB17	覆土上～中層	SB 17-1	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/3		3.9		ナデ	ナデ	
230	SB17	覆土中～下層	SB 17-3	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/1		3.7		ミガキ	ナデ	
231	SB19	覆土中層	SB 19-2	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	4/5		4.2		ハケ・ミガキ	ミガキ	
232	SB19	SB9床下	SB 9-3	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部		18.0				ナデ?	○
233	SB19	SB11床面	SB 11-4	弥生後期	弥生土器	壺	底部	3/4		13.5				
234	SB19	床面直上	SB 19-1	弥生後期	弥生土器	甗	口～底	1/1	24.4	8.2	40.1	櫛波・籬	ミガキ・ナデ	○
235	SB22	床面直上	SB 22-1	弥生後期	弥生土器	鉢	口～底	1/1	10.8	4.8	9.3	赤彩	ナデ	○
236	SB22	床面直上	SB 22-4	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	2/3				赤彩・櫛T	赤彩・ナデ	
237	SB22	覆土上層	SB 22-2	弥生後期	弥生土器	壺	頸～胴	2/3				赤彩・櫛T	赤彩・ナデ	○
238	SB22	覆土上層	SB 22-3	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		7.4		赤彩	ハケ・ナデ	
239	SB19・22	覆土	SB 19・22-1	弥生後期	弥生土器	台甗	甗部	1/1	12.4			櫛波・籬	ミガキ	○
240	SB23	床面直上	SB 23-2	古墳中後	土師器	杯	口～底	2/3	14.5		5.8	ナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ	○
241	SB23	床直上・カマド内	SB 23-3	古墳中後	土師器	甗	底部	1/1		6.8		ナデ	ナデ	
242	SB23	床面直上	SB 23-1	古墳中後	土師器	甗	口～胴	2/3	16.5			ハケ	ナデ	○
243	SB24	床面直上	SB 24-2	弥生後期	弥生土器	甗	口～底	2/3	19.8	5.0	9.6	ナデ・ミガキ?	ナデ	
244	SB24	床面直上	SB 24-1	弥生後期	弥生土器	甗	口～胴	4/5	14.2			櫛波・籬	ナデ	
245	SB25	覆土上層	SB 25-1	弥生後期	弥生土器	甗	口～胴	1/3	12.6			ハケ・ナデ	ミガキ?	
246	SB26	覆土下層	SB 26-1	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		5.2		ミガキ?	ミガキ?	
247	SB29	覆土	SB 29-1	弥生後期	弥生土器	甗	胴～底	1/2		5.8			ミガキ	
248	SB27	床面直上	SB 27-3	古墳中期	土師器	丸底	口～底	2/3	10.1	4.0	8.8	ミガキ	ナデ	○
249	SB 27	床面直上	SB 27-1	古墳中期	土師器	丸底	口～底	1/2	8.5		9.6	ミガキ	ナデ	○
250	SB 27	床面直上	SB 27-2	古墳中期	土師器	丸底	口～底	3/4	9.1	3.1	9.8	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○
251	SB 28	床面直上	SB 28-4	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	1/10	28.0			ナデ	ナデ	○
252	SB 28	床面直上	SB 28-5	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	1/7	13.2			ナデ	ナデ	○
253	SB 28	集中・覆土	SB 28-3	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	1/1	9.6			ハケ・ミガキ?	ミガキ?	
254	SB 28	床面直上・覆土	SB 28-2	弥生後期	弥生土器	甗	口～胴	1/2	24.6			櫛波・籬	ハケ・ミガキ	
255	SB 28	床面直上		弥生後期	弥生土器	壺	胴～底	1/3		10.6		赤彩	ナデ?	
256	SB 28	検出	SB 28-1	弥生後期	弥生土器	壺	口～底	1/3	14.6	5.8	23.0	ハケ・ミガキ?	ナデ・ミガキ?	
257	SB 30	床面直上	SB 30-13	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	14.7			ミガキ	ミガキ	○
258	SB 30	床面～覆土上層	SB 30-1	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/1	14.8		5.7	ミガキ	ミガキ	○
259	SB 30	床面直上	SB 30-8	古墳中期	土師器	杯	口～底	3/4	14.0		5.3	ミガキ	ミガキ	
260	SB 30	床面直上	SB 30-12	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	12.4			ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	

図版 番号	出土遺構		整理No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他		写真	
	記号	位置							口径	底径	器高	外面	内面		
	261	SB 30	覆土上層	SB 30-15	古墳中期	土師器	高杯	杯部	2/3	18.9			ミガキ	ミガキ	
	262	SB 30	床面直上	SB 30-2	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	16.1			ナデ	ミガキ	
	263	SB 30	床面直上	SB 30-11	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/2	14.8			ミガキ	黒色	
	264	SB 30	床面・カマド内	SB 30-6	古墳中期	土師器	高杯	杯部	4/5	20.8			ミガキ	ミガキ	
	265	SB 30	床面・カマド内	SB 30-7	古墳中期	土師器	甕	口～胴	3/4	19.4			ハケ	ハケ	○
	266	SB 30	床面直上	SB 30-9	古墳中期	土師器	壺	底部	1/1		7.0		ハケ・ミガキ	ミガキ	
	267	SB 30	覆土上層	SB 30-14	古墳中期	土師器	壺	底部	1/1		7.0		ミガキ	ミガキ	
図52	268	SB 30	カマド内	SB 30-4	古墳中期	土師器	甕	口～胴	2/3	17.8			ミガキ	ハケ・ナデ	
	269	SB 31	床面直上	SB 31-1	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	1/8	14.6			ナデ	ナデ	
	270	SB 33	カマド周辺	SB 33-12	古墳中期	土師器	甕	口～胴	1/2	15.8			ハケ	ハケ	
	271	SB 33	カマド周辺	SB 33-2	古墳中期	土師器	甕	口～底	1/2	14.2	24.6		ナデ	ナデ	○
	272	SB 33	覆土	SB 33-14	古墳中期	土師器	甕	口～胴	1/3	12.8			ハケ・ナデ	ナデ	
	273	SB 33	床面直上	SB 33-10	古墳中期	土師器	甕	口～底	1/3	16.4	25.3		ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○
	274	SB 33	床面直上	SB 33-6	古墳中期	土師器	甕	口～底	2/3	12.0	5.8	13.5	ナデ	ミガキ	○
	275	SB 33	床面直上	SB 33-9	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	14.0		7.5	ナデ	ナデ・ミガキ	
	276	SB 33	床面直上	SB 33-5	古墳中期	土師器	鉢	口～底	2/3	15.9			ミガキ	ミガキ	○
	277	SB 33	床面直上	SB 33-1	古墳中期	土師器	甕	口～底	1/2	16.0	27.0		ハケ	ナデ	○
	278	SB 33	覆土	SB 33-13	古墳中期	土師器	甕	胴～底	1/2		6.5		ハケ・ナデ	ナデ	
	279	SB 33	床面直上	SB 33-4	古墳中期	土師器	高杯	杯部	2/3	13.4			ナデ・ミガキ	ナデ	
	280	SB 33	床面直上	SB 33-8	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	12.6	6.4	5.5	ミガキ	ナデ・ミガキ	○
	281	SB 33	覆土	SB 33-17	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/3	16.5		6.1	ミガキ	ミガキ	
	282	SB 33	床面直上	SB 33-11	古墳中期	土師器	甕	口～胴	1/3	16.2			ナデ・ハケ	ナデ	
	283	SB 33	床面直上	SB 33-7	古墳中期	土師器	高杯	杯～底	2/3		16.5		ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	
	284	SB 33	覆土	SB 33-15	古墳中期	土師器	高杯	口～脚	1/1	15.9	13.0	11.7	ミガキ	ミガキ	○
	285	SB 33	覆土	SB 33-16	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/2	16.0			ミガキ	ミガキ	
	286	SB 33	床面直上	SB 33-3	古墳中期	土師器	高杯	脚部	2/3		13.8		ミガキ	ナデ	
図53	287	SB 33	覆土	SB 33-18	古墳中期	土師器	丸底	胴～底	1/2				ミガキ	ミガキ	
	288	SB 34	覆土	SB 34-7	弥生後期	弥生土器	壺	口～胴	1/2	11.4			赤彩	赤彩	○
	289	SB 34	覆土下層	SB 34-8	弥生後期	弥生土器	壺	胴～底	1/1		5.8		赤彩	赤彩	
	290	SB 34	覆土下層	SB 34-10	弥生後期	弥生土器	壺	底部	4/5		6.0		ミガキ	ミガキ	
	291	SB 34	覆土上～中層	SB 34-5	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		5.4		赤彩	赤彩	
	292	SB 34	覆土	SB 34-1	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	2/3	15.0	5.0	16.8	楡波・籐	ナデ	○
	293	SB 34	床面直上	SB 34-3	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	2/3	18.4	6.6	22.2	楡波・籐	ミガキ	○
	294	SB 34	床面直上	SB 34-11	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/2	10.0	4.0	3.6	ナデ・ミガキ	ハケ・ミガキ	
	295	SB 34	覆土上～中層	SB 34-6	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/2	13.4			楡波・籐	ハケ・ミガキ	
	296	SB 34	床面直上	SB 34-2	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/1	14.8			楡波	ナデ	
	297	SB 34	覆土上～中層	SB 34-4	弥生後期	弥生土器	甕	底部	3/4		5.0		ミガキ	ハケ・ナデ	
	298	SB 35	覆土	SB 35-検2	古墳中期	土師器	甕	口縁部	1/4	13.4			ミガキ	ミガキ・ナデ	
	299	SB 35	覆土	SB 35-1	古墳中期	土師器	甕	口～胴	1/1	15.5			ハケ?		
	300	SB 35	覆土	SB 35-3	古墳中期	土師器	甕	底部	1/1		5.6				
	301	SB 35	覆土	SB 35-4	古墳中期	土師器	蓋	つまみ	1/1		4.6		ナデ?	ナデ?	
	302	SB 35	覆土	SB 35-2	古墳中期	土師器	丸底	口～底	2/3	9.4		8.5	ミガキ	ミガキ・ナデ	○
	303	SB 36	床面直上	SB 36-1	弥生後期	弥生土器	壺	胴～底	2/3		8.2		赤彩		
	304	SB 36	床面直上	SB 36-2	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/2	21.8			楡波・籐	ミガキ	
	305	SB 38	床面直上	SB 38-1	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	1/1	12.2	4.6	10.5	赤彩	赤彩	○
	306	SB 38	床面直上	SB 30-10	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		6.6		赤彩	ミガキ	
	307	SB 38	床面・P1	SB 38-4	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/2	16.0			楡波・籐	ミガキ	
	308	SB 38	覆土	SB 38-3	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/2		5.9		ミガキ	ナデ	
	309	SB 38	覆土	SB 38-2	弥生後期	弥生土器	甕	底部	1/1		4.8		赤彩	ナデ?	
	310	SB40	覆土・覆土上層	SB 40-1	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	2/3	11.9	4.7	11.5	赤彩・籐	赤彩・ナデ	
図54	311	SB40	覆土上層	SB 40-2	弥生後期	弥生土器	甕	底部	1/2		7.0		ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ?	
	312	SB40	覆土上層	SB 40-3	弥生後期	弥生土器	甕	底部	1/1		6.0		ナデ・ミガキ	ナデ	
	313	SB40	覆土	SB 42-4	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	1/2				赤彩	赤彩・ハケ・ナデ	
	314	SB40	覆土	SB 42-6	弥生後期	弥生土器	台甕	台部	1/1		7.8		赤彩	ナデ	
	315	SB40	覆土	SB 42-1	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/1		4.6		ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○
	316	SB40	覆土	SB 42-2	弥生後期	弥生土器	甕	底部	1/1		4.9		ハケ・ミガキ	ミガキ	
	317	SB40	覆土	SB 42-5	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	1/2		11.2		赤彩	ハケ・ナデ	○
	318	SB40	覆土	SB 42-3	弥生後期	弥生土器	甕	底部	1/1		10.2		ミガキ	ナデ	
	319	SB43	床直上・覆土上層	SB 43-1	古墳中期	土師器	蓋	蓋部	1/2	16.2	3.8	6.3	ミガキ	ナデ・ミガキ	○
	320	SB43	覆土上層	SB 43-2	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	16.4			ミガキ	ミガキ	
	321	SB43	覆土上層	SB 43-3	古墳中期	土師器	鉢	口～底	1/2	17.0	6.4	6.7	ハケ	ハケ	
	322	SB44	床面直上	SB 44-5	古墳中期	土師器	蓋	蓋部	1/1	14.8	4.0	6.6	ミガキ	ミガキ	○
	323	SB44	床面直上	SB 44-4	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	13.1			ミガキ	ミガキ	
	324	SB44	床面直上	SB 44-7	古墳中期	土師器	高杯	脚部	2/3		14.2		ミガキ	ナデ	
	325	SB44	床面直上	SB 44-11	古墳中期	土師器	杯	口～底	2/5	12.0		4.5	ミガキ	ミガキ	

図版 番号	出土遺構		整理No.	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他		写真		
	記号	位置							口径	底径	器高	外面	内面			
図54	326	SB44	床面直上	SB 44-6	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	13.4		7.7	ミガキ	ミガキ		
	327	SB44	床面直上	SB 44-2	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	14.2			ミガキ	ミガキ		
	328	SB44	床面直上	SB 44-8	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/2	13.2		6.7	ミガキ	ミガキ		
	329	SB44	床面直上	SB 44-10	古墳中期	土師器	鉢	杯部	1/2	18.4		8.8	ミガキ?	ミガキ?		
	330	SB44	床面直上	SB 44-1	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/2	17.2			ミガキ・ケズリ	ミガキ		
	331	SB44	覆土上～中層	SB 44-12	古墳中期	土師器	壺	口縁部	1/6	14.6			ミガキ	ナデ・ミガキ	○	
	332	SB44	床面直上	SB 44-9	古墳中期	土師器	甕	口～胴	1/2	14.0			ミガキ・ハケ	ナデ・ミガキ		
	333	SB44	床面直上	SB 44-3	古墳中期	土師器	甕	口～胴	1/2	12.6			ミガキ・ハケ	ナデ	○	
	図55	334	SB45	床面直上	SB 45-1	弥生後期	弥生土器	杯	底部	1/2	5.4			赤彩	赤彩	
335		SB46	床面直上	SB 46-1	弥生後期	弥生土器	台甕	台部	1/1		9.9		ハケ・ナデ	ナデ		
336		SB48	覆土上～中層	SB 48-9	弥生後期	弥生土器	壺	胴部	2/3				赤彩	ナデ		
337		SB48	覆土上～中層	SB 48-1	弥生後期	弥生土器	壺	胴～底	2/3		9.6		赤彩	ナデ		
338		SB48	覆土上～中層	SB 48-6	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	1/8	30.0			赤彩・刺突文	赤彩	○	
339		SB48	覆土上～中層	SB 48-8	弥生後期	土師器	台甕	台部	1/1		6.0		ミガキ	ナデ		
340		SB48	覆土上～中層	SB 48-4	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	1/4		12.8		ハケ・ミガキ	ナデ		
341		SB48	覆土上～中層	SB 48-7	弥生後期	土師器	高杯	脚部	2/3		7.0		ナデ	ハケ・ナデ		
342		SB48	覆土上～中層	SB 48-3	弥生後期	弥生土器	鉢	口～底	1/2	11.7	4.4	6.2	赤彩	赤彩		
343		SB48	覆土上～中層	SB 48-2	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	2/3	8.5	5.1	9.6	楡波・籬	ナデ		
344		SB48	覆土上～中層	SB 48-5	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	3/4		4.6		ミガキ・赤彩?	ナデ		
345		SB49	覆土上～中層	SB 49-3	弥生後期	弥生土器	甕	底部	1/1		5.5		ナデ	ナデ・ミガキ?		
346		SB49	覆土上～中層	SB 49-4	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	2/3				赤彩	赤彩・ハケ		
347		SB49	覆土上～中層	SB 49-2	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	1/2	26.1			赤彩	赤彩		
348		SB49	床面直上	SB 49-1	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	2/3	26.9	7.3	34.6	楡波・籬	ナデ	○	
図56		349	SB50	覆土中～下層	SB 50-6	弥生後期	弥生土器	高杯	口～底	2/3	15.0	10.8	11.9	赤彩	赤彩	○
		350	SB50	床面直上	SB 50-5	弥生後期	弥生土器	杯	口～底	1/3	13.2	4.6	6.4	赤彩	赤彩	
		351	SB50	覆土下層	SB 50-8	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	1/5		12.3		赤彩	ハケ・ナデ	○
	352	SB50	覆土中～下層	SB 50-7	弥生後期	弥生土器	杯	底部	1/1		5.0		赤彩			
	353	SB50	覆土上層	SB 50	古墳中期	須恵器	蓋	口～天	1/5	12.0			ナデ	ナデ		
	354	SB51	床面直上	SB 51-8	古墳中期	土師器	甕	口～底	3/4	15.6	7.0	25.9	ハケ・ナデ	ナデ	○	
	355	SB51	床面直上	SB 51-7	古墳中期	土師器	甕	胴～底	1/2		4.3		ハケ・ミガキ	ナデ		
	356	SB51	床面直上	SB 50-1	古墳中期	土師器	杯	口～底	2/3	15.6		5.3	ミガキ	ミガキ		
	357	SB51	床面直上	SB 50-3	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/3	15.8			ミガキ	黒色		
	358	SB51	床面直上	SB 51-2	古墳中期	土師器	杯	口～底	2/3	13.6		6.6	ミガキ・ケズリ	黒色	○	
	359	SB51	床面直上	SB 51-6	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/3	11.7		4.4	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
	360	SB51	床面直上	SB 50-4	古墳中期	土師器	高杯	杯部	2/3	14.1			ミガキ	ミガキ		
	361	SB51	床面直上	SB 50-2	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	13.7			ミガキ	ミガキ		
	362	SB51	床面直上	SB 51-1	古墳中期	土師器	高杯	杯部	4/5	16.1			ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
	363	SB51	床面直上	SB 51-4	古墳中期	土師器	高杯	脚部	2/3		12.5		ハケ・ミガキ	ケズリ		
	364	SB51	床面直上	SB 51-3	古墳中期	土師器	高杯	口～底	1/3	16.8	14.9	13.3	ミガキ	ミガキ・ナデ	○	
	365	SB51	床面直上	SB 51-5	古墳中期	土師器	高杯	杯部	1/1	18.3			ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
	366	SB52	床面直上	SB 52-2	弥生後期	弥生土器	壺	口～胴	1/2	40.0			赤彩・楡T	赤彩・ハケ	○	
367	SB52	床面直上	SB 52-4	弥生後期	弥生土器	壺	口～底	1/1	13.6	6.4	27.8	ハケ・ミガキ	ハケ・ナデ	○		
図57	368	SB52	床面直上	SB 52-1	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/1		12.3		赤彩・楡T	赤彩・ハケ		
	369	SB52	覆土	SB 52-13	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/1		4.4		ハケ	ナデ・ハケ		
	370	SB52	床面直上	SB 52-12	弥生後期	弥生土器	台甕	台部	1/1		7.5		ハケ・ミガキ	ナデ・ハケ		
	371	SB52	覆土上層	SB 52-11	弥生後期	弥生土器	台甕	台部	1/1		8.4		ハケ・ミガキ	ナデ	○	
	372	SB52	床面直上	SB 52-9	弥生後期	弥生土器	杯	杯部	1/1	15.8	6.1	7.2	赤彩	赤彩		
	373	SB52	床面直上	SB 52-8	弥生後期	弥生土器	杯	杯部	1/1	12.1	4.4	7.2	赤彩	赤彩	○	
	374	SB52	床面直上	SB 52-14	弥生後期	弥生土器	甕	口～胴	1/4	17.4			ハケ	ナデ		
	375	SB52	床面直上	SB 52-7	弥生後期	弥生土器	甕	胴～底	1/2		5.6		楡波・籬	ミガキ		
	376	SB52	床面直上・P1	SB 52-6	弥生後期	弥生土器	甕	胴～底	1/2		11.4		楡波	ハケ・ミガキ	○	
	377	SB52	床面直上	SB 52-10	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	2/3		25.2		赤彩	ハケ・ナデ	○	
図58	378	SB52	床面直上	SB 52-3	弥生後期	弥生土器	壺	口～胴	2/3	38.4			赤彩・楡T	赤彩・ハケ		
	379	SB52	床面直上	SB 52-5	弥生後期	弥生土器	甕	胴～底	1/2		10.6		ハケ・ミガキ	ナデ	○	
	380	SK2	遺構外	SK 2-3	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	1/1	12.4	3.1	16.3	ケズリ	ナデ		
	381	SK2	遺構外	SK 2-2	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	1/1	11.8	5.2	11.7	楡波・籬	ナデ		
	382	SK2	遺構外	SK 2-4	弥生後期	弥生土器	甕	口～底	1/1	18.3	7.0	20.5	楡波・籬	ミガキ・ナデ	○	
	383	SK2	遺構外	SK 2-1	弥生後期	弥生土器	壺	口～底	3/4		10.5	31.3	赤彩・楡T	赤彩		
	384	SE2	遺構外		弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	1/3				赤彩	赤彩		
	385	SD4	遺構外	SD 4-4	弥生後期	弥生土器	甕	底部	1/1		5.6		ミガキ	ミガキ		
	386	SP13	遺構外		古墳中期	土師器	高杯	脚部	1/1		13.3		ミガキ	ナデ		
	387	遺構外		SB 19-4	古墳中期	土師器	壺	胴～底	3/4				ミガキ	ナデ		
	388	遺構外		検-7	古墳中期	土師器	壺	胴～底	3/4				ミガキ	ナデ		
389	遺構外		SB 8・9-3	古墳中期	土師器	甕	底部	2/3		5.0		ナデ	ナデ	○		

図版 番号	出土遺構		整理No,	時代	種別	器種	部位	遺存	寸法 (cm)			成形・調整・その他		写真	
	記号	位置							口径	底径	器高	外面	内面		
	390	遺構外		弥生後期	弥生土器	器台	受け部		1.0						
	391	遺構外	検-5	弥生後期	弥生土器	壺	底部	1/2	5.0			赤彩	赤彩		
	392	遺構外	SB16-12	古墳中期	土師器	杯	口～底	1/3	17.0	7.4		ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		
	393	遺構外	SB19-3	古墳時代	土師器	杯	口～底	1/1	13.7	6.3		ミガキ	ミガキ		
	394	遺構外	B-検-1	古墳時代	土師器	杯	口～底	1/3	15.2	4.6		ミガキ	ミガキ		
	395	遺構外	検出	古墳時代	土師器	杯	口～底	1/2	13.2	8.0	4.9	ミガキ	ミガキ		
	396	遺構外	SB16-9	古墳時代	土師器	杯	口～底	1/1	13.7	5.8		ミガキ	ミガキ		
	397	遺構外	SB16-6	古墳時代	土師器	杯	口～底	1/2	13.8	5.3		ミガキ	ミガキ		
	398	遺構外	サ (SB15西)	弥生後期	弥生土器	蓋	蓋部	1/2	4.0			ミガキ	ナデ		
	399	遺構外	A-SB4	古墳時代	土師器	杯	底部	1/1	7.8			ミガキ	ミガキ		
	400	遺構外	SB16-10	古墳中期	土師器	高杯	杯部	3/4	15.8			ミガキ	ミガキ		
	401	遺構外	検-4	古墳時代	土師器	高杯	胴～底	1/2	10.0			ミガキ	ミガキ・ナデ	○	
	402	遺構外	サ (SB15西)	古墳後期	須恵器	蓋	口～天	1/4	12.8	4.1		ナデ・ケズリ	ナデ	○	
図59	403	遺構外	SB13-7	奈良時代	須恵器	甕	口～胴	1/3	11.0			ナデ	ナデ		
	404	遺構外	サ (南)-1	古墳時代	土師器	甕	口～胴	1/2	14.2			ミガキ	ナデ		
	405	遺構外	SB10-11	平安時代	土師器	椀	底部	1/1	8.0			ナデ	暗文		
	406	遺構外	A-検-2	平安時代	土師器	杯	口～底	1/2	10.1			ナデ	黒色		
	407	遺構外	A-検-1	平安時代	土師器	杯	口～底	2/3	10.6	5.0	3.0	回転糸切	黒色		
	408	遺構外	A-検-3	平安時代	土師器	杯	口～底	1/2	13.2	7.0	3.7	回転糸切	黒色		
	409	遺構外	サSB15西	平安時代	須恵器	杯	口～底	1/6	13.2	6.8	4.4	回転糸切	ナデ		
	410	遺構外	B-検-2	古墳時代	土師器	高杯	脚部		12.9			ミガキ	ナデ		
	411	遺構外	A-西カベ	古墳時代	土師器	高杯	脚部	2/3	10.8			ミガキ	黒色		
	412	遺構外	SB5・6検-2	平安時代	土師器	羽釜	把手	1/1				ナデ	ナデ		
	413	遺構外	C-検-1	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/3	7.0			ナデ	ナデ		
	414	遺構外	A-不明-1	弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/1	6.2	3.0	3.1	ナデ	ナデ		
	415	遺構外	SB8・9-2	弥生後期	土師器	蓋	つまみ	1/1				ミガキ	ナデ		
	416	遺構外		弥生後期	弥生土器	蓋	つまみ	1/3	4.0			ミガキ	ミガキ		

図版 番号	出土遺構		時代	種別	名称	寸法 (cm) ・ 整形・調整・その他	写真	
	記号	位置						
	417	遺構外		土製品	紡錘車	直径4.5cm・淡褐色・焼成甘い。		
	418	SB19	床面直上	弥生後期	土製品	匙形土製品	残存長6.4cm・両面赤彩。	○
	419	SB44	床面直上	古墳中期	石製品	勾玉	最大長5.8cm・滑石製・片面穿孔。	○
	420	SB4	覆土	弥生後期	石製品	管玉	全長2.5cm・緑色凝灰岩製・片面穿孔。	○
	421	SB3	覆土	古墳中期	石製品	管玉	全長1.8cm・両面穿孔・断面不定八角形をなす未成品。	○
	422~	SB16	床面直上	弥生後期	石製品	ガラス小玉	265点以上のガラス小玉が集中して出土。色調はスカイブルー。	○
	687	SB13	覆土中層	(混入品)	石製品	石鏃	有茎式・チャート製。	
図59	688	SB18	覆土	(混入品)	石製品	石鏃	頁岩製・未成品。	○
	689	SB11	覆土中層	(混入品)	石製品	打製石斧	結晶片岩製?	○
	690	SB22	覆土	弥生後期	石製品	磨石	頁岩製・両面に磨面・ベンガラ付着。	○
	691	SB5・6	覆土中層		石製品	砥石	頁岩製・方形。	○
	692	SB34	床面直上		石製品	凹石	石英安山岩製・不定外形・深い孔。	○
	693	SB52	床面直上		石製品	凹石	石英安山岩製・不定外形・浅い孔。	○
	694	SB5	柱穴内		鉄製品	鉄鏃	残存長5.2cm・先端部変形・断面レンズ状・SB6帰属か?	○
	695	SB33	覆土		鉄製品	不明鉄製品	残存長7cm・鋤先・鉄先?	○

# 遺物写真



乾燥中の土器

遺物写真1



出土した北陸系土器



5号住居跡出土土器



11号住居跡出土土器

遺物写真 4



出土玉類



主要出土遺物（手前：玉類 奥：北陸系土器）

遺物写真 5



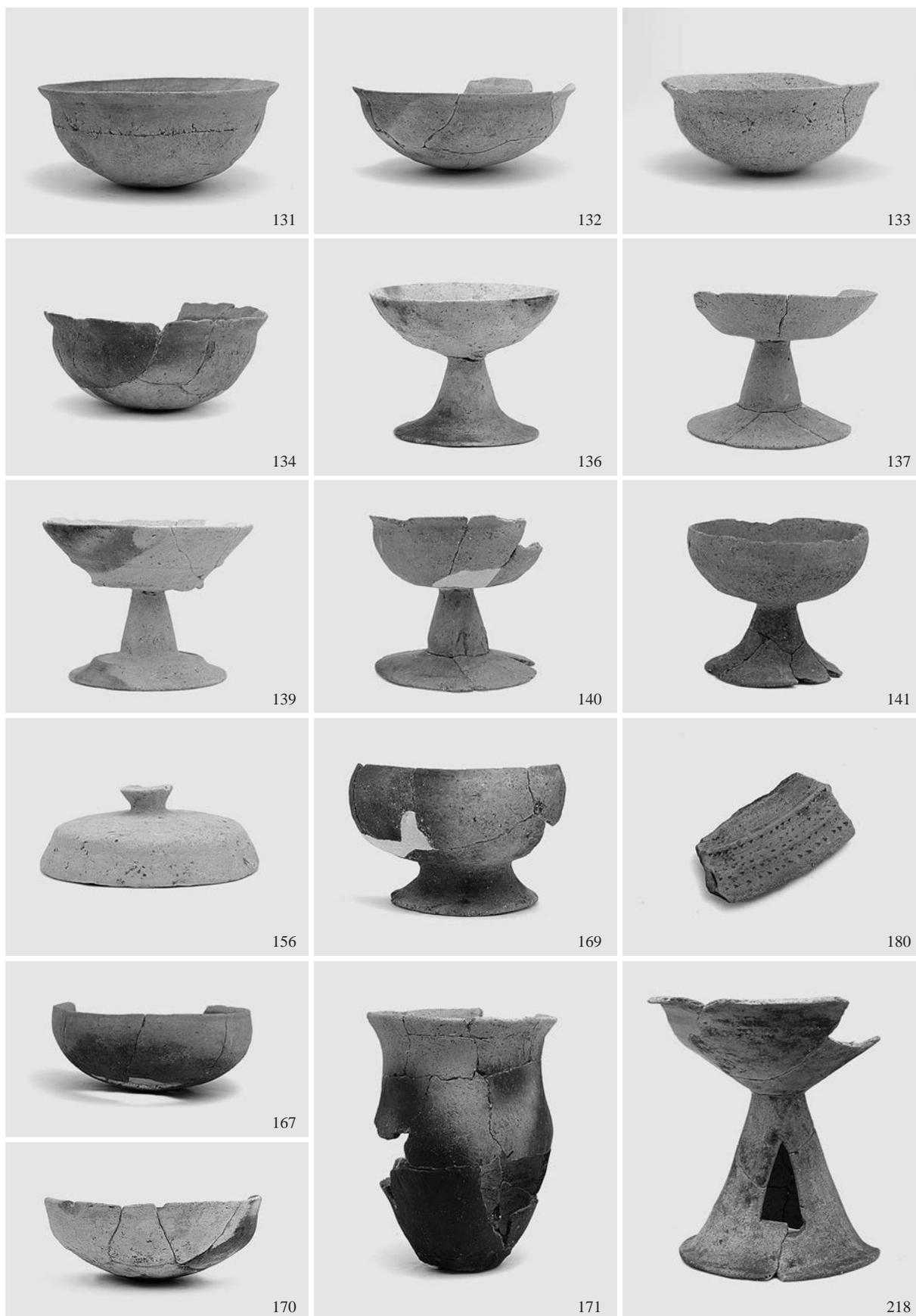
遺物写真 6



遺物写真7



遺物写真 8



遺物写真 9



遺物写真 10



遺物写真 11



遺物写真 12



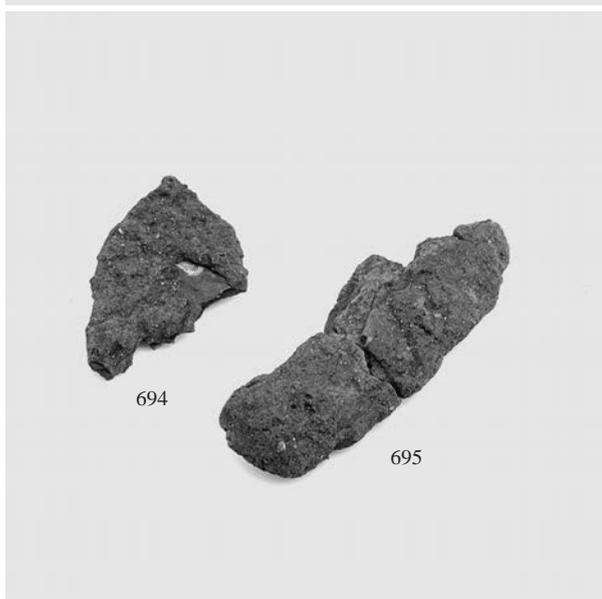
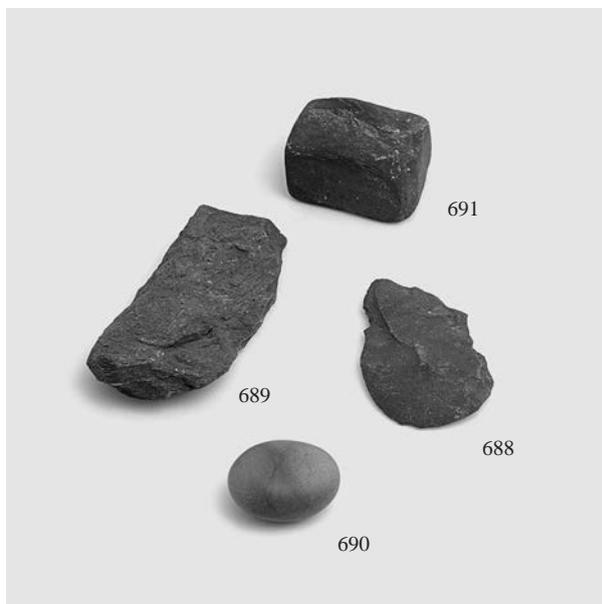
遺物写真 13



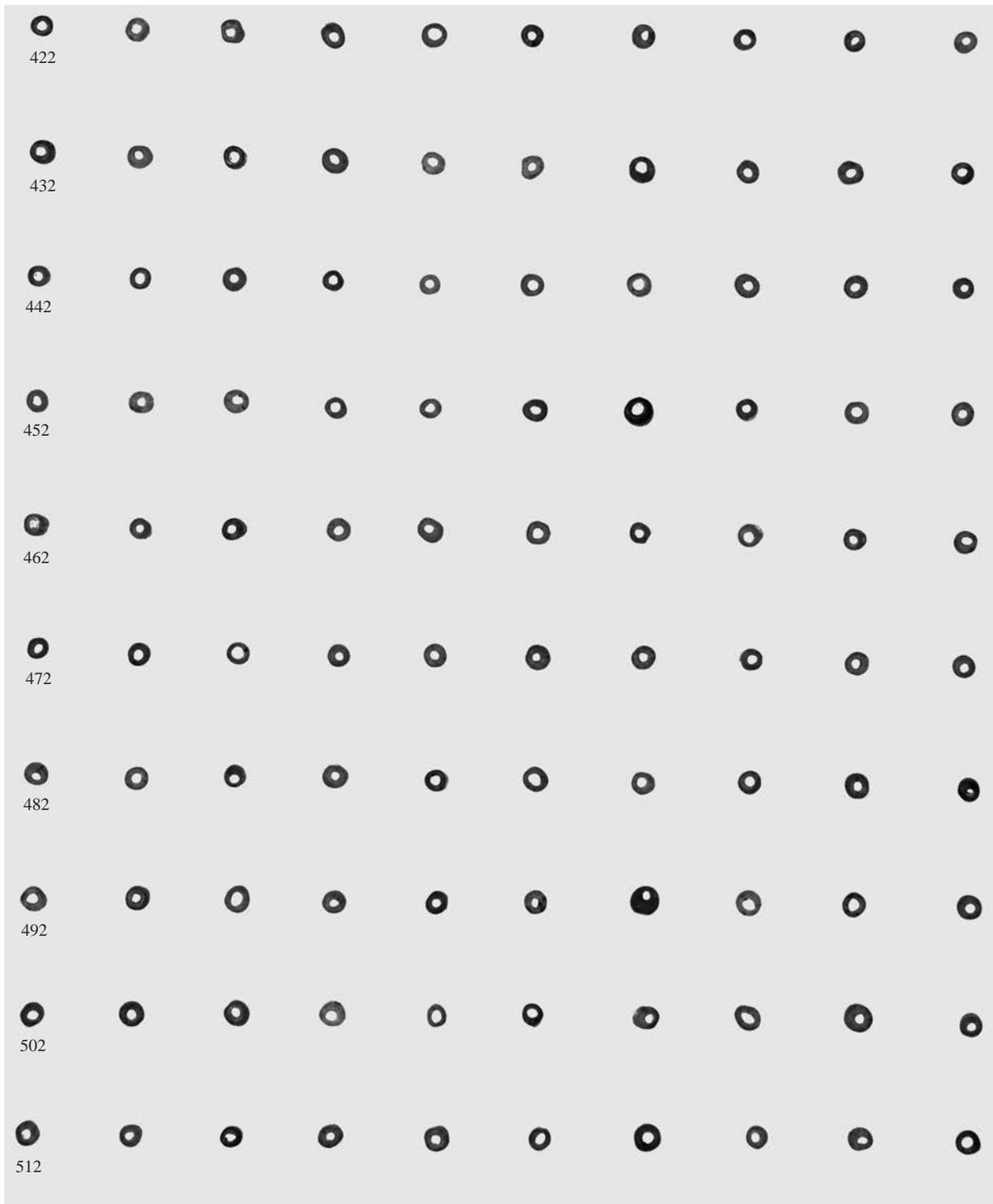
遺物写真 14



遺物写真 15

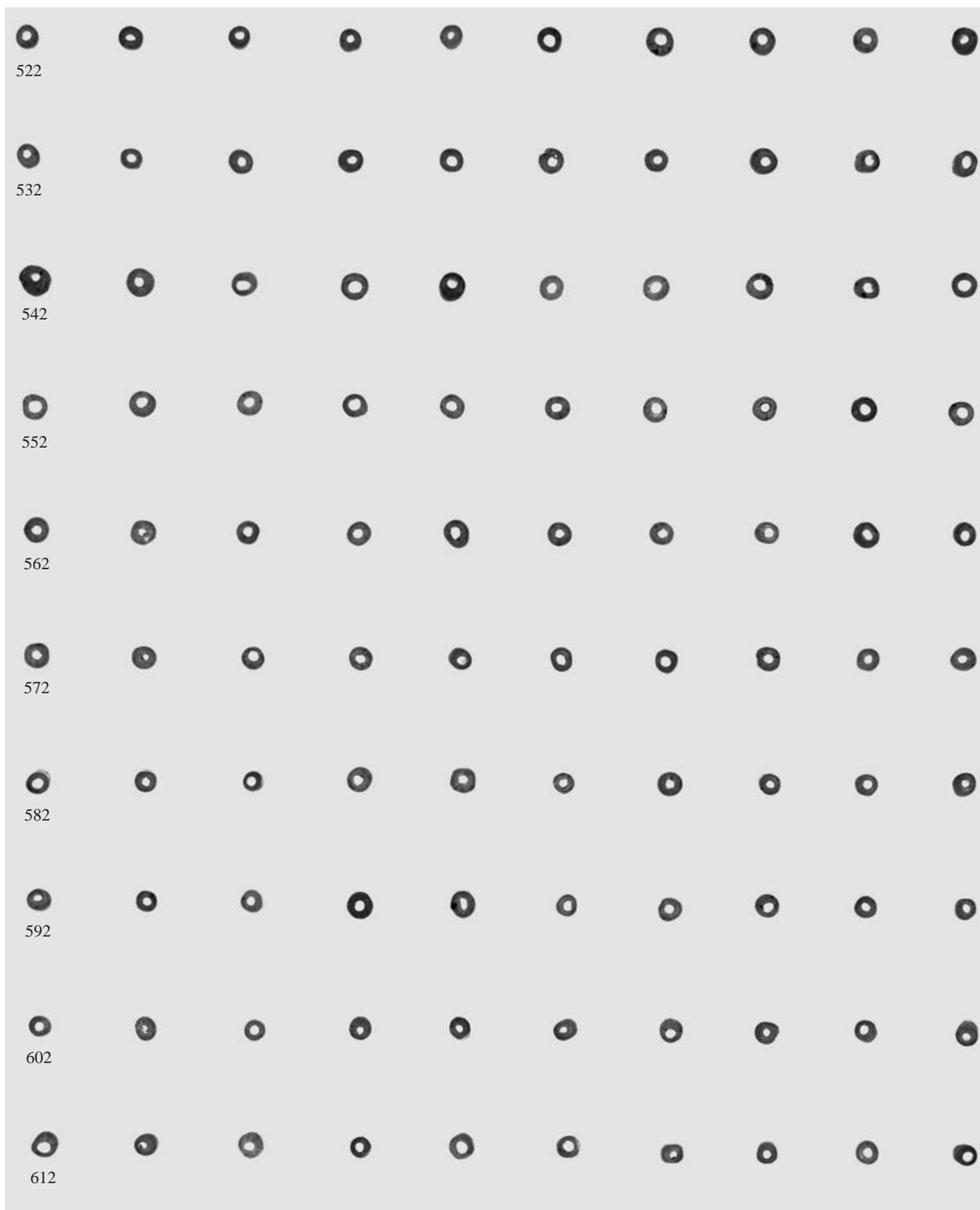


遺物写真 16



16号住居址出土ガラス小玉①

遺物写真 17



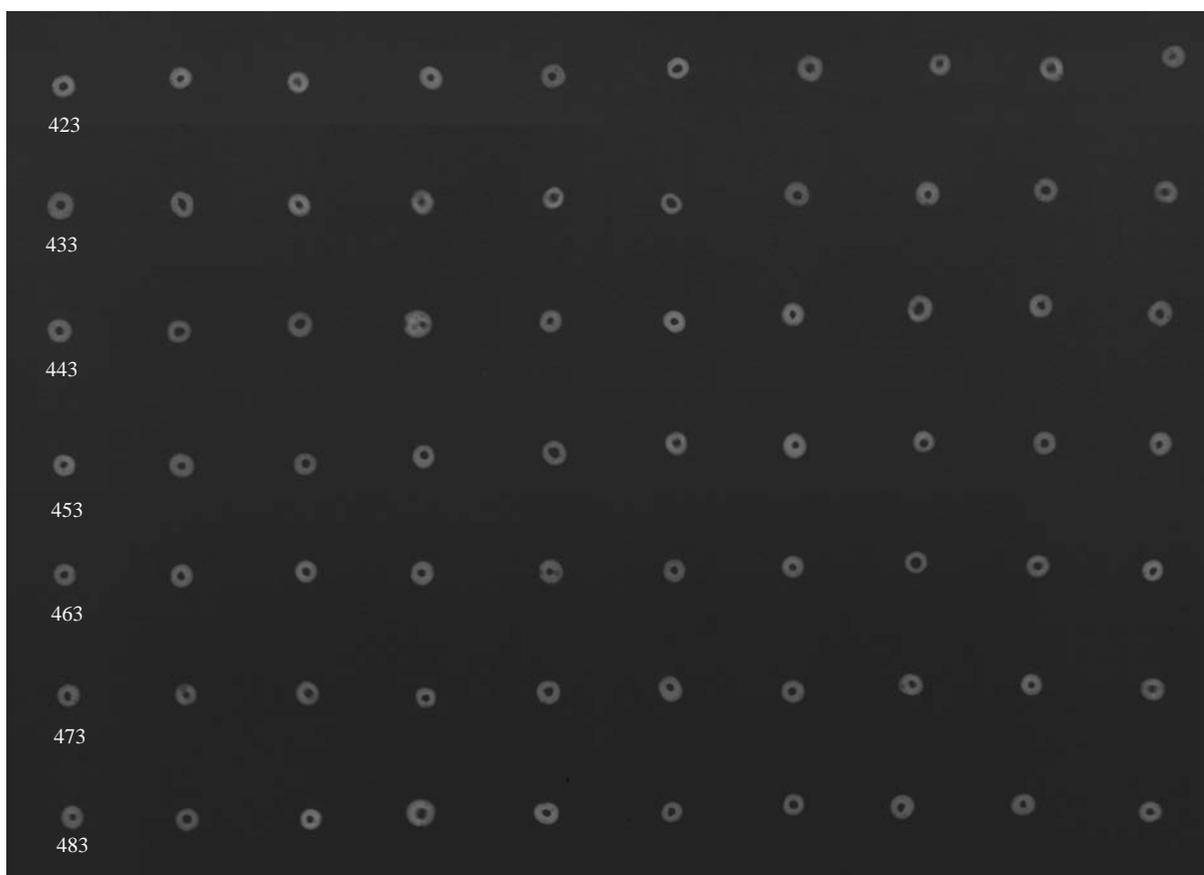
16号住居址出土ガラス小玉②

遺物写真 18



16号住居址出土ガラス小玉②

ガラス小玉 X 線写真1 原版を75%に縮小



ガラス小玉 X線写真2



## 報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん ながのじょしこうこうていいせき
書名	浅川扇状地遺跡群 長野女子高校校庭遺跡
ふりがな	かしょうながのじょしこうとうがっこうけんせつこうじにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ
副書名	(仮称) 長野女子高等学校校舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第134集
編著者名	飯島哲也・柳生俊樹・平林大樹
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2014(平成26)年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		座標(第Ⅷ系) X= 74037m Y=-26427m	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ながのじょしこうこう 長野女子高校 こうていいせき 校庭遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 みわ 三輪9丁目62番1	20201	A-056	経緯度 北緯 36° 40' 01" 東経 138° 12' 16"	20130228 ～ 20130531	2,570㎡	学校建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長野女子高校 校庭遺跡	集落跡	弥生時代 後期	竪穴住居26軒 土坑	土器・石製品 ガラス小玉	
		古墳時代 中・後期	竪穴住居19軒	土器・石製品 鉄製品	

長野市の埋蔵文化財第134集

浅川扇状地遺跡群

長野女子高校校庭遺跡

平成26年3月28日 発行

発行 長野市教育委員会  
編集 長野市埋蔵文化財センター  
印刷 三和印刷株式会社